
ゼロの奴隷 復讐の使い魔リーヴスラシル

ストック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの奴隷 復讐の使い魔リーヴスラシル

【Nコード】

N1547S

【作者名】

ストック

【あらすじ】

日本で追い詰められた青年が、ルイズに召還されます。あまりの仕打ちに貴族に復讐を誓う・・成り上がり・破壊・革命その他です。

残酷描写あります。

プロローグ（前書き）

たった一つ的能力でどこまで強い存在になれるか。
小説を書くのは初めてなのでつたない点はご容赦ください。

プロローグ

プロローグ

俺の名前は武田隼人 19歳。いきなりだが人生のピンチである。

そこそこ真面目に高校に通っていたが、いきなり親父の経営する会社の倒産で大学にいけなくなってしまった。

結局、一家離散みたいになって、望みもしない派遣の底辺肉体労働だ。

中途半端に進学校だったので、正社員の募集先も紹介してもらえなかったのだが。

それでも自分なりに頑張っていたが、大規模な災害の影響で仕事が激減、当然のように派遣きりにあい、数日中に寮からも追い出される。

なぜこんな人生なのだろう。俺が何をしたのだろうか？何も悪いことをしていないのになぜ・・・

今は当てもなく街をさまよっている。どうすればいいのだろうか・・・金もない。

もう嫌になった。死にたい・・・。

そう自暴自棄になった時、突然世界が白くなった。

召還

いきなり周囲が白くなって、下に落ちる感覚。

2メートルほどの高さから落ちた衝撃で全身が痛い。

腰をさすりながら周囲を見渡すと、禿げた中年男性とピンク色の髪の毛の少女、

それと学生みたいな連中がいた。

「あんた誰よ」と偉そうに聞いてくる。よく見ると美少女だが、今の俺にそれを喜ぶ余裕はない。

「あんたこそ誰だよ。ここはどこだ？」

「はあ？あんた杖を持ってないから平民でしょ？聞かれた事に答えればいいのよ」

なんだこいつ。初対面なのに居丈高だな。

「俺は武田隼人。みてのように日本人だよ。あんたも質問答えてくれ」

「はあ？ニホンってどこよ。てかなんで偉そうに質問してんのよ。平民の癖に生意気よ」

「さつきから平民ってうるせえな。そんなもん普通だろうがよ。あんたも平民だろ？」

「この公爵家のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに向かって平民だって？あんた死にたいみたいね」

え、なに？どこからか鞭みたいなものだして「ビシッ」こいつ打つてきがつた。痛い。鞭で打たれるなんて経験したことねーぞ。何度も打つな・・・いたい。狂ったように打ってくる。

「ミスタコルベール。もう一度召還させてください。こんなの使い

魔として認められません」

「それはダメだ。一度呼び出した使い魔は変更できない。いくら彼が態度が悪いゴロツキみたいな平民でも我慢するしかない」

「でも、平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません」

ルイズがそういうと、周囲から笑い声が起こった。

「ゼロのルイズ。ボロの平民が使い魔とはお似合いだな」「本当にお似合いね。ゴロツキみたいだし容姿も下衆だわ」

ちくしょう。なんでこんな事をいわれなくちゃなんの。こいつらだって日本語しゃべっているんだから日本人だろうに……。

「早くしなさい。もう大分時間がかかっているのだから」

「はあ……わかりました」

そういうとうつぶせに倒れている俺を蹴り飛ばして仰向けにして、糞女がのしかかる」

「あんたみたいな生意気な平民初めてよ。使い魔どころか奴隷としてこき使ってやるわ」

「ふざけんな……むぐっ」

いきなりキスされた……が全然嬉しくない。なにしゃがんだよ。

キスしたらすぐに離れて、汚いものに触れたように口をぬぐい、地面に唾を吐きやがる。

なにすん……ぐっ いたいいたい。胸が切り裂かれる……死ぬ死ぬ
—————。

死にそんな痛みは俺の限界を超え、意識が薄れていった。

出会

「ふむ。痛みで気を失ったか。でもルーンは無事刻まれたようだね。でも珍しいルーンだ。後で調べておこつ。さてと、みんな教室にもどるぞ」

コルベールはきびすを返すと、宙に浮いた」

「僕たちの使い魔はルーンを刻まれても平気だったのに、だらしないな」

「仕方ないわよ。セロのルイスが召還した平民だもの。最低ランクよね。お似合いよ」

「あつははは、それじゃルイズ。その平民を引きずって帰れよ。フライもレビテーションも使えないんだからがんばつてな」

口々にそういつてあざ笑いながら飛び去っていく。

残されたのは、ルイズと気絶した隼人だけになった。

「もう、なんなのよこんな平民が来て。一応使い魔として皆に見られてしまったから奴隷として売り飛ばすわけにもいかないし・・・これからずつとつれて歩くのって恥ずかしいじゃない。一人で召還の儀式をすればよかつたわ。なんとかしないと。こんな不細工な使い魔なんて嫌よ」

気絶した隼人をけりながらつぶやく。

「そついえば使い魔つて死んだらまた新しく召還できるのよね。そつだ、コイツが役にたたないなら、今度の夏休みにでも実家に連れて帰つて、訓練中の事故として処分して新しい使い魔を召還すればいいんだわ。今度はもつとききれいな使い魔がくると思うし。とりあえずこれは奴隷として使用人にも運ばせればいいわ」

近くにいた学園の使用人たちに命令して運ばせる。その目はゴミでも見るようにつめたいものだった。

ゆっくりと意識が覚醒していく。知らない天井だ・・・

「気がつきましたか？」と問いかけられる。見ると黒髪黒目のメイド服を着た美少女がいた。

「ここは?????」

「ここは学園の使用人の部屋ですよ。貴方は気絶していたのでミス・ヴァリエールがここに置いておけて。大変でしたね。」にっとり笑いかけてくる笑顔がかわいい。

「いろいろ質問していいかい？キミの名前は？この学園は？全然判らないんだ」

「ここはトリステイン王国魔法学校ですよ。私はシエスタといいます。」

「ここは日本じゃないんだ・・・でもキミは日本人みたいな容姿をしているんだけど」

「ニホンですか？そういえばひいおじいちゃんがそんな名前の国から来たって言うてましたね。貴方の顔も私たちとよく似ていますし。お名前はなんとおっしゃいます？」

「武田隼人だよ。そのひいおじいちゃんに会わせてもらえるかい？」

「ごめんなさい。5年ほど前に亡くなつたんです」

「そうか・・・でもニホンの事を聞いたことがあるキミに会えて嬉しいよ。他には何か言っただけでなかった？」

その後、シエスタからこの世界はニホンと別世界と言っていた事、魔法の存在と身分制度を聞き、途方にくれるのであった。

監視（前書き）

よろしければ感想をお願いします。皆様の意見も参考にして書いていこうと思います。

監視

その頃、ロマリア王国では、二人の男が深刻な顔をして、一つの鏡をのぞいていた。

虚無の担い手教皇ヴィットリオとその使い魔ジュリオである。

彼らは始祖の円鏡という秘宝をつかって、虚無の担い手と使い魔の監視をしていたのである。

現在のところ存在しているのは、ガリア王ジョゼフと使い魔ミュズニトニルン。

教皇ヴィットリオと使い魔ヴィンダールブ。

アルビオンのハーフェルフ。そしてトリステインのルイズであった。

「こまりましたね。トリステインのルイズ嬢がもつとも恐ろしい使い魔を覚醒前に召還してしまった」

「記すことすらはばかれる最大最凶の使い魔・・・破壊と再生を担う使い魔ですか？」

「ガンダールブはすべての武器を、ヴィンダールブはすべての獣を、ミュズニトニルンはすべてのマジックアイテムを使います。これらは強力であっても所詮は個人の能力。しかし神の心臓リーヴスラシルは」

「すべての空間を支配する最後の使い魔。一人でも国を滅ぼせる」

しばらく重い沈黙があった後、疲れたように教皇ヴィットリオは言った。

「彼はわれわれの目的の最後の切り札ですが、扱いを間違えるとすべてを滅ぼせます。接触はしばらく待ちましょう。監視だけは続けて」

「わかりました。彼が私たちの味方になるようなタイミングで接触

「。U/ちご9#」

従属（前書き）

従属

別世界なんて・・・しかも魔法を使える貴族が平民を押さえつけている世界なんだろ。これからどうすればいいんだ」

「貴族様に逆らいさえしなければ大丈夫ですよ。ひいおじいちゃんもタルブ村で穏やかに生きてくれましたし。」慰めるシエスタ。

「でも使い魔なんかにされてしまったからなあ」
頭を抱える隼人。日本でも辛い思いをしたが、この異世界でも前途は辛いようである。

「とりあえず、ご主人様のご機嫌をとって、卒業したら私たちのタルブ村で生活しませんか？ひいおじいちゃんみたいにワインを作っのんびり暮らせますよ」

「ありがとうございます。なんとかやってみるよ。慰めてくれてありがとうございます。」
「どういたしまして。隼人さんって何か親戚みたいで、親近感がわくんですよ。きっと故郷でもうけいれてもらえますよ。」

異世界どころか日本でも孤独だった隼人の心に暖かい思いが染み込む。

シエスタというやさしい少女に惹かれていった。

「何やってんのよ。起きたらさっさとご主人様のところに来なさい」
突然ルイズが乱入してきた。シエスタとのいい雰囲気邪魔されて腹が立つたが、

とりあえず従おうと低姿勢に。

「はい、すみません。起きたばかりだったので」

「口答えすんじゃないわよ。さっさと来なさい。ビシッ」

顔面に鞭を入れられて赤い線が走る。

「くっ・・・はい」

「あなたは使い魔という名の奴隷なんだからね。貴族の私にとって生かすも殺すもすべて私しだいなのよ。わかつたらさっさとくる」

「……（絶対に逃げ出してやる）……」と決意を新たにする隼人。

時刻は夜。ルイズの部屋にて

「んで、あんたは何ができるの？平民だからあんまり期待してないけど、役にたつたら使ってやってもいいわ。」ルイズが腕を組みながらたずねる。

ちなみに隼人は床に正座である。

（そういえば高校は普通科だったし、派遣の仕事は単純作業だったな。俺って特技なんにもなしか？）

「一応学校で勉強していたのですが……」

「あんた読み書きができるの？それならまあ使えるか。だったらこれ読んでみて」

投げつけるように一冊の本をわたす。当然ハルゲニア文字は読めない。

（言葉は日本語に聞こえるんだがな。あの白い空間を通ったときに何かあるのかな？）

「何よ。結局読めないじゃない。嘘なんかつくんじゃないわよ」「ビシッ。ビシッ。何度も鞭で撃たれる

（コイツ……殺してやりてえ。）

「何よその顔は。言っとくけど、私は公爵子女。あんたなんか魔法ですぐ殺せるんだからね」

（まだ魔法なんて見てないけど、ここで何の立場もないし、本当に殺されるかも）

「……はい。失礼しました」と土下座をする。

「判ればいいのよ。明日から雑用でもしてなさい。今日は寝るわ。あんたは床でねなさい」

「……はい（犬猫扱いかよ……派遣の仕事でも人間扱いされていたらぞ）」

「じゃあ、これ明日になったら洗濯しておいて」

いきなり脱ぎだして下着を投げつけられる。普段なら美少女の肢体

を見て嬉しいと思うはずが、なぜか全然惹かれるものがなかった。

隼人は毛布にくるまって泣く。外には月が2つ。

（本当に異世界なんだ・・・これからどうなるんだ。奴隷待遇だし・・・日本に帰っても居場所がなくてホームレスだし。唯一の救いはシエスタか。なんとか大過なくすごして、タルブ村とやらに受け入れてもらうか・・・）

傷の痛み能耐えながら、ゆっくりと眠りに落ちていった。

目覚

「いつまで寝てんのよ。さっさとおきなさい！！」「ビシッ　ビシッ　ピシッ

いきなり顔面鞭で叩かれた。朝一番から傷を負う。

「まったく、ご主人様より目覚めが遅い奴隷なんて、生きている価値ないわね。ほらさっさと着替えさせなさい」

寝起きで状況が理解できない隼人に対して、容赦なく鞭をふるいながらルイズは言った。

鼻血を抑えながらもルイズの着替えを手伝う。

（我慢だ・・・我慢だ・・・まだ何もわかってないのに逆らえない。でも・・・）

ルイズと部屋をでると、廊下に同じようなドアが並んでいた。その内の一つが空いて、中から燃えるような赤い髪の女の子が現れた。

「おはようゼロのルイズ。昨日は使い魔とお楽しみだったみたいね」

「何いってんのよキュルケ。しつけをしていただけよ」

「鞭を振るう音がここまで聞こえてきたわよ。そうゆうプレイじゃないの」

「この変態」ルイズの顔が真っ赤になる。

「それはそうと、それが貴方の使い魔？いかにも平民だわね。顔もハンサムじゃないし。高貴なヴァリエールも三女となればその辺の平民がふさわしくなるのかしら？」

キュルケのからかいに、ルイズの顔が陰しくなっていく。

「私の使い魔なんてサラマンダーよ。やっぱり人にはふさわしい使い魔がくるのね。フレイル」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。キュルケの部屋からのつそりと大きく真っ赤なトカゲが現れた。尻尾の先に火がもっている」

「（こんなの地球じゃありえない・・・なんなんだこの世界は）」
「あらあら、平民の使い魔さんはどうも怖がつているみたいね。使い魔としての格の違いがわかるみたいねえ」キュルケがかさにかかって自慢する。

「じゃあ、お先に失礼」そういうと、颯爽とキュルケは去っていった。

「くやし〜。これというのもあんたが召還されたからよ。あんたなんか来たから、またバカにされるわ。」

「私も来たくて来たのではないのですが。」

「口答えをしない！！」また殴られた。

まだ朝なのに今日だけで何回なぐられたんだよ。こいついつか絶対に殺してやると拳を握り締める。

食堂

トリステイン学院の食堂にて

朝食の場は学生たちでにぎわっている。300人はいるだろう。大勢のメイドが忙しそうに働いていて、おいしそうな匂いが立ち上っている。

隼人は昨日から何も食べてないのを思い出した。

ルイズの隣に腰をかけようとすると、いきなり蹴り倒された。

「何座ろうとしてるのよ。奴隷の分際で生意気な。床に座りなさい」
見ると床に申し訳程度に小さな肉のかけらが浮いたスープと、小さなパンが皿に置いてあった

さすがにキレて言い返す。

「こんなのじゃ足りない。昨日から何も食べてないんだ」
ピシッピシッピシッピシッピシッ。顔に腕に赤い線が走る。

「あんたいい加減に奴隷の身分を自覚しなさい。恥をかかせないで
!!!!!!」

「奴隷になつた覚えはない。ちゃんとメシくらい食べさせる」

周囲から笑いが巻き起こる

「さすがゼロのルイズ。使い魔に反抗されてるよ」

「使い魔に餌くらいあげればいいのにね……。公爵家のくせに貧乏
なのかしら」

周囲の声にますますヒートアップするルイズ。

「うるさいわね。奴隷のしつけは最初が肝心なの。それが嫌なら死
んでもらうわよ」

「くっ……。何なんだコイツは。俺をマジで人間としてみていな
い……。恐ろしい」

膠着した空気のところを、シエスタが仲裁してくれた。

「まあまあ。隼人さん。後で台所に来ていただければ、賄いくら

い出せますから」

「そうしなさいよ。残飯でも食べてなさい。平民はいつも卑しく貴族の残飯を食べていればいいのよ」

(・・・コイツマジで殺す。)

その後、台所に行き、シエスタに賄いをもらった。

「なんなんだよあの態度。残飯を食えだつて・むかつく」

「それが貴族として普通なんです。まあ、私たちも食べきれないメニューを作つて、わざと残すように仕向けて残り物をいただきますけどね。そうでもしないと食事が貧弱になりますから」

「シエスタはそんなにいいの？」

「仕方ないんですよ・・・貴族には逆らえませんか。」

ルイズが台所に入つて来る。

「いつまで残飯がつついているのよ。さっさと来なさい」

「くっ・・・」

教室

トリステイン魔法学校。教室にて

隼人とルイズが中に入っていくと、先に教室にやってきていた生徒が一齐に振り向き笑い始める。

「ブサイクな平民だな」

「私の使い魔の足元にも及ばないわね」

周囲にはいろいろな姿の生き物が使い魔としていた。

ルイズが席に着くと、隼人も石の床に座った。また席に着くと殴られそうだからである。

「オイ平民。ちゃんと餌もらったか？」などからかいの声がはいる。いちいち反応するのにも疲れてきたので無視した。

扉が開いて中年の女の人が入ってきて、授業が始まった。

「皆さん、いろいろな使い魔を召還できましたね。大変結構です。

おやおや、ミス・ヴァリエール。変わった使い魔を召還したものですね。」

教室中がどつと笑いに包まれた。

「その辺を歩いていたら平民つれてきたんですよ。ゼロのルイズですから」

「だからさつき餌をくれゝなんて反抗してたんですよ」

周囲から笑いとからかいの声にルイズは反論しているみたいだが、隼人にとってはどうでもよかった。

「では、授業を始めますよ。」教室のくすくす笑いが収まった。

隼人はとてもではないが、話をきく余裕はなかった。これからのことについてどうすればいいか悩んでいたのである。

「それでは、ミス・ヴァリエールに鍊金をしてもらいましょう」と

声がかかる。

「先生、止めて下さい。魔法がゼロのルイズには無理です」

「また爆発してけが人がでます」周囲から悲鳴がかかる。

（魔法がゼロ？なんのことだ？魔法でいつでも殺せるなんて脅していたけど・・・？）

「やります、絶対に成功させてみます」とルイズが立ち上がると、周囲は机の下に身を隠す。

（なんだ・・・なにが始まるんだ・・・？）

ルイズが呪文らしいものを唱えると、爆発がおこり、教室中が滅茶苦茶になった。

床に座っていた隼人はまともにつけて吹き飛ばされ気絶する。

（おれ、昨日から何回気絶したかな・・・死ぬんじゃないか？）

目が覚めると、教室の片付けを手伝わされた。

発端

教室の片づけがおわり、隼人たちは昼食をとるために食堂に移動した。

朝の騒ぎでルイズによって残飯を食べるように言われた隼人にはもちろん用意されず、シエスタの仕事が終わるまではお預けである。

昼食が終わりかけた時であった。ギーシュというルイズの同級生の1人が落とした香水をシエスタが拾い、これによってギーシュが二人の女性と付き合っていたのがばれて、彼が大恥をかいてしまったのである。理不尽に責められるシエスタに耐えかねて、隼人が間にはいった。

「もう止めるよ。シエスタは香水を拾っただけだろ。拾ってもらって八つ当たりなんてするなよ」

「今なんていった平民・・・」

「何度だつて言つてやるよ。お前は八つ当たりで女の子を苛めているだけだ」

「そうだと無責任にはやし立てる周囲。」

「隼人さんいいんです。貴族様にさからつてはいけません」

「平民の分際で僕に恥をかかせた上に、偉そうに正義の味方ぶつて説教か。ならば君に貴族への礼儀というのを教えてやろう!!」

この言葉に、隼人もカチンと来た。彼自身も今までひどい目にあわされてた上に、好意をよせたシエスタを苛められてだまっていられなかったのである。

「おもしろい、やってやろうじゃないか。」

「ふん。ヴェストリの広場で存分に戦おうではないか!」

こうして、隼人はギーシュと戦うことになったのであるが、シエスタが顔面を蒼白にしながらずに止めた。入った。

「だめです隼人さん。あなた殺されちゃいます。相手は貴族なんですよ。」

貴族の恐ろしさを心底知っている彼女は、隼人を引きとめようとした。しかしもう止められなかった。隼人は奴隷扱いしてくる貴族に心底憤っていたのである。

「けど、ここで引き下がるなんて出来ねえよ。殴りとばしてやる・隼人は喧嘩の経験はあまりなかった。しかし、ギーシュを一目見た所、あまり体力はなさそうだし、年下だからなんとかなると思ってしまった。さらに、隼人は次に駆け寄って来たルイズの言葉でよりヒートアップしてしまった。

「あんたって本当にバカね。そのメイドの言う通りよ、相手は魔法を使える貴族なのよ。あんたなんか勝てるはずがないじゃない。でもいいわ。あんたが死んだら別な使い魔を召還できるからね」
「そっかい捨てる」とギーシュの元に駆け寄る。

「ギーシュ」

「なんだいルイズ。もう止められないよ。君が躰をきちんとしないからこうなるんだ」

「別に止めないわよ。でも中途半端に傷つけるのは止めてね。やるからにはキチンと殺して」

周囲がシンと静まる。

「おいおい、仮にも君の使い魔だぜ。さすがに殺すつてのは・・・」

「貴族が決闘を申し込んだんでしょ。決闘つてのは相手の息の根を止めるまでするものよ。そうじゃない決闘ごっこしかできないなら貴族の誇りなんてないわ」

「ルイズ・・・君・・・」

「いい加減、こんな使い魔にうんざりしているのよ。何もできないし反抗するし。貴方が殺してくれれば、もっとマシな使い魔を召還できるわ。それとも、貴方は奴隷も殺せない腰抜け坊ちゃんなの？」

軍の重鎮グラモン家の名が泣くわよ」

「……いいだろう。グラモン家まで持ち出されたら引っ込みがつかない。キチンと引導を渡してやろう。その使い魔君も恨むならこんな主人を持った運命を恨みたまえ」

冷たい貴族の顔で睨む。隼人は今更ながらに恐怖に震えてしまった。

背景

ロマリア皇国にて

始祖の円鏡を見つめる二人。その表情は暗い

「まずいですね・・・せつかく召還されたリーヴスラシルが危機です」

「どうしてこうなったのでしょうか。使い魔もですが、主人たるルイズ嬢もあまりにも冷たすぎるような。普通は契約時にある程度親和性を持たせるような魔法がかかるのですが」

「それが最大最凶の使い魔たる由縁です。始祖プリミルの最後は知っていますか？」

「ええ・・・一般には伝わっていませんが、ガンダールヴが再召喚されてリーヴラシルの力を得て、その使い魔に殺されたとか」

「ええ、『世界の破壊と改変』の儀式のため、エルフ族が大量に死んでいきました。これ以上の犠牲者を出すまいと、エルフだった使い魔は始祖プリミルの胸を貫き、儀式を止め『シャイターンの門』を閉じました。それで現在の世界ができあがったのです」

「皮肉なことですね・・・始祖プリミルはその使い魔を心から愛していたのに」

「おそらく、その事が原因で、リーヴスラシルを召還した虚無の担い手は本能的に使い魔を憎むのでしょう。実際、この6000年に出現したリーヴスラシルは殆ど虚無の担い手か他の使い魔の不意打ちによって殺されています」

「もつとも忌まれる使い魔・・・だからこそ記すことすらはばかられたのですか・・・」

「ええ。ですが、今回はどうしても聖戦をやり遂げ、『シャイターンの門』を開かなければいけません。たとえエルフや亜人が死に絶

えても、メイジが滅亡しても。世界のために」

トリスティン魔法学院 学院長室にて

「ふむ・・・決闘か。まあ、いい刺激になるじやろつて」秘書の臀部をさすりながらのんきに見物している老人。これが学院長であるオールドオスマンである。

「いい加減にいなさい」と秘書ロングビルからどつかれてもどこか満足そうである。

「大変ですぞ。生徒が決闘です」と中年八ゲの教師、コルベールが飛び込んでくる。

「まあ落ち着きなさい。所詮学生の決闘ごっこじゃ。喧嘩して終りじゃよ。ギーシュ君がいくら未熟でも、平民ふぜいを殺すほど誇りが無いわけじゃあるまい」

主人であるルイズの煽りがあり、すでにギーシュが殺す覚悟を決めているのも知らない。

「はあ・・・しかし、人間が召還されたということが気になるのです。文書では始祖プリミルの使い魔は人間だったとか。左手・頭・右手・心臓にルーンが刻まれたと書いてあります。あの使い魔のルーンは心臓の上にあります。もしやと思うのですが・・・」

「なに、ヴァリエール公爵の三女は魔法がろくに使えないと聞く。その使い魔も大したことはあるまい」

「そうだといいいのですが・・・」

処刑

ヴェストリのの広場にて。

正面から向き合う2人。周りで見守る人間の中には、残酷な笑みを浮かべるルイズと、顔が真っ青なシエスタの姿もあった。

「ほう。逃げずにやってくるとは感心だな。いや、愚かなのか？逃げもせずに処刑場までくるなんて」

ギーシュがあざ笑うように言う。

（糞・・・本当は逃げたかったんだが、お前の取り巻きが見張ってたんだよ）

「それでは始めようか。」

ギーシュが薔薇を模した杖を振り上げると、目の前に花びらが一枚現れ、それがすぐに女戦士の形をした甲冑となった。

「ちよつとまで。なんだそれ。卑怯じゃないか」

「はあ？何を言っているのかね？メイジの僕が魔法で戦うのが卑怯？ここまで私をコケにするとはね。君のお相手はその青銅のゴーレム『ワルキューレ』だ。では行くぞ！！」

ギーシュの指示と共に、ゴーレムが隼人に迫った。

「くそ、いくぜ」

間近に迫ったゴーレムを隼人がなぐりつける。しかし、当然青銅性の体に傷一つつけれない

「あつははははははは。何をしているんだね。使い魔なら何らかの能力でもあるんじゃないのかね？そんな無様な様子じゃご主人さまからも見捨てられて当然だね。」

周囲の貴族からもあからさまな嘲笑が漏れる。

「素手で殴りかかるってバカじゃないの？」

「あれじゃゼロの使い魔どころかマイナスだなあ」

「あれじゃ俺でも殺して次の召還に掛けるな」

この世界の貴族は本当に平民をモノとしかおもっていないのである。

「ぐ・・・もうダメだ。にげるしかない」

散々に殴られて全身に傷がつき、プライドを捨てて逃げようとする隼人。

「おいおい、そのまま土下座でもして俺を拝みでもすれば、万一助ける気も起こったのに。興ざめだよ。人を殺すのは初めてだが、君みたいな卑怯な男なら良心もとがめまい。私の初体験の相手にでもなつてもらうかね。どうせ貴族としていつかは平民を殺して童貞を捨てねばならないのでね」逃げようとする隼人をゴーレムで拘束する。

「ダメです。隼人さん逃げてください。ギーシュ様、なんでもしますから許してください」

シエスタが飛び出して、ギーシュの足元にすがりつく。

「ふん。君の事なんてどうでもいい。僕はあの使い魔が気に入らないだけだ。ご主人様からも依頼をうけているのでね。文句はルイズに言いたまえ」

「ミス・ヴァリエール。お願いします。私が説得しますから、貴方の使い魔として認めてあげてください」シエスタは今度はルイズの足元に土下座する。

「ダメよ。あの使い魔は奴隷としても役に立たないわ。貴族に反抗するような奴隷はいらない。ギーシュに始末してもらって、新しい使い魔を召還するって決めたの」

「そんな・・・」シエスタは泣き崩れる。

「話は決まったようだね。少々やりすぎの気もするがこれも貴族の務めなのだろう。きっちり葬って拳げるよ。ウェルダンテ！！」
地面から大きなモグラが顔を出す。

「さすがに直接切り殺すのは手が汚れる。深い穴を掘って直接埋葬

してあげるよ。ウエルダンテ、よろしく」

「モグ・・・」モグラは気が進まない様子だったが、命令を忠実に実行し、拘束しているゴーレムごと深い穴に隼人を落とし、土を埋めていく。

「隼人さー！ー！ー！ん！ー！！！」泣き崩れるシエスタ。

「さあみんな、これで処刑は終了だ。平民たちも貴族に逆らったらどうなるか、身にしてみてわかっただろう」

貴族たちは頷き、使用人たちは恐怖に顔をひきつらせるのだった。

帰還（前書き）

励みになりますので、感想お願いします。

帰還

暗い闇の中。

穴に落とされた衝撃で隼人はうめいていた。その上に土がかぶさる。「いてて・・糞。どうなったんだ。ここは・・穴の中。まさか生き埋めか？」

あらゆる殺害方法でもっとも恐怖を感じるのは生き埋めだろう。刻一刻と土が入られ、じわじわと死の恐怖が深まる。

（嫌だ・・死にたくないし死にたくないシニタクナイ・・帰りた
いかえりたいカエリタイ）

思えば元の世界はどれだけマシだろう。一家離散しても、低賃金で
こき使われても、
死の恐怖はなかった。どんどん息苦しくなるなかで、死の恐怖が心
を震わす。

（カエリタイカエリタイカエリタイ・・・・）
その時、胸のルーンが光り、拘束しているゴーレムごと姿が消えた。

落下する衝撃があり、周囲がかわった。気がついたら、一昨日まで
寝ていた寮のベッドの上だった。

（これは・・夢だったのか。よかった・・っ）
夢ではなかったことはすぐ気がついた。まだゴーレムに拘束されて
たので。

（夢じゃなかったのか・・なんにしるよかった。生きて帰ってこ
れて）

数日後には寮を追い出されて住所不定になってしまいう辛い現実も忘れて、

ただ生きて帰ってこれた事に歓喜して眠る隼人。

まだルーンが刻まれていることも考えられなくて・・・ただ安らかに。

安息

悪夢にうなされる隼人。鞭で撃たれ、けり倒され、生き埋めにされる。

桃色の髪が悪魔が残酷に笑う。

「うーん はっ」目が覚めると、寝汗でびっしょりだった。

もう朝か・・・そうか、日本に帰れたんだった。

窓を開けて新鮮な空気を吸う。

「よし、今日は飯をたらふく食べて、荷物の整理でもして、明日売りに行こう。少しでも金に換えておかないとな。あと求人誌でももらって、どんな条件でもいいから住み込みで働けるところを探そう。あの地獄みたいな世界に比べれば、ここは天国だ」
やたらと前向きになる隼人だった。

コンビニ弁当とお菓子を腹いっぱい平らげ、寝転んで雑誌を読む。

「しかし、シエスタは可愛かったな。俺のために泣き叫んで土下座までしてくれて・・・あんないい子は二度と出会えないかもしれない。もしかしたらあの子と一緒に暮らせたかもしれない。無事であるといいけど・・・」と妄想まじりに心配をする。平和だった。

トリストイン魔法学院にて

「なんで私が留年になるんですか」と顔を真っ赤にして詰め寄るルイズ。

「落ち着くんじゃ。君は一日で使い魔を失った。進級させることはできん」とオールドオスマン。

「一日でも召還はできました。それに、また召還すればいいだけで

しょう?」

「故意に使い魔を殺してやり直させることはできんのじゃよ。そんな事を認めたら伝統を汚してしまう。そんな残酷なことをする主人についていく使い魔はあるまい」

「殺したのはギーシュです」

「くだいですぞミス・ヴァリエール。貴方がギーシュ君をたきつけて使い魔の少年を殺したのは、本人からも他の人からも証言がとれています。そんな事をするのは貴族失格です。」

「コルベールが言う。彼は心底悔いていた。過去に平民を大量に殺してしまった彼は、貴族のエゴで平民を傷つける事は許されないと感じていた。」

（私がすぐに止めていたらこんなことには・・・彼にはすまないことをした。この子達はまだ幼稚な子供なので、人を殺すことがどれだけ罪深いことかわからないのだ。教師として教えるべきだった）

「わかりました。この件では父であるヴァリエール公爵にお話させていただきます。私の所有物である使い魔を私の意志で殺したことに、どういった罪があるのか父に説明していただきます。もちろん、何らかの処罰があつた場合、ヴァリエール家を敵に回すことをお忘れなく」

勝ち誇った顔で虎の意を借るルイズ。学院長の顔が渋くなった。

「当然、ヴァリエール家とその傘下の家の今後の寄付はなしです。」

また、個人的に友人である王女殿下にもお話させていただきますね。ではごきげんよう。今から実家に帰りますので。」

きびすを返して部屋から出ようとするルイズ。

「待ちたまえ・・・仕方ない。今回限り、もう一度召還の儀式をすることを認めよう」

「学院長・・・それではあまりに・・・」とコルベール。

「仕方あるまい。このままでは学院の存続にもかかわる。その代わり、今回限りじゃ。もう一度同じ事したら留年どころか退学じゃ。」

一度チャンスを与えたことで、君の父上にも王女殿下にも申し開きはできるからな」

「了承しました。ではさっそく召還の儀式にはいりますわ」笑いを浮かべてルイズは去っていった。

再召喚

トリスティン魔法学院にて

コルベールとルイズは召還の儀式に取り掛かっていた。

「ミス・ヴァリエール。くどいようですが2回目はありませんぞ。今度同じようなことがあったら・・・」

「大丈夫ですコルベール先生。どんな使い魔が来てもアレよりはマシですわ」

自信満々で呪文をとねえるルイズだった。

その頃日本では

すっかりリラックスしてくつろいでいる隼人だった。

「いや〜一日いないだけでテレビがこんなに面白いと思わなかった。明日から就職活動をしよう。そろそろ荷物をまとめるかな?」

そう体を起こしたとき、豊から白い光が広がっていく。

「これは・・・まさか。もう嫌だ・・・」と部屋の隅に逃げるが、光は広がっていく

「嫌だ嫌だ嫌だ・・・」部屋のすべてのものを飲み込んでいった。

上空に光の円が広がり、雑多なモノが落ちてくる。

「あぶない」ルイズをかばうコルベール。

光からテレビ・タンス・机・雑誌・布団そのほか落ちてくる。

そして最後に落ちてきたのは・・・昨日死んだはずの青年だった。

驚きのあまり、声もでないコルベール。

「なんであんたが生きてんのよ。死んだはずなのに。てか、また召還されるなんて、私に恨みでもあるの？」と喚き散らすルイズ。隼人はじつと睨んでいたが、いきなりルイズに飛び掛って首を絞めた。

「殺す殺すクロス・・・死ね死ねシネシネシネシネシネシネ・・・」
みるみるうちに顔が青ざめるルイズ。

「君、落ち着きなさい。くっ仕方ない」コルベールが首筋に一撃をいれ、隼人は気絶した。

「ゴホッ　ゴホッ　この私を殺しかけるなんて・・・今度こそ死になさい」と杖を向けるルイズ。

「君も落ち着きなさい」と杖を取り上げ、その場を収める。

「とりあえず、彼を運んで。そしてミス・ヴァリエールは部屋で休んでいなさい。いいね」

隼人を使用人に運ばせ、ルイズをとりあえず帰らせる。

(これは一体どうすれば・・・それにこの見慣れない品々は？
いたい何かおきているんだろう)

苦悩するコルベールであった。

能力

ゆっくりと意識が覚醒していく・・・もう何回目なのだろうか。

目が覚めると、泣きじゃくっているシエスタがいた。

「隼人さん・・・よかった無事で。エグツ・・・ヒック。私のせいで死んじゃったかと思ってました」

「ああ、大丈夫だよ・・・心配かけてごめんね・・・いたっ」

「昨日から散々ダメージを受けていて、全身が痛い。」

「無理しちゃだめです。休んでいてください。私が看病しますから」

「有難う・・・すこし休むよ」横になる隼人。

「でもすごいですね。貴族と戦って生き残れたなんて。本当に生きていてくれて嬉しいです」

「生き埋めにされてもうだめだと思ったら、気がついたら家に帰っていたんだよ。でもまたあの糞女に召還されてしまった・・・まあ、またシエスタに会えて嬉しいけど」

「まあ・・・有難うございます。何かお飲み物をもつてきますね」部屋から出て行くシエスタ。

（しかし、これからどうなるんだろう。どうあがいてもあの糞女から逃げられないのか・・・）

シエスタに再会できたのは嬉しいが、ルイズの顔を思い浮かべてしまい、不安になる隼人だった。

「使い魔君の具合はどうだい？」外から声が聞こえる。

「今起きたばかりですが・・・」

「お邪魔するよ。初めまして。私はこの学校の教師をしているコルベールだ」最初に召還されたときにいた、中年ハゲの男が入ってくる。シエスタが入れてくれたお茶を飲みながら、三人ではなす。

「まず最初に、私の生徒がひどいことをしたことをわびよう。彼女

には私から話をしておく。すまなかつた。」と頭を下げる。隼人は謝罪されるとは思わなかつたので、幾分印象を改めた。

「とりあえず、君の名前を聞いてもいいかな？」

「俺は武田隼人といいます。日本の出身で19歳・・・無職です」

「その日本という国は聞いたことがないのだが、君と一緒に来た荷物はいろいろ珍しいものがあるな」

「どうやらこの世界とは別の世界のようです。」

「なんと・・・いや、信じがたいが、いろいろ複雑なカラクリをもつ物を見ると、そうなのかもしれない。これはその中の一つだが、なんだかさっぱりわからない」と携帯電話をだす。

「これは携帯電話と違って、離れた所の人と話す機械です。他にいろいろ情報をとりだすこともできます」と画面を操作する

「きれいですね、私そんなの初めて見ました」

「そういうマジックアイテムなのかね・・・いや、驚いた。」

「魔法ではなく電気力で動く機械です。」

カメラ機能でシエスタを撮影。驚く二人。

「一瞬で姿を映してとりこめるのか・・・しかも魔法を使わないのか。いやそういうえば、こういったものが「場違いな工芸品」と呼ばれて、貴族の間で高値で取引されているな。私は今まで見たことがなかったが・・・」と好奇心まるだして携帯をいじるコルベール。しばらくして返してくれた。

「そういうえば、君はどうやって穴から脱出できたのかね？」

「死にそうになったら、胸の印が光って、気がついたら元の世界の家に帰ってました」

「ふーむ。君の使い魔としての能力かもしれない。もう一度やってみるかね？」

「わかりました」胸に意識を集中させて、元の部屋に帰りたいと思う。

するとルーンが光り、隼人の姿が消えた。

日本の元の部屋に帰れて安堵する隼人。しかし、持ち物は部屋の中に何もなかった。

（仕方ない・・・あつちに一度戻るか。向こうの部屋を思い浮かべて・・・）

トリステイン魔法学院の使用人部屋。再び隼人が現れる

「いや。消えたと思ったがまた戻って来てくれたが。どうやら君のルーンの能力はそういうものらしいね」とコルベール。

「隼人さんすごいです！！私もまた連れて行ってください。」とはしゃぐシエスタ。

その後も異世界の話を二人にして、大いに話がもりあがった。

ルイズの部屋にて

「なによなによなによ・・・最悪だわ。死んだはずのあのブサイクな平民がまた召還されるなんて。今度

使い魔を殺したら退学だって言ってたし・・・こうなったら休学届けを出して、領地で事故に見せかけて始末しようかしら。そうすれば学院にはばれないし・・・」

そうルイズが考えていると、ドアがノックされた。

「どうぞ」「お邪魔するよ」とコルベール教師が入ってきた。興奮ぎみである。

「いや〜君の使い魔はすばらしいね。おそらく伝説の使い魔だろう」「何をおっしゃっているのですか？あんなの何もできないただの平民ですよ」と不機嫌に答えるルイズ

「いや、彼と話していて、彼が異世界を行き来できる特殊な能力をもつことがわかったんだ」

「・・・熱でもあるのですか？」

「信じられないだろうが事実だ。その証拠に彼と一緒に召還された

ものを見てみたまえ。どれもこれもハルゲニアにはない物ばかりだぞ。」と持ってきた雑誌を見せる。

「確かにこんな材質の本はありませんね・・・写し画もありますし」とグラフィアページをみる。

（確かに珍しいわね・・・学院に出入りしている商人に見せたら、価値があるものかわかるかしら）

「とにかく、彼を通じて見知らぬ世界が見れる。平民だと見下さないで、使い魔として認めてあげればどうかね？」

「わかりました。仕方ありませんね・・・」

（本当に価値があるものを持ってこれるならいい小遣い稼ぎになるわね。死ぬほどこき使ってやるわ）

コルベル退出後、すぐ学院出入りの商人に連絡を取り、庭に散らかっている隼人の持ち物を鑑定させるルイズ。結果、5000エキューという大金がルイズに支払われた。

（まあ、これなら存在を認めてやってもいいわね。あくまで奴隷としてだけ）

起きた後、隼人はもはや持ち物すら無くなってしまったことをしり、絶望するのであった。

能力（後書き）

今回で隼人は無一文になりました。やりすぎたかな？

暴虐

ルイズの部屋にて

5000エキューの大金を得てホクホク顔のルイズ。一般的な平民の10年分の収入にあたり、大貴族の子女とはいえ学生のルイズにとっても大金である。

（何に使おうかしら）ドレス買って。宝石買って。最高級の香水もいいな。ちい姉さまにもプレゼントして褒めてもらおうと。でもあの奴隷が怒ってまた反抗するかもね。んーどうしようかな？あ、いいこと考えた。　　）思いついた事を実行し、使い魔の襲来にそなえる。

ドンドンドン　と激しくドアが叩かれる

「何よ。うるさいわね。」とドアを開けると、顔を真っ赤にした隼人が立っていた。

「お前、何勝手に人のものを売り飛ばしてんだよ。どうしてくれるんだよ！！！」

「あんたは私の使い魔でしょ。トリステインでは使い魔に薬草や宝石を集めさせてご主人様に貢献するのよ。つまり、あんたの物はすべて私の物。そもそも、奴隷に財産なんかもてないのよ」

「ふざけんな！！！」怒りのまま殴りかかる隼人。その時、硬いものに腕をつかまれる。後ろから強く殴られ、壁に叩きつけられる。容赦のない一撃にクラクラしながら後ろを見ると、ゴーレムを従えたギーシュが立っていた。

「やれやれ、レディーに暴力を振るおうとするとは。まったく、平民というのはどこまで卑しいんだい？」

「な・なんでお前が・・・」恐怖に膝がふるえる。

「なに、ルイズから助けを求められてね。義侠心溢れる僕が救いに現れていたのだよ」

「てめえ・・・もしかして金で雇われて・・・」

「下衆のかんぐりは止めてくれ。さて、君のか弱いご主人様に代わって、賤をしてあげよう」

ゴーレムに徹底的に殴られ、床に這いつくばらせられる隼人。

「ギーシュ。もうその辺でいいわ。死なれたら困るし」

「なんだい？前は殺して欲しいといってたんじゃないか？」

「コイツにはまだ使い道があるのよ。またお願いね。」

「はいはい、いつでも参上しますよ。」ルイズに100エキューをもらい、隼人に唾を吐いてギーシュは去っていった。

「あんたもそろそろ学習したら？いくらバカでも貴族にかなわないってわかるでしょう？」

「ふじゃけんな こによどろぼう・・・」口が切れて満足にしゃべれない隼人。

「まだお仕置きが足りないみたいね」鞭を取り出し、10回ほど打ちつける。

「ふふ、どこに逃げてても無駄よ。また召還すればいつでもあんたを呼び出せるし。その時にギーシュにも立ち会ってもらうわ。痛い目にあいたくなければ私に従いなさい」

「・・・くっ・・・なによふればいいんだ」

「あんたの世界のもの、高く売れるのよね。これからも売れそうな物を持ってきなさい」

床に10枚程度のエキュー金貨が投げ出される

「そうすれば使用人部屋の利用と残飯あさを学院に掛け合っけて認めてもらうわ。まああなたに選択肢はないけどね」フッフッフ・・・と実にいい顔で笑うルイズ。その顔はアイドル顔負けの美少女ながら、この世でもっとも醜い顔に隼人には見えた。

受人

結局、隼人はルイズの一方的な命令を受け入れるしかなかった。所持品は携帯と2万円が入っている財布のみ。日本に帰ってもホムレス直行である。

（糞、いつか絶対に復讐してやる）とエキュー金貨を拾いながら隼人は思うのであった。

使用人部屋に帰り、シエスタに傷の手当てをしてもらおう。

「結局、あの糞女の使い魔になってしまったよ。嫌だけど仕方ない。」

「でも、いつでも故郷に帰れるんでしょう？」

「・・・あの女がその気になればいつでも呼び出されるんだ、まるで紐付きの犬だよ。」

「隼人さんかわいそう・・・。元気出してください。私ならいつでも力になりますから」

「ありがとうございます。」（シエスタは本当にいい子だな・・・）

「明日は親方や他の使用人にも紹介しますので、今日はゆっくり休んでくださいね」

「うん。ありがとうございます。おやすみなさい」

ロマリア皇国にて

「どうやら、使い魔になってくれるみたいですね。」とヴィーットリオ。

「いつ彼が力の使い方に目覚めるかヒヤヒヤしましたよ。文献に書いてあるとおりなら、魔法学院ごと消し飛んでもおかしくないですからね。」とジュリオ。

「まあしばらくは大丈夫でしょう。でも出来るだけ早く接触した方がいいですね」

「ええ、しかしこちらに引き込んで、何回でもルイズの元に召還される。どうしてこんな厄介なことになったんでしょう。普通なら使い魔が死ぬまで召還の儀式はできないはずなのに・・・」

「リーヴスラシルは最後に作られたルーンです。能力は空間操作。

おそらく逃げられないように術式を織ったのでしよう。普通なら正面にでる召還の鏡も下に出て、どう足掻いても強制的に召還されま
すからね。」

「やれやれ・・・同じ使い魔として同情しますよ。」と肩をすくめる
ジュリオ。

次の日、使用人と台所の親方を紹介してもらおう隼人

「武田隼人です。強引に使い魔にさせられて、こちらにご厄介になることになりました。これからよろしくお願いします」

「話は聞いてるぜ。災難だったなあ・・・でも貴族に逆らう鼻っ柱はキライじゃないぜ。よろしくな。マルトーだ。まあ当分シエスタの手伝いでもして、こちらに慣れればいいさ。」中年マツチヨが言う。親方らしい。

「はい、これからよろしくお願いします」（よかつた・・・悪い人じゃないみたいだ・・・）

「私はルノー。シエスタと一緒にこの学院に働きにきたの。よろしくね」栗色の髪の可愛い子が挨拶する。

「ミルトよ。貴方シエスタと同じ髪と目ね。親戚みたい。よろしくね」と緑色の髪の少女。かなり発育がいい。

「俺はジョア。一応使用人寮の寮長だ。まあよろしく。なんかあれ
ば言っ
て来い」頼れる先輩みたいな感じの青年だ。

そのほかいろいろな人から歓迎を受けた。ちよつと嬉しい。

食事の配膳を手伝い、賄を食べた後、日本へと向かう

「それじゃいつてきます。」と姿を消す

「お、本当に消えたぞ。面白いな」とジョア。

「お土産何かつてきてくれるかな?」とルノー。

「10エキューもあれば、おいしいお菓子たくさん買えるんじゃない?」とミルト。

「もう・・皆さん。隼人はムリヤリやらされているんですよ」とシエスタ。

「まあ、面白いからいいじゃないか。俺らも異世界とやらに連れて行ってもらおうぜ」とマルトー。

微妙に珍獣扱いされている隼人だった。

受入（後書き）

オリキャラを出しました。

買物

日本にて。

(さて・・・高く売れそうな物が。どうしようかな)

銀行によってキャッシュカードで残金すべておろす。財布のお金と合わせて6万円ちよつと。エキユー金貨10枚。

(く・・・まあ寝る場所とメシの心配がなくなったのはよかったかも。でもこの金じゃ必要なもの買ったらすぐなくなってしまうぞ。

何しろ代えの下着もないんだ)

仕方なく、ユニロでジャージとトレーナー他を買う。残金5万円
(くそ・・・あいつに全部取られた。何もかも・・・しょうがない。100円シヨップで出来るだけ買うか)

100円シヨップで必要なものを買う。昼飯を食べて一服。残金45000円

(この調子だとすぐなくなるぞ・・・くそ。金貨なんかもらったつてこつちじゃ使えねーじゃないか。意味もない金よこしやがつて) 一人で憤る隼人。仕方なく街をぶらぶら歩いていると、一つの看板が目に入った。

【金貨・貴金属買い取ります。どこよりも高値で。貴方の眠っているお宝現金に換えませんか?】

「金貨買取??さてよ、こいつ売れるかもしれないぞ。どうせこつちじゃ使えないんだし」と店に入る

・・・数刻後・ハイテンションになって店から出る隼人

(おいおい・・・金の含有量が結構高いつて・・・一枚一万円かよ・・・ヒヤッハ)

10万円をゲットにして有頂天になる隼人だった。

(これなら何とかあいつらに売れそうな物買えるな・・・ってちよつ

とまで。あいつらの文明レベル中世だから、100円ショップのノートとか鉛筆とかでも大丈夫なんじゃ？こっちの高い物なんて理解できねーだろうし。おもしれー！。100円ショップの安物持って行ってやる」

100円ショップに引き返し、ボールペン、鉛筆、消しゴム、ノート、ホッチキスなど10点を買う。

（これを1個1エキューかかりましたってごまかしてやろう。ケケケ。さて、シエスタや他の連中には

お菓子をお土産に持っていくか。おっと、マルトーさんには調味料もっていつてやろう）

なんだか少し幸せになった隼人であった。

ハルゲニアの使用人部屋に帰る隼人。

「ただいま。お土産かってきたよ」と寮の談話室に行く。シエスタ他が休んでいた。

「お帰りなさい。なにかいろいろ買ってきましたね？それはなんですか？」

「適当に買ってきたんだけど・・・皆で食べよう」

「わかりました。お茶入れますね。皆も呼んできます」とシエスタ。

・・・数刻後、使用人達が大騒ぎになった。

「これおいしい。ケーキ？こんなに甘いなんて。」「ルノー。」

「この黒いの、甘くて病み付きになるわ。チョコレート？」「ミルト。

「うまい。お茶と合う・・・何なんだこれは」「煎餅をすごい勢いで齧るジョア。

シエスタはポテトチップを一心不乱に食べていた。

・・・買ってきたお菓子がみるみるうちに食い尽くされた。若干引いている隼人。

「よかつたらまた買ってくるよ・・・」と隼人。

「……………お願い……………」 使用人全員から頼まれた。

夕食の支度後、マルトーにと買ってきた調味料を渡す。

「ラー油？醤油？七味唐辛子？味噌？いろんな味がするな。こんな
の初めてだぜ」とマルトー

「こんなもありますよ。コシヨウです」

「コシヨウって言ったら超高級品じゃねえか！！こんなのもらえる
かよ。馬車が買えちまう」

「俺の世界じゃいくらでも売ってますよ。300円だったから・
ええと1エキユー一万円として・3スウですか？」

「本当かよ・・・おめえの世界はどうなってやがんだ。子供の小遣
いで買えるのか。この量だと300エキユーはするぜ」

「・・・マジですか？」 「マジだ」・・・

「どうやらおめえはとんでもないお宝みたいだな。それでどうする
？貴族に取り入るか？末端の末端くらいにはなれるかも知れねえぜ。
ゲルマニアに行けば貴族籍を金で買えるからな」

「・・・俺は貴族は嫌いです。人を勝手に召還しておきながら、気
に入らないと殺そうとする。そのくせ、金になるとみたら利用して
くる。あいつら人間のクズです。金を積まれても貴族になる気はな
い」

「よくいったぜ。それでこそ平民の男だ。なあ、我らの『宝』」
「なんすかその宝って・・・」

「まあそういうな。お前のおかげで俺らも楽しくなりそうだぜ」 豪
快に笑うマルトー！。

その後、ルイズに100円シヨップの品を持っていく。

「ノート？すごい綺麗な紙ね。ボールペン？いつまでも書き続けら
れる魔法のペン？鉛筆と消しゴム？書いたものを消せるの？なかな
か珍しいものを買ってきたわね。まあ認めてあげるわ。次はもつと

買ってきなさい」と100エキユーを渡すルイズ。

「（バーカ。100円ショップの安物で喜んでやんのw）畏まりました」と恭しく頭を下げる隼人。

（この調子ならすぐ億万長者だなw将来に希望が見えてきたかも・・
今度はシエスタを日本につれていくか）とわくわくしながら眠るの
だった。

幸福

(うひゃひゃひゃ、1000エキューもらったよ。日本で売ったら100万円。100円シヨップで適当に100個安物買って99万の儲けか。たまんねーなw)

顔がにやけっぱなしの隼人だった。

(この調子で貴族からしばってやろう。とりあえずシエスタとデートだ。)

「シエスタ・明日日本に遊びにいかない？」

「ぜひ連れて行ってください。明日は休みですから。ひいおじいさんの故郷でもありますし、楽しみです」。

ルノーたちも連れて行ってくれとせがまれたが、休みの時に順番に連れて行くからとなだめた。

次の日

「それじゃ行こうか」

「楽しみです。今までためたお小遣いも持ってきました。そういつでも5エキューしかないけど・・・」

「充分。たくさん買い物しよう」「はい」

日本にて

「うわ・・・こんなにたくさんの方が。今日はお祭りですか？」

「毎日これくらいの方が歩いてるんだよ」

「それにお城より大きい建物がいっぱいだし、皆貴族様みたいな立派な身なりですね。」

「デパートとかビルだね。あと全員平民だから」

「貴族様とかじゃないんですね・・・あ、この服かわいい。このパンもおいしそう」

年頃の少女らしく、かわいらしくはしゃぐシエスタ。

隼人は頬が緩みっぱなしだった。カバンには札束が入っていて、隣には美少女。

(何この勝ち組。俺つてもしかして幸せ？生きててよかった)

しばらく二人で店をまわり、大量に物を買ひ込んだ。シエスタは服をプレゼントされ、笑顔である。

「ふう・・・驚くのに疲れちゃいました。そういえば、隼人さんのお家は？ご家族に紹介してください」と無邪気に言うシエスタ。

(そういえば、もう寮に帰れないから、こっちに家はないんだった。部屋を借りるか)

「シエスタ・・・両親は借金のせいで逃げてしまい、どこに行っただかわからないんだ。そして、こっちにはもう家はないんだ。住んでたところを追い出されたから」

「ご・・・ごめんなさい変なことを聞いて。隼人さん苦労しているんですね・・・私の家も不作続きの上家族が多くて、どうしても生活できずに貴族様から借金をしてしまい、返せなくて危うく奴隷にされるところだったんです。なんとか返済はまってもらいましたが、今の家の収入だと利息を払うのがやっとで生活が苦しくて・・・。口減らしと出稼ぎを探してたらルノーちゃんの口利きで学院の使用人の仕事を紹介してもらい、ほとんど仕送りして家計をまかなっている状態なので、苦労はよくわかります。」

「そ、そうなんだ・・・でももう大丈夫だよ。こっちで物を買って向こうで売れば100倍以上になるから、借金もすぐに返せるよ。俺も協力するから・・・お父さんくらいくらい借りているの?」

「隼人さん・・・グスッ・ありがとう・・・3000エキューくらいなんです」と泣き始めるシエスタ。

オロオロ「泣かないでシエスタ・・・絶対なんとかなるよ。ほら、今日は楽しく遊ぼう」

「隼人さんやさしいですね・・・大好きです」

(やばい・・・可愛い。ほれてしまう・・・。しかし3000エキュー＝3000万か。頑張ればなんとかなる。絶対助けるぞ)

その後、不動産屋に行つて部屋を探す。

「お二人でお住まいになられるのですか？」と担当のお姉さん

「いや・・その・・二人で住むといつかなんといいつか・・」真つ赤になる隼人

「それでしたらこちらのアパートはいかかでしょう。」

（どうやら貧乏カップルに見られるらしい。まあ、間違つてないけど。）

「いや、どうせなら家具付で2LDKくらいのマンションで、新築で・・あつ、これなんかいいですね。調子に乗つて家賃14万円のマンションをさす隼人。

「そうですね・・ところでご職業は？学生さまですか？」

ビクツ・・「あの・・えーと。今は無職です。でも金があります。

なんなら前払いでも・・」

テンパツて札束をみせる隼人。無職なのに大金を持ち歩く隼人に対して、胡散くさい目を向けるお姉さん。

「無職ですか・・どなたか保証人になっていただけるとはしますか？ご両親様とか」

ビクビクツ・・「あの、えつと、だから、両親とは連絡つきません」

「はあ・・一応、確認とつてみますね。大家さんがよいといえば・・

・「ため息をつくお姉さん。

（あああ・・こつちでも俺つて・・）

「お待ちいたしました。お客様の指定のマンションでは難しいそうです。」冷たく言われてしまった。

「はあ、えらいすいません」と不動産屋をあとにする。

シエスタは状況がわからずキョトンとしていた。

友情？

仕方なく、レオ レスのマンスリー契約で一部屋借りた。

（まあ今後はこっちが仮の宿になりそうなのでいいか。金稼いで家ぐらい買ったらあ）

ぶつぶつごちる隼人と対照的に、シエスタはご機嫌である。

「そろそろ帰ろうか。シエスタは何を買ったの？」

「100円シヨップという所で小物とかタオルとか石鹸とか鏡とか。みんな高級品ばかりなのに、1スウで買えるなんて夢見たいです。」

「向こうで少しずつ売ろう。これで借金も返せるはずだ」

「はい、ありがとうございます。これで家族も助かります。」と笑顔のシエスタ。

二人は満足してハルゲニアに帰った。

次の日、ルノーとミルトとジョアを連れて日本を案内した。

ルノーはお菓子を、ミルトは服に興味深々である。

金貨を換金して渡したら、目に付いたものをどんどん買っていく。

「そんなに買うのか？大丈夫なのか？」

「こんなおいしいお菓子はトリスティンにないわ。いっぱい買って次来るときまでもたせないと。」

「こちらの服は肌触りがいいし、デザインが斬新だわねえ。うちは貴族相手の服の商人だから、参考にするの」とミルト。

「ミルトって商人の娘なのか？なんで使用人なんかしてるんだ？」

「ルノーはタルブ村の村長の娘。ミルトもかなり大きい服飾商会の娘だ。平民といってもそれなりの立場の者が、コネがないと学院の使用人になれないんだよ。貴族とつながりが出来るし、給金もいい。ちなみに僕の親父は学院出入りの商人だ。君の物は高く売れたと親父が言ってた」とジョアが笑いながら言う。

「おまえの親父か！！！！おかげで俺何もなくなつたんだぞ」

「まあまあ、また買い揃えればいいじゃないか。ご主人様には、便利だが所詮その程度の小物を与えてなだめておけばいい。本当に価値があるものは僕らが直接買い取るよ。例えばあの馬が要らない馬車とか、人が乗れる車とか」自動車や自転車を指差す。

「自転車はいいけど、自動車はデカイし、維持が大変だぞ。てか、こつちでも普通に高い。」

「まあその辺はゆっくり考えよう。将来的にはこつちの知識をハルゲニアにもって行って、生産できるようにすれば理想だね。気がついたら経済面での実権すべてを平民が握っているようになれば、今までみたいに貴族に威張られずに済む様になる」とジョア。

「・・・なんかお前腹黒いんだけど。貴族に取り入るために使用人してんじゃないの？」

「物を売って心を買らないのが商人さ。最終的に金を握るのは貴族のバカから絞り上げてる商人だよ。」

「今までは平民ができることなんてたかが知れていたが、ここには平民がすべてを握る世界がある。」

「うまく知識を取り込むことが出来れば、貴族の魔法なんて多少便利な程度にすぎなくなる。商人のネットワークは結構すごいんだぜ。」

「その気になればハルゲニア中の金貨を集めることができる。君とは最高の仕入先・投資先として殆どの商人が手を結びたがるだろうな。そうして貴族に売りつけて、じわじわと力をそいでいけばいい。」

「そうか。お前らも貴族が嫌いなんだな」

「当然だ。僕の従姉はある貴族の妾にムリヤリされて、一生日陰者だ。」ジョア

「私の姉も貴族に目をつけられて、一晚強制されたわ。親も本人も必死に止めてくれといったのに。断つたら商売できなくしてやると脅されて・・・」ミルト。

「えっと、うちはあんまり貴族がかかわることはないんだけど、収穫の5割が税金でもっていかれて、不作の時に餓死か借金を選ばな

いといけなくなった村民がいつぱいいたわ。シエスタみたいに。税金だけ取って何もしてくれないんだから。」とルノー

「そうか・・・わかった。目指すは貴族打倒だ。俺もいい加減むかついているしな」

「まあ、先は長い。まずは情報収集だな」と本を大量に買い込むジョア。

「そんなに買っても読めないだろ？」

「君が僕らにニホン文字を教え、僕らが君にハルゲニア文字を教えるればいい。商人はギブアンドテイクでお互いハッピーが基本だよ」

「なんかとんでもない奴に目をつけられた気がする・・・」

「諦めたまえ、われらが「宝」。一生君に友情を誓おう」

「打算交じりの友情なんていらねえ」と喚く隼人。

「私も友情を誓ってあげる。お菓子お菓子」「わたしも。珍しい服」

・・・三人にかこまれていじられる隼人であった。

告白

シエスタやジョア達と日本に行ったり来たりを繰り返して一週間。無事日本にも部屋を借りられ、徐々に落ち着いてきた。

ルイズには適当に文房具などを渡しておく、特に何も邪魔しに来たりはしてこない。

一度庭でみたら、周囲に取り巻きが出来ていた。気前よく金を使っているのだろう。

朝晩の配食の手伝いをする以外は、基本的に暇である。

ハルゲニア文字の勉強をしたり、日本に帰ってテレビをみてごろ寝をしたり。

（まあ、ルイズに物をわたすとき以外に接触がないってのは平和だな）

そんな事を考えながら使用人部屋で寛いでいると、ドアが叩かれた。「はい、どうぞ」コルベルが入ってきた。

「今少しいいかね。君の異世界の話を聞きたいんだが・・・」

「いいですよ。よかつたらコルベルさんも行ってみますか？」

「おお、いいのかね？早速連れて行ってくれ」

日本にて。今は夜である

「いや・・・すばらしい。まるで天国のように美しく豊かで平和な国だ・・・」

「・・・そうですか・・・」隼人。

数時間はしゃぎっぱなしの中年に付き合っ、心底疲れた様子である。

「君からみてハルゲニアはどう思う？」

「野蛮な世界ですね」きっぱりと切っすてる。

「野蛮かね・・・そうなのだろうな・・・」

「日本に住んでいる人を見ていただいたらわかるように、誰も魔法が使えません。しかし、誰もが不自由なく暮らしています。それに、建前かもしれないませんが、誰もが平等に人権を持ち、役人だろうと警察官だろうと国家元首だろうと人を殺せば裁かれます。もちろんこちらにも貧富の差は激しいですが、ハルゲニアのように貴族から決闘を申し込まれて殺されかけるといったことはありえないんです」

「・・・命の価値が重い世界・・・か・・・」何か思うところがあるのか、コルベールが目伏せる。

「こちらの世界も、数百年前はハルゲニアと同じでした。でも日々進歩して、少なくとも先進国とよばれる国では命は平等です。犯罪も皆同じように裁かれます」

「本来、目指すべき世界はこのようであるべきと??？」

「それはわかりません。しかし、ハルゲニアでは理不尽に貴族が平民を虐げているのでは？貴方も最初僕を召還したときに、人間だからといってかばったりはしなかったでしょう？」

「・・・その通りだ。私も所詮は貴族だったと言うわけだ。すまない・・・。君なら私の懺悔を聞いてくれるのかもしれない」コルベールはぼつぼつと話し出した。

ダングルテールの虐殺・・・無抵抗の相手を伝染病だからと焼き尽くした罪・・・信じていた国家に裏切られた事・・・20年間ずっと良心に苦しみ、逃げるように教師を続けていた。いつか、教え子達がすばらしい人間になり、多くの人を救ってくれるかもしれないと思いつつ、いつか、世界を変えられる発明ができ、自分が殺してしまった平民以上に救えると信じて。

しかし、何も変わらなかった。何もできなかった。

「貴族だったら、生きてまま焼くなんてことにならなかったのでは？」隼人が静かに言う。

「そうだろうな・・・つまり私も平民だからと命を軽くみていたんだ
！！！」
血を吐くような思いで言うコルベール。

「こちらにも伝染病があります。差別に近いこともあります。しかし、こちらでは隔離をして、徹底的に治療をします。その結果、いくつもの伝染病が根治されました。ただ焼くなんて事をしていたら、いつまでたっても伝染病なんてなくなりません。まして教義の違いで人を殺すなんて」

「その通りだ・・・私はただ良い様に使われただけの、愚かで罪深い蛮人だ」

沈黙がおりる。

「貴方はまだ後悔をしたふりをしているだけです。貴方が本当に後悔し、償いをしたいと思われるなら。まず杖を捨て、平民の立場にたって考えてください。ハルゲニアが野蛮なのは、魔法という刃物を持つ理性のない野蛮人が金と権力をほしいままにし、平民がそれに抵抗できないからです。いくら貴族と自称していても、蛮族にすぎません。」

「私に杖を捨てると・・・しかし、杖を捨てた私に何ができるのだろうか・・・」

「杖を捨て、平民となり、貴族を滅ぼしてください。それが唯一の『殺してしまった人以上に人を救える』行為です。僕は友達からハルゲニアの現状を聞きました。多くの平民が生き地獄に苦しんでいます。この現状を変えるには、貴族そのものをなくす必要があるのです」

「しかし、貴族を滅ぼすなど・・・また悲劇が・・・」

「昔、ある国では貴族が平民を虐げて時代がありました。しかし、「産業革命」により平民が大量に物を生産し、どんどんと能力と財力をつけていきました。彼らの一部は「ブルジュア」となり、平民

でありながら貴族以上の知恵と財産を持ちました。また、そのほかの平民も「一般大衆」として、全体としてみたら貴族の何倍もの財力を持つようになったのです。その結果、徐々に貴族は領地や特権を失い、平和的に平民が国の主役として権力を握りました。一時は世界を支配したのです。「世界史の本に書いていたことを言う。

「この世界の知識があれば、きっとハルゲニアを変えられます。平民自身の力によって。その手伝いをしていただけませんかでしょうか。そうすることによって、貴方が殺してしまった平民の千倍を救えると思います」

「・・・わかった。杖を捨てよう。微力ながらハルゲニアを変える手伝いをしよう。そしていつか、この国のような平和な国をつくらう」

コルベールが真に贖罪の道を見つけ出した瞬間だった。

訓練

魔法学院にて。

コルベールにはしばらく教師を続けながら、貴族の立場を利用して協力してほしいと依頼した。

ハルゲニアでは貴族の方が情報も入りやすく、無理がきくからである。

その間に魔法についていろいろ教えてもらった。

「四系統魔法に虚無の系統・錬金に飛行に病人の治療ですか・・・

魔法もなかなか侮れないなと隼人は思った。

「君の能力は特殊だがな。今まで聞いたことがない。可能性があるといえば、始祖プリミルが使役した使い魔だな。その中には胸にルーンが刻まれた者がいたという。名前は伝わってないが」

「始祖プリミルですか・・・この世界は貴族のほかに、宗教面からプリミル教が支配しているんですよ」

「そうだ。貴族からのみではなく、平民からも信仰されている。中には腐った神官もいるが、地方の村や町では子供に教育を施したり、領主との間に入って交渉をして信頼されている神官も多い。そういった所では、領主も無理に領民から搾取できない。問題になり異端審問扱いされると、貴族が破滅するからな」

「貴族の苛政に対して一定の歯止めになっているわけですか・・・」
「それが信仰される由縁だろう。私もプリミル教徒だからね。ただ、新教徒というより平民の立場を重視する勢力も出ていて、今のところは旧教徒から迫害されている」

（地球でいうキリスト教に新旧両教徒の争いかよ・・・まあ手を組めるところもあるかもしれない）

「わかりました。ありがとうございます」

「後、本気で貴族に対抗するなら、君自身の能力も把握しておいた

ほうがいい。思うところがあるので、今からいいかい？」
二人は庭に移動した。

「君は能力を使うとき、どういった感じでしたか？」
「えっと、日本での知っている場所を思い浮かべて、胸に意識を集中させる感じです」

「では、君のこちらでの部屋を思い浮かべてやってみてくれ」

「（考えたこともなかったな・・・）わかりました。やってみます」
1、2、3、4、5・・・
「コルベールが数を数えると、5で隼人の姿が消えた。」

しばらくして庭に戻ってくる。

「先生、すごいです。こちらの部屋に移動できました。これって瞬間移動ですね！！！！」
「コルベールを先生と呼び始める隼人。」

「ふむ・・・瞬間移動が成功したね。発動まで5秒かかるので、もし敵に囲まれたら地面に伏せるとかして時間を稼ぎたまえ。いきなり這いつくばると、一瞬攻撃の手が止まることが多い」

「・・・（なんか格好わるいな。でも実戦ってこんなもんか）
体を鍛えるとかはいいんですか？」

「うーん。体を鍛えるより能力を鍛えた方が、生き残りやすくなるだろう。他にも攻撃方法も考えた。次は、日本での部屋に行く感じの時に振るう力を、全身ではなく手に集中させて、前に出してみたまえ」

「????? えっと、部屋を思い浮かべて、手に力を集中して・・・前にだす・・・うわ！！！！」

いきなり白い光が手からでて、一直線に進んで宝物庫の壁にあたり、消滅する。

「・・・かめめ波？いや、ダイの冒険のメドロー？」

「・・・消滅したんじゃないか？転移したんだろうが、効果は一緒だね。
・・・しかも魔法固定化無視か・・・」

若干ヒビッているコルベール。隼人も膝が震えている。

「やったーこれでルイズを始末できる」と本音が漏れる

「いや・もし主人が死んだり、あるいは頭部の損傷などで魔力がなくなつた場合、使いの魔のルーンも消える。それは止めた方がいい」

「・・・(チツ。ルイズ殺したらこの能力もなくなるのか。)わかりました」

「あと、この間日本に行ったときに試したが、向こうの世界では魔力がなくなるようだ。君がルイズ君を日本に連れて行って置き去りにしようとしても、二人で向こうに着いた瞬間君の能力も消える。そうなつたらこちらに戻ることもできないだろう」

「・・・(手出しできねーじゃんか。やつぱ貴族ごと没落させるしかないか)わかりました。いろいろありがとうございます。またいろいろ教えてくださいね」

部屋に帰る二人。完全に気配がなくなつた後、その様子を見ていた影が動いた。

「なんだいあの力・・・でも宝物庫の壁が壊れた。チャンスだね」

次の日の朝、有名な泥棒土くれのフーケの書状が届いた「破壊の杖一つ。確かにお預かりしました」

盗賊

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』
教師たちがさんざんに口わめいている。

「ミスタ・コルベール昨日の当直は貴方ではありませんでしたか！
？何をしていたのです？」

「申し訳ない・・・生徒の魔法をみていたので。」

「ふむ・・・こまったのう。破壊の杖は王室も知っている秘宝じゃ。
盗まれましたじゃすまん。」

「退職届を用意いたしましたしよ」とコルベール。彼に教職への未練
はすでになかった。

「いやまで、君は優秀な教師じゃ。そこで、破壊の杖を取り戻して
もらいたい。」

「わかりました・・・善処しましょう。そこで、居場所は？」
『バタン』

「その居場所についてですが、森の小屋に不振な人物がいるという
情報をつかみました」ミス・ロングビル

「よし、では君に任せようと思う」

周りの教師は、自分には関係ないと他人事であった。

「君の貴族の義務に期待する。ミス・ロングビル。馬車を用意して
彼らを手伝ってくれたまえ」

「もとよりそのつもりですわ」

魔法学院 正門にて

たまたま出発の姿をみた隼人が聞いた

「コルベール先生、どこに行かれるのですか？」

「ちよつと盗賊退治にね」とコルベール

「俺も連れて行ってください」

「いかん。君は実戦を知らない、怪我でもしたら」
「実戦なんていつ経験するかわかりませんよ。それに、俺の能力なら逃げられるから、心配ありません。ぜひ手伝わせてください」
「そうか・・・わかった。では手伝わてくれ。危なくなったら逃げるようにね。」

「ミス・ロングビル、手綱なんて私が入りますよ」とコルベール
ロングビルは微笑んだ。

「いえ、私は貴族の名をなくしたものですから」

「え？だってあなたはオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

「あの人はそういうことに拘りませんから」

「奇遇ですな」私もそういうことには拘りません。気が合いそうですな」

ロングビルを口説こうとしている。頭が光った。

（この人中年ハゲなのに気分若いよな・・・俺もこんなオッサンならなってもいいな）

コルベールの別な面をみて、ますます好きになるのであった。

「不気味な森だな・・・お化けでも出てきそうだ」

「あ、アレです」見ると小屋があった。薄気味悪い。

「ミス・ロングビルはここで待っていなさい」とコルベール。

二人で警戒しながら小屋に入る。すると、あっさりと見つけ出した。

「これが破壊の杖だね。」

「これって、地球のロケットランチャー」

「それは？」

「うん。俺の国にある武器・・・じゃないな・・・まあ他の国が使ってる武器の一種です。まあ破壊力のある鉄砲とでも思ってください。威力は・・・建物を一発で消し飛ばすぐらいです」

「危ないな・・・廃棄したほうがいいかもしれん」

その時、屋根が吹き飛んだ。びっくりして外にでると、巨大ゴールムが。

「すげえ・・・これが魔法か・・・」

「関心しないで逃げるぞ」とコルベール。

でもその巨体に似合わずすばやく道をふさぐ。

「やむを得ませんね・・・5秒稼いでください」「わかった」

コルベールがひきつけている間に、手に意識を集中・・・元 玉をイメージ。

瞬く間に巨大な白い玉ができた。

「よし・・・極大転移魔法 オクルーア」と適当に考えてた技名をいい、白い玉をゴーレムにぶつける。巨大ゴーレムはあっけなく消えていった。

「すごいな・・・思っている以上に使える能力だね。ところで、どこに転移したのかな？」

「そういえば、考えてなかったです。どっかにいけとしか・・・」

「・・・誰かの迷惑になつてなければいいが・・・」

「考えないようにしましょう。それよりフーケはどこ？」

そこへ森の中からミス・ロングビルがやってきた。

「ミス・ロングビル。無事でしたかな」とコルベール。

「ええ、森の中に逃げていたので・・・それより、破壊の杖は？」

「ちゃんと取り戻しましたぞ。ほらこれで。」

「よかったです・・・ところで、さっきのは、これを使ったのですか？」

「いや、彼の実力です。これはロケットランチャーというものらしいですね。」

「これは相手に向けて爆発物を打つものです。ここを引けば打てます」と隼人。

「どうもありがとう・・・スチャ」とロングビルがこちらに向ける。

「ミス・ロングビル・・・これは？」

「どうもありがとうミスタ・コルベール。おかげで使い方がわかりましたわ。盗んだはいいものの、まんだかわからなくて。お礼に楽に死なせてあげますわ・・・」「すみませんでしたあああ！！！！ん？」

見ると青年が見事な土下座をしていた。

「助けてください命だけは」「コルベールまで一緒に土下座。

「・・・あんたら、プライドないの？もうちょっと」

調子に乗って話していると、いきなり一瞬で二人の姿が消えた。

「ん????どこに行ったの？」

「後ろですよミス・ロングビル」「はっ！！」

ドコッ フーケの首筋にコルベールの手刀が打ち込まれる。

「どうです・・・俺を連れてきてよかったでしょう」

「まっただくだ・・・しかしミス・ロングビルがフーケとは・・・」

「残念でしたね。好きだったんでしょ??？」

「・・・」

とりあえずフーケを縛り上げ、学院に向かった。

馬車にて

気絶から覚めるフーケ・・・縛られている

「ちくしょう。あんた達なんか捕まるなんて・・・ティファニア・・・」

「ごめん」

「そのティファニアとは誰ですかな」とコルベール。

「はん、誰でもいいだろ。どうせ死刑だ」

「・・・よろしければ、盗賊などをしている理由をお聞かせ願いたい。学院の同僚として、個人的に友人だと思っていた相手として、力になれることがあれば・・・」

「それなら逃がしておくれよ。抱かれてもいいよ。あなたにもその坊やにも」と媚を含んだ目で見る

「(クラツ)い、いやそういうことではなく・・・」コルベール。
「あんたが言っていた、貴族の名をなくしたということと関係あるのか？」隼人

「ふん・・・よくある話さ。無能な主君の没落に巻き込まれて、両親を殺され、妹抱えて路頭にまよって盗賊さ。面白いかい？」

「あんた学院長の秘書だろ？妹と二人ぐらし位できるだろう」

「は！！二人なもんかい。使用人たちも殺されて、その子供を合わせて10人だ。文句あるかい」

「・・・見捨てられなかつたのですか・・・」とコルベール。

「こつちにも事情があるんだ。皆私にとって家族同然さ。でも・・・これでおしまいかもね・・・」

「・・・金が欲しいなら俺達を手伝ってくれ。いくらでも稼がしてやる」

「は、あんたみたいな使用人になにが『手付けだ』なんだいこれは？」

「コシヨウ徳用カンヅメ500gだ。売れば金になるだろ？」

「んなものあんたが・・・これ本当にコシヨウじゃないか！！！！！」

「こついつたものをいくらでも持ってこれる。金の心配はない。手伝ってくれ」

「・・・わかつたよ。盗賊より身入りがよさそうだしね」

学院に帰り、フーケは逃がしたものの、破壊の杖を取り返したことを告げる。

オスマン氏は褒め、この件はそれで終りとなった。

盗賊（後書き）

オリジナル技「オクルーア」「土下座レポート」です。

舞踏会

フーケ事件が落ち着いた日の夜。舞踏会が行われていた。

普段、学生や教師が食事を使うアルヴィーズの食堂の上の階が、ダンスパーティーなどに使う大ホールとなっている。

舞踏会はそこで行われていた。

着飾った教師や生徒。その中にはミス・ロングビルとコルベールもいた。

今回のフーケ襲撃は学院中に緘口令がしかれ、教師も何事もなかったようにふるまっていた。

キュルケはいつも通りに男の取り巻きが彼女を讃えており、ギーシュも女の子に囲まれて気分は最高潮のようだ。

青い髪の小柄な女の子が、どこに入るのかと思うほど料理を貪っている。

ミス・ロングビルは、男性教師の大半のダンスの相手をしていた。こうしてみると立派な淑女である。

「ミス・ロングビル、私も一曲おどっていただけませんか？」コルベール。

「喜んで」とロングビル。

二人は優雅に踊っていく。コルベールの頭が光る。

「なんで私を突き出さなかったのかい？お金はともかく・・・名誉は手に入るだろ？」

「名誉か・・・もうそんなもの必要ないんだよ。私は杖も捨てるつ

もりだ」

「なんでだい？私のように強制的に貴族でなくなるならともかく、自分から」

「君の話を聞いてますます思ったよ。貴族であるが由縁の悲劇・私にも覚えがある。君は貴族だから迫害された。私は貴族だから迫害してしまった」 舞踏会の蝋燭の炎をみながら言う

「隼人君のやろうとすることを手伝えば、きっと悲劇がなくなる。少なくとも、誰かの都合で親兄弟を殺される孤児が出なくなるだろう」

「・・・そうなればいいね。しかし、あの使用人にそこまでのことができるのかね？」

「彼は可能性だ。彼の国では誰もが差別されず、平和に暮らしている。私はこの目でみた」

「差別されないか・・・そうなればティファも・・・」
二人は踊りつづける。

「ヴァリエール公爵家三女 ルイズ・フランソワーズ・ル・ブロン・ド・ラ・ヴァリエール様のおなごり」 衛兵が呼び上げる
周囲が熱狂的な歓声がわきあがる。

ルイズから気前よく振舞われる金品や、珍しく、役に立つ文房具を手に入れたい学生達で、ルイズは女王様のように祭り上げられていた。

貴族としての作法は完璧。物腰は優雅で、気品溢れる姿。この国一番の商人から手に入れた豪華なドレスに宝石。多くの男子生徒とダンスを踊り、取り巻きにちやほやされる。

しかし、自分が虐待した使い魔のおかげでこの幸福が手に入ったという意識はない。

隼人が給仕をしている姿を見ても、特に声をかけるでもなく無視をしていた。

舞踏会終了後

「今日は給仕を手伝ってくれてありがとうございます」シエスタ。
「別にいいよ暇だったし・・・しかし、ルイズは随分ちやほやされてたな」

「ドレス姿素敵でしたね・・・女としては憧れます。お姫さまみたいでした」

「ふん。あんなの虚飾にまみれたピエロにすぎない。俺の目には他人を踏みつけその犠牲でワインを飲む醜い魔女にしか見えなかったよ。シエスタの邦がよっぽど綺麗だ」

「まあ・・・ありがとうございます」

部屋は質素。服は汚れがついたメイド服。何の飾りもない姿でも、隼人はシエスタの方が綺麗に思えた。

「また今度、日本でおいしいものでも食べに行こう」

「はい。また連れて行ってください」とにっこり笑う。

隼人はそれなりに幸せだった。

平民

『平民』

舞踏会が終わった夜、一人の男が女子寮の部屋を訪れた。

コンコン「こんばんは・平民です」とドアをノックする男。

「平民が何のよう???」「お届け物にありました」
そのまますばやく部屋にはいる。

「ふふ・誰かに見られた?」赤い髪の少女、キュルケである

「誰にも見られなかったよ。まあ見られても『平民』だからね」と男は言う。ジヨアであった。

「しかし、合言葉が『平民』組織名が『平民』か・いつもながらまぎらわしい。」

「まあそのせいで私達の組織はただの平民の集団と思われるのよ」キュルケ。

「君は貴族だけどね」

「よしてよ。ツエルプスターの忠誠は常に『平民』の元にあるわ。いわば平民の貴族へのスパイよ」とキュルケ。

二人はハルケギニア最大にして、もつとも秘密に包まれている組織『平民』の構成員であった。

ゲルマニアに本拠を置き、各国に商人を無数のギルドを通して派遣、情報の交換をする商人の組織。

表向きの活動はギルドとして公表しているため、どの国にも知られていなかった。

ゲルマニアの成立にかかわり、表向きは貴族が支配するように見せかけ、旧来の貴族を経済的に没落させてその後を構成員の商人に継がせ、経済活動の実権を『平民』の傘下ギルドが支配する。

ツエルプストー家はヴァリエール家に対抗するために、数百年前に構成員の商人が興した家であった。メイジの血を入れて魔法が使えるようになっていたが、意識は平民の経営者である。

『平民』は興した家が貴族化して墮落しないように、常に有能な構成員を込んで監視している。他の家にも使用人を紹介するギルドを通して構成員をおくりこみ情報収集、すべての貴族の家の状況を常に把握していた。

表では国という形で貴族が支配しているが、その財力と保有情報の量は事実上ハルケギニア最大といってもよかった。

そして、ハルケギニアにはない知識をもつ「異世界からの渡り人」を保護し、その知識を『平民』のものとして文明を発展させることも目的としている。「奇跡の渡り人」としられる創業時のメンバーが、自由に異世界を行き来して組織を作ったという伝説があるからだった。

「それで、今度の『渡り人』はどう？いつもよりマシかしら」キユルケ。

異世界からの渡り人を保護するといっても、何十年に一度しか見つからない上に、殆どは大した知識ももたない一般庶民だった。それでもいくつかは知識として『平民』にわたり、魔法を使わず生産する工業化に成功。ゲルマニアは最大の工業国となっている。ツエルプストー家の担当ギルドは冶金と機械工学だった。

「それが、大当たりだ。『奇跡の渡り人』だよ。」とジョア。

「嘘言わないで。そんなに都合よく『奇跡の渡り人』が見つかるわけじゃないじゃない」

「信じられないなら自分で経験してみな。俺は多分『平民』設立後初めて異世界にいつて帰ってきた平民だぜ。これ、俺が実際に買ってきた本だ」と写真集をみせる。

「・・・私より胸が大きいわね・・・」

「じゃなくてその紙と写し画をみるよ」

「わかつているわよ・・・それで、なんで裸同然の女が乗っている本をわざわざ買ってくるわけ？」

「こういうのが貴族に売れるんだよ。それと個人の趣味」

「男ってしょうがないわね・・・それで、『平民』への報告は？」

「もう済ました。信用を失わないように接しろだつて。幸い、貴族に痛めつけられて憎んでいる。喜んで俺らの最終目的に協力してくれそう。それに、異世界自身もここ数十年でハンパなく進歩しているな。向こうのオモチャがこちらで最高級品だぜ。おまけに金がここより価値があるから、両方にメリットがある交易が成立する。ま、

とりあえずうちのギルドが取引を一任された。すぐにはいわないが、徐々に貴族社会を打ち砕くことができるだろう。古臭い貴族に鉄槌を」

「あんたの家がトリステイン担当だもんね・・・わかつたわ。また私にも紹介して」

「ああ、時期をみてな。お前はヴァリエールの小娘を適当に相手してやってくれ」

「あの子貴族のプライド高くてキーキー喚くから疲れるのよね・・・それと、出来たらタバサを救ってやって欲しいの。危険だとわかるけど」

「シャルロット公女殿下か・・・そうとう入れ込んでいるね」

「あの子は親友よ・・・最初はガリア王族として利用するため近づいたけどね」

「わかつた・・・彼女自身が隼人に頼むようにしてくれ。そうしたら異世界で治療を受けられるように俺からも頼むよ」

「お願い・・・ありがとうね」

「なに、こつちも可能性は残しておきたい。彼女がガリア王になる可能性は0じゃないからな」

「シヨアはいい、部屋から出て行った」

(最初あったとき、ヴァリエールの使い魔だからってバカにしちや
ったのよね・・印象最悪だろうな)
キュルケは軽く後悔するのであった。

平民（後書き）

キュルケの世間なれした行動・・・

ゼロ戦の現物みただけで現代の飛行機すら超えるオストラント号を作れる技術力・・・

ゲルマニアの技術力が高い水準にあるのは、魔法に頼らない意識が浸透していて、平民が力をもっているからだと考え、秘密結社『平民』を妄想しました。

指令

ロマリア皇国にて

マジックアイテム「遠話の鏡」を使うヴィーットリオ。

「クロムウエル。レコンキスタの活動報告を」

「はっ。ご報告いたします。わが軍はまもなくアルビオン王軍を追い詰め、息の根を止めるでしょう。その際、必ずや風のルビーと始祖のオルゴールを手に入れ献上させていただきます。聖下」と30代半ばの金髪の男がうやうやしく頭を下げる。

彼は今、アルビオン王国にて反乱をおこし、王室を滅ぼして貴族による共和制を導入、そのまま聖戦をおこそうという『レコンキスタ』の総司令官であった。

2年前までは一介の司教であったこの男が、王権を脅かすまで力を得られたのは、教皇の密かな指令により動く者であったからだ。

「ガリアの動きは？」

「ミュズニトニルンの小娘が協力してくれ、資金とマジックアイテムを提供してくれています。彼女の前では私は私欲にまみれた俗物なのでしょうな・・・」とクロムウエル。目には自分の正義を信じて疑わない強い力があつた。

「辛い思いをさせてすみませんね・・・場合によっては、聖戦のために捨石になつてもらうかもしれません・・・」

「かまいません。2年前に真実を教えてもらった時から命は捨てております。この世界すべての命の前では、私の命など路傍の石。喜んで死にましよう。いや、私が奪つたすべての命がこの世界のための尊い犠牲なのです・・・」涙を流すクロムウエル。

「ありがとうございます・・・それと、例のハーフェルフに被害がないように願います」

「・・・あのモード大公の娘・・・彼女も重い宿命を受けております

な。本来ならこの国の玉座にこそふさわしい虚無の担い手、一度見させていただきましたが、清く正しく美しい娘です・・・」

「あの悲劇を止められなかった我らにも責任はあります。いますこし、穏やかな生活をさせて上げたいのですが、もうそんな事をいつてられなくなりました。ジュリオを向かわせております。彼女を説得してこちらに保護させていただいた上、使い魔召還に入る予定です」

「おお・・・ついに聖戦の準備が。生き延びることができれば、ぜひ彼女と使い魔に会いたいものです」

しばらくして、トリステインのルイズ対策を練る。

「トリステインのレコンキスタの同調者の中から信頼できる者を護衛に頼みましょうか。」

「一人適任者がいますぞ。ルイズ嬢の婚約者にあたり、トリステイン国内でも高い位置にあります」

「それは適任者ですね・・・そうだ、その前に、彼をトリステインの使者として王統軍に潜入させ、

彼に風のルビーと始祖のオルゴールを持ってきてもらうことは可能ですか？もし万一戦乱で秘宝が破壊されたら大変なので」

「わかりました。何かいい口実は・・・そういえば、トリステイン王女アンリエッタがウエルズ皇太子にラブレターを渡したという噂がありましたな。その現物があればゲルマニアとの同盟ができなくなるという噂を流させて、手紙の回収という名目で使者になるようにすれば」

「いいアイデアですね。お手数ですがマザリー二枢機卿の耳にはいるように取り計らってください。念のため、ウエルズ皇太子の政治的価値を説き、ラブレター回収を口実に亡命をすすめられると吹き込めば、使者をだそうという気になるでしょう」

「かしこまりました。かの国の者にすぐ手配いたします。それで、ウエルズ皇太子はいかがいたしましたしょう」

「・・・今の時点ではあまり生かしておく意味はないでしょう。後

顧の憂いをたつためにも殺害を」

「わかりました・・・虚無に栄光あれ」とクロムウエル

「頼みましたよ・・・」

通信を切るヴィーットリオ。

「殉教者クロムウエルに神の導きを・・・」一人祈る。

依頼

トリステイン城にて

「そんな・・・あの手紙がそんな事になるなんて。もし内容が知れ渡つたら・・・」少女が落ち着きなく

豪華な部屋の中を行ったり来たりしていた。彼女の名はアンリエッタ。トリステイン王国王女であり、王が不在のこの国では権力の頂点に立つ存在である。

「おちつきなされ王女殿下」やせ細った中年男性。宰相としてこの国の実権を握るマザリー二枢機卿がたしなめる。

「落ち着いていただけますか。なんとかして回収しないと・・・ああ、それよりウェールズ様。なんとかして助きたい・・・」懊悩するアンリエッタ。彼女は幼い頃からウェールズを愛していた。

（子供のラブレターなど、国家間の政略結婚になんの障害もならない。騒ぎ立てている貴族どもはゲルマニア皇帝との結婚の反対派かレコンキスタの同調者の可能性が・・・しかし、このままアルビオン王統派を見捨てても、必ずトリステインにレコンキスタは攻めて来る。ならば、王統派の残党の中心となるウェールズ皇太子、国家の正当性の証明となる風のルビーと始祖の秘宝を条件に、亡命を認めてもいいのではないか？後から駒として使えるかもしれん）熟練の政治家らしく、メリットとデメリットを冷静に計算するマザリー二。その考えはトリステインに存在するレコンキスタ派から吹き込まれたものだったが、名案に思えた。

「・・・わかりました。手紙を回収する使者を立てましょう。また、条件によっては亡命を受け入れましょう」

「ありがとうございます・・・あの、信頼の置ける者でないと、手紙を見られてしまいますので、使者は私が選びたいのですが・・・」

「（ラブレターなどどうでもいい！！）・・・して、どなたを使者に？」

「そうですね．．私の信頼できるお友達、ルイズに頼もつかと思います」

「???それはなりません。学生を戦場におくるなど．．それもヴアリエール家の三女とは。下手をすれば内乱になりますぞ!」

「ヴアリエール家は関係ありません。お友達のルイズに頼むのです。彼女以外は手紙を託せません」

「．．．．．わかりました．．．では、せめて従者は私が選びますぞ。一人でも生きて帰ってこれる強者にしないと。」

「お任せします．．．ウエルズ様．．」

心配で周りが見えなくなっている王女。マザリーニはため息をつくのだった。

マザリーニ枢機卿執務室

「．．．というわけだ。若くして隊長になった腕。信頼。そしてルイズ嬢の婚約者という立場。君こそこの任務にふさわしいと思う。受けてはもらえんかね？」

「了承しました。必ず任務を果たしてご覧に入れます」頭を下げる美青年。ルイズの婚約者にてグリフォン隊隊長　ワルド子爵。そして、彼はレコンキスタへの同調者であった。

トリステイン魔法学院にて。

「ミスタ・ギドー失礼しますぞ」授業中にコルベールが入ってきた。

ギトーは内心で舌打ちし、やって来たコルベールの格好に頭痛を憶えた。

コルベールは頭にロールの巻いた金髪のカツラを乗せ、派手な刺繍の施されたローブを身に纏い、

「えー、皆さんにお知らせですぞ」
もったいぶった口調で、授業の中止とトリステインの姫殿下であるアンリエッタの訪問を告げる。
使いの魔の品評会という名目だった。

隼人は使い魔として出場させられたが、詳しい能力を貴族に知られたくないなので、下手な歌を歌ってごまかした。当然、入賞できるわけもなく、ルイズに久しぶりに鞭で撃たれた。

その晩、ルイズの部屋を少女と青年が訪れた。

少女の名はアンリエッタ。トリステインの姫殿下であり、ルイズとは幼少の頃からの親友でもある。青年はワルド子爵。ルイズの婚約者にてグリフォン隊隊長。

「・・・というわけで、ワルド隊長と一緒に使者になってほしいのです」

水のルビーを彼女に渡し頼んでいた。

「一緒に行こう。君の事は私が全力で守る。愛しい婚約者だ。これが始めての二人で力をあわせての国家への貢献だ。引き受けてくれるね？」

「はい。姫様のことなら何でもします。それにワルド様がついていてくれるのだから百人力です」
無邪気に引き受けるルイズ。それをみてワルドは笑顔を浮かべたが、どこことなく冷たい笑みだった。

次の日。二人で出発の用意をする。

「そういえば、君の使い魔は人間なんだね。今回の旅にはつれていけないのかね？」

「いいんですあんな奴隷。珍しい物を持ってくる以外に役に立たないんですから」

「そうなのか・・・しかし姿が見えないなあ」

「あんなのどうでもいいです。早く行きましょう」

そのまま特に問題もなく、スムーズに旅は進んだ。

紹介

ルイズがアルビオンに旅立った日。
トリステイン魔法学院女子寮

「ねえ、タバサ知っている？最近学院内にでまわっている珍しいモノに関してのウワサ？」とキュルケ

「ん・・・」青い髪的美少女タバサ。キュルケの親友で、ガリアからの留学生である。

実は現ガリア王ジョゼフに粛清された弟オレルアン公の娘であり、現在王族の身分を剥奪された身である。キュルケは『平民』からの情報で事情を知っている。

「ボールペンにノート。珍しいお菓子の雑貨。爪きりなんてものもあるし」

実は今まで爪の手入れは鋏で切っていたりしたので、怪我がおおかつたのである。

「あと髪を洗うときにつかう秘薬とか、手荒れを治す秘薬とか、あれって実はヴァリエールの使い魔がもって来ているという噂があるのよね。ヴァリエールは領地で作っているといっているけど」

「・・・」本を読みながら黙って聞くタバサ

「メイドから聞いたんだけど、よく使い魔からお菓子もらってるそうよ。他にも、頭痛がするときにもらった薬を飲んだら、あつという間に治ったって」

ピクッ「・・・頭に効くの？」

「他にも傷口に貼るシールとか、肩こりに効く秘薬とか、いろいろあるみたいよ」

「・・・興味ある」

「私の知り合いの商人がわりと仲がいいみたいだから、紹介してもらいましょうか？」

「・・・うん。今から会いたい」

食堂に行く二人

「これは貴族様。どういった御用で？」

「こんにちわ。ヴァリエールの使い魔はいるかしら」

「先ほどシエスタ達と外に行つたみたいですが・・・庭にでもいるんじゃないですか？」

「どうもありがとう」

いい天気だからと、弁当をつくり庭で食べるシエスタ達。

「ほら、日ごろのお礼にがんばって皆でつくつたんですよ。食べてください。」シエスタ

あーん をする

「おいしそうだ・・・パクツ」と食べる隼人。

(ベタだけど・・・そこがいい。でも恥ずかしいな)

「あなた達おにあいよねえ。結婚したら？親戚みたいに似ているし」
ミルト

「二人が結婚して隼人がタルブ村にきたら、一生お菓子に困らないかも」ルノー

「ぜひそうしたらいい。結婚式はうちのギルドで請け負うよ」とジヨア。

「な・・・何言つてんだよ」と顔真っ赤になる隼人。シエスタは嬉しそうににこにこしている。

最近こんな感じの日常が続き、幸せ一杯の隼人だった。

「ちょっといいかしら」赤い髪の少女と、青い髪の少女が声をかける
(この世界の髪の毛ってなんなんだかな・・・まあもう慣れたけど)
「これはミス・ツェプストー。お久しぶりですね。そちらの方はお友達ですか？」とジヨア

「久しぶりね。友達のタバサよ。皆に紹介してもらえるかしら？」

「かしこまりました。皆、この人はツェプストー伯爵家長女キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アルハルツ・ツェルプストー様だ。この方の領地は工業が盛んで、色んな物を作って商人に卸している。うちのお得意様だよ」

「キュルケよ よろしくね」「タバサ……」

「ルノーです」「ミルトと申します」

「そちらの方は？」と隼人を指す

「隼人、こちらは、ちよつと口が悪いが、貴族の中では平民を認めている人だ。俺達をむやみにどうこうする人じゃないよ。彼女の家の領地の平民はハルゲニアで一番金持ちといわれているんだ」

「そうなんだ……改めて初めまして。武田隼人です。ミス・ツェプストー」

「キュルケでいいわ。隼人ね。覚えてたわ。初めて会ったときはからかってごめんなさいね」

「……タバサ」

「それでは、一緒にいいかしら？」と昼食に加わる二人。

タバサがすごい食べっぷりを見せたので、すぐに弁当はなくなった。

食後にお菓子をだし、皆でつまむ

「ふーん。噂には聞いてたけど、本当に珍しいわね。貴方が持ってきたの？」

「ええ……まあそうですけど」と警戒する隼人

「敬語なんていいわよ。今度は私達にも分けてね」

「……聞きたいことがある。頭に効く薬」タバサ

「頭痛薬ですか？そりやありますけど……」とカバンの中から薬をだす。

「……これを頂戴。お金ならいくらでもだす……」と財布をだし、金貨をわたす。

「いいですよ。なくなったら言っして下さい」

「感謝する……」

（やれやれ、なんとか知り合いになれたわね。まあこの薬じゃ効かないかもしれないけど、徐々に仲良くなつて異世界につれていつてもらつて、タバサのお母様を治療できれば・・・）キュルケが思う。その後、終始和やかに話はずみ、タバサも少し表情がゆるんでいた。

同衾

ラ・ロシエールの宿にて。

「久々に会ったからね。美人になった。少し、飲まないかい？ ルイズ」ワルド。

「はい。（大人だわ・・・かっこいい）」ルイズ。

ワルドがルイズのグラスに、ワインを注いでいく。そして、自分のグラスを掲げて言った。

「任務の成功を願って。そして二人の将来に。」

ルイズも微笑みながら、グラスを合わせる。ガラスの触れ合う、かちんという音がした。

「ふふ・・・しかし姫殿下から直接依頼されるとは、君は信頼されているね」

ワルドはワインを一口含み、ルイズに話す。

「そうなんです。私達は小さい頃からの親友で・・・」

「ふふ・・・お互い大切な友達か。少し妬けるね」

「もう。からかわないでください」真つ赤になるルイズ

「この任務が終われば、私達への姫殿下の信頼はゆるぎないものになるだろう。君は側近として仕えることになるかもしれない。私と一緒に忠誠を尽くし、国を支えよう。」

「はい・・・」

「昔を覚えているかい？ 君のお屋敷の中庭の小さな池。そこに浮かんだ小さな船で、泣きながらうずくまる小さな少女。君は、いつも姉君と魔法の才能を比べられて、デキが悪いつて言われていたね。その度に、あそこでいじけていた」

「忘れていませんわ。私にとっては大切な思い出です。いつも探しに来て、優しく慰めてくれた兄のような少年。彼が婚約者だとしり、

「どれほど私の心の支えになったか」

「そうかい。嬉しいよ。でも、僕はずっと間違いだと思っていた。君にはきつと特別な力がある。たとえば使い魔に人間を呼び出したりね。誰にも使える魔法が使えないのは、君が他人には無い力を持っているからさ。幼い頃から見守っていた僕だから、それがわかる。信じられる」

「ワルド様・・・（この人は私を信じてくれているんだ）」

「君ももうレディだ。私はもう以前のようには兄としてではなく・・・一人の男性として君を愛そう」

ワルドの言葉とワインに酔っていくルイズ。

「二人は人生のパートナーだ。そろそろ休もうか・・・部屋は一つでとつてある。今夜は初めて二人ですごす夜になるな。さあ・・・行く」

「・・・はい」ルイズ。

部屋にて。

「あの・・・私は初めてで・・・母から結婚後ではないとそういうことではいけないって・・・でも・・・ワルド様は婚約者で憧れている人で・・・」

「ふふっ　緊張しているのかい。大丈夫だよ可愛いルイズ。目をつぶって私に任せればいい」

「で・・・でも『ふぐっ』」いきなりキスをされるルイズ

「あ・・・」キスをしながら服を脱がされ、押し倒される。

「や・・・やっぱりダメです。こういうことは・・・ヒグッ」いきなり泣き出してしまふルイズ

（チッ　小娘が。このまま抱いて俺から離れられないようにしてやるうと思つたが、無理矢理してしまうと逆効果だな。仕方ない。今日のところは紳士的な態度を通してやるうか）

「泣かないでくれ愛するルイズ。君の涙をみたくない。わかった。結婚までこういうことはお預けた。

だが、君のぬくもりを感じていたい。二人で肌を重ねて夜を過ごす」

「はい・・・泣いたりしてすいません。心の準備ができていなかったので・・・。ワルド様の胸はとっても暖かくてたくましいですね・・・まるで小さい頃、抱っこされたときみたいです」

「・・・（子供だな）ふふ、君も美しくなった。これほど美しい体を見た男はいまい。」全身を撫で回す

「あっ・・・」

しばらくして、すやすやと寝息を立てるルイズ。

少女は幸せだった。男はその寝顔を冷たい表情でみていた。

ニューカッスルにて。

ラ・ロシエールで竜籠を借り、直接ニューカッスルへ。トリステイン大使として謁見する。

ルイズは一礼して、二通の手紙をウェールズに渡した。アンリエッタ王女とマザリーニ枢機卿からの手紙である。

手紙を受け取ったウェールズは、まずアンリエッタの手紙を愛しそうに見つめ、慎重に封を開いて、中の便箋を黙読する。その間、ルイズ達は黙ってそれを見ていた。

一通り読んだのか、ウェールズは顔を上げる。

「アンリエッタは結婚するのかね？あのゲルマニア皇帝と。なんてことだ・・・私がふがないばかりに・・・私の、可愛い従妹が20も離れた男に・・・その瞳には、悲しみが宿っていた。

「私の心の支えだが、すぐにお返ししよう・・・」手紙をだし、ルイズに手渡す。

「ウェールズ殿下、マザリーニ枢機卿の親書もぜひお読み頂けますようお願いします。」ワルド。

・しばらく手紙を読んだ後、決心したように言う

「マザリー二枢機卿に心から感謝したい。われわれを受け入れてくれるとは。ありがたく非戦闘員についてはトリストインに亡命させていたどころ。もちろん、風のルビーと始祖のオルゴール、そのほかの王室の財産もすべて進呈させていただく」

「貴方達貴族はどうするのですか？」

「われわれは貴族だ。敵に後ろを向いて逃げることはできない。潔く散ろう」

「そうですね・・・同じ貴族として、痛いほど気持ちはわかります。あなた方の気高い精神は必ず後世に美しい物語として伝わるでしょう」とワルド

「理解してくれてありがとう。これが風のルビーと始祖のオルゴールだ。君に託す」とワルドに渡す。

「さあ・・・今日はわれらが最後の晴れ舞台だ。使者殿も楽しんでくれ」と舞踏会に参加するよう依頼。二人も了承した。

豪華絢爛たる舞踏会。豪勢な料理にきらびやかなドレス。それはまさにアルビオンという蠟燭の最後の輝きであった。

(虚しいものだ・・・まあ、所詮伝統の最後などこんなものだ。せいぜい踊るがいい)腹の中で笑うワルド。泣き出しそうなルイズをなだめながら、ワルドは適当に相手をしていた。

その後、最後の船で非戦闘員と脱出、ラ・ロシエールで再び一泊。

「君は大使の役を立派に果たしてくれた。私の妻としてふさわしい」ワルド様・・・これでよかったのでしょうか？」

「彼らの気持ちを理解してあげなさい。彼らは貴族の誇りを守ったんだ。さあ、疲れただろう。明日には王宮で報告して、君は学院に戻ることとなる。またしばらくあえなくなるのだ。二人の気持ちは離れないよう、今晚はお互いのぬくもりを感じて休もう」

「はい」服を脱いでベットに入る二人。

しばらくルイズを宥め、寝静まった後、ワルドは外に出る。

「これが風のルビーと始祖のオルゴールだ。確かに渡したぞ」

「はい。クロムウエル閣下に必ずお渡しします。これで手加減なしに攻め入ることができません」とクロムウエルからの使者は言った。

「せいぜいがんばってくれ。彼らも本望だろう」とワルド。

「それでは、これを」と精巧に作られた贗物を受け取る

「ふふふ、これをトリステインに献上すれば、任務完了だな」満足の笑みを浮かべる。

ワルドには今回三つの目的があった。

第一の目的である風のルビーと始祖のオルゴールの奪取

第二の目的であるルイズの心

第三の目的で王女とマザリーニ枢機卿の信頼

どれも見事に達成し、今後の大きな力になるであろう。

「それでは、帰るとしようか。子猫の機嫌を損ねるかもしれないのでね」

「どうもありがとうございました」と使者。

ルイズが寝ているベットに静かに入り、満足のうちに眠っていった。

復讐

無事に任務を果たして、学院に帰ったルイズ。

アルビオンではニューカッスルが陥落し、ウエールズ皇太子も戦火の中に消えた。

その後、新政府レコンキスタからトリステインとゲルマニアに一方的に不可侵条約を押し付けられ、圧倒的な空軍を擁するアルビオンに抵抗できない両国は条約を受け入れた。

嵐の前の静けさのような状態だが、とりあえず平和が戻った。

トリステイン魔法学院にて

最近では隼人がシエスタ達と食事していると、キュルケとタバサがやってきて、食後のお菓子を食べながら談笑するといった事が頻繁におこり、隼人も二人と少しずつ仲良くなっていった。

だが、その姿を快く思っていない者も少なからず存在した。

「なんだ彼女らは。使用人たちと馴れ合って。ゲルマニアの野蛮人とガリアの馬の骨。所詮貴族の誇りなどないんだろ。」

以前二人にちよっかいをかけて、散々な目にあつた風の名門ド・ローヌのヴェリエ。

「平民の癖に女に囲まれて・・・まったく生意気だよな」太った男。マリコルヌ。

他にもキュルケに振られた数人の男達が楽しそうな彼らを見て、口々に悪口を言う。

彼らは女にまったく相手にされないの、隼人に嫉妬をまやしていた。

「しかし、どうする？直接あいつをボコったって、あの女たちからまた仕返しされるからなあ」ヴェリエ

何度も痛い目にあつたので、学習している。

「簡単だよ。あいつには天敵がいるだろ？頼んでみればいい。」
「そうだそうだと同意する声上がり、ギーシュの元に向かった。

「それで、どうしてほしいんだい？」ギーシュ。

「また君にあの平民に対してしつけをしてもらいたいんだよ。思いついた平民を指導するのは貴族の義務だろ？」ヴィリエ

「まあ、あんな平民なんて何度でも躰はできるが、学院から文句を言われるからなあ。」

以前隼人を殺しかけたことで嚴重な注意を受けたギーシュ。

「学院内でしなければいいだけさ。外に呼び出して躰をすればいい」
「まあいいだろう。下賤な平民の女ならともかく、貴族の女にまで話しかけるなど、思いつきもはなはだしい。」

いくらゲルマニアの野蛮人やガリアの馬の骨でも一応貴族だからね」
そっくり返って言う。

「ありがとう。」

「いやいや、貴族として当然さ」

それから、庭で洗濯しているシエスタを見つけ、後ろから「眠りの霧」の魔法をかけて眠らす。

レビテーシオンで裏山に運び、洗濯物のところに手紙をおく。

しばらくして、ルノーが見つめ、中を呼んで顔色を変える。

「準備を整えたぞ。シエスタを助けたければ裏山に行くように書いておいた。ヴァリエールの使い魔あてにな」ヴィリエ

「誰にも見られなかったらうね」マリコルヌ。

「ああ、同じ失敗はしないさ・・・あの隼人とかいう使用人が裏山にいったら・・・ギーシュに連絡して、見つからないように遠見の魔法で見物だ。」

隼人が痛めつけられる姿を想像してワクワクする数人の男。

「隼人どうするの？学院長かコルベールさんに相談したほうが・・・」
「ルノー」

「いや、こんな事が何回もあつたらたまらない。きつちりカタをつけるさ」隼人

「しかし、どうするんだい？怪我でもさせたら君が責められるぞ」
ジヨア。

「怪我させないさ・・・ふふふ」
なんだか目が逝つちやつてゐる隼人。怖い

「・・・なんか隼人の方が怖いんだけど」ミルト

「いい加減、堪忍袋の緒が切れた。シエスタに手をだすなんてな」
・・・一人で裏山に向かう隼人。

「向かつたぞ。ギーシュに連絡だ。これから処刑シヨアの始まりだな」
「ヴィリエ

裏山ではギーシュと隼人が対面していた。ギーシュの後ろでは眠つてゐるシエスタ。

「・・・シエスタに何かしてないだろうな」

「こんな平民に？冗談言うなよ。こつちが穢れてしまつw」とギーシュ

「そうか・・・」

「悪く思わないで欲しいね。君は調子に乗りすぎ「瞬間移動」・・・え？」

いきなり消えた隼人。とまどうギーシュ。後ろに転移する隼人。そのままルノーに意識を集中

「どこにいった・・・ん？」白い光が二人を包み、二人の姿は消えていった。

日本にて

「・・・ん？何があつた？ここはどこだ」とギーシュ。隼人にはなじ

みが深い町だが、ギーシュはいきなり見慣れない場所に出現して、状況がつかめない。

「さいならバイバイ」と隼人はハルケギニアに戻る。ギーシュを置き去りにしたまま。

後はポカンとした顔をしたギーシュが取り残された。

ハルケギニア

「よいしょつと」眠っているシエスタを背負い、学院に戻る隼人。遠見の鏡で状況をうかがっていた少年達も何がなんだかわからない。「あれってどうなったの？ギーシュは？」「さあ・・・？」

その後、ギーシュが搜索されたが見つからなかった。

陰謀をたくらんだ少年達も事実が発覚されるのを恐れて沈黙し、ギーシュは行方不明扱いとなった。

反抗

ギーシュが行方不明になって数日後。隼人はルイズに呼び出された

「何の用だよ」ギーシュを始末して、自信をもった隼人。横柄な口調で言う

「あんた、ご主人様にむかってなんて口の利き方よ」

「へえへえわるうござんしたねWこちとら平民なんで、口の利き方なんて上等なものは習ってないんでね」おもいきりバカにした口調でいう。ルイズが鞭を振るおうとする

「待った。一発でも鞭で俺を殴ったら、もう二度とモノを持ってきてやらないぞ」

「あんた何いってんのよ。私がいつでもあんたを召還できるの忘れたの!!」

「バーカ。召還されたら逃げればいいじゃん。何回でも。ギーシュはどうしたのかな」

「あんたまさかギーシュを・・・」

「なんであんな奴に殺されかけたんだろ？トイレでオシッコするより簡単だったぜw」

「舐めた事言ってんじゃないわよ。爆発させてあげるわ」と杖を向ける

「瞬間移動」一瞬で距離を縮め、鳩尾を殴りつけ、杖を取りあげる

「はい、これで爆発も使えない。一丁あがりつとw」

ルイズは腹の痛みに耐えながら、なおも言い放つ。その顔は醜くゆがみ、まさに魔女だった。

「この私になんてこと・・・ヴァリエール家を敵にまわしたわね・・・あんた確実に殺してあげるわ」

「ふーん。殺されるんなら何しても一緒だな」と鞭を取り上げ、ルイズに叩きつける

「痛い、痛い。痛い・・・止めなさい・貴族に向かつてなんてこと・・・」
顔面に当たり鼻血がでるルイズ。今までにこんな屈辱を味わったことはなかった。

「何言つてんだ。今まで俺にしたことをやり返したただけだ。俺が痛くなかったとも思つてんのか」さらに何発も打ち付ける。ルイズが荒い息をついて這い蹲る。

「ふん。女を鞭で叩いて快感を得る趣味はない。俺はお前より上等人間だから、この程度でゆるしてやろう。今後俺にかかわるな。今よりさらにひどい目にあうだけだぞ。こんな具合に消されたいか？」

杖と鞭を小さいオクルーアで消す。ルイズの顔に恐怖が浮かぶ。

「あと、お前には二度とモノは持つてきてやらん。友達の親父に直接売るからw」

すつきりした顔で笑いながら部屋をでる隼人。後には傷だらけのルイズが残された。

ルイズの部屋にて。

「悔しい・・・悔しい・・・あの使い魔、絶対に殺してやる・・・」

ベッドの上で泣きながら呪詛の言葉を吐くルイズ

「お父様に言つて腕利きの部下をよこしてもらつて始末してもらおう・だめね。あの魔法・・・あいつの能力なんだわ。何人でかかっても逃げられてしまうだけ。それに、ギーシュは多分あいつに消されたんだわ。下手をすればみんな消されてしまう・・・どうすればいいの・・・だれか助けて・・・助けて・・・」

泣き続けるルイズ。こんなに悲しくなつた事は幼い日に叱られて以来だった

「こんな時に助けてくれたのは・・・そうだワルド様。あの方に殺してもらおう。ワルド様ならきっと私を助けてくれる」

自分に都合よい事情を書き溜めた手紙を書き、鷹便で送る。

「ふふ・・・見てなさいよ。あんたの命もあとわずかよ・・・ふふふ

ふふ」

いつしかルイズは笑っていた。復讐の愉悦にひとりながら。

末路

ルイズからの鷹便を受け取ったワルド。手紙を読む

「ふむ・・・使い魔に反抗された。鞭で打たれて屈辱を与えられたから、殺して欲しいということか。能力についても書かれているな。異世界と自由に行き来できる能力・瞬間移動能力か・人間を消す能力か。化け物だな。虚無の使い魔の中で唯一謎とされていた心臓の使い魔か。厄介な」

ワルドは考える。

「私でも倒すのは難しいな。不意打ちが失敗して一瞬でも時間を与えたら、確実にこちらが消滅する。対抗できるはずがない。どうするか。いつそ彼を殺した振りをしてレコンキスタに取り込むか」さらに考える。

「いや、ルイズが新しい使い魔を召還するときに、また再召喚されるだけか。そうなった顔を合わせたら、今度こそ確実にルイズは殺されるだろう」

「面倒だがやむをえないな。ルイズには対象者を強制的に服従させるマジックアイテムを与え、彼に自発的にそれを装着させるように追い込むか。我慢の限界を超えさせないよう、有効期限を定めて。そうしておいて、いずれ機会をみて私がマジックアイテムを外してやり、ルイズと停戦させて恩をうる。これが一番いい方法だろう。そうなれば、彼の弱点をさぐる」

必ず力になるが、今はほうっておくべきだとなだめる手紙をルイズに書いておく。

「しかし面倒な・・・女とは皆厄介なものだな」独り言をいうワルド。

トリステン魔法学院にて

「きょうこそ、ニホンに連れて行ってもらうわよ。金貨もたくさん持ってきたわ」キュルケ

「・・・楽しみ。あの薬もつと買う」タバサ。
二人に捕まり、日本に連れて行くことをせがまれる隼人。
「・・・わかったよ。でも言葉が通じないから迷子になるなよ。俺から離れたら帰れなくなるぞ」
「わかったわ」「・・・わかった」
三人は光の中に消えた。

日本にて。

「本当に異世界なのね・・・感動したわ。先人達が憧れ追い求めた理想郷・・・まさか私がこれるなんて」

キユルケが感動している
「先人???なんの事だ」

「あ、こつちのこと。気にしないで。珍しいものばかりで感動しているの」とキユルケ。

タバサはさつそくパン屋の前に陣取り、いい匂いをするパンをじーっと見つめて動かない。

「とりあえず、金貨を換金しよう。ほら、こつち」と貴金属買取店に行き、日本円と交換。

「えーっと、とりあえずこちらでは1エキユ＝1マンエンになるのよね。あとゴセンエン・センエン・その下は硬貨か。1スウ＝100エンでいいの?」

「だいたいそんなもんだ。わからなかったら俺に聞けばいい」

「頼もしいわね・・・ふふ。ダーリンと呼んであげましょうか?」

「やめて・・・なんか怖いんだけど」「失礼ね」じゃれあいながら道を歩く。

「そういえばタバサ。頭痛薬は効いたのか?お母さんが病気なんだって?」

仲良くなっっていくうち、母親を治すために必要だとタバサは話していた。

「・・・まだ治らない。でも、痛みでうなされることは少なくなっ

て、少しずつ落ち着いている」とタバサ。

「まあ・・所詮市販の薬だからなあ・・ちゃんと医者に見せた方がいいか。でもなんて説明しよう。健康保険証がないし身分証明できないし・・金払えば済むことなのかな？」

そんなことを話しながら歩いていると、キュルケが聞いてくる

「ねえ、あの人なにしているの？路上で寝転んでいるし、歩いている人より明らかに着ている服が汚いわ」とキュルケ

「ああ、こちらの世界でも貧富の差は激しくて、一度一般社会からドロップアウトすると、家もなくなったりして路上で生活するしかなくなるんだ」

「・・・こちらの世界でも貧民っているのね・・理想郷はどこの世界にもないか」キュルケがつぶやく

「・・・金髪・・あと若い」とタバサ

「え・・ホームレスの外人って珍しいな・・ってアレはギーシュ！」

そう、路上で眠っているのは、10日ほど前に置き去りにしたギーシュであった。

言葉も通じない、魔法も通じない、金も持たない、頼る人もない生活で、すっかりやせ細り、ホームレスに堕ちていた。

「俺を殺そうとした奴だけど、さすがにかわいそうだな。元の世界に戻してやるうか」仏心をだす隼人

「そうしたら、今度こそ貴方を殺すでしょうね。家に帰ってお風呂に入り、たっぷり食事をとって睡眠をとれば、貴方に対する恨みを晴らそうとする余裕が生まれるわ」キュルケ。

「・・自業自得・・殺されなかったただけマシ。隼人はお人よしすぎ。もつと苦しめられている人もいる」とタバサ。

「そうだな・・見なかったことにしよう」とその場を離れる三人。たくさんの珍しいモノを買ってさっさとハルケギニアに帰った。

混浴

ルイズに仕返しして、すっかり気分が晴れた隼人。いつものようにシエスタを連れて日本でデートしている。

「何回か連れてきていただいて、こちらの物をハルゲキニアに持って行ってジョアさんのお父さんに売っていたら、いつの間にか5エキユーが500エキユーに増えました。これも隼人さんのおかげです」とシエスタ。

「大したことはしていないよ。俺はこっちに連れてきただけ」と照れる隼人

「いえ、本当に感謝してもしきれません。そうだ、今度お金を家族に渡しに行くのですが、隼人さんも一緒にきませんか？家族にも紹介したいし・・・家族も、ひいおじいさんの生まれた世界について聞かされて育っているから、みんな憧れているんです」

「ありがとう、それじゃ、二人で行こうか」

「はい！！」嬉しそうなシエスタ。

「そういえば・・・自転車をジョアに注文されているんだよね・・・何台か買っていくか」

「私も乗りたいです。でも乗れるかな・・・」

「すぐ乗れるように、補助輪をつけてもらうか。別に見栄なんて張らなくていいしな」

その他、いつものように大量に物を買ひ込み、食事をして日本の部屋に帰る

（ふぁ・・・大量に買って疲れたな。あつちには蒸し風呂しかないし・・・風呂に入って帰るか）

「シエスタ、お風呂に入って帰ろうよ。さっぱりするよ」

「お風呂ですか？どこにあるんでしょう？」

「どこって・・・ここ」とユニット式のバスをさす。

「え？これお風呂なんですか？大きな桶かと思ってました」

「そういや教えてなかったか。こっちには大体一つの家に一個お風呂がついているんだよ。ほらこうやって」風呂にお湯を入れる

「あつたかい・・・沸かさなくてもお湯がでるんですか？すごい・・・」

「しばらくして湯がたまったら、お風呂に入ろう」

「え？あつ　はい・・・わかりました・・・」なぜか顔を赤らめるシエスタ

(???・・・なんか変なこといったかな?)

しばらくして風呂に湯がたまる

「そろそろいいかな？それじゃ入ろう」

「はい」なぜか決心した顔をして、服をいきなり脱ぎはじめるシエスタ

「ちよつと、脱ぐのはここじゃなくてあっち」あせった顔で隼人はいう

「そ、そうなんですか？」と移動するシエスタ

(あせった・・・でもシエスタ、脱いだらすごいな)

「あ、あの隼人さん。脱ぎましたけど」

(報告しないでいい!!!)イケナイ妄想が脳内で炸裂する。

「ああ、そう、それじゃお風呂に」

「あの・・・一緒に入りませんか？使い方わからないから怖いし・・・それに隼人さんのお背中ながしますから」

(マ・・・マジで?)

「でもそれじゃ・・・」「大丈夫です。覚悟決めてますから」とシエスタ。

隼人はフラフラと魅惑の風呂へむかっていった。

レオ　レスの部屋は一人用である。風呂も狭い。その狭い風呂に二

人が入ると、当然むにむにする。

「お背中流します。隼人さん気持ちいいですか？」

「いい・・すごくいい。むにむに」

シエスタはタオルすら身に着けてない。背後から体を押し付けるように隼人をあらう。

「そ・そんなとこまで。そこだけは俺が洗うよ」大事なことだけは死守する。

「隼人さん、たくましいですね。はい、綺麗になりました。次は私を・・」と交代する

「あ・・そこは自分で洗います」「よいではないかよいではないか」いろいろなところを洗われ洗い、隼人のテンションは最高潮だった。

「それでこの狭い風呂にどうやって二人が入るか・・しょうがないなあ」>といいながら隼人が入り、その上にシエスタが乗っかる形で入る。後ろから抱きかかえる形である

「あの・・隼人さん？何か当たっているんですけど」抱きしめられて真っ赤になるシエスタ。

「キニシナイキニシナイ（一秒でもながくこの天国がつづけければ）」結局、一時間も風呂に入ってしまった。

風呂から出てさっぱりした二人。

（風呂上りのシエスタ・・イイ。今日こそ童貞喪失か！！！！）

「それじゃ、皆心配しているかもしれないから、帰りましょうか。

お土産もいっぱい買えましたし」

「ハイ・・・」

結局、泊まっていこうとはいえない童貞の隼人だった。

混浴（後書き）

混浴イベントははげせない。

勇者

トリステイン魔法学院使用人寮

「母を日本に連れて行って、治療をうけさせたい」タバサが隼人に頼む

「わたしからも頼むわ。なんとかしてあげて」キュルケ。

「別にいいけど、お母さんは連れてこられる？」隼人

「無理・・・一緒に来て欲しい」

「隼人もこの世界は学院しか知らないでしょ？旅行がてらどう？」キュルケが気楽に言う。

「そうだな・・・どうせいつでも帰ってこれるんだし。行こうか」

「決まり・・・シルフィード」と使い魔を呼ぶ。

隼人は今までタバサの使い魔を見たことなかった。

「すごい！！ドラゴンだ。まさにファンタジー」はしゃぐ隼人

「隼人がはしゃぐなんて珍しいわね。なんかいつも驚かされている

仕返しできたみたい」

「乗って・・・はやくいこう」

「てかちよつとまで？乗るって？まさか・・・羽あるし」

「ん？ドラゴンに乗るなんて普通よ。空を飛んでいくから早いし便利だわ」

「空を飛ぶっておい・・・嫌だ。屋根なしのオープン飛行機なんてシヤレにならん。絶対嫌だ」

「わがまま言わない」「早く・・・」二人に引きずられてシルフィードに乗せられる

「嫌だはなせ・・・わっわっ、マジで飛んでる。高い高い、怖い。羽はたくな、ゆれる・・・おろして頼む シニタクナイ」

ギヤイギヤイ喚く隼人。タバサに後ろから眠りの霧の魔法を使われ、眠らされた。

オルレアン屋敷にて

「初めて来たけどいい所ね・・・これはガリア王家の紋章？でも不名誉印が押されているわ」・・・あらかたの事情は知っているが、実際に見るとひどい有様である。元は豪華な屋敷が廃墟寸前だった。

「ベルスラン・・・お母様の容態は？」タバサがただ一人の召使に聞く
「今のところは落ち着いています。シャルロットお嬢様が持つてこられた薬が効いているみたいで。」

「そう・・・」

「それではこちらへ。お嬢様がお友達を連れてくるなんて初めてですな。お茶の用意をしましょう」

・・・皆で屋敷に入る。眠っている隼人はレビテーションで運ばれた。

隼人を起こして、居間で話を聞く。そこから聞いたのは、タバサの事情。

タバサ、本名はシャルロット・エレヌ・オルレアン。現王の姪でガリア王族である。

タバサの父親は、シャルル・オルレアン公爵。故人である。

天才メイジと称され、現王ジョゼフの弟にして王位を争った人物だ。

現ガリア王ジョゼフ。無能王と呼ばれる男。

しかし、魔法が使えない彼を暗愚とのしり、笑いものにしてシャルル王位継承を進めた貴族は、今はほとんど滅ぼされ墓の下。シャルル自身も暗殺されたらしい。

彼らの父親である先代ガリア王はジョゼフの能力を見抜き、争いを防ぐために“次の王位には、ジョゼフを”と遺言を残した。しかし、遺言にもかかわらず、争いは止まらなかった。

魔法至上主義であるガリア貴族達にとって、魔法が使えないジョゼフは平民のようなものだったのである。結果、二派に分かれて激し

い争いがおこった。

そして、その結果オルレアン大公が暗殺され、その後継者のシャルロットが狙われた。手打ちのパーティで母親はシャルロットの代わりに魔法薬を飲み、正気を失うという結果に終わったのだった。

結局、お家は不名誉印を付けられ、シャルロットは王族の権利を剥奪された。命までとられなかったのはさすがにこれ以上体面を無視するわけにはいかなかったのである。

そして、シャルロットはその名を捨ててタバサと名乗らされ、シユヴァリエとして裏の任務をこなす事で王家への忠誠を試され、今まで生き延びてきたのである。

「そうか・貴族であるからこそ悲劇もあるんだな」ぼつりと隼人が言う。

「……私は、母様を助けたい。そして、ジョゼフに復讐したい」キユルケも詳しく話を聞いて、涙ぐんでいる

「なあ、日本でも政治家の権力闘争はあるんだ。ただ、少なくともここ何十年かでそのせいで暗殺されたり、ましてその家族まで悲劇にあつた話なんて聞いたことがない。てか、政治の最高権力者でも政敵の暗殺どころか女のトラブル程度でその座から引きずりおろされるんだぜ。たしか何代か前の首相でそんなのが実際にいた」

「・・・そうなの？」

「ああ、あと大抵首相についての奴はすぐ顔色悪くなってゲツソリするようになる。災害が起きるだけで

無茶苦茶非難される。不眠不休で働いてもいちいちケチつけられる。働かなくてもケチつけられる」

「へんなの。そんなのメリットないじゃない」キユルケ

「まあせいぜい裏金やら、何らかの口利きができる程度だな。それにどんなに偉くなっても建前上は一代限りで地位の継承はない。内閣総理大臣も平民だ」

「……王様もそうなの？」

「形式上の王様はいるよ。妾の一人ももてなくて、70過ぎても公務にひっぱりだされてお菓子一つ自分で買えないけどね。その王家と、数家の王の親戚以外、貴族と呼べるものはない。誰かから聞いたんだけど、王位継承順位一桁くらいの人が学生してて、どこかでバイトしているんだって」

「ほんとうにそうなの？」 キュルケは聞く。『平民』の思想でもそこまで極端ではない。

「ああ」

「……ガリアもそんな国だったら、お父様も殺されることなかった。お母様も……」

いつの間にか泣き始めているタバサ。キュルケが優しく抱きしめる。「とりあえず、今はお母様を治すことを考えましょ。治ったら私のところに来ればいい。先のことは後からかんがえましょ」

「そうだな。それなら早速いこう。」

隼人は眠っているタバサの母親を抱え、4人は日本に転移した。

「てか、話してたら遅くなりすぎたな。病院全部閉まっている」

「仕方がないわね。また明日病院につれて行きましょ」とタバサの母親をベットに寝かす。

「また帰るのメンドクサイから、今日はこっちに泊まるか。狭いからタバサとお母さんはここに寝て、俺とキュルケはホテルにでも泊まるか」

「ふふ……夜のお誘いね。さりげなく迫ってくるあたりキライじゃないわよ」と妖艶に笑うキュルケ

「一緒の部屋じゃないからな！！！！！！」と顔真っ赤にする隼人「いいじゃない。シエスタには内緒にしておくわよ」

「あーもういいから、タバサ、それでいいか？」

「うん。ありがとう。私はここでお母様を見ている。また明日……二人で楽しんできて」

(「え？今タバサが冗談を言ったの?」)

隼人とキュルケは出て行った。タバサは一人で祈る

(「神様・・・どうか明日こちらのお医者様がお母様を救ってくださいますように・・・」)

そのまま、母親の隣で眠るタバサ

「シャルロット・・・ああ、私の可愛いシャルロット・・・」

(「ん・・・お母様の声・・・懐かしい。夢の中で聞けるなんて」)

「シャルロット・・・」懐かしい暖かいものに包まれる。少しずつ意識が覚醒する。でも夢の中にいるような感覚

(「これは夢だ・・・お母様が私の名を呼び、抱きしめてくれるなんて。でも、この夢を一生みていたい」)

その時、ドアが開いて、隼人とキュルケが入ってくる

「おはようタバサ・・・よく寝れたか・・・今から病院に・・・って?」

絶句する隼人

「え・・・なにこれ?」同じく固まるキュルケ

「下がりなさい。貴方方は何者ですか。シャルロットには指一本触れさせません」しっかりした気品のある声で一括される。目に強い意志を備えた、タバサによく似た美しい女性。

タバサは、正気を取り戻した母親に抱きしめられながら、これは夢なんだ、夢なんだ、期待を持って裏切られたらきつと私は壊れてしまおうと何度も言い聞かせていた。

「・・・なんで何もしてないのに治ってるの??」と二人は混乱していた。

タバサは母親にすがりつき、泣いていた。

「と・・・とりあえず僕達は敵ではありません」と隼人

「隼人、とりあえず二人だけにさせてあげましょうよ」とキヨルケ
「そ、それでは失礼します」と出て行く二人

近くのファミレスで朝食を取る二人

「なんで治ったんだ？何もしてないのに」

「そういえば、こちらでは魔法がつかえないのよね」とキヨルケ。

杖を出してライトの呪文を唱えても、何も光らない

「ああ、コルベール先生が言っていた。この世界にきたら魔力がなくなるって」

「オルレアン公夫人が飲まされたのは、魔力を狂わせて心を失わせる毒薬。もしかしたら魔力を失ったせいで、毒薬の効果自体もなくなっただんじゃないかしら？」

「・・・なんとという怪我の功名」

「魔力がなくなるってこの世界の唯一の不満だったけど、こんなこともあるのねえ」

しばらくして部屋に帰ると、入ってきた二人を見るなり、タバサとオルレアン公夫人は跪いた。

「娘から事情は聞きました。このたびは、私を救っていただき、いから感謝してもしきれません」

「・・・ありがとう。この恩は返しきれない。貴方に私の人生すべてをささげる」とタバサ。

「止めてください。友達のお母さんを助けようとするのは当然です。というか、勝手に治ったんであって別に俺が何かしたわけでも・・・タバサも止めてくれ」

「・・・それでも、貴方なしでは母を救えなかった。恩は返す」

「なら最初で最後の命令だ。友達に戻ってくれ。跪びてちゃ友達じゃなくなる。それに、目の前に救いを求める誰かを助けるのが人間だ。そこに対価や条件なんてない。当然恩返しなんていらぬ」

「それでも・・・私は貴方に恩を返したい」

「なら、今度は困っている他の誰かを救ってくれ。お前ができる範囲でな」

「私ができる範囲で・・・わかった、。貴方に誓う」とタバサ

「はいはい、それじゃハルケギニアに帰りましょう。オルレアン公夫人は私の領地で預かるわ。今日中にすべてを済ませるわよ」

4人はオルレアン公の屋敷に帰る。

「すぐ出発。私達5人でとりあえず隼人の瞬間移動で魔法学院にいつて、それからツエルプストーの領地に行くわよ。領地に着いたら隼人はオルレアン公の屋敷の荷物を取ってきて。誰かがきたらすぐに逃げてね」

「人使い荒いよな・・・」

その後は問題も起きず、一行はしばらくツエルプストー領地で静養することになった。

タバサの好きな物語に、“イーヴァルデイの勇者”という絵本がある。

それはイーヴァルデイという名前の平民の勇者が勇気を振り絞り、竜にさらわれた領主の娘を助けるお話だった。

イーヴァルデイは娘を助けた。感謝し礼をしようとす親の領主に対し、一言こういった。

「私には竜を倒すほど力があります。その私が何か困っているでしょうか？その礼は私ではなく、誰か私以外の人を助けるために使ってください」

今まで苛政をしていた両親は恥じ入り、今後は領民のために力を尽くしたという。

そんな事を思い出しつつ、タバサは静かに微笑んだ。

(ついに私は仕えるべき“イーヴァルデイの勇者”を見つけた)

訪問

トリステイン城下町にて

トリステイン城下町を僧服を着た、白金の髪の若い男が歩いていく。道を行く人が思わず振り返るほどハンサムだが、どこかひょうひょうとしていている

ロマリア皇国助祭枢機卿ジュリオ・チエザーレであった。

ロマリアで教皇の側近である彼は、珍しそうに町を歩く。

「さて・・・ガンダ・ルヴを迎えるにあたり、相棒の回収としようか。確かこの辺の武器屋にいると思うけど・・・あった」

始祖の円鏡に写った店に入る

「これは神官さま。うちに何か御用でしょうか」入ってきた僧服の客に、主人が丁寧に接する。

「一つ剣が必要だね」

「はあ・・・しかし神官様が必要な剣など、うちにありますかいね？」ジュリオは店内を見回して探す

「インテリジェンスソードはないかい？」

「一本だけありますが・・・あんなの口が悪くでうるさいだけで武器としてはやくにたちませんぜ・・・ええつとこれだ。オイ デル公。お客様の見えだ」

「ああん？うるせえなあ。なんだこのなよつちいの。こんなのにオレツちが振れるかよ」

「初めまして」

「なんだおめえは？」ジュリオが握る

「ふん。またお前らか。いい加減にしてほしいぜ。せっかく寝てたのによ」

「あはは、またよろしく。君の相棒のところに届けるよ。店主、いくらだい」

「へえ、100エキユーでさ」金を払って店を出る。

「お前らもこりねえなあ。何回も何回も無駄なことしやがって。付き合いきれねえぜ。前の持ち主が死んで戦場の死体荒らしに売り飛ばされて数百年か・・・また巻き込まれた」

「ごめんねえ。でもキミはのために生み出されたものでしょ。何度でも付き合ってもらうよ」

「この6000年の間に何回繰り返したか。いい加減に消えたいぜ。それで相棒は」

「まだ召還されてないよ。これからご主人さまに会いに行くところさ」

アルビオンにて

「おお、ジュリオどの。良くぞ来られました」神聖アルビオン皇国皇帝クロムウエル。

「クロムウエル殿もお変わりなく。この度は大変な仕事を果たされましたな」

「すべて聖戦のためです・・・して、モード大公の娘を連れに来られたのかな？」

「はい。ロマリアにて保護する予定です。」

「お気をつけて・・・まだ完全にこの国を掌握したわけではないので」

「はい。クロムウエル殿の方の準備は」

「軍の再編が終了しだい、トリステインに攻め込む予定です。かの国を併合し、聖戦の準備を」

「お願いします」

「それでは、これが風のルビーと始祖のオルゴールです」

秘宝と孤児達の出国許可状を受け取り、ジュリオはウエストウッド村に向かった。

一人の少女が追われていた。オーク鬼がその後を追いかける

「うわーん。嫌だよう・ティファ姉ちゃん助けて・いたっ」
転んでしまった。そこへオーク鬼が迫り、子供は恐怖のあまり立ち
すくむ

「嫌・・・」目を瞑ったが、しばらくしても何もおこらない。

見るとオーク鬼は竜に捕まえられ、高く持ちあげられていた。20
メートルの高さから落とされ、絶命する

「大丈夫だったかい？」白金の髪の少年に抱き上げられ、少女は幼
い顔を赤く染めた。

「うん・大丈夫。お兄ちゃんだれ？」

「僕はジュリオ。キミ達を迎えにきたんだ。お姉ちゃん達は？」

「こつち」集落へと案内する

ウエストウッド村にて

いきなり飛んできた竜をみて、子供達が騒いでいる

「おねえちゃん」少女が抱きついたのは、耳が長いエルフの少女
だった

「エマ、急にいなくなるから心配したわ・・・どこにいったの？」

「うぐっ えっとね。薪がなくなったから拾いに行こうとおもって・

・お手伝いしようとおもったの。そうしたら怖いオーク鬼に追いか
けられて、このおにいちゃんに助けてもらったの」

「まあ・・・エマを助けてくださってありがとうございます」

「いえ・・・どういたしまして、実は貴方に会いにきたんですが、た
またま遭遇して。助けられてよかったです」

「わたしに？」

「ええ。ティファニア・オブ・モード嬢」

家の中にて

「では・・・私に何の御用でしょうか？」警戒するティファニア。

「改めて名乗ります。私はジュリオ・チェザーレ。ロマリア皇国助
祭枢機卿です」

「神官さま？なぜ私のところに」

「私達は兄弟を集めております。この世界すべてを救うために。ある秘宝を使つて、虚無の担い手を

探していましたら貴方が映りました。ぜひとも我々の国にきていただきたい」

「虚無？？父から伝説の系統として聞いたことはありませんが、そのような事は・・・」

「まずこれを。貴方の物です。覚えがありますか？」

「・・・はい。父が生きていた頃、宝物庫にあったものです。周りの人は音がでないので壊れているのだらうといっていました、が、

私はこの指輪をはめてオルゴールに触れると優しい音楽が流れて・・・」

「これは風のルビーと始祖のオルゴールといい、始祖の秘宝です。

虚無の担い手が触れると、覚醒が始まるといいます」

「まあ・・・」指輪をはめてオルゴールに触れるティファニア。子供の頃聞いた懐かしい曲が流れる。

「後、虚無の担い手にはパートナーたる使い魔が召還されます。明

日、`サモン・サーヴァント`を使つていただけませんか？もし人間の使い魔がきたら、貴方は虚無の担い手です」

「でも・・・」

「貴方はこの世界のために必要な人です。貴方が面倒をみている孤児たちもロマリア皇国にて面倒をみさせていただきます。

ぜひともお手伝いをしていただきたいのです。これ以上戦争を起ささないために」

「わかりました・・・」

次の日

「ねーねー何がおこるの？」

「ティファ姉ちゃんが使い魔つてのを呼び出すんだって」

「可愛いねこちゃんがいい」と子供達

ジュリオと子供達が見守る中、召還の儀式は行われた

「わが名はティファニア・オブ・モード。五つの力を司るペンタゴン。我の定めに従いし、`使い魔`を召還せよ」

目の前の空間に向かって杖を振り下ろす。

光のゲートが現れた。

出国

ゲートの中から出てきたのは、ティファニアやジュリオと同じぐらいの少年だった。

黒髪黒目で、見慣れない格好をしている

「あれ???どうなったんだ???いきなり白い光に包まれて・・・ここはどこだ?」

周囲を見回す。どこにいるのかわからない

「あ・・・あの・大丈夫ですか?」と一人の少女が話しかけてくる

「別になんともないけど・・・うわ!!」

少女は美しかった。そしてとんでもなく胸が大きかった

(なんだこの胸・・・バストレポリューションだ。しかもとんでもない美少女。耳長いし・・・) 混乱する少年

「あの・・・いきなり呼び出してすいません。貴方のお名前は?」

「・・・あつ、はい。俺は平賀才人といいます」

「サイトさんですね。私はティファニアと申します。貴方にお願ひがあるのですが・・・」美少女が上目使いでいう。才人は頭がくらくらした

(なんだこの子・・・いままでみたどんな子よりかわいい。アイドルなんて目じゃない。しかもこの胸)

「えつと・・・どうされましたか?」ポーっとしている才人に言う

「あ・・・なんでもないんです。それでお願ひつて?」

「はい。実は貴方に使い魔になつて欲しいんです。」

「使い魔?つてなんですか」

「使い魔つてのは。メイジにとって人生のパートナーみたいなもんだよ。僕はジュリオ。よろしく」イケメンが言う

(人生のパートナー?それって結婚相手?こんな可愛い子が俺の嫁?)

自慢ではないが才人はもてない。今から出会い系サイトに登録しよ

うとしていたぐらいだ

「いきなり呼び出してすいません。私なんかではだめでしょうか・
」悲しげに言う

「いいです。俺なんかでよかったら使い魔でもなんでも」とサイト
「ありがとございます。それでは契約をしますので・・あの、目
をつぶってください」

（目をつぶるって・・まさか誓いのキス？）期待を込めて目をつぶ
る。

するとティファニアの顔が近づいて・・期待どおり唇に柔らかい感
覚があった

（こんなラッキーってあるんだろうか）とニヤニヤしていると、い
きなり左手に鋭い痛みがはしった

「いてえいてえいてえ・・・」

「サイトさん」あわててティファニアが駆け寄る。痛みは数秒でお
さまり、左手にルーンが刻まれる

「予想どおりガンダールヴのルーンだね。これですべての使い魔が
そろった。ようこそハルケギニアへ。兄弟」

「ガンダールヴ？ハルケギニア？そんで兄弟？」才人

「今からすべて説明するよ。とりあえずゆっくり話そう」

家の中で

「なるほど・・ここは異世界で、魔法があつて、俺は使い魔として
召還された伝説の使い魔か」才人

「なんだかずいぶん受けいれているね・・もつと取り乱すと思つた
が」ジュリオ

「日本でも異世界召還の小説なんてたくさんあるからなあ。ゲート
をくぐって別な場所にでて、目の前には耳の長い女の子。これだけで
だいたい日本人は状況を把握できるよ」

「そんなものなのかい？それで、出来たら協力してほしい。ティフ
アニアを守ってほしいんだ」

「任しとけ！俺にもなんか能力ももらえるんだろ？」

「・・・本当に話が早くて助かる。これがキミの剣デルフリンガーだ」
「よろしくな相棒！！」

「おう。よろしく。マスコットキャラが剣つてのも可愛くないが」
「・・・」

「お話は済みましたか？」とティファニアがお茶をもってくる

「ああ、彼はキミを守るって言うてくれたよ」

「ありがとうございます・・・いきなり呼び出して一方的に頼んで
しまいました」

「いいですよ。お姫様を守る英雄って立場に憧れてました。最高の
お姫様に会えましたから。それから俺のことはサイトとよんでくだ
さい。敬語もなしで」

「わかりました・・・私もテファと呼んでくださいね。よろしく、
サイト」

それから数日をウエストウッド村ですごし、子供達とも仲良くなっ
た。

ロマリア王国へ出発の日

「ロマリアってどんな国なんでしょう。楽しみです」

「この世界で初めて見る国か・・・楽しみだ」サイト

「なに、神の栄光が隅々までいきわたり、平民たちも信仰にあつい。
光の国ってよばれている」

「へえ」

「ただ、エルフは嫌われているから、ティファはフェイスチェンジ
のマジックアイテムを外さないようにね」

「はい」ジュリオから渡されたマジックアイテムであるピアスをつ
ける。耳が短くなり、人間の美少女となる

「ティファは女司祭、サイトは聖騎士として、共に教皇様の側近と
して仕えてくれ。」

「俺が聖騎士か。かっこいいな」とサイト。

「司祭ですか・・・いずれマチルダ姉さんも来て欲しいですね。ロマリアに行くって手紙でしておきましたから」とテファ

（これで問題なくアルビオンの虚無の担い手と使い魔と秘宝を手に入れたな・・・あとはガリアとトリステインか。教皇様と相談だな）

クロムウエルの発行した出国状もあり、一行は問題なくロマリア皇国まで旅ができた

領地

ゲルマニアにて

一行はキュルケの実家であるツエルプストー伯爵家に滞在していた。城下町には活気がみなぎり、あちこちで槌をふるう音がする

ここでは鉄製品や馬車などを大量に作っていた。

「活気がある町だな」散歩している隼人

「ここはモノづくりの町として有名なの。平民の職人が主役で、私達みたいな貴族は影が薄いわ

私は小さい頃、家庭教師じゃなくて城下町の学校で教育を受けたのよ」とキュルケ

「へえ、貴族のお嬢様が？」

「私のお母様は平民よ。父に仕えるメイドで、それから妾になったらしいわ。」

「え・・・そうなんだ・・・」気にする隼人

「気にしないでいいのよ。うちではその辺り寛容だから。私はメイジの素質があつたので伯爵家にのこつたの。先代の妾の子で

父の兄はメイジの素質がなかったからギルドを設立してその長をしているわ」

「だからキュルケは貴族らしくないんだ」

「そうね・・・どっちかというと平民の方が好きね。幼馴染も平民だけど付き合いがつづいているし」

「・・・ここは平和」タバサ。

「いいところでしよう。ここならガリアの追っ手も来ないわ。あと、私の叔父様に紹介するわ。父より実権を握っている人よ。」

「偉い人に会うのはどうもな・・・」

「しっかりしなさい。私のダーリンにふさわしいかみてもらうのよ」ピクツ「だめ・・・彼は私の騎士様」タバサ

「え?」「あらあら、いいじゃない。二人で一緒に彼を旦那様にし

「ちやいましょう。ゲルマニアの稼ぐ男は一夫多妻よ」

「フルフル 首をふるタバサ。」

「もう、可愛いんだから」とタバサを抱きしめるキュルケ
隼人は背中に冷たい汗をかいていた

しばらくして、町の中央の大きい工場につくキュルケ

「ここは馬車の組み立て工場ね。こここの事務棟に叔父がいるんだけど・・・」

それぞれのチームに分業化して馬車を組み立てている

「すごいな。派遣で働いていた工場を思い出す。ここでは流れ作業をしているんだ」

「30年位前にある人から教わって、一箇所に職人を集めて組み立てるってことを始めたら、たくさん作れるようになったって聞いているわ」

「ふーん。日本みたいだな・・・」

事務棟に入る三人

「よくきたなキュルケ。彼が噂の奇跡の渡り人か！！いや、会えて嬉しいよ」作業服を着て、チヨビ髭の中年男性がフランクに言う

「（奇跡の渡り人？）はじめまして。武田隼人です」

「タバサ・・・です」

「よろしく。私はキュルケの父の兄で、ローラン・ヒットラーとい
います」

「ヒットラー？」若干ひきつる隼人

「どうかしましたか？」

「い、いや、ある国の歴史上の有名な政治家と同じ姓なんで」

「ははは、そうか。それじゃこちらに。工場見学でもしていけばいい。ジオアから送ってもらった本は参考になったよ。キミの世界はすばらしいな

これからもぜひいろいろ教えて欲しい」

「ジオアのことご存知なんですか？」

「ああ、彼の父のギルドはお得意さまだからね。うちの息子とも親しいし。キュルケとも幼馴染だよ。私は忙しいから、息子に案内させよう。」

「おいアドルフを呼んできてくれ」

しばらくして赤い髪的美青年がくる。キュルケに似ている

「はじめまして。アドルフ・ヒットラーという。いつもキュルケと仲良くしてもらってありがとう。これからもよろしく」と握手

「おにいさん。久しぶり元気だった？何隼人固まってるのよ」
「キュルケ

「……よろしく願いします」
「ちょっと怖くなった隼人であった。」

カンカンカン 大きな音が響く

「ここでは部品ごとに専門の職人を養成して作っているんだ」

何人かの人がバラバラになった部品を研究して型にとっている

「ここは研究室だ。キミから送ってもらった自転車をばらして、全部型を取っている。でもそれだけじゃわからないものが多くてね・

「俺のことを知ってるんですか？」

「ああ、父やキュルケから聞いて知っている。そのことについて、夜にでも話があると思うよ。キミを支援するギルド設立の話もある」

「なんか話が大げさになってきたな・」

「大げさどころじゃない。キミは数百年待ち望んだ我らの希望だからね」

「……隼人は勇者」
「タバサが言う。」

「私達のダーリンにふさわしいわ」とキュルケがからかう。タバサが隼人を守るようにくつつく。

「あの・タバサ。そんなにくつつくと歩きにくいんだけど」
「フルフル

「あら、じゃあ私はこっちな。」
「キュルケが反対からくつつく。二

人に連行されている気分になる隼人

「ふふ・英雄色を好むか。可愛い従姉妹をよろしくね」とアドルフ。

・・・その後、屋敷に帰るまで。タバサは隼人にくっついていた。

その夜、ツエルプストー家にて

食事の後一行は呼ばれ、会議室に通された。

出席者はキュルケ・アドルフ・ローラン・ツェプルストー伯爵・隼人・オルレアン公夫人・タバサである。

会議

ツエルプストー伯爵家 会議室にて

最初に発言したのは、オルレアン公夫人であった。

「最初にもう一度お礼を言わせてください。この度は娘ともども私どもを助けていただきまして、

お礼の言葉もございません。没落した私どもを助けても何もお返しできないばかりか、皆様にご迷惑をおかけすることを

まことに申し訳なく思っております。私どもで出来ることがあれば、何でもするつもりです」

タバサともども頭を下げる

「いえ、頭をお上げください。私どももオルレアン公御生存中にお世話になったギルドの仲間も多々おります。

彼らは口々にオルレアン公こそ王の器と褒めておりました。その恩をお返ししたまでです」ローラン。

「それに、ご自分を卑下されるのはおやめください。ガリア国内にはジョゼフ王の苛政によりなお多くの苦しむ民草があります。彼らはオルレアン公を心より慕っております。もし貴方方が玉座につき、彼の意思を継ぐことができれば、われらが民草も救われるのです」アドルフ

「そういつていただけると救われます・・・しかし、この無力な母子になにができませんようか」

「我ら平民一同、そしてオルレアン公を慕う善良なる貴族が力をあわせれば、必ずガリアを元のよき国に戻せます。その日まで、どうかこの地にてご静養を」ローラン

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます。そして、わが夫の意思を継ぐよう微力を尽くさせていただきます」

・・・礼をいうオルレアン公夫人。まだ完全に回復していないのか、

体が辛そうである。

「これはいけない。オルレアン公夫人はお休みください」ツエルプトー伯。メイドを呼んで、夫人を部屋に案内する。

タバサはどうしようか迷ったが、会議室に残る

「シャルロット公女殿下。これからは我らがお力ぞえをいたします。すでに商人ギルドや使用人ギルドを通して情勢は把握しております。公女殿下は旧オルレアン公派や心情的にガリア王を面白くおもっていない貴族に、同志となるよう呼びかけください」

「……わかった。全力で協力する」

「こちらから時期をお知らせします。それまでは今までどおりトリステイン魔法学院に。」うなづくタバサ。

話題は隼人のことに移った。

「さて、改めまして紹介させてもらおう。私はローラン。『平民』の最高意思決定機関 『11人委員会』 の一人だ」

「『平民』ですか？」

「ああ、商人ギルドの元締だ。ハルケギニアの平民の相助組織だよ。残酷で愚かな貴族から虐げられている平民を守る組織だね。時には神官を動かす平民の盾とし、有能で良き貴族が治めるとみれば開拓民を誘致する。そのほか、情報を共有して商売を有利にすすめたりしている」

「秘密結社ですか？」

「活動は秘密でもなんでもないよ。殆どを公開している。私は平民に属していますと言っても誰も嘘と思わないだろ？」アドルフが笑う
「ゲルマニアの貴族の半数は『平民』の構成員がもっているの。残りの半数はギルドを通して借金漬けね」キユルケ

「つまり、我々の活動は商業活動を通じて経済的に実権を握り、徐々に平民の地位を上げることなんだ。そして、創業時のメンバーには、君のように異世界を自由に行き来したと伝説が残っている。また、この世界に偶然迷い込む『渡り人』を保護し、その知識を活用

している。メンバーの中には日本語や英語を習得している者もいる。現在君の世界の本を随時解析中だ」

「本当ですか・・・すげえ」

「まあ、11人委員会の中にも一人異世界からの渡り人がいるからな。彼が分業化による大量生産の概念を伝えたんだよ」

「へえ・・・」 「それは知らなかったわ」とキユルケ

「キユルケから二ホンの政治思想を聞いたよ。実にすばらしい。少しずつこの世界の人間の意識を変えて、最後にはそういった世界にしたい」

「・・・そうならば、政権交代のときもお父様みたいな犠牲者がでない」とタバサ。

「それはいいですね。貴族制度を潰すには皆の意識から変えないと」
隼人

「君たちなら賛同してもらえと思ったよ。『平民』に協力してくれるかい？」

「・・・全力で」 「わかりました。協力しましょう」

「では君たちは今日から『平民』のメンバーだ。いくらでも異世界を歩き来できる『奇跡の渡り人』と、平民に人望があつたオルレアン公の意思を継ぐ公女殿下。どちらもこの世界を変えるにふさわしい」

「二人ともありがとう」とキユルケ

「となれば、君達を支援するギルドの設立だな・・・ギルド名をつけてくれ。異世界との交流組織だ」

「えっと・・・どうしようか」 「貴方が決めなさいよギルドマスター」

「俺が？」 「・・・当然」 「タバサ

すこし考えて」 『世界をつなぐ翼』 なんてどう？ちよっとくさい？」

「いいんじゃない？」 「貴方に従う」と二人

「決まったようだね。『世界をつなぐ翼』か。いいギルド名だ。そ

れじゃこれが最初の活動資金で」

と手形を渡すローラン。額面を見て吹いた

「100万エキュール？100億円！！！！！！」

「なんだい？少なかったかい？」アドルフ

「逆ですよ。こんなの使い切れません」

「そうでもないさ。異世界側にも物資と知識を運んでもらう組織を作らないといけないし、こっちからの要求は底なしだ。がんばって使ってくれ。ちなみに予算は1000万エキュール単位で組んでいるからよろしく」

「1000億円……」

「君が持ってきたモノをこちらで作ろうと、私達は今半狂乱で解析している。どんどん持ってきてくれ。あと貴族に対抗できる武器も」

「わかりました。どんどん持ってきます。本も現物も」

「期待しているよ」

「すごいじゃない。さすがダーリンだわ 貴方、下手をすれば今ハルケギニアで一番の金持ちかもよ」

「……それくらい当然。私の騎士。いずれ私と結婚してガリアの王となり、最高の国を作る」

「あの……お二人さん？」

なんだか知らないうちにどんどんこちらの世界で重要人物になっていく隼人だった。

再会

再会

日本にて

ツエルプストー伯領地で手形の一部をエキュー金貨に換え、日本に
来た隼人。

例のごとくタバサ・キュルケ、そしてアドルフが同行した。

アドルフは日本語の読み書きが多少できるらしい。

「幹部の息子として叩き込まれたけれど、まさか実際に役に立つと
は思わなかったな」アドルフ。

例のごとく換金して、本屋に向かう。実用書や電気学・物理学・機
械工学・化学などさまざまな本を買った。

「それと、こつちでの協力してくれる組織を作りたいんだけど、誰
か信用できる人はいるかい？なるべく年長者がいいんだけど」アド
ルフ

「うーん。思いつかないな」隼人

「そういえばご両親は？」キュルケ

「そついや話してなかったな。借金のせいで逃げ出して、今連絡
がつかないんだよ。今頃どうしているか。妹は叔父のところにい
るけど」

「・・・苦労している」とタバサ

「じゃ、その叔父さんに協力してもらおう」

「なんか迷惑かけたみたいで会いにくいんだよ・・・それに遠い
ぜ。ここは東京だから、大阪まで新幹線でいかなきゃならない」

「今からたつぷり恩を返せばいいさ。時間はたつぷりあるんだ。じ
ゃあ行こう」

一度大量の荷物を持って帰り、一行は新幹線に乗り、親戚の家があ

る大阪まで行った。

新幹線内にて

「早いなあこれは・・・ここまで文明が進歩しているとは」アドルフ
「これをハルケギニアに導入できるまで何年かかるかしらね・・・」
キユルケ

駅弁を食べていたタバサは、何かおもいついたみたいに隼人のすそをひっぱる

「ん・・・なんだタバサ？」

「・・・隼人が日本に来るとき、どうしてる？」

「は？えつと、知っている所を思い浮かべてだな・・・」

「直接、トウキョウからオオサカにはいけないの？」

「前試したけどできなかった。こつちじゃ魔力ないせいか、ハルケギニアに帰る以外に発動しなかったよ。」

「じゃあ、ハルケギニアからオオサカには？」

しーん

「できた・・・と思う。新幹線の意味なかったな」と頭を掻く隼人

「まあまあ、珍しい乗り物のただけでいいじゃないか」

「そ・そうね」キユルケ

大阪駅を出たところで、皆でいったんハルケギニアに帰って叔父の家を思い浮かべて転移

「こんにちは・・・」

「あら、隼人君。久しぶりね。連絡つかないからおばさん心配してたわよ」と叔母の静子が迎えてくれた。

「どうも申し訳ありません」

「元気ならいいのよ。後ろの外国人の人はお友達？」

「ええ、キユルケ・タバサ・アドルフです。日本語うまく話せないんですが、通訳できますんで」

『ハジメマシテ』挨拶する三人。

「みなさんいらっしやい」

「ところで、春奈は元気にしてますか？」

「元気よ。もう少して帰ってくるでしょうね・今日はお客様がいっぱい嬉しいわ。ゆっくりして行ってね」

「お邪魔します・・・」

両親が失踪して迷惑かけたのに、優しく接してくれる叔母に感謝する隼人だった。

春奈が帰ってくる

「久しぶりお兄ちゃん・・・って、なにこの派手な人たち??」

赤毛グラマー美少女・青髪メガネロリ・赤毛イケメン外国人を見ておどろく

「久しぶり・・・皆俺の友達だよ。」

「ハジメマシテ・・・ハルナサンですか。ハヤトとはナカヨくさせてもらってます」アドルフ

「ハジメマシテ」「・・・ハジメマシテ」とキョルケとタバサ。

イケメンに話しかけられてはしゃぐ春奈

「うわ・・・みな美形ばかり。なに、お兄ちゃんバンドでも組んでるの?」

「そういうわけじゃないんだが・・・また後で話すよ」

アドルフを気に入ってはしゃぐ春奈だった。

叔父が帰ってきて夕食後、皆で話をする事になった。

「初めまして・・・隼人の叔父の武田雄二です。隼人のことは心配してたのですが、皆よい友人ができたみたいで安心しました」

叔父の言葉にじんとくる隼人。両親のことで迷惑をかけたので申し訳なくおmoi、妹を残して自立して働いてたのであった。

「叔父さん・・・心配かけてごめんなさい。両親の保証人になって迷惑かけて、春奈まで面倒みてもらっていて」と頭を下げる隼人

「子供が偉そうなことを言うんじゃない。弟の不始末は無力な子供より兄が責任とるもんだ。私が怒っているのは、子供の癖に

変に気を使って働こうとするからだ。今の日本で高卒で派遣社員なんかで一人前になれるものか。まったく、大学費用くらい出してやったのに・・・働くにしても、私の会社で働けばいい。お前一人分位の仕事はある」

「でも・・・1000万も押し付けてしまつて。」

「それくらいの貯金はある。私達夫婦には子供もいなかったしな」

「そうよ隼人君。意地をはずさずに帰ってきてなさい。」と叔母である静子という。

「ありがとうございます・・・でも、俺は俺にしかできない仕事を見つけました。叔父さんたちに協力してほしいんです」

「ソウナンデス。ハヤトにはわたしたちのテダスケをしてほしいんです」とアドルフ。

「ふむ・・・何か始めようとする顔だな。話してみなさい。若い人の話を聞くのは老人の勤めだ」と雄二

・・・しばらく事情を説明。雄二はだまつて聞いていた。

「にわかには信じられない話だな・・・別世界とは。そのことを証明できるかな？」

「とりあえず、これを。迷惑をかけたお詫びです」二つの包みをだす。一方には2000万円・もう一方には金貨500枚が入っている。

「ふむ・・・こんな大金、確かに何か特別なことをしないと手に入れないな。この金貨も本物の金に見える」

「お兄ちゃん・・・どこでこんなもの取ってきたのよ。犯罪だよ・・・」

「春奈が引いている。」

「泥棒じゃねーって」隼人。

「ソレはワタシタチ商人が、ハヤトに投資したオカネです。ソレだけキタイしているんです」

「では、私もそのハルケギニアとかいう世界にいけるのかね？」

「「ハイ」」

「即答したな・・・まあいい。今日は疲れただろうから泊まっていきなさい。明日、君たちに付き合おう。それから隼人、私にはこんなものは不要だ。持っておきなさい」

「いや・・・実は彼らから受け取った金つて100億円なんです。俺もどう使おうかと困っている状態で・・・」

「100億円・・・」雄二・静子・春奈が絶句する

「本当なら面白いことができるな・・・うちの会社も商売しているから、力になれるだろう」

雄二は貿易会社を経営しているので顔が広い。

「ぜひ力を貸してください」と隼人は頼んだ。

異世界

武田家にて

さて、明日は異世界つてどこにいくんでしよう？もう寝ましよう
静子の言葉に雄二も同意する。

「そうだな、大変な旅になるかもしれないな」

「いや・・・瞬でつくんですけど」どうもいまいち信じられてない
隼人。当然ではあるが。

「それで、今日お兄ちゃんたちどの部屋で寝るの？」春奈

「ええと・・・タバサとキュルケは春奈の部屋で、俺とアドルフが客
間」

「何を話しているの？」とキュルケとタバサ

「ふむ・・・どうやら、君とタバサ嬢が、ハルナさんの部屋で、俺と
隼人が客間で寝るらしい」とアドルフ

それを聞くとタバサがキュツと隼人にしがみつく

「どうしたんだタバサ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」さらにしがみつく

「あー、知らない人のところで寝るのが嫌なのね」とキュルケ

しょうがないな・・・「アノ、タバササンはハヤトとネたいそうです」
ピキッと空気が固まる

「お兄ちゃん・・・」隼人・・・「あらあら」武田家の反応

「それなら、私も隼人と一緒に寝ようかしら」キュルケ

「キュルケもハヤトとネたいといっています」「・・・」

「」

「お前、誤解を招く事言うなよ・・・だから、これはこいつらが見知
らぬ世界に来て不安がっているだけで・・・」

「お邪魔なら俺がハルナさんの部屋で寝ようか？ふふふ・・・」アド

ルフ

「お前もう黙れ」と口をふさぐ隼人

結局、客間で雑魚寝した。なぜか春奈まで一緒だった。

次の日の朝、タバサとキュルケの両方にしがみつかれている隼人の顔面に春奈は蹴りを入れた。

次の日

「準備はこれでいいのか？」雄二

「楽しみねーきれいなとこかしら？」静子

「お城とかあるの？」春奈。海外旅行にいくみたいなのりだった。

「別に準備なんてしなくていいのに・・・はあ、もう行こう」
ルーンに意識を集中、7人は光の中に消えた。

ツエルプストー伯爵家

「すごいな・・・本当に一瞬で移動したぞ」雄二

「あら、すごいわね。でもにぎやかなとこねえ」静子

「本当にお城だ、馬車が走っている。すごーい」春奈
殆ど観光客である

とりあえず、アドルフが三人を案内した。隼人とキュルケとタバサはローランに報告に行く。

「・・・というわけで、俺の叔父が協力してくれるそうです。今領内をアドルフが案内しています」と隼人

「仕事が早いな・・・わかった。後で紹介してくれ。こちらも、『1人委員会』の渡り人が午前中に来る予定だ。昼食の席で紹介しよう」

「俺達の世界から来た人ですね。どんな人なんですか？」

「君と同じニホン人だよ。37年前にこちらに来て、『平民』の発展に貢献してくれた人だ。今は57才になる」

「日本人？その人・・・日本に帰りたいたいんですか？それなら連れて行きますけど。」

「いや、本人は二ホンに帰る気はないらしい。もう妻も子も孫もいるからと。自分がいなくなつた後のことは知りたいみたいだね。」

「そうですね。叔父と同じ年頃ですし、話が弾むでしょうね」隼人
そのまま、雄二たちが帰ってくるまでのんびりしていた。

昼食の席でお互いに自己紹介する

「私は、ツエルプストーのギルドの長ローラン・ヒットラーと申します。こちらは、同じ『11人委員会』のテツジ・ソラタ殿です」

「空田哲司です。生きて再び故郷の人と会えるとは。よろしくお願ひします」初老の紳士が自己紹介をする

「お初にお眼にかかります。武田雄二です。隼人の叔父にあたります・・・空田哲司さん？はて、どこかで会つた様な」

「武田雄二さん？・・・失礼だが、どちらのご出身で？」

「大阪です。ずっと大阪にいて、阪大の経済学部を卒業して、貿易会社を経営しております」雄二

「・・・もしかして、ラグビー部に所属されていた・・・ユウジ君？」

「なぜそれを??」

「君と一緒に寮に入つていた哲司だよ」

「テツジか？いきなり行方不明になつて・・・君の事をどれだけ仲間がさがしたか。ご両親も心配していたぞ!!!」

「すまない・・・わけもわからずこちらに迷い込んで、どうしても帰れなかつたんだ」抱き合う二人。

皆は状況がわからずあっけにと取られている。

「どうやら知り合いだつたみたいだね・・・」隼人

「・・・偶然」タバサ

「しばらく二人にさせてあげましょう」と静子
全員、二人を残して別室に移動した。

その後、話し込んだ二人は夜になっても話を続けていた。

「そうか・日本はそんなことになっているのか。良くも悪くも発展は成し遂げたんだな」哲司

「ただ、資本主義とモノあまりが行き過ぎて、労働環境が悪くなっている。限界まで発展したが故の悲劇だな。

若者に仕事がなく、モノもあまりすぎて政府が無駄遣いを推奨している有様だ」雄二

「なんと贅沢な・こちらでは平民が貴族にしいたげられ、金もモノもなく貧窮しているのに。仕事をしたいと国中を

渡り歩いている難民がどれだけいるか」哲司

「もう我々の世代できることはないと思っていたが、まだまだありそうだな。」

「ああ、協力してくれ。日本にとってもいい事となるう。こちらの世界では常に人手不足だ。文字さえ読めない平民が普通なのだ」

「全力を尽くそう。もう一度ご奉公するさ。今度は苦しんでいる人たちのためにな」

二人はしっかりと握手をした。

翌日、隼人は三人を連れて日本に帰った。10万エキュール分の金貨を持って

「よいしょ・・重い。家の中に入れるの大変だな」隼人

「後で会社の車で運ぶさ。知り合いに紹介してもらって換金しておこう。これから忙しくなるぞ」雄二

「お父さん張り切っているわねえ。最近会社の売り上げが落ちて老け込んでいたのに。若返って見えるわ」静子

「私もあつちの世界の言葉と文字を勉強する・・アドルフさんから手伝ってくれって頼まれたから」春奈

やがて雄二の経営する会社が、異世界との交易を一手に握る大企業

＜ 成長を促すのびる。 ＞

女難

「そろそろ魔法学院にかえりましようか かなり休んでいるし」キユルケ

「そうだな。シエスタともしばらく会ってないし。元気であるのかなあ」隼人

「・・・気になるの？」タバサ。

「ああ。そりやなあ」隼人
不機嫌そうになるタバサ。

「・・・私も一緒に帰る」とくつつく
最近、タバサは隼人について回ることが多い。どこにいてもそばにいる。

「お母さんのほうはいいのか？」

「・・・大丈夫。ここにいれば安心」とタバサ。

「それじゃ、明日帰ろうか」「・・・ん」

二人を見て、キユルケは何か考えていた。

その日の夕方、タバサはキユルケの部屋に呼ばれた

「・・・なに？」

「ちよつと女同士の話をしていい？」タバサをなでながらキユルケが言う

「・・・女同士？」

「うん、あなた、隼人のことが好き？」

「・・・うん」赤くなるタバサ

「そう、私も好きよ。最初はちよつとブサイクかと思ったけど、性格もいいし、知らない世界をみせてくれるしね」

「・・・それで？」ちよつと膨れるタバサ

「でも、あなたの事も大好き。親友だもの。で、三人でいるのはいいの。でもこのまま魔法学院に帰ったら、

もしかして私達を相手にしてくれなくなるかもね？」

「・・・なぜ？」

「あのメイドよ。使用人寮でいつも一緒。おはようからおやすみまで甲斐甲斐しく世話をやかれたら・・・」

「！！」

「私たちはなんだかんだいって貴族だし・・・あの子は平民。それに二ホン人の血を引いているっていったわよね」

「・・・」杖を握り締めるタバサ

「ほら、そうやって杖で魔法を使ったら、ますます自分達と違うと思われるかもよ。ルイズと同類とおもわれて、友達ですらいられなくなるかも」

はっ　として杖をはなすタバサ。目がうるんでくる

「・・・どうすればいいの？」

「私に任せて。二人がかりで彼と強い絆をつくれればいいの」「いつの間にか二人で隼人を共有することになっている。」

「はい、これ。タバサの下着。用意しておいたの」「真っ白で清楚な下着をわたす

「私はこつちの下着を着るわ。オルレアン公夫人が寝たら、私の部屋に来て」赤い下着を見せながら、キュルケが言う。

タバサは何をするか悟り、泣きそうになりながらも頷いた。

深夜

コンコン　キュルケの部屋のドアがノックされる

「来たわね・・・」キュルケが枕をもって出る

同じく枕を持ってタバサがいた。ちよつと震えている

「それじゃ、行きましようか」「・・・ん」

「失礼しまーす」二人で隼人の部屋に忍び込む。隼人はぐっすり眠っていた

「寝顔もかわいいわね・・・それじゃいくわよ」「・・・」「二人は下

着姿になつてベッドに入る

枕元にランプを置いててらす

「・・・どうすればいいの？」タバサ。

「まずはキスで起こしましょう。タバサ、先にしてもいいわよ」

「・・・私が??」「私が先にしましょうか?」

「・・・キスで口をふさぐ。しばらくして「ん??んん?ゴフツ」
隼人が起きる

「なんだ?」「はい。ダーリン」「キュルケ?そしてタバサ?こんな夜中に何してんの?」

「ふふ・・・みてわからない?」ランプの光がキュルケの体を妖しく照らす

「・・・がんばる」白い清楚な下着のタバサが抱きつく。妖艶と清楚のコントラスト。

「お・・・おい、何をがんばるの?」二人に抱きつかれ、タバサから石鹸の匂いが、キュルケからは香水の匂い。

すでに隼人は陥落寸前だった。

「ふふ・・・あなたは何もなくなっていいわ。二人で天国に連れて行ってあげる」とキュルケが首筋を舐める

「・・・」タバサは無言でキスをしてくる

「(ここは天国か??いや、夢だ。初体験が3 なんて・・・ああ)」
もう隼人は声も出ない。

二人に全身をまさぐられてなすがまま。

「・・・なんか、ここ大きくなっている?それに熱い」タバサが大事などころの異変に気づく

「そこを優しくなでてあげると、殿方は喜ぶのよ」

「・・・がんばる」タバサの小さな手が下着の上からなでる

「アツ アア・・・だめ・・・クツ」急に力が抜ける隼人

「ん?大丈夫?」と隼人を見つめる純真な目。何があつたかわかつてない。キュルケは妖しい目をして笑っている

「・・・」急に隼人の姿が消える

「・・・何か悪いことして嫌われた？」タバサが動揺する
「くくつ、大丈夫よ。恥ずかしくて逃げただけ。大成功よ。とり
あえず、今夜は二人で寝ましょう」
タバサを抱きしめながら言うキュルケ。そのまま二人は眠っていた。

そのころ、東京のレオ レスで、パンツを洗いながら自己嫌悪に陥る世界一情けない男の姿があった。

陰謀

陰謀

トリステイン魔法学院にて

キュルケとタバサを連れて瞬間移動で帰る

「なんか久しぶりだな」隼人

そのまま食堂に行く

「シエスタ久しぶり。元気だった？」

「隼人さん。なかなか帰ってこないから、どうしたのかと思いましたが・・・本当にどうしたんですか！！！」隼人を睨みつける
原因はびつたりくつついているキュルケとタバサにあった。

「いや・・・ベツニナンデモナイデスヨ」と拳動不振になる隼人

「あら・・・冷たいのね。あんなに熱い夜をすごしたのに」

「・・・がんばった・・・」

「熱い夜ってなんなんですか！！隼人さん。きつちり説明してください」

「夜・・・ムチムチとスベスベが・・・」思い出して、心持ち前傾姿勢になる。

「隼人さん！！」フライパンで殴られ、使用人部屋まで連行される
隼人

「ふふ、やつぱり頑張ってよかったでしょう。隼人は私たちにメロメロみたいよ」

「・・・次はもっと頑張る」何かに目覚めた様子のタバサ。

使用人部屋

「さあ、何があったか、きちんと説明してもらいますからね」どす黒いオーラを背負ったシエスタ

「な・・・何も無いよ。タバサのお母さん助けて、叔父さんに紹介し

て、キュルケの実家に行っただけ」

「！！！！お互いのご家族を紹介しあつたんですか？？？それってまさか婚約？それも二人も！！」

「ちがうちがう・・・なんでそうなるんですか??」

「それで二人と熱い夜をすごした？タバサさんみたいな小さい子まで頑張った？ムチムチとスベスベ？」

「なにもがんばってないから！！！」

「そんな・・・一緒にお風呂まで入ったのに・・・わーん」

「な、泣かないですよ・・・」罪悪感がこみ上げる隼人。

「こうなったら責任取ってもらいますからね。私だけ家族を紹介してないなんてずるいです」

「責任・・・ってどうすれば??」

「とりあえず、今から一緒にタルブ村に行つて、お父さんに会ってもらいます」

「ええー！ー?」「い・い・で・す・ね」「はい・・・」

帰ってきて早々、タルブ村に連行される隼人。

二人に見つからないようにと授業中に出発するシエスタ。隼人は従うだけである。

ルイズの部屋

「ワルドさま・・・きていただいたんですね」ルイズ

「可愛いルイズのためなら、いつでも来るよ・・・といたいが、今回は公用だ。君にこれを渡しに来た」ワルド

「これは？」

「王家の秘宝の始祖の祈祷書さ。本物だよ。アンリエッタ王女殿下とゲルマニア皇帝との結婚式るとき、君が祝辞を読み上げる巫女に指名された。」

儀式のときに始祖の祈祷書を使う伝統になっている。」

「私が？身に余る光栄です」

「本当は結婚式るとき以外、門外不出なのだが、私が本物を君に渡

すよつマザリー二枢機卿を説得した。国家の功労者たるルイズに託すようにね」

「私にですか???なぜ」

「君の覚醒において必要なものだからだよ。水のルビーをはめて、始祖の祈祷書を開いてみたまえ」

水のルビーをはめて祈祷書をめくるルイズ

うつすらと文字のようなものが浮かんでくる

「え・・・これって、虚無の魔法? 初歩の初歩の初歩、エクスポローション?」

「それが君の系統だ。君には伝説の虚無の担い手だ。私が信じていた通りの、すごい力だよ」

「ワルドさま・・・」涙ぐむルイズ

「どうしたんだい可愛いルイズ。泣き出したりなんかして」

「だって・・・家族には才能ないって厳しくいわれ、学院の生徒にはゼロのルイズと馬鹿にされ、召還した使い魔は反抗して逃げ出した。世界で一番不幸な女の子だとおもっていたのに。こんな私をワルド様だけは信じてくれてて・・・愛しています」

「僕もだよルイズ」

(これでルイズの心は完全に掌握したな。次は使い魔を手に入れる算段をするか)

「ふふ。私は常に君の為を思っている。使い魔についてもちゃんと考えている」

「本当ですか・・・あのにくい使い魔を殺せるのですね?」

「いや、彼の力は特殊だ。失敗したら返り討ちになる。彼が自発的に君に服従するよう仕向けたほうがいい」

「服従ですか・・・わかりました。私を鞭でうった罪、骨の髄まで思い知らせてやりますわ」

「私に任せておくがいい・・・さて、久しぶりに二人ですごそうではないか」

「はい・・・」

(レコンキスタ艦隊が最初に攻める地点をタルブ村に指名して、使
い魔の弱点となる少女の家族を確保。

そのまま一気にトリスティンまで攻め上って王宮を陥落。私はこの
ままルイズと秘宝と共に魔法学院にとどまり、

魔法学院を制圧にきたレコンキスタ軍に投降をよそおって合流。あ
とは生徒を人質にとり、国中の貴族に降伏勧告。

完璧な作戦だ。さて、ゆつくり子猫を愛でながら吉報を待つか)

「私は君に祈祷書を渡したあと、一週間ほど休暇をもらった。まあ、
君の護衛がてらだが。ゆつくり愛を育もう」

「ワルドさま・・・私はもうワルドさまに身も心もささげます」ル
イズ

確かに完璧な作戦であった。その使い魔がタルブに向かってさえい
なければ。また、ガリア王の策略さえなければ。

人は陰謀をめぐらすとき、自分以外の者もまた同じく陰謀をめぐら
していると考えないものである。

ガリア王国にて

「両用艦隊の準備は？」青い髪、美髯の堂々とした男。ガリア王ジ
ョゼフである

「いつでも整えております。クロムウエルの側に協力者としていた
せいで、複数のマジックアイテムを仕掛けることができました。

かの軍の行動タイミングは手に取るようにわかります」冷たい感じ
の若い女。

「さすが余のミュージズだ・・・では、破壊の幕開けだな」大笑いする
ジョゼフ。

後の歴史書で、大乱の幕開けとされる争いがはじまった。

戦闘

タルブ村

タルブ村。シエスタの故郷である。

もの珍しそうな隼人

「へえ・・ずいぶん綺麗な農村だな。フランスみたいだ。行ったことないけど」

「ここでは葡萄作りが盛んです。おいしいワインも造ってますよ」
シエスタ。

道中昨晚のことを詳しく聞き、一線を越えなかったことを知り機嫌を直している。

「こつちですよ」家に案内する。シエスタの家族が歓迎してくれた。

「やあ、はじめまして。オリム・ササキだ。娘のシエスタが大変お世話になったね」シエスタの父親が挨拶する

「は・はじめまして。武田隼人です」緊張している隼人。なんだか怖い

「はは、そんなに緊張しないでいいよ。シエスタがよく手紙に君のことを書いているよ。祖父と同じ国からきた

君は我々にとって親戚のようなものだ。自分の家だとおもって寛ぎなさい。」

「はあ、お世話になります」

「まあ、娘を泣かしたらその限りではないがね」一転してギロリと睨まれる。

「は、はい。大切にさせていただきます」とわけのわからないことを口走る隼人

「隼人さんたら・・さあこつちですよ。寛いでください」

「婿殿、他の家族にも紹介しよう」

(婿殿・・・？なんかドツボにはまっっていくような)

その後、シエスタの曾祖父、佐々木武雄の遺品やゼロ戦をみせてもらい、お墓参りをした。

「このゴーストに住所が書いてあるね・・・埼玉県に住んでいたんだ。もしかしたら遺族に遺品を届けられるかもしれない

あのゼロ戦は持って帰ったら騒ぎになるから無理だけど・・・」

「本当ですか？日本にいる親戚・・・会ってみたいです」

「また会いに行こう」「はい」

その夜は郷土料理となっっている寄せ鍋をたべ、日本の話をする。シエスタの兄弟姉妹ともすぐ仲良くなり、隼人お兄ちゃんと呼ばれるようになった。

次の日の昼、シエスタと平原でピクニックをしていると、村の鐘が鳴る

「大変だ・・・どこかの国が攻めてきたみたいだ。みんな逃げろ」

大騒ぎになっているタルブ村

空に巨大な船が何十隻も浮かんでいた。

「なんだよあれは・・・」隼人

「！！！！！！大変・・・早く助けないと。お父さんお母さんや兄弟が」

シエスタが駆け出す

隼人もあわてて後を追った。

炎上するタルブ村。村人が精根こめて作ったブドウ畑も焼き尽くされる。

騎士を乗せた火竜が、ぶおん！！と火を吐き、人や家を焼く

はじめてみる生の戦場。道に幼い子供の焼死体がころがって、その側には若い母親が泣きじゃくっている。騎士の槍がその胸を貫く

「なんなんだ・・・なんなんだこれ・・・」隼人は思い切りはいた。

混乱の中でシエスタとはぐれ、必死になって探す隼人。

「その黒髪と黒目・・みつけたぞ賞金首のササキ一家。さあこい」
巨大なドラゴンにのつた騎士が隼人を見つけた

「賞金首・・なんのことだ？」

「お前ら平民は命令されたことに従ってればいい。さつさとそこに這いつくばれ。死なずにすんだことを感謝でもするんだな」

「なんなんだよテメエらは！！！」

「やかましい・・エア・ハンマー」風の魔法が隼人を襲う。かろうじて避ける隼人

「オクルーア！！」日本の海を思い浮かべて転移魔法をかける。正面の騎士はドラゴンごと消えた。

しかし、周囲ではなおも殺戮が続いている。

「オクルーア！！」瞬間移動を繰り返し、目に付いた騎士を消していく隼人。

20人ほどいた騎士は瞬く間に消滅した。

それを見ていた村人たちから歓声があがる。

「ありがとう」

「早く逃げて・・シエスタたちは？」

「まだ村にいるはずだ・・助けてやってくれ」村長らしい中年男

「とりあえず、ツエルプストーの領地についててください。オクルーア」と村人達を逃がす。

そのままシエスタの家に。すると縛り上げられ、竜籠で運ばれるシエスタとその家族がいた。

「瞬間移動」竜籠に転移

「婿殿？」「お兄ちゃん！！」「隼人さん」シエスタたち

「とりあえず逃げて。オクルーア」シエスタたちの姿が消える

あらかた村人を助け出した隼人、しかし、ますます火勢は勢いをまし、村には牛馬の死体がころがる。

人間の死体も10以上ころがっていた。焼かれた者、魔法で殺され

た者

「これがてめえら貴族のやり方か・・・平民をほんとに人間と思っ
ないんだな・・・後悔させてやる」

隼人は今までこれほど怒りを感じたことはなかった。

「いくぞ。超オクルーア」上空の戦艦に向けて魔法を放つ

「オクルーア・オクルーア×連続」何十回も放つ隼人。

アルビオンが誇るハルケギニア最強の空中艦隊は、たった一人の男
のため消滅した。

条約一方破棄、タルブ村炎上のほうをうけ、出撃したトリステイン軍
自ら出撃したアンリエツタ王女とマザリーニ枢機卿も、その奇跡を
みていた。

「おお、これこそ始祖の虚無。始祖ブリミルはトリステインを守り
給えた」とマザリーニ枢機卿

「さあ、おのおの方。始祖の奇跡に続こうではないか!!」「おう
!!」士気が高まるトリステイン軍。

残敵を掃討し、タルブ村戦はトリステイン軍の勝利に終わった。

オクルーアの連発で、精根尽き果ててタルブ村にへたり込んでいる
隼人

「邪魔だ」とトリステイン軍の騎士に蹴られる

「なんだと・・・今頃来ておいて。お前ら何してたんだよ」

「平民ごときが・・・生意気な。せつかく拾った命を捨てたいか？」
と騎士

トリステイン軍はタルブ村に駐留していた。兵士が金や物を略奪し
ている

「お前ら、止めるよ。いい加減にしろよ」

「ふん。救いに来てやったんだ。これくらい当然だ・・・小僧、女
はどこにいる」と騎士

「お前ら・・・心底腐ってるな」

「生意気な・・・さては貴様アルビオン軍の残党だなwせつかく出動したのに手柄の一つも

立てられず腐っていたところだ。価値のなさそうな首だが、とりあえず死ね」魔法を放つ。

目の前にいる平民は一瞬で消えた。魔法が虚しく地面を穿つ

「なに??」

「言っておく。お前ら貴族は俺が滅ぼす。アルビオンもトリスティンも関係なくだ。必ずだ」

その言葉を残して、隼人は消えた。

顛末

アルビオンにて

「バカな・・・アルビオン艦隊が消滅・・・撃破されたのではなくすべて消滅とは」クロムウエル

たった一つ逃げ帰ってきた船から事情を聞く

「ワルドめ・・・まさか裏切ってタルブ村に艦隊を誘導したのでは・・・いや、それどころではない。このままでは聖戦が」

苦悩するクロムウエル

「申しあげます。ガリア軍両用艦隊襲来！！」

「なに？」

「ロサイス陥落」 「サウスオブゴータ防衛軍敗退！！制空権を握られました。」

「ばかな・・・まさかあの小娘、この時のために協力するふりをして」
「両用艦隊、こちらに迫っています。もうそこに・・・」

バルコニーに出て空をみるクロムウエル。そこには空を埋め尽くす大艦隊があった。

「ふふ・・・これで終りか。所詮私には聖戦を貫徹する力などなかった。だが、虚無の担い手と使い魔、秘宝は

ガリアにわたらない。まだ私が死んでも、きつと教皇様が聖戦を・・・」

教皇に希望を託すクロムウエル。静かに微笑む。その時砲弾が打ち込まれ、神聖皇帝クロムウエルは炎の中に消えた。

ガリアにて

「ふふ、余のミューズ。今回はよく働いてくれた」ジヨゼフ

「すべてはジヨゼフ様の覇道のために。私の全力を尽くします」

まず、アルビオンの内乱に乗じて王党派を滅ぼし国力を弱体化させる。聖戦をあせり、続いてトリステインを奇襲で併合するため大部分の精鋭部隊をトリステインに派軍するクロムウエルの行動を監視。そのタイミングで両用艦隊派遣により

アルビオンを簡単に陥落させ領土に加える。ジョゼフの戦略は見事に成功した。

これにより、

？ハルケギニア上空を移動する自給自足できる不沈空母を手に入れる？アルビオンに軍を駐屯。今後の戦争に地面と空からの二正面から進行できる

？風石により空に浮いているアルビオンでは大量の風石を簡単に手に入れることができる。

のメリットがガリアに与えられる。

この瞬間、ガリアはトリステイン・ゲルマニア・ロマリアをあわせたより強大な軍事力をもつことになった。

ロマリアにて

「まさかあの時点でリーヴスラシルがタルブにいたとは・・・完全に失敗でした」教皇ヴィットリオ

「ジョゼフ王のアルビオン進行も予想外でした。」ジュリオ。

「やむを得ません。これからの計画をすべて練り直します。幸い、ロマリアには2人の虚無・2人の使い魔

2つの秘宝・1つのルビーがそろっています。虚無の数ではガリアを上回っています」

「はい。どれだけ苦しくても聖戦をやりとげます。全力を尽くします」ジュリオ

「俺もです」才人

「私も・本当の事を聞いた以上、協力します。たとえば、お母さんの同族に被害が出ても・・・」ティファニア。

「頼みます・・・我が兄弟たちよ」ヴィーットリオ

ゲルマニアにて

「隼人君、私たち皆を助けてくれてありがとうございます」タルブ村村長がお礼を言う

「いや・・・そんな。俺はただ助けたかっただけで」

「いや、君のおかげで私たちは救われた。ありがとうございます。これからもしエスタをよろしく。君を心から誇りに思うよ。婿殿」オルムー。

「隼人お兄ちゃんありがとう」シエスタの兄弟達。

（この人は私たち家族の命の恩人。そして私の旦那様）シエスタは隼人の側で、嬉しそうに微笑んでいた。

日本にて

哨戒中の海上自衛隊。

「おい、あれはなんだ？空から船が落ちてくる????」

何十隻もの船が落ちてくる

「あれは？動物の上に人が乗って・・・どんどん落ちてくるぞ」

風の魔力で空を飛んでいたドラゴンは、その重量を支えきれず、苦しそうに落下していく。

何十人もの人が海に落下・・・どんどんおぼれていく。

海上に落下した船もどんどん沈んでいく。

「と・・・とりあえず、救助」

・・・救助された異世界からの侵入者は身柄を拘束された。

魔法

タルブ村襲撃より一週間が経過。

村民達はすでにタルブ村に帰っている

「こつちで働いた方がいいんじゃないですか？ツエルプストー伯に頼めば新しく村を興す援助くらいしてもらえるとと思いますけど」

隼人は提案するが、村民は皆帰ることを希望した。

「ありがたいが、私らの父祖が眠るタルブ村からは離れられん。また一から立て直すさ。故郷だからな」

「では、これを役立ててください。」と5万エキユーの手形を渡そうとするが、拒否された。

「私は君に命を助けてもらった。これ以上何をしてもらおうというのかね？私にもプライドというものがある」

「ですが・・・」

ちよっと とアドルフに呼ばれる

「君から金を出してもらったら、恩を通り越して負担に思うだけだぞ」アドルフ

「そんなものなのか？」

「ああ、彼らのプライドを尊重してやれ。復興の手助けは『平民』傘下のギルドがタルブ村の取引先だから、それを通してやるほうがいい。」

こういう時にギルドが支援するから、普段少々安い値段でもワインを卸してもらっているんだ。それでまたギルドに対して信用が増すってことだ」

「うーん」まだ迷っている隼人だったが、最後には納得した。

「わかりました。それじゃ皆を村に送ります。それぐらいならいいでしょう？」

「ああ、頼むよ」

別れる時も歓迎してもらって、シエスタと共に魔法学院に帰った。

ツエルプストー伯爵家にて

すでにかんりの物資と本を叔父の会社をとおして集め、ツエプストー伯爵家に送っていた。

「これは・・すごい。ここまで技術が進んでいるとは」さまざま

機械をみて驚くコルベール。彼は必死に技術を学ぼうとしていた。

「これだけいろいろ素材があるとはね・・チタンにアルミニウムか。錬金してても今まで存在自体気がつかなかったよ。」マチルダ。

二人はすでに魔法学院に辞表を出し、『平民』に参加していた。

「『錬金』とは・・すごいですな。地球ではどれだけ研究してもできなかった技術だ。金まで作れるとは」雄二

「こちらでも金は貴金属ですが、鉱山から取れる金より錬金でつくられる金の方が多いのです。だから金貨にする必要量がまかなえているのです」。ローラン

「ほう、すばらしい。ぜひ見せていただきたい」雄二

「残念ながら、金は土のスクウエアでないと錬金できません。土のスクウエアは非常に数が少なく、1000人に1人かと。殆どが国家に管理されて、造幣に携わっています」

「わたしはトライアングルなんで銀までしかつくれないしね」マチルダ

「それでもかまいません。ぜひ見せてください」雄二

「それじゃいくよ。錬金」その辺の石ころにマチルダが魔法をかける。一部が銀に変わる

「これが錬金？適当な石ころで銀が出来るのですか？原子置換？」

雄二が驚く

「原子？そんなものはわからないけど、まあイメージだね」マチルダ。

「……何か考え込んでいる雄二」

「そういえば、卑金属から貴金属を生成することは、原子物理の応用によって現在では理論的に可能とされているんだ。核分裂により、金より原子番号が多い水銀に中性子線を当てれば、長い年月と膨大なエネルギーを掛ければ・」

マチルダさん。水銀に小さい粒が一つなくなることをイメージして、錬金してもらえませんか？」

「???いいけど……」

ギルドによって水銀が用意される

「それじゃいくよ……小さい粒が一つなくなる……錬金」

見事に水銀が金になっていた。

「え?なんで?精神力も殆ど使っていないのに。私が金を作れた。それもこんなに大量に」マチルダ

「……やっぱり。金に近い物質から換える方が効率がいいみたいですね。水銀が一番金に近いと地球では判明しているんです」雄二
「この感じじゃ、ドットメイジでも水銀から金をつくれるね」マチルダ

「すばらしい……水銀はこちらでは毒物扱いなので手付かずです。いくらでも用意できます。早速抑えましょう。これで直接金を作ってお渡しできる」ローラン

「我々の世界ではできないことも、こちらで出来ることがまだまだありますな。楽しくなってきた」雄二。

その後、地球用に金のインゴットが山のように用意されるようになった。

「あと、水系統の魔法で病人を治療できるとか。どのようにされるのですか?」雄二

「はあ……我々はよくはわかりませんが、体内の毒素を排出したり、体の中の力をコントロールして再生を促したりするようだとローラン。」

「領地開拓の失敗で、我々から大金を借金している貴族が水魔法の癒し手として高名です。彼らに協力してもらいましょうか。いろいろ魔法薬などもとりあつかっているとか。」

「よろしく願います。毒素の排出はがんなどの治療に、再生は再生医療に有効かもしれません。早速患者を連れてきましょう。」

「わかりました。こちらモモンモランシー伯爵家に協力してもらえよう説得しましょう。」

拒絶

トリステイン王宮にて

トリステイン軍が勝利したことにより、同盟を保ちつつゲルマニア皇帝との婚約を破棄。アンリエッタは女王として即位した。

「それでは、あのタルブの奇跡を起こしたのは、ルイズの使い魔だということですか？」アンリエッタ

タルブ村の村民からと、捕虜にした敵からの話で一人の青年が艦隊を消滅させ、タルブ村を救ったことは判明していたが、タケダハヤトとしか名前がわからず、捜索中であった。

「ええ、ルイズは虚無の担い手。そしてその使い魔は伝説の使い魔リーヴスラシルです」とワルド子爵。

ルイズが始祖の祈祷書にて覚醒したことを、アンリエッタとマザリーニに報告する。

そしてルイズからの手紙を見せて、使い魔の能力を説明する。

「つまり、アルビオン艦隊はルイズの使い魔に、異世界に送られたということかね？」マザリーニ。

「確認は出来ませんがおそらく」ワルド

「しかし、恐ろしすぎる力だ・・・そのような者が自由に歩き回っているのか？」マザリーニ

「ええ、彼がその気になれば、次の瞬間にはこの王宮が異世界に消されているかもしれません。」ワルドが恐怖を煽る。

「そんな・・・どうすれば」アンリエッタ。

「とりあえず、彼の立てた手柄に対し叙勲をするという名目で、国に組み込んで？貴族という立場を与えたら、彼に首輪をつけることができるかもしれません。それが出来ない場合は、反抗できないように手を打つということだ。」

「彼に首輪をつけることができるのかね？それならばシュヴァリエの位を与えてもよい」マザリーニ。

「ルイズの使い魔なら、ルイズからお願いできないでしょうか？」アンリエッタ。

「それは難しいですね。ルイズは彼を心底憎んでいます。まあ、私が抑えています。彼を叙勲し、ある程度彼にも立場を与えることで、ルイズにも彼を奴隷扱いすることを諫めることもできます。そうなれば私が仲を仲介できるかもしれませぬ」

「わかりました。ワルド子爵にお任せします。ルイズには私が手紙を出しましょう」アンリエッタ。

「子爵。頼む。今のわが国は彼のような力が必要なのだ。彼をわが国に協力させてくれ」マザリーニ。

「お任せください」ワルド。ルイズの説得のため、アンリエッタの手紙を持って魔法学院に行く

学院長室にて

「ふむ・・使い魔君を呼びなさい」オールドオスマン
隼人が呼び出される

「何か御用ですか？」

「王宮から召喚状だ。君に王宮まで来て欲しいとの事だ。」

「俺には用はないですがね」冷たく言う隼人

「これこれ、これは名誉なことなんじゃぞ。君の戦果に対して褒美を出されるそうじゃ」

「俺には名誉も褒美もありませんが？」

「何か言いたいことでもあるのかな？ならば王宮に行って女王陛下に訴えたらどうじゃ？いい機会かもしれんぞ？」

しばらく考えて隼人はいう

「わかりました。王宮に行きましょう」

ルイズの部屋にて

アンリエッタからの手紙を読んだルイズは、怒りに顔を真っ赤にさせた。

「なんであんな奴隷などに名誉あるシュヴァリエを。貴族に叙任するなんて!!!」

「落ち着きたまえルイズ。彼は手柄を立てた。それに報いなければならぬ」

「でも、あいつは公爵家の三女である私に無礼を働きました。とうてい許すことはできません」

「ふむ・・・こう考えたらどうだろう。彼が自由に動き回っているのは、彼が平民だからだ。シュヴァリエと叙任されたからには、国に従う義務が発生する。彼にはヴァリエール公爵三女にて、虚無の担い手ルイズの護衛の任務を与えてもらうように働きかけよう。つまり、煮ようが焼こうが君の思いのままだ」

実際には王家所属のシュヴァリエに手を出すにはよほどの理由が必要になるが、そのあたりをごまかしてワルドはなだめる。

「・・・そうですか。彼を服従させることができますね。それなら我慢します」

「いい子だ。それなら王宮に行くぞ。彼の主人である君も叙任式に出席する必要があるからな」

王宮にて

謁見の間で隼人は不機嫌そうにしていた。

ルイズがワルドに連れられて入ってくる。顔をあわせると、お互いにそっぽを向いた。

「この度は、タルブ村を救っていただき、女王として感謝いたします」アンリエッタ。

「友人とその家族のためにしたことです。礼は不要です」冷たく言う隼人。

その態度に護衛の銃士隊がざわめく

「ごほん。女王陛下はお礼をおっしゃっているのですぞ。」マザリ

― 二枢機卿

「……」

何も言わない隼人。気まずい雰囲気の流れる。

「あの、それでは、今回の貴方の戦果に対し、マントをさずけ、シユヴァリエとして貴族と任命いたします」

貴族の証であるマントが侍女によってかけられる。

「……」隼人はいきなりマントをむしりとり、地面にたたきつけた。そのまま踏みにじる。

「貴様！！」「何をする！！」銃士隊がいきり立つ。

「見ての通りだ。穢れた貴族の証など必要ない。お前ら貴族のせいでタルブ村に何があったのかわかってないのか？こんな貴族ごっこをしている暇があればタルブ村で再建の手伝いでもしている」

「あなた・女王陛下の前でなんてことを。もう国家に対する反逆よ？」ルイズ

「反逆？笑わせるな。俺はトリスティンに属したことなど一日もない」

「……どうやら、私は大変な勘違いをしていたようですね。貴方は貴族になるにふさわしい、誇り高い

騎士道精神の持ち主であるとおもっていたのですが？」怒りに震えながらアンリエッタが言う。

「ふん。その騎士とやらが無抵抗の女子供を焼いたんだ。そこにいるルイズもそうだ。最初に一方的に召喚しておきながら、気に入らないと鞭をふるい、次の日には男子学生をたきつけて俺を殺そうとした。これほどの下衆女を見たことはない。貴族など平民を力で押さえつける強盗にすぎんw」

女王の面前で恥をさらされ、怒り狂うルイズ。

「あんたもそうだ。こちらに礼を言つといいながら、思うとおりにならないと勝手に失望か。実に下衆だw俺は誇り高いから、貴族な

とどいうゴミに身をおとしたくないんだよ」

「女王に向かって下衆ですと……」

「悪いが俺は一生平民だ。もつとも自由な立場にいるのに、なぜ貴族などという蛆虫の下っ端にならねばならん。そのようなマント、俺の国じゃ1エキューにもならん。着て町をあるけば指をさされて笑われるぜw」

大笑いをする隼人。周囲では憎悪の嵐

「……この者を捕らえなさい。王家に対する侮辱罪で収監します」
アンリエッタが命ずる

銃士隊が剣を突きつけ、取り囲む

「バカな奴だ。ここまで放言をするとは、死刑はまぬがれまい。いや、この銃士隊長のアニエスが直接切り刻んでやる」

「残念だが、あんたらには俺に指一本も触れられんよ。オクルーア」
取り囲んでいた銃士隊10人が一瞬で消える

「な……」 「これは……」 「アンリエッタ、マザリーニが絶句」
「（クツ。初めて見たが理不尽な力だ。危険すぎる）」 「ワルド。

ルイズはおびえてワルドに取りすがる

「……んで、あんたらも消えたいのかな」

「何が望みだ」 「アルリエッタをかばおうと前にでるマザリーニ

「望みはもうなかったさ。俺をわざわざここにご案内してくれただけだな。つまり、俺はこれからいつでもここに来れる。その気になつたらその女王様とやらもいつでも消せる。」

「!!!!!!!」 「室内の全員が恐怖に震える。」

「あんたらもせいぜい首を洗っておけ。俺にちよっかいかけた次の瞬間、王宮ごと消してやる」

笑いを浮かべて隼人の姿が消える。

……後に残された3人の間に重い沈黙がおりた。

「……私は大変な間違いを犯した。もつとも危険な存在を招いてい
まうとは」 「マザリーニ

「……こんなことって」 「アンリエッタがへたり込む。」

「・・・私も話に聞いただけで、詳しく知らなかったので失敗をしました。この失点を取り戻すために、今後彼の対策は私に任していただけませんか？」ワルド

「しかし・・・なんとかなるのかな？」

「多少汚い手を使うことになるかもしれない。ご禁制の品も使ってよろしいでしょうか？」

「・・・お任せします。ああ、ルイズ。こんなにおびえて。あのような悪魔に脅かされ、今まで恐ろしかったでしょう。もう大丈夫です。私たちが全力で貴方を助けます。もう貴方は一人ではありませんよ。」

「姫さま・・・」抱き合う二人。

「ヴァリエール公爵にも事情を説明して、彼の始末に協力してもらいましょう」「ワルド。」

ワルドは勝算があるのか、3人を安心させるように笑った。

対策

ヴァリエール領

ワルドとヴァリエール公爵夫人が話し合っていた。

ワルドはルイズの系統・そして国家に反逆する使い魔について詳しく話した。

「なるほど・そんな事になっていたのか。その使い魔、一刻も早く始末しなくてはな」公爵

「このままではルイズの身も危ないですね。母として娘の障害は取り除かねば」

今にも魔法学院に乗り込むような気配の公爵夫人。彼女は伝説の風の使い手、先代マンティコア隊長「烈風のカリン」であった。

「お二方、お待ちください。奴の力は私も確認しました。下手な所で戦いを仕掛けると、周囲に被害を及ぼします。それに単純に正面から

向かったら、確実に消滅させられます。」

「ではどうすればいいのだ！！！！」公爵が不機嫌になる。

「ヴァリエール家は代々、ご禁制の品を管理している家、その品をお借りしたい」

「アレか・しかしアレは使用どころか持ち出しすら禁止されている。万一世に広まったら、貴族に大きな害を及ぼす。」

「こちらの領土内で秘密裏に使いましょう。ここまで連れてくる方法についても心積もりがあります」

「確かなのか？」「ええ」

「・・・わかった。君にまかせる。アレを見せよう」公爵

・・・深く暗い地下室に案内される。何十もの固定化とロックの魔法がかかっている

「嚴重なものですな」

「当然だ。装着者がもしつけた者の命令に逆らえば首が絞まり、同時に、魔力を封じるマジックアイテムだ。」

「対メイジ用に想定された服従アイテム。この技術が平民に広まれば、魔力が効かない剣や鎧も作成されるかもしれん。」

「そうなれば革命がおきかねん。異端とされた魔力封印の研究の成果だ。これを作った我がヴァリエール家の先祖は系統魔法が使えなかったが、」

「いくつもの奇妙なマジックアイテムを作ったらしい。「転移の鏡」というのも王宮に献上したそうだ」

「ふむ・その方ももしや虚無の担い手だったのかもしれない」「そうかもしれない・これだ」と一つの汚れた首輪を見せる。

「これがあれば、最凶の使い魔といえども服従させることが出来るでしょう」ワルド

「生ぬるい。処刑だ」公爵。カリンも頷く。

「それで・彼に首輪をつける方法ですが」とワルドはある提案をする

「ふん・貴族にあるまじき行為だが、いたし方あるまい。せめて奴と一緒に葬ってやろう」

「はい。そしておとなしくここに連れてくる方法ですが、すでに王宮の許可はとれており、手配済みです。すぐに彼らを捕縛するでしょう」ワルド。

隼人に対する包囲網は完成されつつあった。

トリステイン魔法学院使用人寮にて

最近、隼人の日常は、朝、ツエルプストー領に転移して、大量の金のインゴットを日本に運ぶ。

そして叔父の会社の倉庫に用意された物資と本をツエルプストー領

に運ぶ。

なにやら大量にあるが、使い方がわからない機械も多い。

一度などは叔父に某国に連れていかれ、大量の怪しい細長い箱を運ばされた。その場でツエルプストーから大量の金を運び、交換する
「ねえ・・・これってもしかして 武」

「知らない方がいいさ」叔父がニヤツと笑う。

（叔父さん・・・アンタ顔が広すぎるだろう。怪しすぎるぜ）冷や汗を書く隼人。

そして夜は使用人寮に帰る。帰らないと機嫌が悪くなる人間がいるからである。

深夜、ある部屋で話し声がする。

「それで、王宮からの呼び出しがあったけど、どうなったの？ダーリン」妖艶な声。右から聞こえる

「隼人さんは私たちの味方ですよ。貴族なんかになりませんよね」必死な声。左から聞こえる

「・・・隼人は私の騎士。トリステインなんかに渡さない」可愛い澄んだ声。上から聞こえる。

「あの・・・ところで起きたらこの状況？ドウィウコトデスカ??」

隼人

「わかっているくせに・・・ふふ」

「旦那様と一緒に休むのは、メイドであり妻である私の勤めです」

「・・・今日はもっと頑張る」

右にキュルケ・左にシエスタ・上にタバサである。おまけに全員下着姿。

赤と黒と白の下着がまぶしい。一部が勝手に反応する。

とつてもあったかくやわらかい。

「・・・あの、えっと、とりあえずどいてください。このままでは我

慢できなくなる」

「我慢なんてしなくてもいいのよ」「我慢しないでいいです」・・・我慢は体によくない」

全然言うことを聞いてくれない。

仕方なくこのまま王宮でのことをはなす隼人。

「そう。ふふ、さすがダーリン。『平民』の鏡ね」

「さすが隼人さんです。私の愛する人です」

「・・・トリステイン騎士なんかにならなくていい。隼人は私と結婚して王になる」

タバサが顔を胸に擦り付けながら言う。

「あら、隼人が王様か。それもいいわね。いつそハルケギニアを征服しちゃいましょうか？」

「ダメです。隼人さんはタルブ村に来て、ワインを造って幸せに暮らすんです」

「・・・ダメ。隼人は渡さない」ついに大事なところを触れるタバサ。あわててガードする隼人。

「あら、それじゃどっちが隼人を満足させるか勝負で決めたら？私はどちらでもいいわよ。」キュルケ

このところ、毎日三人が侵入してきて、シエスタとタバサが張り合う。それをキュルケが煽るといった次第である。

隼人はつかれきっていた。

「もう止めてくれ。今日はもう寝よう・・・疲れた」と眠りに落ちる。

美少女三人も眠りについた。

そしてある日の午前四時、複数の影が魔法学院使用人寮を目指していた。

「眠りの霧をまきながら進め。気づかれないうちに奇襲するのだ」ワルドが指揮する精鋭部隊は隼人の部屋を目指す。

襲来

襲来

「……ん？」タバサが起きる。幾多の実戦に鍛えられた勘で、異変を悟る。

「みんな起きて……何か変」

シエスタ・キュルケ・隼人が起きる。

「どうしたんだ??」「……黙って」

「何かあったの?」

その時、いきなり窓を破って人が進入してきた。

同時にドアもからも乱入してきて、4人を組み伏せる。

そうしておいて、すばやくシエスタをドアから運ぶ

「待て……シエスタをどこに連れて行く。」組み敷かれた隼人が喚く。

「ふむ……まあ道中ゆっくり話そうか。私はワルド。ルイズの婚約者だ。王宮で会ったね」

「貴様……」

「おとなしく付いてくるなら危害を加えない。おっと、私を消したら、君の彼女がどうなるかは保証しない。

いくら君が瞬間移動できている、居場所もわからずどうやって救うのかな?」

「く……」

「さて、行こうか……?そっちの二人は見逃そう。他国の貴族に手をだすと問題になるからね」

「ふざけないで!!」「……許さない」杖を取り上げられているので抵抗できない二人。

「さらに言っておこう。シエスタだったかな?たとえあの少女を救う機会があったとしても、二人で逃げない方がいい。

なぜなら、すでにタルブ村に部隊を派遣し、彼女の家族をとらえているからだ。女王陛下の命で反逆者の一族としてね。」

「貴様らどこまで」

「国家権力を舐めない方がいい。さて、私に従ってもらおう。ルイズの両親がヴァリエール領で待っている。君に礼がしたいとさ」

「く・・わかった。どこへでも連れて行くがいい」

「だめよ!!! 処刑されてしまうわ」「・・私達はいつも一緒。私も行く」

「二人には後のことを頼む・・」

「・・わかったわ」「キュルケ!!!!!!」

「二人が付いていってもどうにもならないわ。今は抑えなさいタバサ」

「相談は決まったかな?では使い魔君、行こうか」

連行される隼人。タバサが付いていこうとするのを、キュルケが必死に留める・

「キュルケ離して・・隼人が・・このままじゃ殺される」

「落ち着きなさい。今私たちが出来ることをやるのよ。あの中年ヒゲオヤジの失敗は私達を見逃したこと。必ず助けるわ」

ヴァリエール領にて

「おお、よくやってくれたワルド子爵。さすがは私が見込んだ婿だ」
公爵

「国家に反逆した罪深き平民。すぐに縛り首の用意を」カリン

「今までの罪。たっぷり思い知らせてあげるわ」ルイズ

「お待ちください。その前にすることがあります。『虚無の首輪』
を」ワルド

ルイズが渡された首輪を隼人につける。すると、胸のルーンが消えた。

「これは!!!」驚く隼人

「魔力を完全に封印し、装着者に絶対服従を強いる伝説のマジック

アイテム。よく効いたようだね。ルーンも封印された」ワルド
ルイズが隼人を鞭で打つ。反抗的な目を向けた瞬間、首が絞まり呼
吸困難に陥った。

「どうやら問題なく作動しているようだ」

「ふん。処刑は明日だ。ルイズ、これで安心できるな」公爵

「はい。お父様、ワルド子爵様。これで反逆した醜き平民が罰をう
け、正義が保たれます」ルイズ。

牢に連行される隼人。抵抗がまったくできない無力な存在になった
ことをかみ締めながら。

夜 ルイズは牢の前に来ていた。隼人はすでに公爵の部下に痛めつ
けられ、半死半生である。

「ふふ、醜き平民にふさわしい無様な姿ね」ルイズ
足元には縛られたたシエスタがいる。

「貴様。シエスタに何をするつもりだ!!!」

「決まっているじゃない。あんたの目の前で死ぬまで鞭で打つのよ
w」

「何・・やめる。シエスタは関係ない」

「関係あるわよ。あんたが苦しむじゃない。この女も国家反逆罪で
死刑よw」

ビシッピシッピシッと容赦なく鞭を振るうルイズ。みるみるうちにシ
エスタの体に傷が出来る

「止める・・ぐっ」首がしまる隼人。息ができない

「あつはつはつは・・明日の処刑なんて待つ必要ないわね。この
まま二人で死になさいw」

もはや狂気の表情のルイズ。

「やめるやめるやめる・・」

発狂しそうになるほど怒りが膨れる。

その時、胸にルーンがうつすらと輝き、光が広がっていく。

「なによこれ・・封印されてるはずじゃ・・きゃっ」

隼人・ルイズ・シエスタは光の中に消えていった。

ツエルプスト伯領にて

「隼人救出部隊、準備できました」ローランに報告するアドルフ

「私も参加するわ」「・・・私も」シルフィールドで急報をもたらしたキュルケとタバサ。

「今回だけは君たちの参加を認めることはできない」ローラン
「なぜ!!」「・・・勝手に付いていく」

「そうして、また隼人君の弱点になりたいのかね？」ローラン
「うっ・・・」「・・・クッ」

「軍事面での君たちの役目は誰よりも早く『平民』に隼人君の居場所を知らせた時点で終わっている。

次は隼人君のための役目を果たしたまえ」

「「役目?」「」

「帰ってきた隼人君を慰める役目だ・・・シエスタ君とその家族。全員を助けられるとは限らない」

「・・・わかつたわ」「わかつた」

「では出発だ。時間がおしい。トラックという車で行くぞ。全員出撃」

トラックに乗り込んでいく兵士。全員が日本からもたらされた銃を装備。短期間だが訓練をつんでいる。トラックを運転するのもこちらの世界の兵士である。

(間に合ってくれ・・・こんな所で彼を失うわけにはいかないんだ)
ローランは祈った。

狭間

狭間

光の中から出現する3人。

隼人とルイズを隔てていた牢の柵がカランと倒れる。

「く・・・ここが異世界というところなの？何にもないわ」ルイズ。
周囲の光景は一変していた。辺りは薄暗く、岩山が続いている。空には弱い光の玉。

草木の一片も生えてない地獄のような光景。

「とりあえず、あんたたちは殺すわ。エクスプロージョン」

隼人とシエスタが吹き飛ぶ。気絶する隼人とシエスタ

「??おかしいわね。今のは最大限の力なのにあれっぼっちの爆発なんて。まあいいわ。もう一度よ」

杖を向ける。今度こそ殺そうと呪文を唱えるルイズ。

その時、目の前に黒い影が出現し、突然声が響いた

「やめよ・・・愚かなる者よ」

「誰!？」反射的に杖を向けてエクスプロージョンを放つ。

黒い影はいつたん拡散したが、再びあつまる。

「なによなによ・・・幽霊?こないで!!」後ろを向いて逃げ出すルイズ。

後には黒い影と、気絶した二人が残された。

意識が戻る隼人

「いてて・・・どうなったんだ。ルイズの爆発で吹き飛んだことまでは覚えているが」

「気がついたか」黒い影が話す

「うわっ 幽霊。こっちくんない!!」

「落ち着け。我等は幽霊では・なくもないが。危害は加えぬ」

「そ・・そうか。まあ魔法やドラゴンがあるんだからなんだってあ
りか」少し落ち着いてくる隼人。

「そういえばルイズは？」

「お前達を殺そうとしていたので、我等がやめるよう声をかけたら
逃げていった。」影

「そうか・・助けてくれたんだな。ありがとう。ところで、お前の
名前は？」

「名前か・・数百万あるので言い切れぬ。民族名ではヴァリヤーグ
という」

「ヴァリヤーグ？それがお前の名前か？それじゃ、ここはどこだ？」

「狭間に封じられし大陸、アトランティス」ヴァリヤーグはいった。

「狭間？」

「そう。精霊世界と物理世界の間にある、我らが故郷だ」

「アトランティスってあの伝説の大陸？ということとは、ここはどこ
らの世界でもないのか？」

「そう、世界間の狭間に封印された大陸だ。ここに迷い込みし者は
少ない」

「・・この世界に来たのはこの首輪のせいかな？今までにない力が
湧いてきたんだが、地球にいけなかったし

中途半端になってしまったのかも」

うーん と声がしてシエスタが起きる。ヴァリヤーグをみて幽霊！

！と一声あげてまた気絶した。

「とりあえず、こちらに来るがいい」とヴァリヤーグが案内した。

しばらくシエスタを背負って歩く。すると巨大な塔が見えてきた。

「でさえ・・なんなんだあの塔は」

「我が最後の技術を結集して作った、世界を渡る塔だ。あの

塔以外はヴァリヤークが築いた文明はすべて滅び去った」

「滅び去った？どういうことだ？」

「塔の中の`知識の部屋`に入るがいい。我等が歴史を知ることができる。また、我等もお前のことを知ることができる」

「なんか怖いけど・・・まあいいや」

「こちらだ」と案内された部屋に入る。隼人の意識が拡散していった。

日本にて

壮年の男達が会議をしている

「最近の奇妙な事件はいつたい」

「上空から落ちてきた奇妙な船の乗組員はさっぱり意味不明な言葉を話しています」

「また、彼らが乗っていた生物・・・形状に従い、仮にドラゴンといいますが、地球にはない新生物です」

「最近東京に現れて、街中で剣を振り回し、警察に拘束された集団も同じ言葉を話しています。」

お互いに報告しあう。彼らは最近起こる奇妙な事件への対応を任せられた政府機関であった。

「幸い、最近起こった災害に世間の目は集中しているので、マスクミへの対策は成功しました。すべての事件が

報道されていませんが、このまま続くようでは国民に知れ渡るのは時間の問題です」

「まずいな・・・復興だけでも大事なのに、これ以上国民に不安を与えるのは・・・」

「一つ手がかりらしきものがあるのですが・・・最近、東京でどのデザインにも該当しない金貨が

貴金属買取店で売られました。かなり大量にあったので、一部がまだ錆漬されてないので、

それが彼らの持っていた金貨と一緒に物があったのです」

「その金貨を売却したのは？」

「武田隼人という青年です。住所はレオ レスになっています」

「その青年を洗ってくれ。なにか知っているかもしれない」

「あと、最近保護された精神病患者がいます。ギーシュと名乗る彼は、外国人のように見えるのですが、

身元が判明しないのです。街で杖を振り回し、万引きを繰り返したので逮捕されたのですが、

言葉がつうじなく行動がおかしいので精神病と判断され収容されました。

最近カタコトで話を通じ始めたのですが、ハルケギニアという異世界から来たといっています。

彼もこの謎の金貨を持っていました」

「そうか・・・彼にも話を聞いてみよう」

後日、ギーシュが呼ばれ、断片的ながら異世界の情報を得ることが出来た。

歴史

狭間の世界。アトランティス大陸。

「世界を渡る塔」の知識の部屋において、隼人は眠っていた。

隼人の意識が拡散し、ヴァリヤーグの意識と同化する。

隼人はヴァリヤーグの歴史を知った。

ヴァリヤーグは隼人の知識を得た。

それは6000年前にさかのぼる。

当時、3つの種族が覇権を握るため、血みどろの争いを続けていた。

精霊の力を自らの魔力で行使する種族。マギ族。

精霊の力を意思を通わせることで行使する種族。エルフ族。

精霊の力を技術で行使する種族。ヴァリヤーグ族

何年もの大乱。しかし、この中で次第にヴァリヤーグ族が残りの2種族を圧倒するようになった。

技術を使う方法が、万人にとって確実に最大の効果をもたらすからである。

仮に「早く移動する」という課題をクリアするのに、

マギ族では、自らの移動する速さを鍛える。

エルフ族では、馬を手なずけて乗る

ヴァリヤーグ族では、移動機械を開発して使う。

同じ目的でもその効果は雲泥の差があった。

技術により強大な力を得たヴァリヤーグは世界征服を目指し、軍を

拡大していた。

しかし、ここでニダペリーヌという村のマジ族に救世主となる天才が現れた。

ブリミル・ル・ルミル・ニダペリーヌである。

彼は天才であった。当時体系化されていなかった虚無の系統を理解し、さまざまな術式を開発した。

爆発・記憶操作・加速・異世界移動などである。

そして、彼が長年の研究により開発した究極の魔法により、ヴァリヤグは滅亡の時を迎える。

究極の魔法。それは、ヴァリヤグの国ごと異世界に転送する魔法であった。

自らが召喚し、特殊な能力をもつ、3人の使い魔。

そのうち、彼がもっとも愛したエルフの娘には、左手と胸にルーンが刻まれていた。

ブリミルが呪文を唱える。3人の使い魔が精霊の力を集める。

それは世界の一部を切り取るという、大きく自然の摂理に反する行為。

だからこそ、この世界に存在するほとんどの精霊力をつぎ込む必要があった。

ガンダールヴとリーヴスラシルの力を得て、すべての精霊力をつぎ込み、大陸を転移させる力を放出するエルフの娘。

しかし、それによって生きる力を奪われる存在があった。

彼らエルフを含む亜人と言われる種族にとって、精霊力の消滅の影響はマジ族よりはるかに大きい。

聖霊力の枯渇により生命力を失い、どんどんと倒れていくエルフ族。

最後の力を振り絞り、エルフの長老が苦しむすべての亜人の姿をエルフの娘の前に魔法により映し出した。

瀕死のエルフ族の姿をみて術をとめるため、エルフの娘は究極魔法を使っているブリミルの胸を持つている剣で突き刺した。

ブリミルの死により魔法は中断した。しかし、その時すでにヴァリヤグの国アトランティスは大陸ごと消えていた。

ハルケギニアから消滅したものの、魔法の中断により物理世界に渡ることができなかったアトランティス大陸。

ヴァリヤグ族は残された精霊力を使い、上空に火石をつくり光とし、風石によつて空気を循環させ、

水石により雨を降らせ、土石により重力を安定させた。

しかし所詮箱庭世界にすぎない。数百万ものヴァリヤグ族は飢えによりどんどん死んでいった。

わずかに残った総力を結集し、ヴァリヤグの文明の結晶、世界を渡る塔^レをつくり、一部の者は物理世界に渡っていった。

しかし、アトランティス大陸に残された者がいる。

それは数百万、いや動物や植物も含めた何千万という死んでいった存在の魂であった。

すべての命あるものに存在する魂。

それは永遠の輪廻転生を繰り返す不滅のもの。命は死ねばその魂は、大いなる意思^レに融合し、それから新しい魂が生まれ命にやどる。

しかし、狭間の世界に封印されたアトランティス大陸では、魂は輪廻転生の輪に戻ることが出来なかった。

魂は融合し、一つの、ヴァリヤグ^レという存在になる。

そして自らを永遠の囚われから開放してくれる存在を数千年待ち望んでいたのがあった。

過去

アトランティス大陸 世界を渡る塔 知識の部屋にて

隼人とヴァリヤークはお互いの知識を交換している。

「こうして我等は6000年にわたる幽閉を受けている」ヴァリヤーク

「そうだったのか・・・」

「我等の希望はシャイターンの門を再び開くもの。すなわちお前だ。リーヴスラシル」

「リーヴスラシル？」

「お前のルーンだ。」

聖戦について。ルーンについて。虚無の魔法について。

以前ここを訪れたリーヴスラシルの知識が隼人に入っていく

究極転移魔法を行使する前、ブリミルは三人の子供に血統の保持を義務づけた。そして、一人の弟子に使命を与えた。

『ヴァリヤークは魔法のつかえない異世界にて技術を失い衰退するだろう。しかし、究極転移魔法で世界の一部を切り離したことへの反作用が起きる。そのことが原因で世界に大いなる厄災がおきるであらう。』

失われた世界の一部であるアトランティスを取り戻そうと精霊力が結晶し、暴走することになる。その時は再びシャイターンの門を開き、溜まった精霊力を制御して、究極召喚魔法である『オメガ・サモン』を使い、アトランティスを召喚せよ』

ロマリア皇国を興した弟子フォルサテ以降、この使命は忠実に守られることになった。

しかし、究極魔法により半数が死滅したエルフ族が、悲劇をくりかえすまいと聖地を占拠、奪回しようとするマギ族との間で争いがおき、聖戦が繰り返されることとなった。

「お前の希望は苦しむ平民を救うことか・・・今平民とされているのは、アトランティスが狭間の世界に転送されたときにハルケギニアに残された我等が子孫なのだ。技術を失い、国を失い、マギ族に服従するしかなかった。」

「・・・」

「お前にも物理世界に渡ったヴァリヤーグの血が流れておる」

「そうか・・・」

「絶望に陥っていた我等が希望を得たのは、2000年前、お前と同じリーヴスラシルがこの狭間の世界に迷い込んできたときだ。今のお前と同じように知識を共有し、我等が封印されてから精霊世界で何があつたのかを知り、

聖戦の目的を知り。希望が生まれた。

聖戦が達成され、アトランティスがハルケギニアに召喚されれば、我等は輪廻転生の輪に戻る。頼む。我等が子孫よ。我等をこの永遠の地獄から救い出してくれ。我等の遺産もやろう。この大陸もやろう。未だマギ族の支配に苦しむ同胞も救おう。」

「わかった。全力を尽くそう」隼人

ロマリアにて

始祖の鏡には何も映らなかった。

「困りましたね・・・」ヴィットリオ

「どうして何も映らないのでしょうか。今までリーヴスラシルについては、異世界に行っているときには映りませんでした。しかし、ルイズ嬢まで行き場所がわからないとは」ジュリオ

「二人が異世界に行ったのなら、虚無の力もリーヴスラシルのルー

ンも消滅して、次の虚無の担い手が映るはずです。しかし、始祖の円鏡には何も映らない」

「・・・もはや、封印されしアトランティスに・・・」

「その可能性はあります。これがどのような結果をもたらすか・・・」

日本にて

年長の男達が、ある男と話し合っていた。

「・・・以上が私達のしようとしていることです」隼人の叔父、雄二が言う。

「そうですか・・・異世界、それに錬金術。信じがたいが・・・」

金貨を販売した青年をたどっていくうち、叔父の経営する会社から大量の金のインゴットが市場に売られた。政府機関の人間が接触し、事情を聞く。

「私も実際にハルケギニアに行くまで信じられませんでしたよ」苦笑する雄二

「しかし、これは我々の手に余ります。事実としたら日本にとつもない富をもたらすが、公表したら大混乱になる」

「ええ・・・しばらくは秘密裏に交易をしようと思います。異世界に渡る方法も隼人の能力以外にはないですし」

「わかりました。我々が日本側の窓口となりましょう。ぜひ協力していただきたい。」

「ありがとうございます。それでは、まず武器をお願いします。旧式のくれてやつてもいい程度の武器でかまいません。かの異世界は未だ野蛮な論理が通用している場所なので、どうしても必要なのです」

「善処しましょう」

今後、日本側から武器や技術が雄二の会社を通して供与されることになった。

過去（後書き）

次回、ついにルイズに鉄槌が下されます。

捕縛

アトランティス大陸をあてもなくさまようルイズ

「なによ．．．ここは一体どこなのよ。誰もいない。のどが渴いたし、お腹も減ったわ．．．」

足を引きずりながら歩く

「もう限界．．．歩けない。お父様・お母様・ワルド様．．．誰でもいい。誰か助けて。助けてよ！」

どれだけ声を張り上げようと、反応は返ってこない。

疲れきったルイズ。そのまま眠りに落ちた。しばらくして、黒い影が覆いかぶさり、世界を渡る塔に運んでいった。

世界を渡る塔にて。

液体を満たしたカプセルの中に漬かっているルイズ。全裸である。頭にはヘルメットのようなものがかぶされている

「ルイズとか言う少女は我等が預かるう。これ以上自由にさせて、万が一死なれでもすれば聖戦が遅れる。」

この中にいれば、食事や排泄をしなくても体を保てる。それに、我等にとつても良い刺激になる」

「刺激？」首をかしげる隼人。

心持ちヴァリヤークが笑うような、怒ったような、期待しているような感情が伝わる。

「知識の部屋で、お前の受けた仕打ちによる苦痛・怒り・絶望・死の恐怖は我等も共有した。すばらしい刺激だった」

「おい」

「ふふ。これはお前にはわかるまい。6000年の間、なんの変化もなくただ存在するだけだった我等。我等の娯楽は1000年に一度くるかこないかの迷いこんでくる人間の経験を体験する事しかなかったのだ。痛みや苦しみをすら快感になるほどな。永遠の停滞よりはるかに望ましい」

「お前ら・・・変態か？」

「数百万の中には、お前の概念に該当する者もいた。」

「・・・まあいいけど」

「このヘルメットはルイズの意識を保たせ、我等の意識と接続する。ルイズには、聖戦の時まで我等の刺激となつてもらおう。数百万の存在の嗜好を満足させるようにな」

「・・・(数百万の人間一人一人の嗜好？つまり変態プレイに付きあわされるって事か？えげつないな)そんなことをしたら発狂するんじゃないか？数百万人のペットなんて死ぬぜ」

「我等が正気を保たせる。どれほど苦痛・快楽・愛情・憎悪そのほかの感情を直接ぶつけられ、脳が擦り切れそうになつても発狂の精神システムを発動させないように抑えられる。もちろん意識を保つたまま、指一本動かせない状態だ」

「わかつたよ・・・聖戦とやらで必要になるまで、すきにしているがいさ」隼人。

数百万の人間に弄り回されるルイズ。意識の中でどれだけ絶叫をしようが、誰も助けてくれない。

正気を保つたまま、すべての感覚を与えられ、奪われ、また与えられる。

「なによこれ・・・どうなつたの・・・」

脳に流れ込んでくる「愛情」「憎悪」「友情」「侮蔑」「羞恥」「憤怒」「憐憫」「安堵」「失望」「同情」・・・

今まですべての人生を覗かれる感覚。いちいち届く感想。

ある子供からは姉と慕われ、同世代の少女からは友達と認識される。中年の女性からは娘のように思われ、老夫婦からは孫のように可愛がられる。若い男に妄想され、性欲の対象とされる。変態に苦痛を与えられ、同調される。

隼人への行為を非難され、無数の人から軽蔑されることもあれば、記憶の中の父母を貶められる。

恥ずかしかった。悲しかった。ほうっておいて欲しかった。

なのにルイズのすべての反応を楽しむ数百万の意識。

それなのに、死ねないのだ。狂えないのだ。まさに生き地獄であった。

殺してくれと泣いて頼めば、自業自得だと返ってくる無数の声。

時に慰められ、時に希望を与えられる。いつかきつと開放されると1500年前にこの地に迷い込み、餓死した者の魂は言う。私に関心もたれなくなるまで100年かかったと。死ぬより深い絶望に歓喜の声が響き渡った。

前哨戦

前哨戦

アトランティスにて

傷の手当てを受ける隼人とシエスタ。完全に傷は治り、「虚無の首輪」も外されている

「しかし、お前らの技術すごいよな」隼人。

「私の傷も治してくれてありがとうございます」シエスタ

「気にするな。それから、隼人のリーヴスラシルのルーンにも手を加えておいた。今のままでは、

シャイターンの門を開く儀式が終わったあと、その負担に心臓が耐えられず死ぬ可能性があるからな」

「そうなのか？ っておい」

「初代リーヴスラシルのエルフの娘も死んだらしい。安心しろ、ルーンの処理効率を上げておいたから死ぬことはない。

また、今後は「瞬間移動」「転送」に加えて「召喚」も使える」

「『召喚』？」

「物を手元に引き寄せる力だ。」

「そうか、ありがとうな」

「この空間は封印されているので直接ハルケギニアに帰れないが、物理世界には渡れる。こちらだ」

「渡りの間」に案内する

「では、聖戦を頼んだ。相談あればいつでも来い。塔の中には我等が遺産である各種マジックアイテムもあるしな」

「ああ、ありがとう。それじゃシエスタ行くぞ。家族も助け出さないとな」

「はい。ヴァリヤークさんもありがとうございます」

二人は光の中に消える

「・・・さて、ゆっくりルイズで楽しむか」

ヴェリヤーグはルイズを弄ぶ遊びに熱中した。

ヴァリエール領

「大変です。どこにもルイズ様がいらつしやいません」

朝から大騒ぎになっていた。

「牢に入れていた平民もいなくなっています。」

屋敷の全員で探しても、二人は見つからなかった

「くそ・・・あの平民め、ルイズをどこにやった。」公爵

「昨日のうちに処刑しておれば・・・」カリン

「済んだことをいっても仕方ありません。今は探しましょう」「ワルド。しかし、内心はあせっていた。」

（クツ・・・まさか「虚無の首輪」でも力を完全に抑えられないとは。しかも人質の娘まで行方不明だ。

考えられる事態の中で最悪だな）

時間だけただ過ぎていった。

そして夜、さらなる報告が鷹便でもたらされた

「ツェルプストー方面から正体不明の軍が襲来、すでに2つの砦が破られたとだど・・・？」公爵

「ありえません。どちらの砦も私が育てた部隊が守っています。しかも、2つの砦は馬で全力ではしっても

1日はかかるはずですよ。そんなに早く来れるはずが・・・」

「とにかく、周辺のわが部隊を集めて用意しよう」

非常収集をかけ軍を集め、急遽4000人の部隊を編成した。

翌日の昼、ツェルプストー領との間のルクセンの野にて陣をはるヴァリエール軍。

「急な収集にもかかわらず、よく集まってくれた。この度の戦、私

しかも1日のうちに。これはとんでもないことの幕開けかもしれない
せん・・・」カリン

「そうでしょうか?」ワルド

「あの平民の青年といい、近頃は貴族に対しての平民の不満も高ま
っています。ツエルプストーへ逃げる平民も多く、彼らはかの地に
て職人として技術を磨いています。もし、そのような平民が、貴族
の魔法に対抗できる武器を開発したら・・・?最近王宮においても
魔法を使わず銃をつかう銃士隊というものが設立されています。以
前では考えられないことです。」カリン

「銃ですか?しかしあんな使いにくい、命中精度もひくく単発な武
器など・・・」ワルド

「今はまだそうです。しかし、その武器が進歩して連射が出来るよ
うになったら・・・」カリン

「申しあげます。正体不明の軍が襲来!!!近くの平原にて駐屯」

「なんですと・・・では、わが軍は?」

「何も情報がはいっておりません!!!」

「クツ・・・私が指揮をとります。防衛部隊、こちらから急襲します」
出て行くカリン。

取り残されたワルドは、必死に冷静になるようつとめた。

破滅

ヴァリエール領。ツエルプストー隼人救出軍。

「しかし、この武器の有効性はすごいですね。初めての实战でこれほど戦果を挙げられるとは」

平民の兵士が言う。今回の作戦は、メイジと平民がほぼ半数ずつ参加していた。

メイジには杖は腰に下げ、攻撃には使わず護身用に使うように訓練されている。

「この銃にはメイジは対抗できないな・・・この戦争から一変するだろう。今後は私も杖をすて銃をとるだろう。貴族の時代は今度こそおわるのかもしれない」

メイジの兵士が言う。彼は没落貴族で、傭兵に身をやつしていたが、ツエルプストー軍に拾われた過去を持つ。

「間違えるな。今回の目的はヴァリエール領の占領ではない。あくまで隼人やシエスタ君の救出だ。だいいち、今の段階では占領しても維持できない。救出後、隼人の瞬間移動でツエルプストーに帰って成功だ。」アドルフが言う。

ハッ と二人が敬礼する。

「ヴァリエール防衛軍がこちらに向かっています」

「総員戦闘配備。射程距離に入り次第掃討。その後ジープとトラックで蹴散らし、屋敷を占拠する」すばやく戦闘隊形をとる救出軍。

ヴァリエール防衛軍は、真正面から救出軍に向かっていく。先頭には老いたマンティコアにまたがった騎士。

「下がちなさい。私は前マンティコア隊長、烈風、カリン・・・これ以上「一斉射撃」え????」

ダダダダーーンと銃声。ヴァリエール軍に銃弾の嵐

カリンにも銃弾が肩に当たり、杖を落とす。

「なんと・・・この距離で銃弾が・・・クッ」痛みで沈みそうになるが、立って指揮をとろうとする
そこに無慈悲にも第二射が来る。

「グハッ」肺を貫かれるカリン。周囲の精鋭部隊も全滅している
カリンは苦しくなっていく呼吸の中で、ワルドとの会話を思い出していた。

（ついに・・・ついに平民の武器が貴族の魔法を上回ってしまった。
これで貴族の歴史が終わる・・・あなた・・・エレオノール・・・カトレア・ルイズ・・・どうか無事で・・・）

「烈風」カリン。享年44歳。貴族の中の貴族といわれ、一人で反乱を鎮圧した。ドラゴンを倒したと

さまざまな伝説を残した騎士。その最後は、平民が放った銃弾により、反撃すらできずに滅んだ。彼女を倒した平民は名前すら伝わっていない。

この戦闘は貴族の終りの始まりを象徴するものとして、長く語り継がれることになった。

シエスタを日本の武田家に残して、ヴァリエール領の屋敷にくる隼人。

「あいつら・・・シエスタの家族の居場所を聞き出したら、絶対に日本の海にドボンだ」

屋敷の中を探す隼人。しかし使用人たちの様子がおかしい。

「おい、何があっただ」

「何をのんきに・・・貴様一昨日の平民。ルイズ様をどこにやった！！」いきり立つ使用人の男

「そういえば、お前の顔覚えているな。一昨日痛めつけてくれた糞野郎か。めんどくせえ。消えろ」日本の海に転送。周囲の顔が引きつる

「もう一度聞く。何があっただ」

「あ・・あの。殺さないで。私たちただの使用人なんです」メイドが命乞いをする

「質問に答えたら何もしない」隼人

「は・・はい。ツエルプストー軍が攻めてきているんです。もうそこまで。私たちみんな逃げようとしてて」

「そうか・・では聞く。ここに平民の家族が国家の反逆者として連れてこられなかったか？」

「え・えっと、私は知らないんですが」周囲を見渡す。皆も首をふる。本当に知らないようだ。

「最後の質問だ。公爵夫妻とワルドはどこだ」

「公爵様と奥様は軍を率いて出ていらっしやいますが、ワルド様はカトレア様を連れて外に・・」

窓から外をみる。ピンクの髪をした美女とワルドが馬車に乗り込もうとしていた。

「わかった。お前らは好きにしる。瞬間移動」一瞬で姿が消える隼人。

「カトレア嬢。馬車にお乗りください。私が手綱を取りましょう」ワルド

「でも・・あの子たちが。私が餌をあげないと。それにお父様やお母様が」

「・・今は御身のことだけ考えください（この非常事態に動物だと？うつつとうしい。単身で逃げるか。しかし後のことを考えると・・）」

強引に馬車に乗せて、発進するワルド。
しばらく進むと、いきなり馬が消えた。

「な・・・なんだ。まさか・・」ワルド

「一昨日ぶりだなヒゲのオツサン。自分達だけさっさと逃げてお楽しみか。反吐がでるぜ」隼人

「・・もう来たのか。さすがだな」

「シエスタの家族はどこだ。」

「フツ 教えてもらいたいなら『召喚』なに??？」

いきなりワールドが持っている杖が消え、隼人の手元に現れた。

「これは・・・なんだ!!!!!!」

「これでお前は魔法が使えない。もう一度きく。シエスタの家族の場所はどこだ。地面に手をつけて土下座して答える。答えが遅れると、次は片手を召喚してやる」残酷な笑みを浮かべる隼人。

(懐に予備の杖があるが、取り出し呪文を唱えるのに時間がかかる。これは言うことを聞いて、エア・カッターで・・・)

「あの家族は王宮の部隊が拘束した。トリステインにいるだろう」とワールド

土下座しながら小声で呪文をとなえるワールド

「もう用はないな。オクルーア」一瞬で姿が消えるワールド

「ワリイなおっさん。バレバレだぜ。俺も実戦で土下座してテレポ―トするよう先生から学んだんでな。お前はあっさり殺すの面白くないから、特別に某国におくってやるぜ。死ななかったことをあっちの世界で感謝するんだな」

某国

「エア・カッター…ん？」土下座の姿勢からすばやく予備の杖を抜いてふるワールド

しかし、何も魔法が発動しない。

「ここはどこだ??？」周囲は見慣れぬ服装の人。

周りはやけに殺気立っている雰囲気。

・・・一週間後、持っているものすべてを奪われ、裸で路上に寝転がるワールドの姿があった。

勝利

ヴァリエール領

隼人は侵攻してきたアドルフたちと合流していた。

「そうか、シエスタ君の家族はここにいなかったのか、まあ、君が無事でよかったよ。」アドルフ

「心配かけてごめんな。助けにきてありがとう」隼人

「なに、こつちも君がいなくなったら困るんだ。何度でも助けてやるよ。それに、君は可愛い従姉妹のダーリンだしな」アドルフ。

親愛の情が伝わって来る

「それはそうと、面白いことがあったぞ。ツエルプストーに帰ったら報告するよ。それじゃ帰るか」

なにか考えているアドルフ

「・・・隼人、君はジープとトラックと人数全部のほかに荷物が増えなくても転移できるか？」

「余裕だぜ」

「んじゃ、行きがけの駄賃にヴァリエール家の財宝でも持って帰るか」

「その話、乗った。でも使用人には・・・」

「任せとけて。手出しするような奴はいないさ。」

・屋敷中を回って美術品・宝石・金貨を集める。宝物庫には山のような財宝があった。

「ウホッ いい感じ!!」アドルフ

「お前しっかりしているよなー。それじゃ行くところか。宝は皆で山わけだ」

ウォーーーーーっと思気が上がる。皆大喜びだ。

転移により一瞬で皆の姿が消えた。

ヴァリエール公爵が馬を全力疾走させる。従う兵の数は少数。直属の騎兵のみである。

「間に合ってくれ・・・皆」

屋敷近くの平原にたどり着く。あまりの惨状に絶句する。

「なんだこれは・・・わが領の防衛にまわした精鋭部隊が・・・全滅だ
と？」

殆どが銃で撃たれて息絶えていた。馬や幻獣の死体も転がっている。

「カリン。返事をしてくれ。カリン - - - - -」

虚しく愛する妻を呼ぶ。しかし返事はない。

「公爵様、これは・・・」公爵夫人の騎獣であるマンティコアの死体が見つかる。

数箇所に銃弾を受けて死んでいた。

「まさか・・・」死体を取り除けると、その下には変わり果てた妻の姿があった。

「許さん・・・絶対に許さん。ツエルプストーめ。トリステイン全軍を率いて滅ぼしてくれる」

妻の死体にほお擦りしながら復讐を誓う。

ヴァリエール屋敷

「なんだ・・・誰もいない。どういうことだ」

公爵と部下が屋敷内を探索。人っ子一人いない。

「飾られていた美術品も軒並み奪われています」

「宝物庫も空になっています。借金証書や手形、預金証書などの有価証券も軒並み・・・」

「そんなものはどうでもいい。カトレアは？」

「・・・しばらくして

「カトレア様発見。外の馬車に隠れていらっしやっただようです」と報告があがる。

「おお、カトレア。無事だったか・・・」

「はい、お父様。しかし、ワールド様が・・・」

「ああ、何があったかは後で聞こう。今日はもう休みなさい」
使用人がいないので、部下を使って死体を埋葬し、その日は休むことになった。

「・・・（明日は王宮に参上して、この惨劇を報告し、宣戦布告といこう。絶対にツエルプストーリーは許さん）」

ツエルプストーリー領にて。

「隼人の救出とツエルプストーリーの勝利を祝って、乾杯」ローランが乾杯を取る

その日の夜は盛大な戦勝パーティが開かれ、兵士達にもヴァリエール家の財宝が分配される。

誰もが祝い喜びあっていた。

「シエスタは無事？」キュルケ

「ああ、日本の叔父さんの家に預かってもらっているよ」

「そう。よかったわ。最近じゃあの子がいないとつまなくなってきたのよね。そうよね。タバサ？」

「口いっぱいにご馳走をほおばって話せないタバサ。首をフルフル。」

「・・・隼人は私だけの騎士。キュルケは侍女。シエスタは魔女」

「あなたも言うようになったわねえ」楽しそうなキュルケ。

隼人は考える

「明日になったら一人で王宮に乗り込んでやる。絶対シエスタの家族も助けるぞ」

玉座（前書き）

今から最悪の話を書きます。非難軽蔑どんどこいいます。

玉座

戦勝会があつた日の次の朝、隼人はこつそりとツエルプストー家を抜け出した。

そのまま、王宮の謁見の間に転移する。

「さて、これからどうするか・・・さすがに早いからここには誰もいないか」

謁見の間には誰もいない。豪華な玉座があるだけである。

「しかし、この玉座ってム力つくよな。なんでこんなに偉そうなんだろ?」

蹴ったり座ってみたりする。

「そうだ・・・思いついた。やるならとことんやらないとな。ケツケツケ」

妙な笑みを浮かべる隼人。

王宮付きのメイドの朝ははやい。謁見の間の掃除は毎日である

「さ、今日も頑張つて綺麗にしましょう・・・ん?」

メイドは若い少女であつた。この国の一番権威がある部屋の掃除を任されていることに強い誇りをもっている。

ドアを開けて最初に見たものは、奇妙なものだつた

「えっと、あの肌色で割れているのはなに?なんかぷりぷりしているけど?」

肘のところに足をかけて向こうを向き、背もたれに抱きつく形で尻を出して、なにやらしている隼人

「ブリッ ポト カサカサ」白い紙が玉座に投げ出される

「ふーっ すっきりした。次はこつちだな」

「えっと、あなたは何をされているんでしょう?」メイド。

「ちょっと待ってね。すぐ終わるから。シャーーツ」液体が玉座にかかる。

メイドは硬直。あれは何？ソーセイジ？先からでる液体は？

「はい。終り。そんなこつちを見ないでよ。照れるじゃん」いい笑顔で話しかける隼人

硬直しているメイドに話しかける隼人

「それで、下衆王女とアホ宰相はどこにいるの」隼人。

「へ・・・」

「へ？」

「変態ーーーー！！！！！！」メイドが叫ぶ。騒ぎを聞いて人が集まってきた。

「どうしたんだ？」メイドの絶叫を聞いて、駆けつける魔法騎士隊

「この人変なんです！！！！！！」

「なんだ貴様は！！！！！！」

「ソウダス ワタスが変なおにいさんです。変なおにいさん だから変なおにいさん。脱糞ダー！！！！」

妙な踊りを踊る隼人。

「いや、人生で一度はやってみたいよね」

玉座の惨状を見た騎士が激昂する。

「き・き・き・き・貴様・なにをしておる」

「いや・・・用を足す場所わかんなくてさwとりあえずそこで代用しようとおもって。これでも考えたんだぜ。洋式方式じゃケツに付くし」

「クロス」

「はい、さよなら。君たちの行き先はアトランティスだよ。『オクルーア』」5人いた騎士隊が消滅。

メイドは一目散に逃げ出していた。

「しょーがないな。まあ、ここで待つてりゃそのうち来るか。ちょっと臭いけどw」

しばらくして、大挙して現れる騎士団。

「貴様!!!」

「いーから下衆王女かアホ宰相よんでこいつての。何回事かと言わせるんだよ。『オクルーア』」

勇猛で知られたマンティコア隊隊長が消える。

「お前も消えたいのか？ああん？」もはやただのヤンキーである。

「何事ですか???あ、あなたは!!!」アンリエッタが騒ぎを聞きつけて現れる

「おつラッキー。お前から来るとはな。『召喚』」

玉座の上に転送させる。そのまま鳩尾に一発。くずれ落ちるアンリエッタ。持ってきたロープで縛り上げる。

「ケツ。お前の玉座はそれがお似合いだ。さて、木偶騎士隊さんたち。アホ宰相を呼んで来い。お前らの大事な女王様が人質にとられましたってな」

「なにを!!!」切りかかってくる若い騎士

「もうバカの相手してらんねーっての。『オクルーア』」

ようやく、絶対になわなない相手だと理解し始めた騎士隊。どの顔にも恐怖が貼りついていた。

現状が理解できないアンリエッタ。

「なぜこんなことをするのですか・・・って臭い。まさか」

「クソまみれの玉座にようこそ」

「い・・・いや・・・」

「」

逃げようとするアンリエッタ。玉座にしっかりと縛り付けられて動けない。

「おやおや女王様。玉座から逃げ出してはいけませんよw」

この時の隼人はまさに外道であった。

玉座（後書き）

やっちゃんいました。皆さんすいません。

対談

トリステイン王国 王宮内

この日は朝から前代未聞の出来事に、城中が大騒ぎになった。

朝からいきなり城に現れた賊に玉座を汚され、一騎当千の騎士が消され、女王が拘束された。

マザリーニ枢機卿の元に報告が入り、対処に追われることになった。

「・・・それで、様子は」

「女王陛下は大変恐怖され、現在取り乱されていらつしやいます」

「現在、騎士隊による救出作戦を立案中ですが、隊長を含む多数の消滅により混乱中です」

「賊は宰相閣下を呼べと」

「・・・わかった。その前にマリアンヌ母后殿下にご報告申し上げます。時間を稼ぐように」

マリアンヌ母后の部屋

「・・・以上のような状況です」マザリーニ

「そうですか・・・。」

「これから賊の下に向かいます。おそらく、私も彼奴に消されるでしょうが、女王陛下は必ずお助けします」

「いや、私も共に参りましょう」

「しかし・・・危険です」

「あなたが仰られた様な者なら、王宮内のどこにいても危険なのは？」

「・・・確かにそうですね」

謁見室

「しかし、時間を稼ぐばかりでちっともきやしないですね。アンタ見

捨てられたんじゃ？」隼人

アンリエツタは絶賛う　こまみれ中である

「女王である私に、ここまで無礼を働くとは・あなたは恐ろしくないんですか？」

「なにが？」

「私は女王ですよ！！」

「う　こまみれの玉座にすわった女王が怖い??」

「いいから、この縄を外しなさい。そうすれば、命だけは助けても・
・・」

「アンタ本当に頭悪いな。ルイズと同類だわ・おつと」

天井が外れて騎士が降りてくる。オクルーアで消す

「これで6回目か・・あ何人消せばアホ宰相はくるのかね。いっつそ王宮ごと消そうか」

「この悪魔・・いや、悪魔でも貴方に比べれば慈悲ぶかい・・」

「アンタ等にとっては鬼でも悪魔でも結構。しかし、こんなバカが国のトップ?これじゃまともな政治なんかできんわw」

そのとき、マザリーニ枢機卿とマリアンヌ母后が入ってきた。

「これは・・なんとという有様だ。」

「おお・アンリエツタ。」

「来てやったぞ。何が望みだ。」マザリーニ

「あんた等が連れて行ったシエスタの家族、今すぐここに連れて来い。話はそれからだ。10分以内にな」

「・・・わかった。あの家族は牢に入れてある。」

部下に命じてシエスタの家族を牢から出して連れてくるよう命じるしばらくして、傷つきつかれきった様子 of 家族が来る

「婿殿・・」「お兄ちゃん」

「かわいそうに・・こんなに傷ついて。とりあえず、ツエルプストーで休んでください。オクルーア」

一瞬で消えるオルムー達。隼人はやっと安心した。

「ツエルプストーだと？お前はゲルマニアの者なのか？」マザリー二。

「違うね。俺はハルケギニアのどこの国にも属してない。敵と味方があるだけだ。お前等が俺の敵に回ったにすぎない」

「貴方の望みは叶えました。アンリエッタを解放しなさい」マリアンヌ

「まあいいだろう。こんな糞娘など話し合いの対象にもならん。」ロープを消す隼人

転がるようにアンリエッタは母親の元に逃げ出す。

「女王陛下をすぐにお風呂に」侍女に命じるマリアンヌ。

「さて、お二人さん。話し合いといこうか。ここは臭いから別室でな」

別室にて

隼人はルイズに召喚されてから、自分が受けた仕打ちを話した。

「以前、俺にちよっかいかけたら容赦しないってお前に言ったよな。無視した結果がこれだw」

「くっ・・・だが、お前のような危険な存在を野放しにはできぬ。政治を預かるものとしてはな」

「笑わせる。なら、なぜ頭を下げて話し合いにこないwツエルプストーは俺と話し合い、お互いに認め合って、俺の自由を認めた。その結果、危険どころか巨大な武力と利益を手に入れた。これが文明国の対応ってもんだ。お前等は無能だから勝手におびえ、力でなんとかしようとし、結果、状況がわるくなっていくだけだ。卑怯な人質作戦など相手を怒らすだけ。失敗したときのことを考えもしなかったのか？俺の忠告を守りさえすればそれ以上争いが起きなかったのに、明らかなお前の判断ミスだ。そんなこともわからず、安易に最低の手段を使ってくるから、お前等の頭はレベルが低いってことなんだ。そんなのが貴族だと威張りくさっているから、6000年も未開な野蛮人のままなんだよw」

「玉座に粗相をするような者が文明人だと？」

「玉座に粗相された程度でそこまで頭を沸騰させるからお前等は野蛮人なのさw」

お互いに睨みあう二人

「……それで、貴方は何を望みなのです？」マリアンヌ

「俺の望みは人質の解放。これはもう達成された。あとはお節介だな」

「お節介？」

「魔法という刃物を振り回し、平民を奴隷扱いする貴族という名の強盗を退治する。正義の勇者にふさわしいだろ？」

「我等貴族は強盗などではありません。民をまとめ、導く存在なのです。魔法は始祖から与えられた神聖なものです」

「ほう。では、なぜここまで平民が苦しむ世をつくる？なぜ魔法を罪のない平民に向ける？口先だけのお題目など意味がない。だいたい、アンタは先代王の王妃なんだろ？17の小娘に政治を丸投げして贅沢している場合じゃないだろう。世間知らずの小娘に権力など日本じゃ狂気の沙汰だぞ。」

「……」

「まあ、そんな事はどうでもいい。貴族が平民を虐げるなら、俺が貴族を虐げるまでさ。自分が被害者に回ったときに自分の今までしてきたことを棚に上げて相手を悪魔だの非難してくる存在を、卑怯者というんだ」

そのとき、使用人が入ってきて、ヴァリエール公爵の訪問を告げる

「待たせておけ」マザリーニ

「ふん。叩きのめされて国に頼りにきたんだらう。普段誇りだのなんだの言っておきながら、都合が悪くなると虎の威を借るか。」

「……どうあっても我等に敵対すると？」

「何をほざく。召喚した俺をいきなり殺しかけて敵対したのはお前等だ。そのくせ、お前等が俺を味方にしようと提供したのは、薄汚

いマント一つ。俺がそんなに安い存在だと思うのか？」

「では、どうしろと。公爵位でも望むか。それとも王位か？」

「う　こまみれの玉座に座らせられるなど何の罰ゲームだ？そんなものはいらん。敵対してほしくないなら敵対しなければいい。すでに敵対しているのなら、償いをして今後は敵対しないと誠意を示せ。」

「・・・わかった。今後はお前に敵対しない。誠意も見せよう。」

「ふん。どうだかな。どういった誠意を見せるか、楽しみだ」

マザリーニは立ち上がり、壁に立てかけられている鏡を外す。中に騎士が杖を握り締めて様子をうかがっていた。

驚く騎士「宰相閣下??？」

「行け。もう必要はない。お前達もだ」部屋に潜んでいた騎士が退出していく

「これが誠意か？」

「敵対しないということを行動でみせた。次は誠意を見せる」

「どうやって？」

「その中に入っている。マジックミラーになっっていて中の様子が伺える。公爵への対応でお前への誠意を見せよう。」

「ふん。どうするかみてやるぞ」

誠意

ヴアリエール公爵を招き入れる前に、いくつか指示をだすマザリー二。

「わかったな。ぬかるでないぞ。それでは公爵を呼べ」

部屋に入る前に呼び止められる公爵

「失礼ですが、杖をお預かりされていただきます」

「無礼な。公爵たる私に向かつて」

「どなたも例外はありません。宰相閣下と母后殿下の命でございませす」

「ふん。鳥の骨ごときの命なら聞きはせんが、殿下の命ならいたし方あるまい」杖を渡す公爵

部屋の中に入っていった。

「・・・というわけだ。わが領が卑怯なツエルプストーにより蹂躪された。即刻宣戦布告を要求する」

「そんな・・・カリンが死ぬなんて・・・」泣き崩れるマリアンヌ

「母后殿下、わが妻のために高貴なる涙を流していただき、ありがとうございます。亡き妻の無念、晴らすためにぜひ私に力をお貸しください」

「落ち着かれよ。しかし、なぜこの時にいきなり攻めてきたのかな？」

「逃げ出した使用人を捕らえ、話を聞きだしたところ、かの悪逆な使い魔とツエルプストーが手を組んでいたのだ。あの使い魔が怪しげな武器をもたらし、正々堂々と戦った我等をだまし撃ちした。許すわけにはいかん」

「だまし撃ち?????」

「正面から布陣したわれらに向かい、名乗りも挙げずに銃で乱射し

た。戦いの作法もわきまえぬ野蛮人どもが!!」

吐き捨てるようにいう公爵

「・・・それで、被害状況は？」

「・・・我等は妻カリンを始めとするメイジ軍が全滅。相手側の被害は・・・皆無だ」苦しそうに言う公爵

「なんと・・・烈風」カリン様でも、一人の敵を倒すこともできずに殺されたのですか。・・・それで、我等に同盟国たるゲルマニアに攻め込めと」

「相手が一方的に攻め込んできたのだ、同盟など戯言にすぎん。こちらから国を挙げて奇襲すればあのような武器など取るに足らん」しばらく考えるマザリーニ

「それで、話の発端となった使い魔については？」

「無事に奴に首輪をつけたとこまでは上手くいったのだ。ところが、いつの間にかルイズをさらい逃げ出した。その後、ツエルプストーと共にわれらの財宝を略奪し消えたという。まったく下衆な平民らしいわ」

「・・・わかりました」鈴をならし、部下を呼ぶ

「・・・公爵に元帥杖を」

「おお、わかつてくれたか。我が指揮をとり、にくきツエルプストーを滅ぼし、ゲルマニアを征服してくれる。そしてあの使い魔は人間として生まれてきたことを後悔するほど拷問をかけてやるわ」狂気の表情で笑う公爵

マザリーニやマリアンヌは、どこか冷めた表情をしていた。

「元帥杖をお持ちしました」騎士数人が入ってくる

「おお、感謝する」元帥杖に手を伸ばす公爵。

しかし、いきなり屈強な騎士数人に組み伏せられ、拘束される

「これは・・・なんだ。どういうことなんだ」

「今朝、件の使い魔が王宮に現れ、騒ぎを起こしたのです。我等は隊長を始めとする10人の精鋭を失い、あまつさえ女王陛下を人質

にとられました」

「卑怯な!!!」

「その後、我等側の人質と交換となり、マリアンヌ母后殿下と私と三人で対談しました。彼はいつでも王宮に入り込むことができるうえ、騎士の強さなどかわりなく消滅させることができるといいました。いや、その気になれば王宮そのものを消せると。彼一人で一国の軍に匹敵する力を持っているのです。そのうえツェルプストーと組み、カリン様を一方的に殺せる異世界の武器を持つ軍隊まで持つ。とうていかなうことはできません。」

「・・・マリアンヌ殿下。貴方は妻を殺した卑劣漢に組するのですか？」

「・・・カリンの死は確かに悲しいです。しかし、ここで彼に敵対すれば、もっと多くの人命が失われるでしょう。私はアンリエッタが成す術もなく辱められるのをこの目でみました。母として、母后としてこれ以上危険を招くわけにはいきません」

「・・・くっ」

「私は彼に敵対をやめ、償いをし、誠意を見せると約束しました。元はといえばルイズ嬢のくだらぬ非道からはじまったこの争い、これ以上拡大させて国を滅ばすわけにはいきません」

「・・・私をどうするつもりだ」

「ヴァリエール家は改易。長女エレノール嬢とカトレア嬢は幽閉、ルイズ嬢は隼人殿にお任せする。そして公爵閣下、貴方は国のための礎となつてもらおう。・・・これが私達のみせる精一杯の誠意だ。貴殿に対する無礼は報いを受けさせた。これ以上の敵対する理由はない」

「ふふ・・・なかなか面白い誠意だ。いいだろう。トリスティン関係のごたごたはこれで終りだ」

鏡の後ろから出てくる隼人

「・・・貴様・・・」睨みつける公爵

「自業自得だ。さっさと刑を執行してくれ。それで全部終りだ」

「わかった。」

「貴様もいつかは裏切られる。覚えておくがいい・・・」呪いの言葉を吐いて、公爵は連行された。

「負け犬の遠吠えだな。これで敵対する理由をなくし、元凶を処分することで誠意をみせた。さて、償いは？」

「我等が危害を加えたあの家族に5万エキュー。そして迷惑をかけた貴殿に、王宮勅使の立場を認めよう。立場は平民ながら、貴殿の要求にはすべてこたえないといけない義務を貴族に課すことになる。今後は不快に思うことがあれば、我等が対処する」

「ふむ。シエスタの家族も5万エキューの侘び料があれば、ツエルプストーで新しい生活ができるな。また王宮勅使とは要するに水戸黄門の印籠みたいなものか。だが、う　こまみれになった女王陛下のお気持ちはどうするのかな？」

「私が教育しましょう。女王といえども、平民から報いがかえってくることもある。心の底から反省させます」マリアンヌ

「ふむ・・・面白い。確かに誠意を見せてもらった。これからはトリステインもわが味方だ」

胸をなで下ろすマザリー二とマリアンヌ。

ギロチンにて処刑されようとしている公爵。

「くっ・・・さあ切るがいい。貴様を永遠に呪ってやる」公爵

さすがに目の前で首を切られる光景というのに隼人は嫌悪感を感じる

「ちよつと待った・・・オクルーア」公爵をアトランティスに送る隼人

「どうした、貴殿に対しての誠意を実行するところだったが」マザリー二。

「俺は日本人なんで、生で首切られるのを見るのはゴメンだ。公爵はある場所で餓死してもらおうさ」隼人

「ふむ・・・まあいいだろう。これで処刑は終了だ」、

その後、公爵は騎士たちと一緒にアトランティスをさまよい、一週

間で餓死することになった。

しかし、このことがルイズに思わぬ影響を与えるのである。

誠意（後書き）

ラストを少し変えました。感想にて指摘されたので、ルイズには自力でアトランティスを脱出してもらわなくなったので。

脱出（前書き）

前回「誠意」のラスト変更しました。

脱出

脱出

アトランティスにて

数百万の意識にもてあそばされるルイズ。正気こそ保っていたが、心を貝のように閉ざしていた。

確かにヴァリヤークは邪悪な存在ではない。愛情を向けられることもある。かわいがられることもある。

しかし、それはどこまでもペットを見るような一方的なものであった。

ヴァリヤークから聖戦のことを知識として伝えられたが、ルイズはかたくなに拒否していた。

そんなある日、数百万の意識の中でたった一つ、確かな愛情を向けてくれる魂と出会った。

「ルイズ・・・ルイズ。私のかわいい娘」

今までのような贗物ではなく、真実の愛情がこもった声

「あなたは・・・」意識をその魂に向ける

「ルイズ!!!」魂とつながった瞬間、彼の知識が流れ込んできた

「お父様？お父様なのね。ああ、どうしてここに」ルイズが精神世界で涙を流す

「ルイズ・・・たとえこのような場所であっても、生きていてくれてよかった」公爵の魂は言う

伝わってくる情報。母カリンの死。姉達の幽閉。そして・・・使い魔によって父がこの世界に送られ、餓死したこと

父の苦しみが直接伝わってくる

「なんて・・・なんてことなの。」悲しみに心を震わせるルイズ
ヴァリヤークの一部の意識があざ笑う

「あんたたち・・・あんたたちなんかは、何がわかるものですか!!」

「！！！！！！！！！！」

怒りの意識が高まる。答えが返ってくる。お前の父も我等が一部。わかるともと。

「私は・・・私は、あんた達なんかには負けない。そして、必ず隼人に復讐する！！エクスプロージョン」

ルイズのあまりの怒りに魔力が反応し、精神世界に爆発が広がる。内側から破壊されるカプセル。

ルイズは自力で戒めから脱出した。

塔の中をさまようルイズ。ヴァリヤークの意識体がついてくる。

「お前は生身だ。体を維持するには、あの培養カプセルに入っているしかない。餓死したくないなら戻れ」

「いやよ。あんた達の慰みものなんて二度とゴメンだわ」

「しかし、どうする。この世界は虚無の力で封印されている。脱出するのは無理だ」ヴァリヤーク

「なら、あんたたちはどうしようとしたのよ。私の力が聖戦に必要だから、わざわざ生かしておいたのでしょ？」

他の人は餓死するまでほうっておいたのに・・・お父様も・・・涙ぐむルイズ。

「それは・・・」ヴァリヤークの意識体の姿が変わる。ヴァリエール公爵の姿になった。

「お父様」ルイズが抱きつく。しかし、手ごたえが感じられない。

「私は彼らの一部になっている。彼らの知識も手に入れた。こちらだ」と案内する

そこにはルイズの身につけていた物があつた。杖・服・財布そして水のルビーと始祖の祈祷書

「水のルビーをつけ、始祖の祈祷書を開け。必ず道は開かれる」

祈祷書を開くルイズ。文字が浮かぶ

「世界扉、？」

「そうだ、この世界からハルケギニアに直接戻るための唯一の方法

封印を打ち破り世界を移動する虚無の魔法」

「お父様・・・ありがとう」

「しかし、ハルケギニアに戻っても、我が家はすでに改易されている。ここにいてくれたほうが」公爵

「大丈夫。きつと姉さま達を助ける。聖戦を達成して、お父様も助ける。そして・・・隼人に復讐もする」ルイズ

「そうか・・・小さなルイズよ。お前はもう子供ではないのだな。気をつけていくがいい。『世界扉』ならここに帰ってくることも可能だ。

私という魂の一滴が入ることによって、ヴァリヤークはお前の味方ともなった。ヴァリヤークの遺産を使えるのはお前も同じ。私も全力でお前に力を貸そう。」

ヴァリヤークの姿が元の黒い霧に戻る

「我等にとつて聖戦さえ達成されれば、どちらに味方してもよい。いくつかお前が有利になるアイテムを授けよう」

たくさん指輪・宝石等が渡される

「ふん。あんた達なんか助ける義理はないけど、お父様を助けるために、聖戦に協力するわ」

「楽しみだ・・・ふふ」

ルイズは『世界扉』の呪文を唱える。ルイズの姿が消えた。

脱出（後書き）

千晶のパパさんのご指摘により、前回のラストを変えて、ルイズが自力で脱出するようにしました。彼女も敵役として強大な力を得ないと隼人に対抗できないので、ヴァリヤークを味方につけました。

無限

王宮にて

アンリエッタは嘆いていた。あれから、玉座に座るたび不快な思いをする。

どれだけメイドが綺麗にしようが、あのことを思い出すのである。それに、護衛の騎士も頼りにならない。いつ、あの下劣な悪魔が目の前に現れるか不安でたまらない。

母から厳しく言われ、マザリーニは言うことを聞かない。幼い頃からの知り合いであるヴァリエール家の姉妹は理不尽に幽閉され、親友のルイズは行方不明。

「ふふ・・飾り物の女王など、確かに何の恐れもたないわね・・」最近、ワインの飲む量が急激に増えた女王であった。

コンコン

「なにかしら・・」ベランダの窓を叩く音がする。しかし、姿は見えない。

「??誰もいないの??」警戒するアンリエッタ。

「姫さま・・私です。ルイズです」ルイズの声がする。

「ルイズ、ルイズなの?姿を見せて!!!」ベランダを開けるアンリエッタ。

すると、何者かの気配が部屋に入る。

「お久しぶりです。姫さま」なにもないところから、ルイズの姿が現れた。

「ああ、ルイズ。私のお友達」「姫さま・・」

二人は抱き合って、涙を流した。

「そうですか・・封じられし大陸。ヴァリヤーク。そして・・公爵

の死」アンリエッタ

「はい。今の術はマジックアイテム『偏光の指輪』にて、姿を消しました。」

「そうですか．．．ルイズ、私は貴方に謝らないといけません。女王とは名ばかり。ヴァリエール家を守ることにもかなわず、姉妹に等しい方がたを幽閉され、信頼していた枢機卿はあの悪魔に服従。なんとわびれば．．．」

「気にしないでください。父とは向こうで会えました。私はなんとかしてでも家族を救い、聖戦が終わればあの悪魔を殺します」

「聖戦ですか？」

「はい、父の魂を救うには、どうしてもそれが必要なのです」
考えこむアンリエッタ・

「こうなれば、ロマリア皇国を頼りましょう。貴方の姉妹も、出家の名目でロマリアに保護してもらうようにできるはずです。そしてルイズ、私にはもはや味方がいないのです。新たな名を名乗り、力を貸していただけないでしょうか。マザリーニ枢機卿の手に落ちつつあるこの国を救い、ヴァリエール家を再興させ、再び誇り高き伝統の国トリステインをとりもどしましょう」

「はい、微力をつくささせていただきます。」二人は抱き合う。

数日後、若い女官として、常に女王に寄り添う少女が王宮内に見られるようになった。

フェイスチェンジで顔を変えたルイズである。出自が問題になったが、アンリエッタが押し切った。

「彼女はわが忠実な友です。彼女の言に逆らうものは、その場で首にさせていただきます。わが友セイバーハーゲンに従いなさい」

「しかし．．．」

「彼女にかなうものなど、貴方方の中に一人もいません。実力を疑うなら束になって試してみれば？ たった一人の平民を抑えることもできない貴方方騎士が頼りにならないからこそ、彼女を側近にした

のです」「アンリエッタが笑う。

いきりたった騎士が試合を申し込む。

少女はすべての指に指輪をはめていた。4本の指輪が輝く

「極風の指輪発動 偏在」10人に増える

「極水の指輪発動 ブリザードグングニル」無数の氷の槍

「極地の指輪発動 アースクエイク」大地が震る

「極炎の指輪発動 ボルケーノ」地面が溶岩に満たされる

「ば・・ばかな。4系統スクウェアなど、存在するわけが・・」恐怖に震える騎士隊。

「ふふ・・見事です。セイバーハーゲン。これなら、あの悪魔でも・・」

アンリエッタの顔にも狂気が浮かんでいた。

その後、各地の有力貴族が、女王の側近を名乗る彼女の訪問を受けた。ある者は一族皆殺しとなり、ある者はほとんどの財産を供出させられた。

ヴァリエール家の改易により動揺していた貴族達は、力によって王家に従わせられ、

トリステインは再び結束を取り戻した。

女王の側近の無慈悲で強大な魔力をもつ女

いつしか「無限」のセイバーハーゲンとして恐れられるようになった。

三姉妹

トリステインにて

「出る」騎士に追い立てられる二人。

ヴァリエル―家長女エレノールと、次女カトレアである。

「私達をどこにつれて行こうとするのですか。私はともかく、妹は・
・カトレアをかばうエレノール。」

父の消滅と母の死、ヴァリエール家の突然の改易、自分達の幽閉と、可愛がっていた妹の行方不明。

ここ10日のうちに暗転した運命を思い、処刑されるのと思い震えている。

「とにかく、こちらに。安心してください。ロマリアに移されるだけです。」と女が言う。

王宮では見たことのない女の発言に、少し安心するエレノール。

「しかし、妹は体が弱くて・長旅には耐えられません」

「ご安心を。道中治療をいたします」女

「あなたは・・・？」

「こちらは女王陛下の筆頭女官、セイバーハーゲン様だ。陛下から全権をゆだねられている方だ。」

お前等ごとき囚人がとやかく聞いていい方ではない。言われたことにしたがっておればいいのだ」

高圧的に命令する騎士。

その時、鋭い音がして、騎士が倒れ付した。

「お黙りなさい。貴方こそ何様のつもりですか。きいたふうな口を叩くでない。痴れ者！！」

「も、申し訳ありません・・・お許しを」鞭で叩かれ、許しをことう騎

士。

エレノールとカトレアは、なぜかこの女が誰かに似ているような気がした。

「この者が失礼をいたしました。お詫び申し上げます。まず・・・ご母堂のお墓参りをされてから、

ロマリアに行つて頂く予定です。道中、私も同行いたします。ご安心を」

墓参りのくだりのところで、少し声が震えた気がした。

「・・・わかりました。お任せいたします」エレノールとカトレア。

ヴァリエール領

近くの平原に埋められている死体。カリンの墓もそこにある。

「お母様・・・ああ」泣き崩れるカトレア。それを励ますエレノール。

何故かセイバーハーゲンも跪き、祈りをささげていた。

夕方についた一行。屋敷にて宿泊する。

屋敷は一応の清掃がされ、エレノールやカトレアも自室を利用できることとなった。

夕食後、セイバーハーゲンが使用している、元のルイズの部屋に呼び出された二人。

セイバーハーゲンがロックとサイレントの魔法をかけ、三人だけになる。

「この度のご好意、お礼の言葉もありません。我等の立場を憂いてロマリアにて保護していただけるとは」エレノール

「もはやこのトリステインもヴァリエール家にとって安住の地ではありません。ロマリアにいらっしゃった方が安全です」

「重ね重ねありがとうございます。そして・・・御用とは？」

「まず、お約束であった治療をさせていただきます。カトレア様、

こちらに横になっていたきたい」

ベットに横たわるカトレア

「それでは、治療を始めます。ん・・・」

指の極水の指輪が光る。全身を光がつつみ、癒していく。

「これは・・・」

「究極の水の治療魔法です。死者すら死んでまもない時なら蘇生が可能です。これでちい姉さまも・・・」

「ちい姉さま・・・あなたはまさか・・・」エレオノール。

一時間ほど光に包まれるカトレア。光が収まったとき、全快していた。

「まあ・・・体が楽になったわ。息も苦しくない。これは・・・」カトレア。

「よかった・・・ちい姉さま。」セイバーハーゲンが抱きつく。少しずつ姿が崩れ、ルイズの姿があらわになった。

「ルイズ、ちびルイズ・・・心配させて!!!」カトレアに抱きつきながら、エレオノールに頬をひっぱられるルイズ。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい」と泣きじゃくるルイズ。しばらく三人の時間が続いた。

「・・・そんなことがあったの。それでお父様とお母様は・・・ルイズの話を書いて嘆く二人。」

「私はこれ以上家族が傷つくのは耐えられない。元はといえば私があの悪魔を呼び出したせいなの。」

命を賭けて聖戦を果たし、お父様の魂を救い、あの悪魔を滅ぼすわ。それまでロマリアにいて」

「ちびルイズ!!!いくら力を手に入れても貴方は子供。一人で何ができるの!!!」エレオノール

「そうですね。私たちもお手伝いしますわ」カトレア。

「でも・・・いたた!!!」また頬をひっぱられるルイズ。

「いつから言い返せるほどえらくなつたのかしら??？」
「いひゃいひゃいひゃい」いつもどおりの反応に、エレオノールは胸の中で安堵した。

「・・・あの、それで、お母様に最後のお別れをしようと思うの。だから二人にも来て欲しかったの」ルイズ

「「最後のお別れ??」」二人は怪訝そうな顔をした。

ルイズははめている指輪を見せる

「これは？」

「「相心の指輪」というヴァリヤークの遺産の一つ。相手と心をつなげることができるわ。たとえ死者とでも。これをお墓の前で使えば、まだ魂が大いなる意思に同化してなければ、お話ができるはず」

「・・・すぐに行きましょう」とエレオノール

カリンの墓の前

ルイズが呪文を唱えると、カリンの姿が浮かび上がった。

「「「お母様」」泣きながら墓にすがりつく三人

「もう一度貴方達と話せるとは・・・嬉しく思います。皆、私の力が足りないばかりに、辛い思いをさせました」

「「「いいえ」」

しばらく話をする四人

「ルイズ・・・母はいつまでも見守っています。ただ一つの忠告です。平民の武器は侮れない。注意するのです」

自分の死の間際に何があつたかを話すカリン。

「はい・・・お母様。絶対に油断しません。安らかに眠ってください」ルイズ

「エレオノール、カトレア、ルイズを頼みましたよ・・・」

少しずつカリンの姿が消えていく。三人はいつまでも見守っていた。

皇国

ロマリア皇国にて

前もって連絡が入っていたので、入国はスムーズだった。

トリステイン国の貴族が出家することと、出迎えが来る

「はじめまして。ロマリア皇国助祭枢機卿ジュリオ・チエザーレと申します。光の国ロマリアによろこそ」

月目の美少年が挨拶する。

「このたびは、私たちの保護を引き受けていただき、誠にありがとうございます。エレオノール

「なに、高貴な方々が、神の栄光を支える兄弟になるのです。喜ばしいことです。」ジュリオ。

「それではこちらでございます」女神官がエレオノールとカトレアを案内した。

「さて、それでは、トリステイン筆頭女官セイバーハーゲン殿。いや、我等が兄弟と言うべきか。教皇様がお待ちです」

「兄弟？」

「はい。貴方は私達の兄弟と呼ぶべき存在なのです。他の兄弟もその時に紹介させていただきます」

ジュリオが右手のルーンを見せる

「それは・・・わかりました。私も教皇のお慈悲にすがりたいことがあります」ルイス。

「なんでもご遠慮なさらずに。では、兄弟として。大変だったね。ルイズ嬢」ふふつと笑うジュリオ

「・・・何でもお見通しつてわけね。ジュリオ殿。」

「ああ、実はかなり前から君たちを見ていたんだよ。この度のことは我等にも責任がある。」

なんでも力になるよ。おいで。他の兄弟にも紹介する」

「・・・わかったわ」

聖ルティア聖堂会議室にて。

「はじめまして。わが兄弟を。私は教皇エイジス三十二世 ヴィック
トリーオ・セラブレと申します。以後よしなに」

「はじめまして。サイト・ヒラガと申します。聖堂騎士隊に所属し、
聖下の護衛を勤めています」

黒髪黒目の少年。彼を見たとき、あの異世界からの悪魔を思い出し
た。

「はじめまして。ティファニア・オブ・モードと申します。女司祭
として聖下にお仕えしています」

金髪の美少女が自己紹介する。

「・・・トリステイン女官 セイバーハーゲンと申します」

「あえてルイズ殿と呼ばせていただきます。我々兄弟の間には遠慮
は無用です。」

「その前に・・・事情はご存知でしょうか？」

「はい。貴方がもつとも危険な使い魔を呼び出し、大変な目にあわ
れた事も。事情を察しながら止められなかった我々をお許しくださ
い。」

「私は、もはや家も両親も失った身。望みは聖戦と、あの悪魔への
復讐のみです。そのためにはなんでもします」

「心情ご察しいたします。しかし、聖戦の成就までは・・・」

「・・・わかっております。聖戦にはあの悪魔の力が必要なことも。し
かし、彼は私がルイズと知ると、その場で襲い掛かってくるでしょ
う。聖下や皆様方には、ルイズは病にたおれ、その死に際にセイ
バーハーゲンという者に虚無の力を移したということにしていただ
きたいのです。」

「・・・承知しました。我等は貴方の味方です。聖戦が終わった後、
彼を倒すお力添えをすることを約します」

「ありがとうございます・・・聖下」跪くルイズ。

「大変でしたね。私も両親をなくしました。ここにいる間は、本当の兄弟のように思ってください」ティファニア。

「あんな酷い奴、同じ国の男として恥ずかしいです。聖戦がすめば、俺も始末を手伝います」サイト。

「・・・みなさん。ありがとう・・・」涙ぐむルイズであった。

「なるほど・・・封じられしアトランティス大陸。そして我等がマギ族の宿敵ヴァリヤークがそのようなことになっているとは」教皇
「もはやヴァリヤークは魂だけの存在。アトランティスを召喚しても、魂が拡散し輪廻転生するだけで無害です。そうなれば、わが父ヴァリエール公爵の魂も救われます。そして、私は虚無の力のほかに、遺産も手に入れました」とルイズ
いくつかのマジックアイテムを見せ、その効果を説明する。

「これは・・・面白いですね。では、これからルイズ嬢、いや、セイバーハーゲン嬢にもロマリア皇国司祭の資格を与え、私の代理としてすべての貴族を説得していただきましょう。聖戦のために」

「わかりました。すべての虚無の力を集めてみせますわ」ルイズ。

この後、トリステイン女王と教皇の代理人として、聖戦に協力するよう、ガリア・ロマリア・ゲルマニアの貴族を取り込んでいくルイズ。

隼人に対する包囲網は確実に作り上げられていった。

革新

トリストインから帰った隼人。シエスタを家族と再会させ、感謝された。

そして、1年が平穩に過ぎた。

オルムーとシエスタの兄弟は受け取った5万エキューを元にツエルブストー領内で新しく村を開拓。ブドウ栽培を再開した。タルブ村からも何人が移住し、地球から持ち込んだ葡萄を試験的に栽培。各種のワインを開発している。

その間、何度も日本から物資と人を運んだ。その結果、ゲルマニアが激変した。

人材の面では、日本で職をなくした年長の技術者などを何人も運び、技術指導者とした。

日本では旧式となった技術でも、ハルケギニアでは最先端の技術であった。

日本からどんどん人・物・知識が流れこみ、発展していくゲルマニア。

資源面においては、日本の調査専門会社に依頼、ゲルマニアの領土内を調査したところ、

いくつかの炭鉱を発見、発電所建設の目処がたった。

また、石炭から錬金で石油を精製する技術を確立し、日本から運ばれてきた大量の自動車のガソリンをまかなうことができた。

経済面では、錬金によって生み出される金は水銀から効率よく錬金

することにより、ほぼ無限の資金を『平民』にもたらした。また、その他の材料も、殆どが錬金で生み出すことができた。その資金と日本からの輸入品で、影響力をますます強めていった。

軍事面では、日本側の輸出態勢も整い、旧式ながら武器の輸入も進んだ。それを元に兵器の生産に乗り出している。すでに数万の連発式の銃が配備され、平民を中心とした軍隊が編成された。

指揮官は自衛隊の退職者を採用し、近代式戦闘方法を取り入れ、従来のメイジを中心とした軍は衰退していった。

技術面では、すでに産業革命は起こっていた。

自転車は量産体制にはいり、ゲルマニアに普及していた。

今取り掛かっているのは自動車の生産である。馬車を生産していた職人達に技術を教え込み、旧式の自動車の開発を目指す。本格的な生産にはまだ日数がかかるが、5年以内に生産ベースに乗る予想だった。

流通面では、トラックなど自動車が多量輸入され、また冷凍技術により劇的に流通が効率化。鉄道の建設もはじまった。

農業の面では、化学肥料の導入により、飛躍的に生産量があがる農業。

必然的に人手があまり、農家の次男三男は軍隊に入るか、新興工業地帯で工員となった。

経済を発展させるため、彼らに十分に給料と社会保障を完備。購買力をつけ、

新たな購買層を作った。彼ら向けの商品が生み出され、ますます豊かになっていく。

政治面では、新しく出来た都市部においては、平民の自治が認めら

れはじめた。

旧来の貴族が治めている土地は田舎扱いされ、人口の流失が著しくなった。

あわてた貴族の一部が、引きとめのため平民の優遇を行い、地位向上につながった。

そして、日本側にも変化をもたらしていた。

未だ異世界との交易は非公開であったが、秘密を守ることを条件に失業者を大量に雇用し、

ハルケギニアに移住させ仕事を与える。

雄二が経営する会社「タケダ」はその交易を一手に引き受け、莫大な利益を上げていた。

その利益を元に無数の会社を傘下におさめ、所有している技術をハルケギニアに輸出。

その見返りの金の流入により日本の景気も上昇し、長い不況から脱しかけていた。

日本での無為な生活や、トリステインでの殺伐とした生活が嘘のように、隼人は毎日充実して生活をしていた。

ツエルプストーに帰ってから、毎晩三人が迫ってくる毎日である。

三人が牽制しあう。

「もういい加減にしてくれよ・・・このままじゃ・・・毎日4　なんて

・隼人

「なにかしら？ふふ。体が持たない？」「キュルケ。わかっててからかっている。

「いい加減諦めてください。平民は平民同士がお似合いなんです。父も隼人さんを婿としてみとめています」シエスタ。

「・・・私ももう平民。母からも認めてもらっている。隼人には責任とってもらおう。」タバサ。

ずっとこんな調子で、ある意味生き地獄な隼人であった。

しかし、裏では危機が迫っていることを、隼人たちは知らなかった。

一年

ロマリア皇国

周辺の都市国家をルイズの力で完全に支配下におく。聖戦のための準備として、統一軍をもつようになっていた。

ガンダールヴの力で、ロマリアが何百年も溜め込んでいた、場違いな工芸品の使用方法を教えるサイト。それにより、戦車や銃を扱える、特別な騎士団「聖戦士」を設立。サイトがその騎士団長となり、聖戦の切り札的存在となっていた。

そのサイトを支えるティファニア。二人は恋人同士として周囲にも知れ渡っていた。

二人を見るたび、ルイズはせつなくなつた。

「もしかして・・・彼のような人が使い魔になってくれていたら、こんなことにはなつてなかつたのかしら・・・」
今のルイズにはワルドもない。姉妹以外にはなかなか心を開けない。

彼らをみるたび、もう自分には支えてくれる人はいないのだと孤独を感じていた。

トリスティン王国 魔法学院

魔法学院は閑散としていた。原因は日々不穏になる情勢に、子供を引き上げる貴族が多くなつたからである。ルイズによる力を背景とした、王国からの圧力の強化。要求される金額。課せられる軍備。貴族は平民からの搾取を強めたが、平民からギルドを通して王宮勅使である隼人に訴えられると、問答無用で貴族が罰せられる。結局板ばさみになり、自分の財産から持ち出すか、それができないと破

産して没落貴族になるものが続出した。

「・・・そろそろ、僕等もトリスティンを見捨てることにするよ」
「ジオア。」

皮肉なことに、貴族の凋落に伴い、ジオアのギルドの売り上げも減っていった。

「どうするの？うちも最近さっぱりなのよね」
「ミルト」

「タルブ村も最近、人が新タルブ村にどんどんいつちやってるのよねー。復興もなかなかできないしさ。お父さんも意地はらないでツエルプストーに行けばいいのに。頭固いんだから」
「ルノー。」

「まあ、僕等は隼人のコネもあるし、あつちは人手不足もいいところだ。いくらでも仕事はあるよ」
「ジオア」

「そうよね。ゲルマニアって超好景気だし。日本からもいろいろ入ってきているのよね。私からも両親説得するわ」
「ミルト」

「わたしも、新タルブ村にいこうかなー。あつちじゃ普通に日本のお菓子売ってるんだから。`こんびに`なんて便利な店もできたみたいだし」

「まあ、身の振り方を考えてたほうがいいぞ。そろそろきな臭くなりそうだし」
「ジオアは『平民』から得た情報をあたりさわりなく伝えた。」

「おつ、お前等そろってんな。何はなしてんだ？」
「マルトー親父」
「そろそろトリスティンを見捨てようかなって。ゲルマニアにいく相談ですよ。隼人もいるしね。」

「そついや伝えてなかったな。俺もあと3ヶ月で辞めるんだ。厨房のやつらと一緒に日本にいつて学んできた料理と今まで貯めた金でゲルマニアで食堂でも開こうかってな。日本で`れすとらん`ってのみで、参考になったし」

「それがいいですよ。`かれー`とか`らーめん`、なんてのはこつちじゃ作れる人いないし」

「あはは。平民にとっては今がチャンスかもな。いい時代になりそうだし」

後の世で、ジオアは商社、ミルトは衣料メーカー、ルノーは菓子メーカー、そしてマルトーは大手チェーンレストランのオーナーとなる。

モンモランシ伯爵領

「お呼びですかお父様」モンモランシ伯爵家長女、モンモランシーも実家に戻されていた。

ただでさえ領地経営の失敗で借金を抱えており、王家からの多大な要求にこたえきれず、破産寸前であった。

「うむ・大切な話があるのだ。」部屋の中には両親がいた。

「魔法学院を中退させてしまつて、本当に申し訳なくおもう。が、わが家の現状はしつておるな？」苦しげに言う伯爵

モンモランシーはうなづく。名門貴族とは名ばかり、貧乏な状況を知っている彼女は自分で香水や秘薬を売って小遣いを稼いでた。

「はい・・もはや、どうにもならないのですね・・」

「そうだ。ただ、一つだけ方法がある。どうせこのままでは領地を没収され、伯爵位も剥奪される。下手をすれば借金のカタにすべて奪われ、奴隷に落とされるかもしれん」

「お父様・・その方法とは？」

「うむ・・我等の借金をすべてまとめて持つておる商人ギルドがある。借金をすべて帳消しにする用意があるといつていた。担保にとられてる財産もかえしてくれるらしい。」

「条件は？」

「爵位と領地を自主的に王家に返上し、ゲルマニアに亡命すること。人を治療することを目的としたギルドを設立しているので、モンモランシ家の秘薬の製造方法と、その家臣団の治療技術を提供しることだ。ある意味、我等の命ともいえる魔法を売りわたすことになるが、もはや他に道はない。平民となつてしまつが、名を捨て実

を取るしかないだろう」

「平民ですか・・いたし方ありません。このまま没落貴族になってしまふよりマシです。もはやこの国に未練はありませんし。」モンモランシー

彼女は平民になってしまふことに屈辱を感じているが、同時にどこかほっとしていた。

アルビオンにて

ガリア王ジョゼフは、その居城をアルビオンに移していた。

もとのガリアには娘であるイザベラを代理としておいて、軍、政治、財政機構の殆どの移転がこの一年で終了していた。領地はすべて直轄地で、領地を持つ貴族はいない。

アルビオンはそのおかげで復興がなり、景気も上向いていた。

その代わりにガリアは半ば見捨てられたような状態となり、容赦のない搾取にさらされていた。

誰もが大国を放置して小国に引きこもるジョゼフを、無能、臆病、とあざ笑い、ゲルマニアに亡命しているシャルロットとオルレアン公夫人を王として迎え入れようという意見が高まっていた。

だが――

「ふっ 小人もがさわいでおるわ。愚かにもそんなに大地にしがみつつか。そうしていられるのもあとわずかなのに」ジョゼフ

「所詮、何も知らぬ愚か者ども。事が始まれば、泣き喚き、空を羨望の眼差しで見上げるしかないものを」シェフィールド

「苦しむ者どもを神のごとく見下すか・・余が起こそうとしていた大戦など、これからくる大厄災に比べると子供の遊びにすぎん」

すでにアルビオンには、ガリアの総力が結集されているといっても

過言ではなかった。

かれらにとつてガリア国など、必要なものを搾り取ったのこりカスに過ぎない。

笑いあう二人。そこに耳の長い美男子が入ってきた・

「くだらんな・・同族の苦しむ姿がそんなに楽しいか」エルフからの使者。ビダーシャルである

「ふふ・・楽しいとも。わずかとはいえ心がゆれないこともない。少なくとも苦しくはないな。」

これから起こることをビダーシャルから聞いたジョゼフは、アルビオンを侵略し、完全な支配下に置いた。そうしておいて、安全な立場からゆつくり見物するつもりである

「お前達エルフも、自らの安全のために厄災を放置するのであろう。余と同類だ」

「くつ・・我等にも事情はある。それと、約定をわすれるな」

「いいとも、これほど面白い見世物を安全な立場から見物できるのだ。聖戦などには参加せん。」

地上が1000年の地獄に苦しもうとも、放置してやるさ」

笑うジョゼフ。シエフィールドは無表情に二人を見ていた。

新領土

アトランティス大陸 世界をわたる塔

「それで、ルイズは自力で脱出したのか。今はどうしているのかな」
隼人

「我々は『世界扉』でハルケギニアに帰っていくところまでしか知らんな」

ルイズにも肩入れしたという情報をシャットアウトして、隼人と情報交換するヴァリヤーク。

世界を渡る塔には、隼人以外にもたくさん人間がいた。日本人である。

日本政府は、`タケダ`を通して、アトランティス大陸にも拠点を作っていた。

「聖戦」の目的がアトランティス大陸をハルケギニアに引き戻すことであることを
隼人から聞き、無人のうちに押さえておくつもりである。

知識の部屋をつかえば、ハルケギニア言語と文字を一瞬で習得できる。

ハルケギニアにわたる日本人は、まずアトランティスに来て、知識の部屋で基本的な知識を知ってから移住する。

おかげで移住に対しての困難はかなり減少し、希望者はどんどん増えていった。

日本政府により、アトランティス大陸の調査が進み、広さは日本の80倍、アフリカ大陸に酷似していることがわかってきた。

方々に資源調査をして、豊富なレアメタルや鉱物資源、原油の存在が確認された。

現在、渡りの間から日本にいくゲートは、`タケダ`の所有する倉庫に固定され、隼人の能力なしで往復が可能になっていた。

各都市にゲートを作るべく、日本とアトランティス、日本とハルケギニアをつなぐゲートの開発の研究も進んでいた。

ヴァリヤークから知識を得た研究者達が、魔法理論を解析中であり、数年後にはアトランティスの各地にゲートをつなげられるメドがたっていた。

「ハルケギニアに召喚されれば、おそらく地球でいうアフリカと同じ位置に出現するだろう」とヴァリヤークが分析。

その情報をもとに準備が進められていった。

かなりの数の自衛隊がアトランティスに配置された。

日本では、`タケダ`による資金援助を受けた政党が政権を奪取。

聖戦が達成してアトランティスがハルケギニアに召喚され、二つの世界をつなぐゲートの技術が確立したら、国民に新領土として公開される手はずとなっていた。

すでにかかなりの人数がハルケギニアやアトランティスに渡っているため、ネットではすでに噂になっていたが。

世界を渡る塔を中心に、すでに街が出来ていた。

『新都』となづけられた都市。自衛隊員、研究者、資源開発会社の社員など多数がすむ街。

隼人は新しくできた町をあるきながら、自分が歴史に残る事業をし

ていることを誇りに思った。

災厄

始まりは突然であった。

ガリア南部の火竜山脈。

ガリアとロマリアを分ける大山脈である。

突然、巨大な音がした。驚いて飛び出す近くの村人
信じられない光景が浮かんでいた

「なんだ・山が・山が・浮かんでいく」
それに連れて地面が震える

「大変だ・みな、逃げろー」
近隣の村は地震により、壊滅した。
たまりに溜まった風の精霊の力が結晶し、巨大な風石をつくり、火
竜山脈を浮かしたのであった。

トリステイン王国 旧モンモランシ伯爵領 ラグドリアン湖
以前から湖の水量が増えていると報告があったが王国は何も手を打
てずにいた。

「まったく、王国は税だけとって何もしてくれやしねえ。俺の畑も
水没だ。これからどうすればいいんだ・」

苦悩する農民たち。新しくきた代官は見回りにもこない。
農民はこれからのことを話し合っていた。

その時、ゴーツという巨大な音がした

「なんだ・」湖を見に行く

「ば・ばかな。」

今までとは比べ物にならないくらいの洪水が起こっている。流れて

きた大量の水に飲み込まれる農民。近隣の村は洪水により壊滅した。

ロマリア皇国の南端。マンペイの町

ここはポスニオ山のふもとにあり、港町として古くから栄えていた。その日は朝から小刻みに地震が起こっていたが、市民普段どおりに生活していた。

突然、ポスニオ山が噴火をし、火山弾が街に降り注ぐ。

「ばかな・・・この街ができて3000年、ただの一度も噴火などしたことがなかったのに・・・」

逃げ惑う市民。その時、溶岩流が流れてきて、すべてを燃やし尽くした。

マンペイの街は噴火により壊滅した。

ゲルマニア首都、ヴィンドボナ

皇帝アルブレヒト3世は最近機嫌がよかった。

国内の景気は上昇し、平民や貴族からの支持も厚かった。

日本から届いた珍しい菓子を食べながら、政務を執り行う。

突然、体が重くなったような気がした

「なんだ???グッ・・・これは・・・ギャー」

徐々に重くなる体。床に倒れる皇帝。骨が折れる音がベキベキと響き渡る。

周囲の者も同じ状況であった。やがて、屋根が崩れ落ち、皇帝は瓦礫の下敷きとなって死んだ。

街もあらゆる建物がつぶれ。人がその下敷きになって死んでいく。

ヴィンドボナは高重力によって壊滅した。

ロマリア皇国

「くっ・・・とうとう大災厄が始まってしまいました」ヴィットーリオ

「これまで聖戦の準備をしてきましたが、未だ4の4はそろわず。

これからどういたしましょう」「ジュリオ。

「やむを得ません。直接交渉に行きましょう。今の状況を知れば、必ず手を貸してくれるはずです」

「ゲルマニアの隼人は力を貸してくれるでしょう。火のルビーの持ち主も提供してくれるでしょう。」

しかし、ジョゼフ王は・・・？彼はこの事態を見越して、いち早く安全地帯を手に入れました。高みの見物を気取るつもりでしょう」

「そのことについては・ゲルマニアの説得に成功してから考えましょう。我等兄弟、全員でかかれば、

ジョゼフ王にも対抗できるかもしれません」

「彼がどうしても我等に協力しなかつたら？」

「やむを得ません・・・どれだけ犠牲を払っても、彼を殺して新しい担い手にかかけましょう」「ヴィットーリオ

ずっと黙っていたルイズが発言する。

「まず、私を使者として、彼に派遣してください。彼の真意を問います」

「しかし・・・危険です」

「いえ、私には、相心の指輪^{レム}があります。必ず彼を説得してみせます」

「・・・わかりました。お任せします。サイト殿、彼女の護衛をお任せできますでしょうか？」

「任せてください。守りきってみせます」

「私もルイズと一緒にいきます。アルビオンは私の故郷ですし、私の虚無の力もお役に立えます」ティファニア。

「わかりました。私とジュリオはゲルマニアに行きます。気をつけて」

5人は二手に分かれ、それぞれの目的地に出発した。

アルビオンにて

玉座にすわり、遠見の筒で地上の様子をうかがうジョゼフ

「これは・・・すごいものだ。人がゴミのように死んでいく。まさに地獄だ」

「わが主、貴方様こそ真の王でございます。地上の屑どもは貴方を伏し拝み、この地に入れて欲しいと

這いつくばるでしょう」

「ふふ・・・だからといって受け入れる義理はないな。余の娯楽のため、そのまま死んでもらおうか」

「この精霊の暴走が収まるまで1000年はかかるだろう。その間、一人も受け入れぬのか？」 ビダーシャル

「さあな。我が手を下したわけでもなし。彼らは自力でなんとかしてもらおう。クッククック」

「イザベラさまから、指示を問う鷹便がきておりますが」

「ほぅっておけ。もはやガリアなどどうなってもよいわ。」

笑うジョゼフ。この惨事をみても涙一滴流れない自分の心を忌みながら。

脅威

ゲルマニアにて。

首都が壊滅したゲルマニアで、『平民』では、今後の対策を協議していた。

「幸い、かなりの機能をツエルプストーに移していたから、致命的なことになっていないが・・・」

「我々11人委員会の委員も6名が本部壊滅と一緒に死亡した。」

「資金は充分にある。軍備は万全だ。これを機に、貴族を駆逐し、共和制国家にしたらどうか？」

「今はそれより、精霊の暴走を抑えることに力を注ぐべきでは・・・さまざま意見がでて、まとまりを欠く。」

「今は争っている場合ではありません。ゲルマニアの分裂はなんとしても避けるべきです」ローラン

「幸い、食料他必要物資は日本から輸入できます。この機会にゲルマニアを共和制に移行させましょう」テツジ

同調する意見が増える。

「採決をとる・・・ゲルマニア統一意見が多数だな。それでは、軍をうごかそう」

ツエルプストーから連発銃を装備した軍隊が、ジープやトラックに乗って派遣された。

もともと『平民』に借金をしていた貴族は、免責とともに領地を『平民』に差しだし、無抵抗で下った。抵抗する貴族もいたが、圧倒的な戦闘力をもつツエルプストー軍の前に滅亡した。

一ヶ月でゲルマニア全域を平定。『平民』は発展的解消をとげて新政府となり、国名をゲルマニア共和国と変更した。

初代首相はローラン・ヒットラーが就任。貴族特権の廃止、奴隷制度廃止、平民の権利をみとめた新憲法の発布を行った。生き残った他の委員やテツジ、日本からは雄二などが議員として参加し、平民議会も開かれた。

そんなある日、ロマリア皇国から、教皇ヴィットリオと助祭枢機卿ジュリオの訪問があった。

聖堂騎士隊の護衛に守られながら、首都である元ツエルプストー領、現ベルリンの街を馬車で移動する二人。

「これは・・・いったいどういったことでしょう。馬がいなくても動く馬車が走っています」ヴィットリオ

「ゲルマニア軍の装備・・・杖をもったメイジがないことはないですが、殆ど銃をもっています

建物も立派であり、平民達の身なりも立派です。しかし、貴族はどうしたのでしょうか？」ジュリオ

「あちこちにマントをきた人はいますが・・・なぜか汚れて見えますね。中には路上に転がっている者も・・・」

見たこともないモノで溢れているベルリン。二人は少しずつ不安に駆られはじめていた。市民の聖堂騎士隊を見る目が、尊敬の眼差しというよりは、道化者でもみるようなものになっている。

聖堂騎士団の前をよぎった子供に、騎士団長カルロの怒声が響き渡る。「無礼者。聖下の御前を横切るとは。別国の者とはいえ、その無礼ゆるせぬ。そこへ直れ。手打ちにする」

必要以上に高圧的になるカルロ。彼も市民の視線の違いに気がついていて。

その声が響き渡ると、群集から石が飛んでくる

「なにが聖下だ。貴族を今までのさばらせてきた腐れ坊主が。人の国にきて何を威張ってやがる」

「お馬さん乗って騎士ごっこか。格好いいつもりか。ダサイぜ」
激昂するカルロ。子供を切りつけようとす。その時、ダンツと銃声が響き、カルロが乗っている馬が倒れる

「何をする！！！」喚くカルロ。聖堂騎士団も騒ぎ立てる

「何をするのはこちらの台詞だ。国賓なら礼儀を保て。われらが国民に危害を加えるなら、容赦はしないぞ」

警備をしていたゲルマニア軍の隊長が諫める。怒りに顔を赤く染めたカルロ。

今までこのような屈辱を与えられたことはなかった。今まで聖堂騎士団といえば誰からも尊敬され、どんな要求も民は答えた。それはロマリア以外の国でも通用したのである。

「ゲルマニアの野蛮人が。礼儀を教えてやる」杖をとりだし、斉唱する騎士団

ザツ と周囲の兵士が銃を抜いた。「馬を狙って一斉射撃。打て」
ダダダと銃声が響く。騎士隊の馬は全頭が即死した。

あまりの威力に詠唱を止める騎士団

「何の騒ぎですか・カルロ。ここはロマリアではありません。自重しなさい。」ヴィーットリオ

「申し訳ありません 聖下・くつ。お前達、覚えておれ。いつか必ず目にモノをみせてくれる」カルロ

「ふつ それはいいが、聖下の馬車の馬までしんだぞ。お前等が人力で引くがいい。野蛮人にふさわしくな」隊長

「この平民が……」

結局、騎士団が全員で馬車を引き、街を回る。杖を持った貴族が汗だくで車を引く姿をみて市民達は、大いに笑った。

「これは・由々しき事態です。聖戦が達成されても、このままではマギ族が……」

馬車の中で苦悩する教皇。今までは聖戦の達成以外に何も考えなかったが、平民の台頭というまったく別の脅威が出てきたのだ。

「ジユリオ・・聖戦の後のことまで考えないといけませんね。我等は今の社会秩序を保つ必要があります。貴族や神官が辱められる社会を招いては絶対にいけないのです。そうなれば、遙か昔にヴァリヤーグに虐げられた暗黒の世が再び到来してしまいます」

「ええ・・私もこのハルケギニアを守るためには力を惜しみません」
周囲からくる侮蔑の視線に耐えながら、二人を乗せた人力の馬車はすすんでいった。

交渉

ゲルマニア共和国 首相官邸

「はじめまして、ゲルマニア首相、ローラン・ヒットラーと申します。なにやら道中で警備兵と悶着が合った様子。心からお詫びさせていただきます。自己紹介と侘びをいれるローラン。」

「いえ、こちらの騎士が最初に失礼をしたことが原因です。心よりお詫びさせていただきます」 教皇

「そういつていただけるとありがたいです。それで、早速ですが、今現在ハルケギニアを襲っている災厄についてのお話とか？」

「はい。この災厄は、精霊力の暴走によって引き起こされたものです。我等が始祖ブリミルはこのことを予期しておりました。聖戦を起こしてエルフから聖地を奪還し、4の4を揃え、災厄をはらうようにと」

「ふむ・・・」 考えこむローラン

「貴方方のよく知っている、ハヤト・タケダ殿も4人の使い魔の一人。ゲルマニアの戦力も聖戦に必要なのです。何卒、力を貸していただきたいのです」

「確かに隼人君は我々の友人であり、取引先でもある。しかし、独立したギルドのマスターであり、国の役人でもなんでもないので、強制は無理ですね。お口添えはできませんが。また、貴方がおっしゃられることが事実なら聖戦については協力しましょう。我々も建国したばかりで出せる戦力は限られています。」

「お願いします」 教皇

しばらくして、隼人とコルベールが呼ばれる

「はじめまして。ヴィットーリオ・セレヴァレと申します。ロマリ

ア皇国にて教皇位についております」

「はじめまして。ジュリオ・チェザーレと申します。ロマリア皇国助祭枢機卿です」

隼人たちも自己紹介をする

「・・・というわけで、ぜひとも聖戦に協力していただきたいのです」教皇が説明する

「・・・確かにこの災害を放置はできませんね。それで、聖戦をすれば、どのようなことが起きるのですか？」

ヴァリヤークから大体のことは知っていたが、あえて確認をする

「今起きている災害は、封じられた大陸取り戻そうとする精霊の力の暴走。封じられた大陸を門を開けて召喚することで、精霊力の暴走が収まるのです。」

「わかりました。俺は聖戦に協力します」

「私も協力しましょう。そして、長い間お預かりした、火のルビーも正当な持ち主にお返しします」

コルベールから教皇に火のルビーが渡る。

「おお、これで3の担い手、3の使い魔、3の秘宝、3のルビーが揃った。あとジョゼフ王の協力が得られれば、聖戦に入れます」

ハルケギニアの地図を見ながら、一堂が説明を受ける

「それで、聖地とは？」

「東方にあるエルフが住む地。ここを奪回し、聖地にて儀式をする必要があるのです」と説明

「聖地はどこにあるんですか？」隼人が聞く

「我々の調査では、この辺りの海上が、聖地と言われているようです。岩場があるので、そこで4つのルビーがそれぞれの精霊力を集め、4つの秘宝が術を発動し、4人の担い手が制御し、4人の使い魔が門を開けば、究極召喚魔法が発動します。」ジュリオ

「ふむ・・・エルフの都市を奪うのではなく、聖地だけを占領して、儀式だけを行えばいいと」

コルベールが発言

「ええ、しかし、そこに行くまでには必ずエルフの妨害が入ります。だからこそ、大軍が必要なのです」

「・・・わかりました。ゲルマニア軍については我等にお任せください」ローラン

「助かります。私達はガリア・トリステインについて軍の出兵を依頼します。」教皇

その後、教皇一行はしばらくゲルマニアに滞在した後、ロマリアに戻っていった。

アルビオンにて

ロマリアからの正式な使節として、ルイズ一行は入国をした。

周囲を竜騎士に護衛されながら、王都ロンディウムのハヴィランド宮殿に到着する。

「よくぞ来た・・・といたいが、何の用かな？」新アルビオン国王、シヨゼフ王。

隣には冷たい雰囲気的女性が立っている。

「はじめまして。ロマリア皇国司祭 セイバーハーゲンと申します」

「同じく、ロマリア皇国司祭 ティファニア・オブ・モードです」

「同じく、ロマリア皇国聖堂騎士 サイト・ヒラガです」

「ほほう。顔をあわせるのは始めてだったな。わが兄弟たちよ」

「・・・事情はご存知のようですね。では、単刀直入に申し上げます。苦しむ民のために、聖戦に協力をお願いします」セイバーハーゲン

「ふむ？苦しむ民というが、わが民はアルビオンのみ。別に何も困ってはおらんが？」

「陛下はガリアの王でもあらせられます。かの地の民は風石の暴走で、いつ空に舞いあげられるかおびえております」

「ふふ。別に空に浮かんだとて、暮らしていけぬでもあるまい。現にアルビオンでは生活できておるが？」

「風石だけではありません。他の精霊も暴走をはじめ、手がつけられぬ状況です」

「知らんな。この無能王はアルビオンのことで手一杯だ。他の国のことまで面倒はみられぬ。クッククク」
笑うジョゼフ。からかっている。

「・・・それでは、どうすれば協力していただけるのでしょうか・・・」
セイバーハーゲン

会話をしながら、相心の指輪を発動させる。
なんとか彼の心を知り、説得を果たそうとした。

「ふつ。そうだな・・・余の退屈を紛らわしてくれたら、考えてもよいぞ」

「退屈を紛らわす？」

「そうだ。王として手を組むには、それなりの相手でなくてはならん。ビターシャル」

隣の部屋から耳が長いエルフの男が入ってくる

「そのビターシャルと、ここにいる余のミュージズと戦ってみよ。勝てたなら、話を聞いてやってもいい」

せいぜい余の楽しみとなるのだな」

「くっ」デルフリンガーを構えるサイト。杖を出すティファニアとルイス

「ははは・・・存分に戦うがいい」

こうして戦いが始まった。

三者

アルビオン王国 謁見の間

サイトの前にビダーシャルというエルフの男、ティファニアの前にミューズという女がたちはだかる。

サイトに向かってビダーシャルが言う。

「おとなしく立ち去った方が身のためだ。蛮人の戦士。お前では私には絶対に勝てない」

「なにを！！俺は聖戦士団団長だ。お前などに負けるはずがない」
デルフリンガーで切りかかるサイト。空気がゆがみ、足を取られて転ぶ

「なんだ??」

「この場所の精霊はすでに私と契約済み。私にはもはや攻撃が通用しない」

「なにを！！」立ち上がり、切りかかるサイト、しかし、ビダーシャルの体の前に空気の壁のようなものがあり、
剣が押し返される。

「なんだこれ!!」

「相棒、ありやエルフのカウンターの魔法だ、あらゆる攻撃と魔法を跳ね返す先住魔法さ」

「先住魔法？」

「ああ、メイジが使う系統魔法より何倍も威力があるぜ。おれっちじゃ破れないな」

「我と契約せし火の精霊よ。命ずる。我が敵を焼き尽くせ」
ビダーシャルの手から炎が燃え上がり。火炎放射器のほうにサイトに放たれた。

間一髪でデルフリンガーに炎を吸い込む

「我と契約せし地の精霊よ。命ずる。礫となり、我が敵を撃ち滅ぼせ」

周囲の床がはがれて、石礫になり、サイトを打ち据える。

「いたた・・なんか手はないのかよ」鼻血を出しながらデルフリンガーに聞く

「ないこともないが・・虚無の嬢ちゃんたちも忙しいみたいだぜ」ルイズやティファニアもそれぞれの相手と相対していた。

ティファニアの前にたつシェフィールド

「はじめまして。私はジョゼフ様の使い魔で、あらゆるマジック・アイテムを操る「神の頭脳・ミヨズニトニルン」

貴方の相手をつとめさせてもらおうわ」警戒するティファニア。

「どうしたの？こないならこちらから行かせてもらおうわ。スキルニル・ゴーレム」

天井がわれ、2メートルほどの大きさの頑丈な甲冑を着た人形が降りてくる

「エクスプローション」ティファニアは爆発魔法を唱える。確かに爆発をしたが、小揺るぎ

もない。

「無駄よ。カウンターをかけた甲冑に、スキルニルの魔力で最強の騎士の経験と意思をこめたゴーレム。

どんな力を持つとうとも対抗できないわ」

ゴーレムに殴られ、壁に叩きつけられるティファニア。

人間そのもののスピードと動きで、反応することすらできなかった。拘束されるティファニア

二人の様子をみて、余裕の表情を浮かべるジョゼフ

「兄弟たちは苦戦中だな。お前は手助けをしないのか？」

「貴方の相手は私ですので」ルイズ

(はやく・・はやくジョゼフの心を探り、弱点を見つけないと)

「んん??これは・・なんだ」

「相心の指輪」により、ジョゼフとルイズの心がつながった

「ふふ・・余の心を読むか。よかるう。こんな空の心でよければ、いくらでも読むがいい」

(な・・なにこれ。この人の感情はまったく動かない。人に対しての愛情も憎しみさえもない。

ただ、なんでもいいから自分の感情を揺らしたいとだけ思っている。こんな人って・・)

まるで薄暗い砂漠に一人で放り込まれたような絶望がルイズに伝わってきた。

激戦

ビダーシャルに追い詰められるサイト。

何度も剣で切りつけ、持ってきた銃で撃つも、かすり傷ひとつ与えられない。

反対にサイトの体は魔法の攻撃により、ボロボロだった。

「くそ・・・このままでは殺される。何か打つ手は？」

「オレツちに虚無魔法ディスプレイをかけりゃカウンターを無効化できるんだがな」

しかし、ティファニアは離れた場所で拘束され、ルイズはぴくりとも動かない

「滅びるがいい蛮人の戦士。『虚空』」

サイトの周りが広範囲にわたって空気がなくなる。窒息し、必死でガンダールヴの力を全開にして逃げる。

（まてよ・・・声を出しているということは、空気は口に入っているのか。つまり、攻撃だと認識したもののみに届かないようにしているわけだ）

必死に体をうごかして魔法を避けるサイト

「どうした。逃げるならさっさとするがいい。」

（目はこつちを見ている。つまり、光が届くということだ・・・ならば）

すばやく腰に下げてした閃光弾を投げる

「なんだこれは・・・グッ」

パツと強い光が目に入り、視界を奪われるビダーシユル。目を押さえて身を屈める

「いまだ！！」

懐に飛び込む。口に銃口を差込み、引き金を引く。

パンっという音がして、ビダーシャルの脳天がぶちまけられた。

「驚いたね・・エルフを殺すとは。さすがにガンダールヴだけのことはあるか。でもこのスキルニルゴーレムはどうだい？」

2メイルある巨大なゴーレムが襲い掛かる。あわてて逃げるサイト。体制を立て直して切りかかるも、まったく通用しない

「ははは、そいつの記憶はアルビオン最強の騎士のものを入れてある。おまけに鋼の肉体に甲冑だ。さっきの手を使おうとしても目なんかないしね」

「くそ・・」

銃で撃つても効果はない。

「それでおしまいかい？・じゃあ・死んでもらうかね。まず足を折って逃げられないようにして・・」

サイトは転がされ、足を踏みつけられる

「ぐーーーギヤアアアアアア」

ミシミシという音がする。

「サイトさん！！！！」

必死に助ける方法を考えるテファ

(・・まっつて。記憶を入れる??だとしたら記憶を消したら)

「えい！！」虚無の呪文を唱え、ゴーレムにかける。すると、ゴーレムは動かなくなった。

「な！！」驚愕するシェフィールド

「貴方にも。私たちの『記憶』を消させてもらいます」

シェフィールドにも虚無の魔法をかける。

「わ・・わたしは？なにをしたの??」

おとなしくなるシェフィールド。

ジヨゼフの精神世界に入るルイズ

自分が殺したオルレアン公に対しての、異常なまでの憎悪。コンプレックス。そして・・愛情。

魔法ができ、人格も尊敬できる弟。自慢に思っ心。そして絶対にかなわない自分が兄だという引け目。

誰からも無能としてさげすまれる屈辱。

王として指名されたときには勝ったと思った。しかし、まったく嫉妬を感じさせない顔を見たとき、

人間として負けたと思った。打ちのめされた。

自分が玉座に座っても、誰一人王として認めず、傍らにたつ弟を誰も頼りにするだろうと思った。

暗く危険な思考が脳にはこびり、憎悪が募っていく。相談する相手もない。父もない。

とうとう、思い余って暗殺をしてしまった。しかも、自ら手を下した。

自分に刺されて驚愕の表情で死んでいくシャルル。死の瞬間まで愚かな兄を信じていた。

ジョゼフの心は壊れ、狂気に走っていった。

「ふふふ・小娘ごときが余の絶望に触れるか、さぞかし面白いことだ。発狂するかもしれんな」ジョゼフ

「ふふ・発狂などいたしません。これくらいの絶望を感じたことなど、何度でもありますわ」ルイズ

「なに？」

「貴方の絶望は充分感じました。次は私の絶望を感じていただけますか？」

ルイズから逆流する意識

「これは・・なんだ？？余の絶望を遥かに超えるとは・・」

数百万の意識に翻られた経験。伝わってくる悲劇。ヴァリヤークに見せられた記憶

封印後、アトランティスではまさに生き地獄が展開された。

餓死もあった。裏切りもあった。殴り殺された。焼かれた。

ありとあらゆる死の苦痛が伝わってくる

友人同士、親戚同士、兄弟同士、親子同士が生きるために争った記憶。

そして、もっとも恐ろしかったのは、6000年にもぼる永遠の幽閉だった。

『相心の指輪』の魔力を切るルイズ。精神世界から戻る二人

「ふふふ・・・余の絶望など、これに比べればありふれたものだったか。

しかし、絶望など見飽きた。余の心を揺らすことなどできん」ジヨゼフ

「では、どうすれば・・・」

「余の心を救うことはできん。シャルル以外はな。しかし、シャルルは死んだ。」

なおも心に絶望を抱えながら、シャルルを求めるジヨゼフ。その目は暗いままだった。

和解

アルビオン王宮

ジヨゼフ王と対面する三人

「では、オルレアン公と和解がなれば、協力していただけますか？」
ルイズ

「和解か・・・ふふ。シャルルがもしここにおっても心からの和解など今更ではしまい。」

自らを殺し、妻を狂わせ、娘を虐げる兄など・・・」

「我々の力があれば、オルレアン公ともう一度会うことはかないます。和解できるかどうかはお二人しだいですが・・・」

「戯言を・・・死した者との再会など」

「貴方はこの二人に勝てれば話を聞いていただけると。一度だけ協力していただけませんか？」

「ふふ・・・いいだろう。どうせ惜しい命でもなし。殺される前に茶番に付き合うのも一興よ」

「では、土のルビーと始祖の香炉のご用意を」ルイズ。

ルイズが水のルビーと始祖の祈祷書を。

ティファニアが風のルビーと始祖のオルゴールを。

ジヨゼフが土のルビーと始祖の香炉をそれぞれ用意する。

「これで3人の担い手・3つのルビー・3つの秘宝が揃いました。皆秘宝に触れてください」

ルイズの指示により、それぞれの秘宝に触れる

始祖の祈祷書に呪文が現れる。始祖のオルゴールが呪文を音としてティファに伝える。

始祖の香炉から匂いが立ち上り、それを通じてジヨゼフの脳裏に呪文が浮かぶ。

「これは・・・？」
「呪文を唱えてください。虚無の上級の中の中。`世界意識`」
ルイズがジョゼフに魔法をかける。ジョゼフの意識と、とてつもない巨大な存在の意識がつながった。

ジョゼフの意識が覚醒する。周囲はひたすら白い空間が広がっていた。

「これは・・・ふふ。話に聞いた天国とやらか。余は地獄に行くとももっていたがな」

「確かにここは死者の在るところ。天国や地獄という概念とは違うがな」

何者かが話しかける

「誰だ？」

「久しぶりだなジョゼフ。ここから常に見ておったぞ」威厳のある老人の声

「久しぶりです兄さん」聞きなれた若者の声

少しずつ周囲に人影が現れる。何百人・何千人もの影。

その影の先頭に、懐かしい二人の姿があった。

「父上・・・そしてシャルル・・・」ジョゼフ

あれほど揺れなかった心が、今は激しく揺さぶられていた。

「すまぬ。お前の苦しみを察しながら、王たるものの試練と放置して、死の間際になっても話ができなかった」先代ガリア王
先代ガリア王の記憶が流れ込んでくる。どれだけジョゼフに期待していたかを。

王たるもの、必要な能力は魔法の力ではなく、知恵と人望と精神力であることを。

それを鍛えるため、あえて貴族達の陰口を放置したことを。

それに自ら気づかせるため、父として励まさず、放置をしたことを。

「にいさん。僕を殺したことも、妻を狂わしたことも、シャルロツトを虐げたことも憎い。しかし、僕は兄さんにわびないといけない」シャルル

シャルルの記憶がジョゼフに入り込んでいる。

魔法ができる弟として優越感を持っていたことも。ジョゼフを無能とさげすんでいたことも。

そのくせ、ジョゼフの知能に恐怖を持ち、目の前では優しく従順な弟とふるまっていたことを。

そして、影でジョゼフの悪評を流し、裏金を使ってジョゼフを排斥しようとしたことを。

自らが王になれば、兄への嫉妬と恐怖をなくすることができると思じて。

しかし、父王にはすべて見抜かれていたことを、臨終の場で思い知らされ、必死に取り繕ったことを。

「お前がしたことは人倫においては許される行為ではない。しかし、王家においては何度も繰り返されたのだ」先代ガリア王

周囲の何千もの影の記憶が流れこんでくる。過去のガリア王家の記憶。6000年ガリア王家の裏の歴史を知った。

代替わりごとの骨肉の争い。何人も暗殺された王子。

双子として生まれ、それぞれ能力があったため、相打ちになった王子たち。それが原因で、ガリアで双子が

忌み嫌われ、どちらかを処分されるという悪習が残ったこと。

「そうか・・・ははは。」ジョゼフはいつしか涙を流していた。

「済んだことはもうよい。ここにいる皆も、王として、闇も醜さも背負っている。余も先々代の王の庶子を、兄弟を無実の罪で処分しておる」先代ガリア王

「このような魂だけになれば、恐怖も憎しみもどうでもよくなってくるんだよ。ただ、妻と娘だけは守ってくれないかな？王として。

義兄として。叔父として。それだけはお願ひしたいよ」シャルル

「ああ・・・お前も俺と同じように闇を抱えてたんだな。俺が恐ろしく、嫉妬を抱えていたんだな。俺がお前に思っていたように。それだけわかればもういい。すまなかつた・・・すまなかつた」
心の底からわびるジョゼフ

「我等の意識は今は一時的に活性化されているが、やがて、大いなる意思^①に溶け、記憶をなくした状態でまた生まれ変わる。その時地上が精霊力の暴走した状態だと、また余計な苦しみを味わうだろう。聖戦に協力し、世界を元の状態にするのだ。我等が同化せし大いなる意思はいつも見守っておるぞ・・・」

ガリア王の姿が消えていく。何千もの影も消えていった。

「兄さん・・・辛いだろうが頑張つて。地上を救うには、兄さんの力が必要なんだから・・・」消えていくシャルル。

「また行ってしまうのか・・・俺を残して・・・」ジョゼフの意識は遠のいていった。

気がつくと、虚無の担い手達に囲まれ、涙を流していた。

「どうやら・・・和解をされたようですね」

「ふふ・・・自らを殺した相手に妻や子や地上を託すとは。まったく、相変わらずのお人よしめ。また嫉妬しそうだな・・・」

素晴らしいながらも、晴れ晴れとした表情のジョゼフ

「いいだろう。聖戦とやらに協力しよう」

このときから、4の4が揃った最後の聖戦が始まった。

飛嶽

ジヨゼフへの説得が功を奏し、聖戦への準備は整った。
ルイズたち一行はジヨゼフとシエフィールドを伴い、ロマリア皇国に帰っていった。

一週間後、関係者が集まり、聖戦に関して会議が開かれる予定となった。

ゲルマニアからは、ローラン・雄二・隼人・コルベール、そして軍事顧問の元自衛隊将官が出席した。

ロマリア皇国に向かう船は、最新鋭機「飛嶽」

ジャンボ機の3倍以上ある超大型胴体を風石で浮かし、日本から提供されたジェットエンジンをつけ、垂直降下・空中停止も可能な、日本にもない科学と魔法の融合した飛行戦艦である。

武装も旧式ながらミサイルを取り付けられていた。

同系機も量産体制にはいり、聖戦後はゲルマニアとアトランティスを結ぶ輸送船の機能も果たす予定である。

「しかし、この船はいいですね。飛行船と飛行機のいいとこどりで。日本で使えないのが残念です。製作コストも安いし、発着陸のエネルギーが必要ないので、推進だけに燃料を使える。下手をしたらこの船で世界一周できるのでは？」元空自将 岡部正弘氏が評する。

「魔法制御部分はコルベール氏に協力していただけました。技術面では本当に助かっております」ローラン

「いえ・私など。日本の技術には圧倒されてばかりで恥ずかしく思います」コルベール

「何を仰いますか。風石などの魔法石は低コストの上効果が高い。

おまけにエコでもある。日本では技術の弊害がおき、環境汚染であわてて今頃エコを叫んでいる始末です。コルベールさんには、今後火石や風石で発電所なども期待しています。将来的には石油は化学衣料そのほかの原料のみに用途を限定されるようになればいいですな」雄二

「そうですね。コルベール先生は後世で発明王エジソンに匹敵するように尊敬されますよ」隼人

照れるコルベール。最近では徐々に多くの人を救う仕事をしているという実感がわいてきて、表情も明るくなっていった。

「そういえば、聖戦の作戦は？」隼人

「うむ。教皇達は陸軍で大軍隊を編成し、力押しのつもりだろうが、この船で一気に聖地に行つて、上空から儀式の間だけ君たちを長距離砲で守り、さっと撤収。基本的にはこう提案するつもりだ」正弘
「そのほうがいいですね。別にエルフの国を侵略するわけでもないですし」雄二。

「むしろ、アトランティス召喚のあと、大陸が海上に出現して落ちるわけだから、そっちの被害をなくすほうが問題だ。その対策はどうなっているのかな？」正弘

「アトランティスにいる日本の研究者が説明して、ヴァリヤークがあの土地に残っている精霊力をかき集めて対応するそうです。海上から海底に沈下するのに一ヶ月かけてゆっくり行つそうです」

「そうか・・・まあ、海にいる魚にとっては迷惑な話だろうけどな」一同が笑う。

「そろそろロマリア王国です」伝令がはいる。
特に誰もシートに座るなどする必要もなく、ゆっくりと垂直に降りていった。

ロマリア王国に指定された広場に下りる「飛嶽」

周囲の聖堂騎士団が騒ぐ

「これは・・・なんとおおきなフネだ。あの突起はなんだ。異端ではないのか？」

「ゲルマニアの野蛮人の作るフネだ。どうせハリボテであろう」「
ジユリオが出迎えにくる。」

「ゲルマニア共和国の皆様、ようこそ光の国ロマリアへ」
表面上は穏やかにふるまっていたが、このフネと護衛の平民達も
ついている銃をみて、内心は不安に震えていた。

ロマリアの街に行く一行。積んできた自動車を進む。

周りの聖堂騎士団の馬に合わせながらなので、非常にゆっくりである。

「しかし、この国は乞食と神官しかいないのかな？」隼人

「税率が9割を超えていますから・・・」ローラン

「・・・9割」「驚く日本人

「ええ、おかげで皆おおきな宗派の荘園に逃げ込む者、他国へ逃亡する者、逆に他国から来る者と混乱が続いているようですよ」

「最近では矛盾に気がついた新教徒という宗派もでて、平民にもつと厚く遇するようにと主張する者もいるみたいですが・・・弾圧されています」

「コルベールが暗い顔で言う。」

「これは・・・いくら貴族が支配しているといっても、酷すぎますね」

「ロマリア王国は貴族制の総本山みたいなものですからね。貴族であり、神官としての権利も持っていれば・・・」

「ふむ。地球の歴史では、大体この後に宗教戦争や革命がおこり、長続きはしない。聖戦には協力するが、その後までまともな付き合いができる国ではないな」雄二。

他の日本人も同じような感想だった。

対面

ロマリア皇国大聖堂

ゲルマニア一行は部屋に案内された。

「さて・・・会議が始まるまで、皆休んでおこう。これから大変なんだから」ローラン

それぞれ個室に入る。入り口にはゲルマニア兵が護衛に立った。

隼人も部屋にはいつて休もうとすると、ジュリオに呼び止められた。

「会議の前に、兄弟たちを紹介したいんだが、ちょっといいかい？」

「兄弟？」

「虚無の担い手と使い魔さ。一人は君と同じ国から召喚されたらしいよ」

「へへ。面白そうだな。それじゃいくか」

ジュリオに案内されて談話室に行く。そこには3人の同年代の少年少女がいた。

「どうもはじめまして。武田隼人といいます」自己紹介する隼人

そこには金髪の胸の大きい美少女。黒目黒髪の少年。そして、金髪で背が高い少女がいた。

何か睨まれている気がする

「ほら、皆も自己紹介して」ジュリオ

「・・・ティファニア・オブ・モードです。」金髪巨胸の少女が頭を下げる

「・・・平賀才人だ。聖堂騎士「聖戦士隊」隊長をしている」黒髪の少年。ずっとこちらを睨んでいる。

「・・・セイバーハーゲンよ。ブリミル教司祭」背の高い少女。心なしか、顔を背けている。

「ルイズは、私達に保護されたあと、病気でしんだんだ。セイバー

ハーゲンはルイズを看取った人でね。彼女から虚無の力を譲り渡された。君にとつては形式上ご主人様になるのかな？」ジュリオ
「そうですか・・・よろしく」頭を下げる隼人。

「ふん。聖戦のためと言え、こんな奴と協力しないといけないとはな」サイト

「・・・なんだって？えっと、初対面だよな。」キョトンとする隼人
「ルイズからお前の非道は聞いているよ。同じ男として恥ずかしいせつかく神の力を与えられたのに、肝心の心が下劣だと宝の持ち腐れだ」

「・・・なんだと」隼人の声に怒気が混じる。

「何度でもいってやるさ。お前は下劣だ。かよわいルイズを痛めつけ、両親まで殺した、日本だったら殺人鬼だぜ」

「・・・もう一度言ってみろ」

「何度でもいってやるさ。殺人鬼。女を痛めつける奴は最低だ」
「てめえ」

「大体、貴族や神官がこの世界の人たちを導いてるんじゃないか。貴族だからって一方的に偏見を持って無礼を働くとは、礼儀もなにも知らない山猿かよ。しかも神聖な玉座にう　こしたんだって？お前まともに教育受けたのか？」

「聞いた風なことを。この世界の平民がどれだけ虐げられてんのか知らないのかよ」

「そんなの知るか。勝手に不平不満を喚いているゴロツキどもだろ　うが。皇国じゃ平民に騎士団が施しをしてやってんだぜ。」

「その施しは誰が作った食べ物だ。お前が着ているご立派な鎧は誰が作った。日本人のくせに、そんな事もわからないのか？」

「俺達は平民に出来ないことをしてやってたり、守ってやってるんだ。つまらないことは平民がやるべきだろ？聖堂騎士はどこに言っても尊敬されるぜ」

「ふん。ゲルマニアじゃ道化者として大笑いされてたぜ」

「どうせ、金稼ぎなんてつまらん事に能力を使っている下衆や、金に目がくらんだ平民には誇りなんかないんだろうな」

「ふっ。自分も平民の癖に貴族気取りか。まさに下衆だな。犬がちよっと人間扱いされるとご主人に尻尾フリフリして昨日まで仲間だった者を見下すようになるか。典型的小物だな。」

「・・・聖職者である騎士をバカにするつもりか。お前は殺されたいのか」

「どうやら、宗教にかぶれて変な特権意識を持ったみたいだな。親がみたら泣くぜ」

「・・・貴様」

睨みあう二人

「・・・もう止めなさい。サイト。彼に何を言っても無駄よ」セイバーハーゲン

「しかし、ルイズの受けた仕打ちを知ると、男として許せねえ」サイト

「笑わせる。都合のいいことだけ鵜呑みにする低能が。話にならん」隼人。

そのまま隼人は席を立って部屋を出て行った。

「しかし、何なんだよあいつ。誇りつてもものがないのかよ。せつかくの力も金稼ぎなんてつまらない事につかっているし」サイト

「彼は心まで平民よ。高貴な使命に見合った心なんて最初から持ち合わせてないわ」セイバーハーゲン

「あの・・・二人とも。喧嘩しないほうが。聖戦のため協力しあわないと。」ティファ

「ふん。聖戦が終わったらすぐ始末してやるぜ。儀式の直後は奴の能力もしばらくつかえないんだろ？」サイト

「ああ、能力が全開になるから心臓に負担がかかり、しばらく使えなくなると思う。彼を始末するには絶好のチャンスだ」ジユリオ

「・・・貴方も力を貸してくれるの？」セイバーハーゲン。
「当然だ。彼を放置しておく、社会秩序が揺らぎかねん。儀式が
終わった後の計画は・・・」
ジュリオが計画を話す。ティファは気乗りしない様子だったが、残
りの二人は乗り気だった。

作戦

ロマリア皇国大聖堂。会議室

第一回聖戦会議が始まっていた。

ロマリア皇国側出席者は教皇・ジュリオ・セイバーハーゲン・サイト・ティファニア・そして騎士団長カルロ

ゲルマニア側出席者は隼人・雄二・ローラン・正弘

アルビオンⅡガリア側出席者はジョゼフ・シエフィールド

トリステイン側はグラモン元帥

会議は最初から紛糾していた。

ロマリア皇国

「我々は正々堂々と、エルフから、聖地、を奪還するのみ。お前達は我々に協力するだけでよい」
気炎を吐くカルロ

「俺はエルフの中でも上位の地位にあるビダーシャルを倒した。エルフなんて大したことはない」
豪語する才人

「私のマジックアイテムもあるわ。平民の軍隊なんて、私たちが詠唱する間の盾になっていればいいの。だからこそ、大軍が必要なのよ。今回の戦いは平民が得意な卑怯なだまし撃ちなんか通用しない、聖なる戦いなよ」セイバーハーゲン

ティファニアは雰囲気についていけず、ジュリオは何か考えているように無言。

「いずれにしろ、聖地に着くまでに必ず気づかれます。しかも、儀式に6時間は必要です。必ずその間にエルフ軍が攻めてきます。だからこそ、大軍で殲滅するべきなのです。ガリア王はガリア陸軍と両用艦隊を、トリステインにも派軍を要請します。ゲルマニアにも軍を要請いたします」教皇

ゲルマニア

「軍なんて出す必要はないだろう。」正弘

「要は儀式をするわけだろ？なんでわざわざ大戦争が必要なんだ？」隼人

「占領する必要はないなら、時間を稼ぐだけでいい。『飛嶽』で聖地まで急襲し、海上で静止。儀式をする岩場を守り、上空からエルフ軍を監視して、近づいてきたら長距離砲やミサイルで近づけなければいい。儀式が終われば撤収だ。それで充分」正弘
ローランも雄二もうなづく。

トリステイン

「・・・我が軍も準備は出来ておる。いつでも要請にこたえることができる」グラモン元帥

ガリア＝アルビオン

「我等は、両用艦隊を提供しよう。しかし、陸軍の要請には多くはこたえられない。ガリア国は混乱が続いているので、治安維持のために必要なだ。」ジョゼフ。

しかし、カルロを始めとするロマリア側は、ゲルマニア側の作戦が気に入らなかつた。

「長距離砲？ はっ 平民のもつ大砲など通用するものか。神聖なる魔法ですら通じぬこともあるのに。ましてミサイルとはなんだ？」
あぎけるカルロ

『ミサイル』について説明するも、異端の技だ！！！！と取り合わないカルロ。

「いいからお前等は我等の盾になっていればいいのだ。平民の役目など6000年変わらぬ」
「どんどんヒートアップする。」

「ミサイルや長距離砲なんて卑怯だ。そんなことしなくても、正々堂々と戦えばエルフなんて圧倒できる。始祖が認めた聖なる戦いなんだ。直接大軍で堂々と戦えばいい。」
「サイト

「野蛮人の国は臆病者の国でもあるみたいね。まあ、平民らしいわ。影からこそそだまし討ちしかできない卑怯者。死ぬのが怖いというのならそれでもいい。その隼人という小僧だけよこしなさい。礼儀知らずらしいから、首輪をつけてね。トイレの躡ぐらいはしておいてね。」
「セイバーハーゲン。」

沈黙するゲルマニアの面々

「(ダメだこりゃ・頭の完全に中世だわ)」
「隼人

「(重症だな・自衛隊の新兵でももう少しましな考えするぞ)」

正弘

「(彼らが来るまで我々もこんな考えだったのか・いや、知らないとは恐ろしいことだ)」
「ローラン

「・・・」
「あきれて声もでない雄二。」

「お前等な。それをつづけて6000年 っ いた！！！」
「隼人が罵声を上げようとすると、テーブルの下で雄二に蹴られた。」

「何すんだよ叔父さん」

「(小声で)こついつた輩に正面から文句言っただって無駄だ、間違いを指摘するだけ意地になる」

「(じゃどうすんだよ)」
「(俺にまかせろ)」

「いや、カルロ殿、サイト殿も大変勇ましい。私たちも安心しました」雄二

「そうであろう。お前たち平民を守っているのは高貴で勇猛なる我等なのだ」カルロ

「確かに、我等の役目は貴族様の盾。しかし、もう一つお役に立てるものもあるのです」

「ふふ、なんだ？お前等が分を弁えるのなら、話を聴いてやってもよい」

「我等の役目は『貴族様を乗せる馬』です。『飛嶽』なら、空を早いスピードで飛ぶことができます。

教皇様や虚無の担い手といった高貴な方々に、移動の労を煩わせることがなく、儀式の地にお運びできます。護衛の任は勇猛なる騎士様がたにお任せし、我等は馬や盾に徹するということでいかがでしょう？」

「なるほどね・・・雑魚はお前達に任せて、直接俺達を襲ってくる強いエルフを貴族に任せるってことか。確かにミサイルとか砲でやられるのは雑魚だろうし。強いエルフが近くにきたら平民じゃかなわないだろう。やっぱ主役は強敵と戦わないとな」サイト

「・・・僕は彼らの作戦に賛成しますね」ジユリオ

同意するグラモン元帥。

ジヨゼフとシエフィールドは何も話をせず、会話に耳を傾けていた。

「異論はないですね・・・では、一ヶ月後にここにそれぞれの軍を率いて終結しましょう。」

主軍はロマリア・ガリア・トリステインで。ゲルマニアは『飛嶽』と隼人の参加のみでお願いします」

解散する一同。ある者は意気揚々と、ある者は暗い復讐心を、ある

者は深い思考を、ある者は呆れた感情を。ある者は陰謀を。
聖戦軍は一枚岩ではなく、それぞれの思惑はバラバラだった。

案内

ロマリア皇国にて

会議が終わった夜、隼人は二組の訪問を受けた。

「始めてお目にかかる。余はガリア＝アルビオン国王 ジョゼフだ。」

「虚無の使い魔、シエフィールドです。お見知りおきを」

「先ほどは私の友人が失礼をしました。改めて自己紹介させてください。ティファニアと申します。テファとおよびください」

虚無の担い手二人と使い魔であることは知っていたが、いきなり訪問されるとは思っていなかった隼人。

「とりあえず、中にどうぞ。どういったご用件ですか？」

他の虚無の担い手や使い魔の悪印象もあり、警戒している隼人。

「ふむ。まず余から。我が姪であるシャルロットと、義妹オルレアン公夫人は健勝であるか？」

「……ええ。」

タバサから事情は聞いている。目の前の人物はオルレアン公家族の仇なので、警戒する。

「シャルロットから事情は聞いておるようだな。わかっておる。余が最低の卑劣漢であることは。弟を殺し、義妹を狂わし、姪を虐待した。それでもなお、余は彼らを愛しているのだ。不審は承知。聖戦が終われば首を渡してもいい。少しでも償いをしたいのだ。」
隼人に頭を下げるジョゼフ。

「シエフィールドは『神の頭脳・ミョズニトニルン』の能力を持つ

ておる。すべてのマジックアイテムを使うことが出来る。このとおり義妹の毒を治す薬を調合させた。貴殿の能力でゲルマニアにつれていってもらい、彼女らに会わせてくれないだろうか？」

隼人はオルレアン公夫人の病がすでに治っている事を伝えるかどうか迷った。

実際のジョゼフは話に聞いたよう狂王のような印象はなく、後悔している様子も伝わってくる。

「・・・俺は貴方の真意はわかりませんが、ゲルマニアは彼女達の味方です。つまり、周囲すべてが敵地になるわけですが、それでも行きたいのですか？」

「かまわぬ。少しでも不審な様子なら、かまわず殺せ。杖も預ける」

「ご主人様は深く悔いておられるのです。私からもお願いします」

「・・・わかりました。ただ、タバサ・シャルロットが貴方に襲い掛かっても、俺は止められる自信がないですが・・・」

「かまわぬ。その時は一片の抵抗もせず、喜んで首を差し出そう。」

聖戦の遂行は遅れるかもしれぬが、余の代わりは出現するだろう。本当に命懸けで俺びを入れたい様子が伝わってくる。これなら会わせてもいいだろうと隼人は思った。

タバサが未だに夜毎復讐の気持ちでうなされるのを聞いていたからである。

「あの・・・私の願いも一緒なんです。マチルダ姉さんとはばらく会ってなかったので、ゲルマニアに連れて行ってもらえませんか？」

「いいんですか??？」

「私がここにいってもやることはないし、貴方なら一瞬でまたここに帰していただけるんですね？それに確かめたいこともありますし」「確かめたいこと？」

「はい・・・サイトやセイバーハーゲンも貴方のことや平民のこと、

ゲルマニアのことを散々悪く言っています。しかし、マチルダ姉さんからの手紙は、とても充実していて、幸せに暮らしているそうですねです。私、どちらの言っていることが正しいかわからなくなつて・

「・」
ティファニアは隼人を暗殺する計画を聞いたときから、このままでいいのか疑問を持った。それで実際に行つて確かめようとおもつたのである。

「わかりました。貴方達を連れて行きましょう。」
隼人のルーンが輝き、三人の姿が消えた。

ベルリンの夜景

すでに小規模ながら発電が行われており、街のあちこちに照明が点いていた。

「きれい・・・こんな光みたことない」テファ

「夜になつても人通りが途切れぬとは・・・ガリアやアルビオンでもこのような事はないな・・・」ジョゼフ

「あの自分で動く馬車や、人が乗っている車。皆の表情も明るいですね」シェフィールド。

マルトールレストランで食事をした。カレーを食べておいしいと言う三人。

「今日はもう遅いですから、明日引き合わせしましょう。とりあえずこちらに泊まってください」

、世界をつなぐ翼、ギルドの建物の宿泊室に案内し、その日は終わった。

懺悔

ベルリンにて

元ツエルプストー伯爵家屋敷

「シユルロツトとオルレアン公夫人は現在ここに住んでいます。事情を説明しますので、少し待っていてください

あと、オルレアン公夫人の病は治っています」

「治っておるだと？あの解毒薬はそう簡単に作れるものではないと思いが・・・」

「いや、偶然治ってしまったというか・・・とにかく行ってきます」
ジヨゼフとシエフィールドを客間で待たせ、説明に行く隼人

「隼人さん。今までずっとどこほつつき歩いていたんですか！！」
シエスタ

「・・・隼人、久しぶり。あちこち動いてて全然帰ってこない」隼人の顔を見るなり、膨れるタバサ

「そうよ。貴方の家はここでしょ。タバサずっと機嫌悪くて大変だったんだから」キュルケ。

フルフルと首を振るタバサ。

「あ、あはは。ここにいたら襲われるから・・・って、ごめん」隼人
「今日は覚悟しなさいよ。ふふ」キュルケが妖艶に笑う。

「そ、それより、タバサとオルレアン公夫人に大事な話があるんだ」
「・・・話？」

「皆にも相談に乗って欲しい」

オルレアン公夫人が呼ばれ、5人で話をする

「・・・というわけで、今、ジヨゼフ王がここに来ているんだ。」

「貴方なんてことするのよ。！！タバサの事情はしっているでしょ

う」キュルケが怒る。

タバサとオルレアン公夫人は青い顔をして、黙って聞いていた。

「そうですね。とつとと追い出してください。いや、私がします」

ホウキを持って飛び出そうとするシエスタ。

あわてて止める隼人

「俺も事情は知っている。だけど、タバサの側の事情だろ？ ジョゼフは反省して後悔している様子なんだ。あっちの事情を聞いてみてもいいんじゃないかな？ 何か不審があつたら自分を殺せなんていつているし、実際に杖も置いてきているんだ」

「そんなの、タバサさんとお母さんに危害を加えるための演技に決まっています」シエスタ。

「それなら、ジョゼフ自ら来る意味がないよ。自分も危険にさらすんだから。」

黙るシエスタ。キュルケも不審そうな目をしているが、言い返せない様子。

「・・・私は彼に復讐を誓った。これはチャンスかも知れない。ただ、お母様は会わず訳にはいかない」

「いや、私も同席します。シャルロットに過ちを犯させないために」
オルレアン公夫人

「・・・危険過ぎる」

「私も彼に聞きたいのです。なぜ夫を殺してしまったのか。この機会を逃せば、もう二度と会えないのかも恐れませんか」

「タバサ、俺も部外者だけど護衛として同席するよ。何かあったらすぐ二人を逃がす。」

「・・・わかった。でも隼人、私よりお母様を優先させて」

「心配するな。お母さんもタバサも守つてやるさ。何があつてもな」
嬉しそうに頬を染めるタバサ

「なに真つ赤になつていらんですか！ 隼人さんは私の家族のために王宮まで乗り込んでくれたんですからね」シエスタ。

「真つ赤になるタバサ可愛いわ・ふふ、複雑な気分ね」キユルケ
「隼人さん。母として、夫である貴方にシャルロットの事をぜひお
願いします。私の身などを気にする必要はありません。貴方になら
シャルロットを託せますから」
につこりと笑う夫人。皆の緊張がすこしほぐれた。

客間にて

タバサとオルレアン公夫人が入ってくるなり、ジョゼフは上着を脱
ぎ、跪いた。

大国の王のそのような姿を見たことがないので、隼人はびつくりし
た。

「ジョゼフ王。それは何のまねですか？」硬い声でオルレアン公夫
人が言う。

タバサは夫人を守るように杖を突きつける。

「すまぬ。あわせる顔もない。シャルロットよ。さぞかし余が憎い
だろう」

「・・・当然」

「まさに当然だな。兄弟を殺し、肉親を虐げた拳闘王の権力を玩具
にした愚かな王だ」

「・・・とりあえず、顔を上げてください。そのような事をしてい
ては、話もできません」夫人

ゆっくりと顔を上げるジョゼフ。彼は泣いていた。

その顔を見て、絶句するタバサと夫人。許されない罪を犯した者が、
心底悔いる姿。

心の慟哭が伝わってくる。

「・・・なにがあつたの？」タバサ。

「ああ・・・長い話になるな・・・」

「皆様、ご主人様は心底悔いておられます。私のような端女がくち
だす事ではありませんが、ぜひお話を聞いていただきたいのです」

「貴方は？」

「私の名はシエフィールド。ご主人様であるジョゼフ様にどこまでも付いていく者です」

「どこまでも？」

「はい。ジョゼフ様がシャルロット様の御手にかかれたときは、どうかお慈悲を持って返す杖で私もお手打ちお願いします」
彼に対する愛情が伝わってくる。

タバサにとってジョゼフ王は絶対悪だった。彼を殺すことは復讐であり正義であった。

そんな悪の権化にも心から愛してくれる者がいたという事実は、タバサの心を揺らした。

「……とりあえず、話だけは聞く。納得できなければ、私は貴方を殺す」

「望むところだ。余の命、喜んでさしだそう」

席について、[〃]大いなる意思[〃]に同化している先代ガリア王とシャルルに会い、タバサと夫人を託された事を話すジョゼフ。ガリア王家6000年の裏の血塗られた歴史。先代ガリア王の告白。

シャルルを嫉妬心と恐怖心によって殺してしまったこと。また、シャルルも同じようにジョゼフを恐れ嫉妬し、ジョゼフを排斥しようとしていた事実を言われて、タバサは混乱した。

「嘘・嘘。お父様がそんなことをするはずがない。貴方の都合のいい嘘に決まっている」

杖を振ろうとするタバサ。その杖を白い手がつかみ、ゆっくりとおろされた。

「……お母様??」杖を母親に取られ、呆然とするタバサ。

「……やはり、そういうことだったのですね……」夫人

「なんで、ちがう。お父様はそんなことしない!!」タバサ。

タバサを落ち着かせようと、後ろから抱きしめる夫人。タバサも少しずつ落ち着いた。

「シャルロット。私の髪を見て何か思わない？」夫人が聞く

「え？」

「私の髪も青いでしょ？つまり、私にもガリア王家の血が流れているの。今は滅んだ、先々代王の庶子の家の娘」

「ジョゼフ王が下を向く」

「先代ガリア王は、庶子である長兄と・私の父と王位を争ったの。きっかけは父の部下が父に王位を継ぐよう要請したこと。叔父にあたる先代王は、断腸の思いで長兄を殺したわ。その後、泣いて復讐を誓う私を手元において育てて、王家の作法を私に教え込んだの。」

「どれほど大きな国でも玉座は一つ。混乱を避けるために王は後継者を決める。それに反して王座を狙う者は、能力も是非も善悪もかわらず処分するしかないのだ。その一つの命を刈ることで、より大きな争いを避けるために。これは何千年も続いた王家に課せられた義務だ。兄は確かに無実であった。だからこそ、余にしか手を下せないのだ。」と。そして泣きながら私の頭をなでてわびた。「
「・・・」タバサは無言で聞いている。

「私がシャルルと結婚すると言うと、彼は喜んでくれたわ。まるで父のようだった」涙ぐむ夫人。

「ジョゼフ王。いいえ、義兄上。シャルルの不明、謹んでお詫びいたします」夫人が頭を下げる。

「・・・いや、父のように大義をもって親を滅したのなら、余は貴方を厚く遇したはずだ。父のように。余はただ醜い嫉妬心でシャルルを殺した。侘びを入れられることなど何も無いのだ。余はただの卑怯者であった・・・」

泣きながら頭を下げるジョゼフ。沈黙が部屋に下りた。

「わかった。なら、貴方にしてもらいたい事がある」少しして、タバサが言う

「いいだろう。何でもお前の言うことを聞こう。命を差し出してもよい」ジョゼフ

「命なんかいらぬ。代わりにガリア王家を潰してほしい」

「ガリア王家を？」

「私は隼人から日本の民主主義という政治を聞いた。本も読んで学んだ。権力の正当性を、神でも、王家の血でもなく、民衆の合意に求める政治思想。これなら、どれだけ権力を持つと、民衆から反対されたら失脚する。王家での権力闘争のように、殺し合いによつて権力を守る必要もない。ガリア王家を潰し、平民の代表者になり、もう二度と骨肉の争いを繰り返さないこと。これが貴方に対する罰」

「ふふ・・自らのよつて立つ王家を潰し、平民になれか。面白い。確かにその罰を受け入れた。」

余はガリア王家最後の王になろう。これで我が一族も過去の呪縛から開放される」

タバサの前にもう一度跪き、誓いを立てるジョゼフ。

彼は後の世で、自ら民主制を生み出し、中世の悪習を断つた最後の王として、高く評価されることになる。

疑問

ベルリンにて

ティファニアは、マチルダからの迎えを待っていた。昨夜のうちに隼人が連絡してくれたのである。

ぼんやりと外を見てみると、外から「自動車」が入ってきた。庭に停まり、中から従者とマチルダが出てくる。ティファニアは迎えに行こうと走りだしていた。

「マチルダ姉さん！！」マチルダに抱きつくティファニア

「テファ、元気だったかい？まったく、ロマリアに行ったきりここに来ないで、心配かけて！！」

「ごめんなさい。でも元気そうで安心したわ」

「そりゃ元気にもなるさ。皆が私に仕事を丸投げして、全然休みもとれない。病氣している場合じゃないからね」

「そういえば、姉さんなんの仕事しているの？」

「ああ、外じゃ話せないから、とりあえずうちのギルドに行こう」二人は車にのり、従者の運転でマチルダのギルドに向かった。

車内にて

「このくるまってのは馬車よりずっと早くて乗り心地がいいわね」

「ああ、かなり普及しているからね。そのうち一家に一台もてるよっになるよ」

「・・・本当に???馬車でも貴族か大金持ちしか乗れないのに・・・」
「まあ、こっちじゃもう貴族はいないからねえ」

「そうなの？でも何も混乱してなくて、皆幸せそう」

「ああ、景気がいいからね。誰でも仕事を見つければできるし、その仕事で貯めた金でモノを買ってからますます景気よくなって生活水準があがる。まあ、そのうち二ホンに追いつくさ」

「二ホン？」

「隼人が来た国さ。ここにも二ホンから人が結構きて、皆いろいろしてくれるのさ」

「電気工事に道路舗装。その他いろいろな知識や技術を惜しげもなく提供してくれている事を話すマテルダ」

「・・・そんな事をしてくれるの？でも、無料じゃないんでしょ？」

「ああ、ちゃんと代金は払っている。ただ、こっちにしか出来ない事もあるので、お互いが得になっているんだ」

「そうなんだ・・・え？あの人って？」

「街中を歩いている人を指差す。背中から翼が生えていた。」

「ああ、翼人だよ。この国の噂を聞いて、ハルケギニア中から集まっているんだよ」

「え・・・そんな。大丈夫なの？ロマリアだったら見つけ次第騎士が出て討伐されるのに・・・」

「結構市民の間でも二ホンの考えが広まってね。翼人とかそのほかの亜人に対しての差別もなくなりつつあるのさ」

「え？なんで・・・」

「ああ、二ホンから来た人にとっては、魔法使いもエルフも翼人も別に差別しないんだよ。その考えを取り入れて、ここじゃ基本的に話ができれば誰でも市民として登録できる。そして、亜人が街でいるんな仕事につくだろ。最初は偏見の目で見られるけど、そんな事してたら仕事にならないからね。一緒に働いているうちに仲良くなったりするんだよ。ここは常に人手不足だからね。仕事はいくらでもあるし」

「・・・それなら、もしかして私も・・・」

「ああ、もちろんエルフ領からも人が集まってきているよ。あつちの国も結構窮屈らしいからね。はみ出し者はここにくるのさ」

笑うマチルダ

「失礼ですが、私もそんな亜人の一人ですよ」少女のように見える従者が運転席から話しかける

「貴方も？しかし、貴方は人間のようにみえるのですが・・・」

「ふふ、実は私は吸血鬼なのです！！」振り向いて牙をみせる

「きゃっ！！！」驚いて叫び声を上げるティファニア。

「こら！！ダルシニ。前を向いて運転しな！危ないだろ」後ろから頭を叩くマチルダ

「いた！！ごめんなさい」前を向くダルシニ

「ね、姉さん。吸血鬼って・・・大丈夫なの？」

「大丈夫さ。むしろこいつ等体が丈夫で魔法が使えるから、すごく役に立っているよ」

「私と妹のアミアスはここに流れてきて、マチルダさんに雇ってもらったんです。他にもいっぱいいますよ」

「え・・・だって、襲われたりしないの？」

「ああ、吸血鬼というか、吸血人は家畜の血でも代用できるんだ。人の血の成分をわずかに混ぜればね。ニホンから来た人がそれに目をつけて、向こうの世界の牛や豚を肉にする時に廃棄されている血や、血液銀行の期限切れで廃棄される血を買い取って、混ぜて飲み物にしてこっちに輸出しているんだよ。最初は大変だったみたいだけど、今じゃその辺の店でも売っているよ。」

「一本3スウなんです。一日一本飲めば元気ハツラツです」ダルシニ

「まあ、吸血人たちの話を聞くと、殆どの人が今まで人間を襲って血を吸う行為を後ろめたく思ってたみたいだしね。私達だってもし牛や豚が人間に似てたら肉にして食べようなんて思わないだろ？」

「そうなんだ・・・そんな事、ロマリアでは誰も思いもしない。平民に対してすらまともに人間扱いしていないのに・・・」

ティファニアは今までロマリアは光の国だと思っていたが、ベルリ

ンの街の輝きを見て、急に薄暗く住み難い国に思えてきた。

大きな工場に車は入っていった。隣に学校みたいな施設もある建物の一つに入り、応接室で話をする。

「ここが姉さんの仕事場なの」

「ああ、一応このギルドマスターをしているよ」マチルダ

「ギルドマスター?????」

「マチルダさん、ここで一番偉い人です。ついでに、ベルリンで一二を争う大金持ちです。あ、私、秘書をしているアミアスと申します。姉ともどもマチルダさんにお世話になっています」ダルシニと似ている少女が言う

「私達は土のメイジの魔法を生かして、錬金でいろんな素材を生み出しているのさ。それを二ホンに輸出している」

「作れば作るほど儲かるんですよ。税金もハンパないけど。税金対策でいろんな事業もしてますよ。隣の建物は孤児院ですよ。マチルダさん儲けの殆どつぎ込んでいるんですよ。いい人です」

「ふふ、いくら儲けたって税金が上がるだけだからね。政府が認めたら国に役にたつ事業に金を使うと、その分税金から引かれるのさ」

「・・・そうなの。正直、私はよく分からないけど・・・孤児院を姉さん自分で持っているの」

「ああ、後で案内するよ。ロマリアに残してきた孤児たちも連れてくるがいいよ。まだまだ余裕があるからね」

その後、工場を見学した。本当にいろんな人が働いている。エルフの姿もあった。

昼食をギルドの食堂で取ったが、いろいろなメニューがあって、どれも食べた事もないようなおいしいものだった。

午後、孤児院を見学する

「ここでは読み書きと計算をとりあえず教えている。年長者は、出来るようになった者からうちのギルドで働いてもらっているんだ。」
たくさんの子供たち。皆一生懸命に勉強していた。

「ただ、見かけは子供でも年取っている吸血人は、ちゃんと働いてもらっているけどね。そのエルザみたいに」

教壇に立っているのは、なんと5歳くらいの金髪の子供だった。

「ええ・あの子って子供じゃない」

「ああ、あいつはもう40才を超えているからね。知識も経験もそれなりにあるし。子供の相手も得意だから教師をしてもらっているよ」
「本当にここじゃ誰でも働けるんだ・・・」

その夜はマチルダの屋敷に泊まるティファニア。彼女の頭の中では、先ほどのマチルダとの会話がずっと耳に残っていた。

「今だから言うけど、私も隼人に拾われる前は、いぶん人に言えない事もしてきたんだよ。でも隼人やニホンの人たちが仕事を与えてくれて、今じゃこの通り誰にはばかる事もなく生活できている、本当にあの坊やには感謝しているんだよ。ティファニアもなんか隼人と仕事するんだろ。私の代わりに少しでも恩返ししてほしいよ」

「でも、隼人さんは、私の友達から嫌われている・・・」

「その友達って貴族かい？」

「ええ・・・」

「いいかい、今まで貴族は平民の犠牲の上に生活していたんだ。私だって昔はそれが当然だと思っていた。しかし、それは間違っている。貴族も平民も働いて、正当な報酬を受けて誰の犠牲もなしに豊かになる道が必ずある。隼人とその仲間はそのことを示してくれたんだ。貴族の偏見に惑わされてはいけないよ。誰かから搾取して自分だけ豊かになっても、人から憎まれる盗賊と一緒になんだからね。」

貴族は盗賊と一緒に・・・人の犠牲の上で生活している。その言葉に打

ちのめされるティファニア。
とりあえず、隼人とゆっくり話し合ってみようと思った。

事情

次の日、世界をつなぐ翼、ギルドにマチルダに送ってもらった。

「いいね。体に気をつけて、それから、なるべく早く皆と一緒にくるんだよ。私達は家族なんだから」マチルダ

「姉さん・・・」涙ぐむテファ

二人は別れる前に堅く抱き合った。

建物に入ると、ジョゼフ王とシエフィールドに会った。

「え・・・みなさんどうされたんですか？」ジョゼフの姿をみて驚く。王のマントを脱ぎ、何の飾りもない平民風の服を着ている。

「いや、あれから街を見て回って、いろいろ買い込んだのだ。`ゆにくろ、`とかいう服の店があって、気に入ったので買った。`じやーじ、`とかいったが、こういった服を着ているほうが楽だな。しかも、安い。」

「ええ、肌触りもいいですし、楽ですわ」シエフィールド

「いや、ここは楽しい。誰も余を王としてではなく一般客として扱うからな、気を使わなくてもいいし、わずかな金で驚くほど旨いものも食べれるしな。`ぎゅうどん、`なんて信じられん。あんな旨い物がたつたらスウだぞ。」

「他にもいろいろありましたしね・・・臣下の方々にもいろいろお土産をかつたんですよ」

「すべてが済んだら、いつそ二人でここで暮らすか。なあミュージ」

「ご主人様つたら・・・」

仲睦まじい二人。テファは眩暈がしそうになった。

「え・・・えつと。ジョゼフ様？ガリアとアルビオンの王様がここで暮らすというのは・・・」

「ああ、その事は心配いららないぞ。何年かかかるだろうが、ゲルマニアみたいな政治体制にして、余もいずれ平民になるからな。」

「ええ、いい目標ができましたね。頑張りましょう」「シエフィールド
楽しそうな二人。

王様まで平民になって移住したくなる国。テファはますますゲルマ
ニアが眩しく感じられた。

「あ・・あの。それで隼人さんはどちらに？」

「ああ、昨日遅くまで『居酒屋』とか言う店で一緒に飲んでだな。

あいつは酒が弱いからいかん。まだ寝てるんじゃないか」ジヨゼフ

「そ・それじゃ、起こして来ますね」と隼人の部屋に向かうティフ
アニア。

隼人の部屋

「うう・・頭痛い。きもぢわるい。おっさん、散々付き合わせやが
つて・・」

昨日はジヨゼフがはしゃいで、散々絡まれた。

「なにが俺は平民になるんだーだよ。中身すでに大衆オッサン
だわ。」

ぶつぶつ独り言を言う。

そこでドアがノックされた・

「どうぞ〜」

ティファニアが入ってくる。

「うう・・ティファニアさん。お帰りなさい。とりあえず、水と
薬もってきて〜」

「どうしたんですか？」

「二日酔い・・頭いたい。割れそう。死ぬかも」

「あ・・それじゃ虚無の魔法で治せるかも。えい！！」杖をふる。

「あれ？頭痛なくなっただ」

「私の虚無は頭に作用するので、もしかしたらかと思って」

「あ、ありがとう。楽になったよ。それで、マチルダさんと話は弾

んだ？」

ニコニコしながら聞いてくる。邪気のない笑顔。

「ええ・マチルダ姉さんは隼人さんに大変感謝していました。私からもお礼を言わせてください」

「よしてよ。お互いさまだよ。マチルダさんのギルドには大変お世話になってるんだから。マチルダさん今じゃベルリンでも有名なだよ。大金持ちで社会貢献もしていて、町中から尊敬されている」

「そうなんですか・・これも全部隼人さんたちのおかげです。あの、私、どうしても隼人さんに聞きたい事があるんです」

「え？聞きたい事って？」

「あの、ルイズの事なんです」
隼人の顔がこわばる

「ルイズから聞きました。隼人さんに鞭で叩かれ、隼人さんが原因でお母様とお父様と婚約者を失い、家まで没落したと。絶対に許せないと言っていました。サイトは怒っていました。私は実際に隼人さんに会って、とてもそんな事をする人に思えないんです」

「・・・ルイズ側に都合のいい事実だけ並べたら、確かにそうなるよな。言っている事は間違っていないが、どうしてそうなったかは言っていないんだろ？」

「はい。ただ貴族だから反抗したってだけしか聞いていません」

「やれやれ・・そうだろうな」

「聞かせてください。私はどちらが正しいか知りたいんです」

「わかった。俺の方の事情を話すよ」

ルイズに召喚されてからの事情を説明する隼人

「・・・そんなことがあったんですか・・・」

「別に俺の方が正しいなんて言うつもりはないよ。ルイズが俺の敵に回っただけ。それに俺は一度は彼女を許し、もうかわるなと言

った。その後、親やら婚約者やらトリステインやらシエスタの家族まで巻き込んで仕返ししようとしたのはルイズだ。そうになると、当然破滅する人も増える。俺が気に食わないなら、自分だけで喧嘩を吹っかけるべきだったんだ。それなら最悪どちらかが死ぬだけで終わったはずだよ。」

「はい・・確かにそうですね」

「俺は友達やその家族を守るために、ルイズや彼女の父やトリステインを敵に回すしかなかった。ゲルマニアは俺を守るためにヴァリエールに侵攻し、ルイズの母親を殺すしかなかった。正義とはいえないが、俺にとってはやむを得ない行為だった。いえるのはそれだけだな」

「・・・」

しばらく沈黙がおりる

「それに、ルイズはもう死んだんだろ？トリステインのマザリーニ枢機卿ももう敵対しないと約束したし、もう済んだ話さ。」

「あ・・・貴方のお話を聞いて決心しました。まだルイズの復讐は終わっていません」

「え？」

「今から話す事をよく聞いて下さい。ある意味、ロマリアとブリミル教に対しての裏切りになります。貴方にどうしても伝えたいことがあります」

ティファニアは裏切り者になっても、ロマリアがたくらむ陰謀を話す決意をした。

「召喚の儀式が終わった後、貴方は負担がかかり、しばらく能力が使えなくなります」

「あ・ヴァリヤークもそんな事いつてたっけ。最悪死ぬかもしれないから、ルーンの効率をよくしたと言ってた」

「ええ、特に能力や精神力の消耗が激しいのは貴方になるんです。」

もちろん、私たち虚無の担い手や使い魔もしばらく全員精神力を使い切って何もできなくなるんですが」

「でも、しばらくしたら元にもどるんでしょ。大した問題じゃないよ」

「その間に命を狙われてもですか？」

「え？」

「計画では、貴方は聖地からの帰りの途中、『飛獄』の中で反乱に巻き込まれて殺される予定です」

「反乱なんて。誰が襲って来るんだよ」

「担い手の一人セイバーハーゲン。いや、彼女の正体は、魔法で顔を変えたルイズです。彼女は複数のマジックアイテムを持っていますから、精神力を使い切っても、指輪の魔力で貴方を殺す力を持っています」

「・・・そうだったのか。でも、反乱って？」

「ロマリア皇国も、これ以上平民が力をつけ、貴族を脅かすのは好ましくないのです。貴方さえ殺せば、二ホンからの物資が来なくなつてこれ以上平民が発展することもなくなる。そのようにジュリオは言っていました」

「くそ・・・あいつ等腹黒もいいとこだな。でも、よく教えてくれたよ。ありがとう。これで対策を取れる」

「いえ・・・マチルダ姉さんを悲しませたくないから。それに、本当の理想の国を見せていただいたし。私もいつかこの国に住みたい」

「いつかと言わずに、すぐおいでよ。皆が歓迎するよ」

「私が・・・エルフでもですか？」耳のピアスを外し、長くなった耳を見せる

「ふっ。エルフなんて何十人もいて見慣れているよ。というか、君の耳が長くなつても魅力は損なわれてないよ。君の胸が小さくなつたらがっかりだけど」胸をじろじろ見ながら言う隼人

「・・・隼人さん!!。もう・・・でも、ありがとうございます。私も聖戦が終わったら、ここに来ますね」

「うん。マチルダさんも会ったびに君の事を話題にして、心配して
たんだよ。彼女のためにもここに来て、協力してね」

「はい・・・」

才人とはまた違った隼人の優しさを感じて、すこし胸が高まったテ
イファニアだった

相談

ベルリンにて

「とりあえず、ジョゼフさん達にも相談しよう。味方になってもらわないと。」

「はい、呼んできます。」 ティファニアが呼びに行く。

「おお、隼人。潰れていると思ったが、意外に元気だな。今日も飲むか？」

ジョゼフ。すっかりご機嫌である

「もういやです。それより、テファの話聞いて欲しいんです。大変なことなんです」

「ふむ・・何かね？」

ティファニアが二人に隼人暗殺計画を話した。

「なるほど。平民の力をこれ以上つけさせないために、隼人を暗殺か、ロマリアの糞坊主がやりそうなことだ」 ジョゼフ

「まったく・・6000年も現状維持してきたから、変化が怖いのね」 シェフィールド

「ええ、情けない事ですが、その時俺は無力になるみたいです。死にたくないんで助けてください」

「ふふ・・お前は素直だな。無力だから助けてくれと。そう正面から頼まれると断るわけにもいくまい」

「私たちは貴方に借りがあるわ。ここでキッチリ返させてもらおうわ」
隼人は二人の協力が得られたので、幾分安心した。

「しかし、こうなると、奴等はティファニア殿が聞いた計画は失敗することが前提として、次の策を考えるだろうな」

「え???」

「奴等は虚無関係の事を映し出す、虚無の円鏡」を持っているらしい。余たちもそれで虚無だと知られ、接触された」

「そういえば、私もいきなりウエストウッド村にジュリオが迎えにきたわ・・・もしかして今も見られている？」ティファニア

「精神力がもたないで、四六時中秘宝を使って監視しているわけでもあるまいが・・・可能性はあるな」

「え、そんな。やばいじゃん」隼人

「幸い、私達は高性能な「スキルニル」を作って、それに能力の大部分を移してこっちにきているから、見られるにしてもロマリアにいる人形のほうだけど・・・」シエフィールド

「わたしの裏切りはばれている可能性がある・・・それに、私が孤児をゲルマニアに移したら、ますます疑われる・・・」

「ふむ。大事な者たちなら、半ば人質のようなものだろうがな」ジヨゼフ。

しばらく考え込む一同

「それに、あの会議でやたらと大軍を要求したのも、不自然な感じがしたな。ゲルマニアの作戦は合理的かつ最上のものだ。単純な者にはわからぬが、教皇やその側近に理解できぬはずがない。なぜ大軍の指揮権を要求するか・・・」

「もしや・・・相手をエルフと見せかけて、ゲルマニアに侵攻？」シエフィールド

「ええ！！そこまでやりますか？」隼人

「当然だな。隼人を暗殺したらゲルマニアと戦争になる事ぐらい折込ずみだ。奇襲をかけるだろうな」

話がどんどん大きくなる。隼人は自分の甘さをしり、恐怖した。

「すみません。俺はやっぱバカです。そんな事思いもしませんでした・・・」

「それだけ平和に生きてきたと言う事だ。権謀術数に揉まれる経験

など辛いだけだ。自分の力が足りんと思えば信頼できる味方を増やせ。下手に小利口になるよりよっぽどマシだ。」ジョゼフ。

はい、お願いしますと素直に頭を下げる隼人。

「まあ、すべてが終わったら、また酒にでもとことん付き合え」「ニヤツと笑うジョゼフ

「こういうときは、まず現状認識だわ。貴方達の能力を包み隠さず教えてもらえる?」シェフィールド

「えっと、俺の能力は『瞬間移動』『異世界移動』『物品召喚』ですわね」

「私はいまのところ『爆発』『記憶操作』です。」ティファニア

「瞬間移動はどんなところにもいけるの?」シェフィールド

「ええ、自分が行った事がある場所なら」

「異世界か・・・ニホンというところか。どんなところかね?」ジョゼフ

「はい、ゲルマニアの何百倍も人がいて、発展しているところです。

魔法は使えませんが、技術がハンパないです」

「まて、魔法が使えないのか?」

「はい。オルレアン公夫人も、魔力がなくなったので、毒が消えました。偶然ですけど・・・」

「そうだったのか・・・だとしたら」何か考えついたジョゼフ。

「ふむ。ロマリア滞在予定は、確か明日までだったな」

「ええ。今日の夜には帰らないと。明日『飛嶽』で出発します。といつても、俺の瞬間移動で『飛嶽』ごとゲルマニアにかえるんですけど」

「ならば、ティファニア嬢が懸念している孤児は、それでゲルマニアに連れて行くことにして、隼人は戻ってきて、『シャルル・オルレアン』でアルビオンと一緒にいこう。アルビオンについてから、余達をニホンに連れて行け。そこで、ゲルマニア側や異世界側の重要人物を集めて対策を練ろう」

「でも、その会議を始祖の円鏡で見られるんじゃないですか？」

「魔法が使えぬ異世界なら、見られることもあるまい」

「あつ……ジョゼフさん。頭いいですね」

「ふふ……無能王と言われているがな」

「無能なわけではないですよ……でもちよつと安心しました。」

「孤児はすんなり行かせてくれるでしょうか……」ティファニア

「今の段階では、ティファニア嬢の協力は必至だからな。養ってくれるところを見つけたといわれれば、断れまい」

安心するティファニア。

「それじゃ ロマリアに帰るか。これから忙しくなるぞ」ジョゼフ

四人はロマリアに帰った。

次の日

「それじゃ、ゲルマニアに帰ります。一カ月後にまた来ます」『飛嶽』に乗り込む一同

孤児たちも一緒である

「バイバイ。テファ姉ちゃん。姉ちゃんも早くきてね」

「うん。聖戦が終わったらすぐに行くからね。いい子にして待って」テファ

その様子を冷たい表情で見つめるジュリオ達であった。

「瞬間移動」一瞬で『飛嶽』の姿が消える。

しばらくして隼人だけ戻ってきた。

「それじゃ、アルビオンに行きましょう」隼人は『シャルル・オルレアン』に乗り込んだ。

「しかし、なぜ隼人殿がアルビオンに……」不審そうな教皇

「なに、ゲルマニアの使者としてですよ。アルビオンに一度行けば、何回でも往復できるようになるからこれからの連絡に便利ですし」

「ゲルマニアから申し出があったのでな。まあ、アルビオンにも足

りない物はある。ゲルマニアから運べるだろう」「ジョゼフ
なにかいいたそうだったが、結局何も言わず、アルビオンに行く船
を見送った。

「何か不審そうでしたね」

「教皇側としたら、あまりゲルマニアと接触されるのは困るんだろ
うな」「ジョゼフ

「向こうについたら、スキルニルを大量に作らないと。これから使
う場面が多々あるだろうし」「シェフィールド。

そのままトラブルもなく、船はアルビオンについた。

決裂

ロマリア皇国にて

「どうして、あんな奴のいる国に子供達を託したんだ？」サイト

「ゲルマニアにはマチルダ姉さんがいるから・・・彼女が面倒を見てくれるわ」ティファニア

「別にここでもいいだろ。教皇様のお膝元だし、子供達も勉強したら神官になれるかもしれないし」

「神官になる事があの子たちの幸せになるとは限らないわ・・・あの子たちには自由に生きて欲しいの」

「だからってあんな野蛮国に。しかも隼人なんて屑野郎の助けを借りるなんて」ふてくされるサイト

「隼人さんは屑野郎なんかじゃないわ！。皆が幸せになるきっかけを作ってくれたのよ」

「はん。ただの金儲けじゃないか。それも日本と行き来できるからってだけで、別にあいつが偉いわじゃない。日本の珍しいものを持ってきてるから、野蛮な平民達が喜んでるだけさ。」

「金儲けって・・・違うわ。彼らは日本からいろいろな物や技術を持ち込んでくれたおかげで、ゲルマニアは発展しているのよ。皆幸せにくらしているわ、少なくともロマリアよりは」

「ロマリアをバカにするのか？平民達にも慈悲を与える光の国を」

「生活していけなくなった平民達にわずかな施しをしてるだけじゃない。本当に彼らのためになるなら、ちゃんと仕事を与えるべきよ。ゲルマニアじゃ、巫人でも働いて生活しているのよ」

「巫人・・・？そうか、人間の敵ですらでかい面している野蛮国か。」

人間に対する裏切りだ。ゲルマニアは異端の国でもあるんだな。これじゃますます潰すしかないな・・・」

「なんでそんな事言うのよ！！！貴方もニホンから来たんじゃない

の？」

ティファニアは珍しく怒っていた。サイトは少なくともエルフである自分を差別していないと思っていたのである。

「君こそ、どれだけの人が亜人のせいで命を落としているのかわかっているのか？エルフだって素直に我々の領地である聖地を引き渡せばいいものを。神に逆らう異端者たちだよ」

サイトは意地になって言い募る。

「そりゃ、そんな事もあつたけど、だからって殺し合いを続けるの？ちよつとも解決策を考えたら、いくらでも方法はみつかるわよ！。あそこじゃ吸血鬼の食べ物である血も商売にしまうくらい日本の人は賢いのよ。そのおかげで吸血鬼達は救われて、人扱いされるようになったわ。隼人さんなんか、私をみても『エルフなんて見慣れてる』で済ませたのよ。この人とは大違いだわ！！」

口論を続ける二人

「さつきから隼人隼人って・・・あいつが何だつてんだ。本当に正義の戦士はガンダールヴである俺だろう？あいつなんて金儲けしかできない守銭奴じゃないか。しかもあつちこつちにペコペコして頭下げて。男として情けないぜ。」

「守銭奴なんかじゃないわ！！隼人さんのおかげで、何人の人が幸せになったか。マチルダ姉さんも感謝しているわ。それにペコペコしてるんじゃないかって、誠意を持って接しているのよ。おかげで何人もの人が彼を信頼しているわ」

「普通、皆から崇められる英雄は商人じゃなくて勇者だろ？本当に世界を救うのは俺だよ。あいつはせいぜい金をばら撒いて人気取りするしかできないやつさ。心が卑しい平民はだませても、高貴な貴族や神官にはあいつの本性がわかるのさ。ルイズみたいにな」

「ルイズの件は自業自得だわ！！。ルイズは自分の使い魔を大切にしなかった。反抗されても当然じゃないの。しかも一度許されて、

これ以上かかわるなって言われてるのに、周囲の人を巻き込んで仕返したせいで取り返しがつかないことになったのよ」

「・・・君も所詮巫人か。虚無の担い手だから、ちゃんと高貴な心を持っていてとおもったけど、勘違いだったみたいだな。金持ちの隼人なんか口説かれて、尻尾でも振ったのか？」

「・・・ひどい。なんて事言うのよ・・・」

わかってもらえなくて、悲しくなるティファニア。涙が流れてくる。「ふん。聖なる力を託された俺の気持ちなんか、わかってもらえなくて結構だ。別に君なんかにこだわらなくても、俺を認めて尊敬してくれる女なんて腐るほどいるんだからな」

そのまま部屋を出て行くサイト。ティファニアはただ涙を流していた。

以前は確かに結びついていたと思っていた心が、今は刻一刻と離れていくように感じた。

その様子を、始祖の円鏡でみる教皇とジュリオ、ルイズ

「まずいですね・・・ティファニア嬢は完全に隼人側についたみたいですね」教皇

「ええ、これでは彼女の前で話した計画が漏れていると考えていいでしょう。失敗でした」ジュリオ

「やむをえません。別な策も考えておきましょう。これ以上隼人側に力をつけさせるわけにはいかない」

「ええ。その為にはガリア王とガリアの取り込みを図らねば。幸い、この間のガリア王はロマリアにずっといたので、ゲルマニアの現状を見ていませんが・・・」

「時をおいたらゲルマニアに取り込まれてしまう可能性が。一刻も早くガリア王に、真・聖戦への参加を要望しましょう」教皇

「私がガリア貴族を取り込みましょう。すでにトリスティンは完全に協力を了承してもらっています」ルイズ

「では、私はガリア王の説得を。このままゲルマニアを発展させ続けられれば、王政も崩れてしまいますということの説得します。」ジュリオ

「二人とも・頼みましたよ。後、サイト殿は協力してくれそうですが、ティファニア嬢もこの先脅威になります。いずれ始末せねばなりません。今はその事を悟られないよう、自然に振舞ってください。」教皇

「わかりました」「同意する二人。

「さて・私は聖戦の準備を整えましょう。今から手紙を書きますので、すべての諸侯に配ってください。この“真・聖戦”に参加しない者は異端認定すると。また、達成後にはゲルマニアの領土を与えると」教皇

聖戦の後にくる真の大戦は、着々と準備が進められていた。

準備

アルビオンについた次の日、スキルニルにジヨゼフの虚無の能力とシェフィールドの使い魔のルーンを移して、隼人と3人で日本に転移した。

大阪で日本政府側とゲルマニア側、ガリア側、タケダ関係者が会議をし、これからの聖戦について情報のすりあわせをする。

ゲルマニアとガリアにはアトランティスの話も説明された。

「なるほど、聖戦が達成されると、アトランティスが召喚されるということか」ジヨゼフ

「ええ、日本側としたら、アトランティスと、ハルゲニアの未開の地である擬似アメリカ大陸、擬似オーストラリア大陸を領土としたのですが、その点について承認していただきたい。代わりに、充分な技術提供をさせていただきます。すでにゲルマニア側には承認していただいているのですが、ガリア王についても承認をいただきたい。」日本政府代表が発言する

「ふふ。もともと余の土地でもない。承認しよう。我等の知らぬ進歩した技術が手に入るなら安いものだ」ジヨゼフ。

「ありがとうございます。我等はガリア国とも、誠意をもって国交を開かせていただきます」

「期待しよう。ゲルマニアの街を見せていただいたが、すごいものだったな。余も移民したいくらいだ」

「ふふ、我等も自分で驚いている有様ですよ・・・」ローラン
終始和やかな雰囲気で会議が続いた

「さて、ここからは軍事の話させていただきます。」『飛嶽』

艦長 元自衛隊将官 岡部正弘氏が説明を始める。

「まず『飛嶽』の軍備について説明させていただきます。」

全長 : 117.4 m

胴体最大直径 : 16.2 m

エンジン : ゼネラル・エレクトリックCF6-80C2ターボファン(ボーイング747後期型のエンジン) × 8

風石最大積載量 300トン(補給なしで一ヶ月の浮遊が可能)

最大速度 : 820 km/h

巡航速度 : 740 km/h

武装

シースパロー対空ミサイル8連装発射機(退役した「はつゆき」級護衛艦から取り外したもの) × 1 (船体上部)

L-90 35mm2連装対空機関砲(陸上自衛隊の退役品) × 2 (両舷中央)

M2 12.7mm単装機関銃 × 2 (両舷前部、主に曳光弾を使うための威嚇用)

TOW改 有線誘導式対地・対空中艦船ミサイル発射機 × 2 (両舷後部)

有線誘導爆弾(TOWの誘導装置をベースに、日本がゲルマニアにて独自開発したもの) 投下機 × 1 (船底)

船体上部には、シースパローの誘導用パラソランテナ(引込式)装備。

風石式 小型飛空艇 2艇 (10人乗り)

シースパローの射程距離は20km・L-90とTOWの有効射程は、最大でも4km程度です。

「飛嶽」の船体はチタニウム製で、ドラゴンのプレスにも耐えられ

ます。

総重量は約1800トンになります。

「ロマリアから出撃して、上空3000メートルを飛行。約2時間で聖地に到着する予定です。午後10時に出発して、午前0時に現地に到着。上空で風石の力により静止。暗視装置で周囲を警戒。もちろん儀式をする8人にも暗視スコップをつけてしてもらいます。おそらくエルフ側も聖地を警戒していますが、夜なので軍を編成して攻撃してくるまで時間を稼げるでしょう。攻撃をしてきたら近く前に撃破。6時間程度なら充分でしょう」

周囲も同意する

「ガリア王が推測されたように、聖戦がおわりしだい、ロマリア側から反乱される予想です。そこで、先手を打ちます。まず、儀式終了後、『飛嶽』に帰還するとき、味方側の虚無と護衛と教皇一派の乗る小型飛空艇を分けます。そこで、教皇側が乗っている小型飛空艇を打ち落とします。これで終わりです」

ずっと黙っていたシエフィールドが発言する

「発言させてください。聖戦で『シャイターンの門』が開くと、アランティスが召喚されるのはわかりました。その結果、精霊の暴走が停まるわけですが、その場合、門の近くにある精霊力の結晶である『風石』も消滅するのでは？」

「……そうですね。ということは、『飛嶽』も使えなくなる」

雄二

「計画の大幅な訂正が必要ですな。では、こうしましょう。隼人君を先行させて、件の儀式をする岩場をみせておく。そして、聖戦決行の日に護衛を含めた全員で転移。夜中に秘密裏に儀式を行い、儀式終了後、護衛により教皇一派を始末。その後、高速ヘリコプター

でアトランティスから迎えに行くということだ。「正弘

「なるほど・・・で、『飛嶽』はどうしましょう」「ローラン。

「ゲルマニアに配置し、防衛に備えればよからう。余の両用艦隊にも武器を提供してほしい。余は彼らに協力したふりをし、ゲルマニアへの攻撃が始まったら上空から攻撃し殲滅する。これで貴族は滅亡だな」ジヨゼフ

「わかりました。それでは、ミサイルと機関砲を提供し、取り付けする技術者も日本から派遣しましょう」日本政府代表

「それから、隼人君の能力についてですが、ご主人であるルイズ嬢の死か、あるいは日本に転送して魔力の喪失で能力が失われるそうです。そうになると、ゲルマニアとしても非常に困るのですが・・・」ローラン

「一応、アトランティスと日本が別技術でつながっているので致命的なことにはならないのですが、隼人君、どうおもいますか？」日本政府代表

「いいです。すっぱりルイズ殺っちゃってください。この転移能力には充分助けてもらいました。今更なくなっても惜しくありません」隼人

「いやに無欲だな。能力が惜しくないのか？」ジヨゼフ

「もともと、俺には過ぎた能力ですよ。ゲルマニアにもガリアにも充分コネが出来たし、世界をつなぐ翼を、タケダと合併させて、今後は商人としてがんばるつもりです」隼人

「なかなか言うじゃないか。いいだろう。俺の後をついで社長になれるよう、ビシビシしごいてやる」雄二

「ふふ、いいだろう。忙しすぎて死ぬほど仕事を発注してやる。覚悟しておけ」ジヨゼフ

「まだまだゲルマニアにもしてもらわない事がありますからね。頑張ってください」ローラン

「ははは、政府しても、タケダには頑張ってもらおうようお願いし

ます」政府代表。

今後の方針が定まり、概ね満足のうちに終わった。

直前

日本での会議が終り、それぞれ国にもどり、聖戦の準備をすることになった。

アルビオン

日本から戻って2日後、ロマリア皇国大使ジュリオが訪問してきた。

「これはジュリオ殿。何かお話でも？先だつての会議以外のことかな？」

「はい、われわれ貴族や神官にとって大切な事です」

「ふむ、話を聞こうか」

「はい。実は、今ゲルマニアでは好ましくない事が起こっているのです」

「・・・詳しく聞こうか」

「先日、大災厄により、ゲルマニア皇帝が死去されました。」

「しつておる」

「本来なら、後継者を立て、皇統の継続を計るのが筋。しかし、直後に平民による反乱がおき、皇族・貴族の殆どが滅ぼされました。

今、ゲルマニアでは貴族がその地位を剥奪され、皆塗炭の苦しみにあえいでいます。信仰は地に堕ち、教会から追放された新教徒が勝手に神官を名乗る始末。まさに無法状態です」

「なるほど」

「彼らは異端の技術を使い、あまつさえ亜人すら取り込んでいます。異端よりもはや異教徒。このハルケギニアの秩序を守り、混乱を避けるため、力をお貸しください」

「・・・今はお互い争っている場合ではないと思うが？」

「いえ、教皇様は、聖戦が終わった後に来る戦いをもっとも懸念されています。ガリア王家はもっとも古く尊い家柄。その王権すら

ゲルマニアの平民どもは認めないでしょう。最悪このまま放置すると、革命が起きるかもしれませんが」

「（ペラペラとよくしゃべる奴だ）・・それで、余に何を望む？」

「はい。教皇様は、聖戦のため対エルフに大軍を動員するとみせかけて、そのままゲルマニアに一気に攻め込むつもりです。ガリアの諸侯も賛成していただいています。ガリア王も参加していただきたいのです」

「余は彼らに治安維持のため軍は領地を守るよう命じたはずだが・・」

「ブリミル教徒としての義務に従い、自発的に諸侯は軍を出していただけますようになりました」

「（つまり、余の命令よりロマリアの命令に従ったという事か・・だが、これは貴族どもを潰すチャンスかもしれない）その諸侯とは？」

「はい。こちらの方々です」リストを見せるジュリオ。殆どのガリア貴族があつた。

「やむをえん。余も両用艦隊の向く先はゲルマニアにしよう。個人的に親交がある者もいるがな」

「ご理解していただいてありがとうございます」

「ただし、余は彼らに武器を発注してある。それは取り付けさせていただくぞ。後で異端だの難癖つけぬようにな」

「はい。協力していただけるのなら。出来るだけゲルマニアからも情報を引き出してください」

「ふむ・・個人的に気は進まぬが、貴族とブリミル教のためなら従おう」

ジュリオが帰った後、イザベラ姫をアルビオンに呼び寄せ、説得をするジョゼフ

「お父様は、ゲルマニア侵攻には反対なのですか？」

念のため、スキルニルのダミーを使い、さらにサイレントをかけて話すジョゼフ

「ああ、お前にも一度見てもらいたい。次に隼人が来たときに連れて行ってもらおう」

「．．．そんなに楽しい国なのですか．．．」

「ああ、そこなら、お前も姫だの騎士団長だの、面倒な事を考えなくてすむぞ。シャルロットも幸せにくらしておる」

「．．．」シャルロットの名前を聞くと、俯くイザベラ

「お前がシャルロットに対して思っている気持ちはわかる。嫉妬が半分・愛情が半分というところだろう」

「．．．お父様なんかにながわかるのさ！！」口調が変わる
「だいたい、今まで私を放っておいて、一度も父親の愛情なんか向けてこなかったくせに。しかも狂ったようなことばかりして！！私が今までどれだけ陰口叩かれてきたとおもってるのよ！！！！」

「．．．ああ、今まですまなかつたな。今の余にはそれしかいえない
「すまなかつたで済まないわよ！！叔父様まで殺して！！だから私は．．．私は．．．エレーヌに対して、あんな態度をとるしかなかった。いきなり悪の立場に強制的に立たされた者の気持ちかわかる？無理矢理自分が上だ、正しいんだってゴリ押ししなければ、私は自分を保てなかつた。そのうっぶんをエレーヌに向けて、あんな酷いことをして．．．妹のように思っていたのに．．．」

「だが．．．お前は出来るだけのことをしてやりたかつたのだろう？」
「．．．」

「オルレアン公夫人は自分に任せてくれと言った事。彼女を守るためだろう。シャルロットの名前を変えてシユヴァリエの位を与えた事。生活のため年金を与えるためだろう。トリステイン魔法学校に留学したこと。彼女の身を守るためと、将来の亡命のための地盤を与えたかつたのだろう。さまざまな任務もお前が選んでいたのだろう。引きこもつた甘えた小僧の説得・自分の護衛・イカサマ賭博の暴き。できるだけ危険のない任務を選んでいるな。本当に危険な任務が回つてきそうになると、あわてて自分のわがままな用事を思いついたように押し付けたな。どうせ火竜の卵など、その辺の鶏の卵

でも持つてきたらいいと思っていたのだろう。ふふ、シャルロットは変に真面目だから、本当に火竜山脈にいかれて、あわてて護衛を影ながら派遣したこともわかっておる」

「・・・だって、死んでほしくなかったんだもの・・・」すすり泣くイザベラ。

「・・・もういい。イザベラ姉さま。もう私は恨んでいないから玉座の影のカーテンから、タバサが出てくる。」

「シャルロット・・・ごめんなさい。私はあんな事して・・・叔父さまのことも・・・」

「もういい。叔父上は懺悔をしてくれて、もう二度と悲劇が起きないように、ガリア王家を潰すと約束してくれた」

「シャルロット・・・今、叔父上と言ってくれたの？それに王家を潰すって・・・？」

「この一族内の悲劇は、元はと言えば王位が存在すること自体が原因だ。ならば王位を捨て、平民として生きていくことが我等一族のもっとも幸せな未来だ」ジヨゼフ

「・・・そんな事できるのかしら・・・」

「・・・できる。姉さまもゲルマニアに来て。そこで新しい世を實際に見て欲しいの。」

「わかったわ・・・今までの償いをしたい。今まで本当にごめんなさい」

「・・・いい。姉さまが私を罵る時、苦しそくに顔がゆがんでいたのを私はみている。本心じゃなかったのが伝わってきた」

「ごめんなさい・・・ほんとうにごめんなさい」

二人は姉妹のように抱き合った。

数日後、ゲルマニアの街をタバサと連れ立って歩くイザベラの姿があった。まるで普通の少女のようにはしゃいで回るその姿は、幸せそうに輝いていた。

アトランティス

世界を渡る塔の中で、隼人は儀式の時に使う装備の説明を受けていた。「この対魔法スーツは、魔法を完全に無効化できます。虚無の首輪を解析して、その理論を応用しました」

「へえ・・・結構軽いもんですね」

「動作補助システムも搭載されていますから、いつもの2倍のパワーも出せます。軽く感じるのはそのせいですね。あと衝撃にも強いですから、魔法の矢や氷をぶつけられてもびくともしません。我々の技術の結晶です」

ここにいる研究者はその柔軟な発想から学会を追われ、市井にまぎれていた者が多かった。莫大な予算と自由な研究が許され、精力的に研究している。知識の間に入り浸り、ヴァリヤークの技術も殆ど再現されようとしていた。

「それにしても、なんかここ落ち着くんですよ。遙か昔に住んでいたみたいなの・・・」主任研究者 間部浩二が言う

「当然だ。お前の15代前の過去世は、アトランティスから物理世界に渡ったヴァリヤークの一人だ」ヴァリヤーク

「ええ、そうなんですか??？」

「ああ、特に優秀な研究者だったぞ。キノ・クール。その時の名前だな。魂のどこかに記憶が残っているのだろう」

「へーそんな事もあるんですね。ちなみに俺は？」面白がる隼人。

「お前はヴァリヤークの子孫だが、魂は関係ないな」ヴァリヤーク
「・・・そこは気をきかせてなんか伝説の男の生まれ変わりとかいつてくださいますよ。嘘でもいいから！」隼人
一同は笑う。

その後いくつかの装備の説明を受ける。準備は万全だった。

トリステイン王国

教皇から手紙を受け取ったアンリエッタはニヤリと笑う。

「ようやく・・・ようやくあの悪魔を殺せるのね。それに教皇からの

許可も取れたし」

鈴を鳴らして騎士隊を呼ぶ

「屈強な騎士を私の護衛に。そして、マザリーニ枢機卿をここに呼びなさい。」

しばらくして呼ばれる枢機卿

「女王陛下。ご機嫌つるわしゅう。それで、どういった御用でしょうか？」マザリーニ

「ただ今をもちまして、トリステイン国宰相の位を辞めていただきます」アンリエッタ

「ばかな・・・どういうことですか？」

「そして、マザリーニ枢機卿。いえ、このたび、貴方は枢機卿の位を解かれ、ただの平民となりました。教皇陛下の命により、新教徒として収監させていただきます」手元の手紙をみせる。

屈強な騎士に組み伏せられるマザリーニ

「あつはははは。平民の血を引く下賤の分際で、これまでよくも好き勝手していただけましたね。自業自得ですわ」アンリエッタ

「くっ・・・私を牢に入れて、どうするつもりです」

「別に何も。貴方は一応これまでの功績がありますから、一生幽閉で勘弁してあげますわ」

「私のことではない！！この国をどうするつもりかときいたのだ！！答える！！小娘」

「本音が出ましたね・・・いいでしょう。陛下の元、真なる聖戦を起こし、思い上がった平民に鉄槌を振り下ろすのですわ」

「まさか・・・ゲルマニアに侵攻を・・・」

「トリステインだけではありません。ガリアも、ロマリアも加わって袋叩きですわ。そしてあの悪魔を捕らえて、拷問して・・・」アンリエッタの顔に浮かぶ狂気

「ばかな・・・個人的な復讐のために国を賭けて戦争とは・・・私は貴方を育てそこねた。これでトリステインは滅亡だ・・・」

「あらあら、負け犬の遠吠えですの。それに貴方なんか育てられ

た覚えはなくなつてよ。衛兵、つれていきなさい」

「くつ……」騎士に引かれて牢に入れられるマザリーニ

「ああ……これでトリスティンも終わる。自業自得なのか……私はどうすればよかったのだ」

牢の中で苦悩するマザリーニ。どれだけ考えても答えは浮かばなかった

人気

ベルリンにて。

イザベラは旧ツェプストー屋敷にずっと滞在していた
毎日、タバサを連れまわして街を散策している

「ほら、このパンおいしそう。この服も可愛いわね。エレーヌちよ
つと着てみて」

この数日連れまわされて、すっかり着せ替え人形にされているタバ
サ。

ちなみに今はお揃いのメイド服を着ている。

「・・・姉さま、ちよつとはしやぎすぎ」

「ごめんね。でも今までこんな自由に過ごしたことがなかったから・
あの店は何？」

「・・・えつと、` ぱちんこ ` っていう賭博場。近寄ったらダ
メって言われている」

「いいじゃない。よって行きましようよ。」

二人で入る。何故か二人とも運が強く、10連チャン以上した。

「あー楽しい。儲かっちゃったわね・・・あ、あれ何？」

「・・・それはアイス。冷たくておいしい」

「これは？なんででしょう。パン？」

「・・・ハンバーガーとポテト」

「これいい男の写し絵ねえ。こんな精巧なの？」

「それはCD。音楽が聴ける」

「えくすごい。こんないい曲始めて。」

毎日散々遊びまわっている二人。

美少女二人で目立つので、結構話題になりつつあった。

「ここは本当にいいわねえ。これじゃ王宮なんて牢獄と一緒に。部屋の温度調節すらできないなんて遅れすぎているわ」

「・・・ニホンはもつとすごい」

「今度隼人に頼んで行きましょう。もつと見てみたいわ」
すっかり現代文明に染まりつつあるイザベラだった。

「・・・隼人は今すごく忙しい。心配」タバサ

「そうなんだ。ま、すべて終わるまでの辛抱よ。」

「・・・でも二週間も帰ってきてない。心配。」
顔をうつむいて不安そうな顔をする

「もしかして・・・隼人のこと好きなの？」

「こくんとうなづくタバサ。イザベラはすこし胸が痛んだ。

「それじゃ今日は帰りましょうか。」

二人で屋敷に帰る。トラブルはその日に起こった。

隼人はツエルプストー屋敷に来ていた。

「やれやれ・・・最近オツサン率高かったから、ここに来たら癒されるな。皆元気かな・・・」隼人

「おかえりなさい隼人さん。ご飯ですか？お風呂ですか？それとも・・・わたし？」シエスタ

「そのベタさが癒される。ただいまシエスタ」

「お帰り隼人。二週間も放っておいたんだから、今日は寝かせないわよ」キュルケ

「いきなりそれかい！！ただいまキュルケ。そういえば・・・タバサは？」

「さあ、最近お姉さんが来ているから、その相手をしてるんじゃない？仲よさそうだし」キュルケ。

「そうか・・・だったら先にお風呂に入ろうかな。本当に疲れたし、癒されたい」

「はい。じゃもちろん一緒に。隅々まで洗ってあげます」シエスタ

「先に果てたら承知しないわよ・・・ふふ」キユルケ

三人で裸になって、浴場の扉を開けた瞬間、隼人は硬直した。視界に入るのは、青い髪の美少女に後ろから髪を洗われているタバサ。

「・・・あつ 隼人。おかえりなさい」平然とした声でいうタバサ
「・・・イザベラの絶叫が響き渡り、隼人は裸で逃げ出した。」

その夜。正座させられている隼人。

その前に座っているタバサ。ぶかぶかのジャージを着ている。タバサを守るようにおそろいのジャージを来たイザベラが杖を突きつけている。

キユルケは面白そうに、シエスタは可哀相な顔をしてみている。

「あんた、キユルケやシエスタと風呂に入るって、どういうことなんだい」杖でグリグリと押す。

「いや・・・その・・・普通に皆で入っているんで・・・」

「皆？まさかエレーヌとも??？」

「・・・うん。皆で入るときもあるし、二人で入るときもある」タバサ

「ふつ ふたりに」

「あと、夜は皆で寝たりもする」

「皆で・・・まさか!!!」

「・・・私は隼人の妻・・・」赤く頬を染めるタバサ

いきなり隼人を殴りつけるイザベラ

「・・・あ、あんた。エレーヌをいくつだと思ってるんだい。こんな小さい子に手を出して。しかも皆ってなんだ!!!」

「・・・えらいすいません。言い訳の余地なしです」隼人

「あんたみたいな奴にエレーヌを任せられないよ。この子は私の可愛い妹だ!!!」

タバサを後ろから抱きしめて、シャーと威嚇する

「……でも、私は隼人の物。離れたくない。それなら、姉さまも一緒に寝る？」

「い、い、一緒に？」

「……キュルケがどうやったら気持ちよくなるか、いろいろ教えてくれた。がんばった。姉さまにも教えてあげる」

今まで面白そうに見ていたキュルケの顔が引きつる

「……こら、何言い出すのよ」焦るキュルケ

「……教えるってあんた……想像して真っ赤になるイザベラ

「ふふん。今までのバチがあたつたんです。そういうことで、隼人さんは私のもので……」シエスタ

隼人の腕をつかんで寝室に連れて行くこととする

「ダメ」「……ダメ」「待たんかいこのダメメイド」三人が止める

收拾がつかなくなった頃に、オルレアン公夫人が通りかかった。

「あら、皆さん楽しそうね。何話していたの？」

「今日タバサさんが誰と寝るかでもめていたんです」とシエスタ。残りの4人が真っ赤になる。

「あらあら、シャルロットは人気者ね。でも揉めているなら、今日は私と寝ましようか？」

「……はい、お母様」タバサ

その後、隼人とキュルケは朝までイザベラの説教を受けた。

次の日、タバサと一緒に寝たいザベラは、いろいろな手ほどきを受けて、ますますタバサに愛情をそそぐようになったので、その後、キュルケと喧嘩することが多くなってしまった。

聖戦

聖戦当日。ロマリア皇国にて。

隼人と護衛部隊のみで現れたゲルマニア軍に、ロマリア軍は不審の目を向ける。

「なぜ『飛嶽』とやらで来ないのだ。我等を愚弄するか」カルロ

「いえいえ、よく考えたら『シャイターンの門』を開いたら、精霊力を大量に消費するんでしょう？ だったら積んである風石も消滅して、『飛嶽』も墜落しますよ」

「・・・では、どうするのですか？」 教皇

「ああ、もうすでに俺は以前『飛嶽』で聖地の岩場に行ったことがありますから、そのまま転移すればいいだけです」

「帰りはどうするんだい？」 ジュリオ

「ちゃんと迎えのフネよこすから大丈夫。」

「・・・信用できないなあ。僕達の方も迎えを呼ぶけどいいかい？」

「ああ、別にいいよ。帰るところが別ならその方が効率いいし」 隼人
微妙な雰囲気漂う

「ふん。何でもいいけど、ちゃんと役目を果たす事ね」 セイバー
ーゲン

「もともとあんなフネいらねーよ。デルフにもカウンター魔法かけてもらったし、いくらエルフが来ようと俺が全部倒してやる」

「・・・」 ティファニアは無言。この一ヶ月でかなりやつれて
いる。

「テファ・・・大丈夫かい？」 隼人

「はい・・・大丈夫です」 テファ

「なに気安く名前呼んでんだよ。勝手に女口説くなよ。これから戦場にでるつてのに、これだから実戦を知らない奴は」 サイト

「（だめだなコイツは。本当におこちゃまだ）」

「それから、一応人数分の装備用意しましたんで、着てください」。それぞれに暗視スコープと対魔法スーツを配る

「暗視スコープは真夜中でも周囲が見えるようになります。マジックスーツは暖かいので、夜の海上の風にさらされても大丈夫です」
対魔法無効化機能を黙って説明する。

「暗視スコープ？このような異端の技・・・ましてこんな黒いスーツなど。我等には必要ない」

「俺もだ。そんな格好悪い黒づくめなんて泥棒みたいじゃないか」
サイト

「・・・夜儀式をするので、周囲が見えるようになる暗視スコープと言うものは使わせていただきましょう。しかし、マジックスーツというものは必要ありません。神官や騎士にはそれなりの服装というものがありません」
教皇

「（まあ、あんたら側のスーツはハリボテだったけどな）・・・わかりました」
隼人

「私は着させていただきます」「余達も着させてもらおう。風邪など引きたくないのでな」
ティファニアとジョゼフ達

「あ・・・ティファは胸のサイズがちよつとアレだから、特注したから」
胸まわりが大きいサイズを渡す

ティファが着込んだら胸が潰れてみっちりになる

「・・・よいものだな」「・・・ええ」
ジョゼフと隼人がアイコンタクトする。真つ赤になるティファ。睨みつけるシェフィールド

午後10時

「では、この時をもって、聖戦の開始です。皆、始めてください」
教皇

教皇側の護衛20人・隼人側10人・虚無の担い手4人・虚無の使い魔4人の28人が光の中に消えた。

聖地の岩場

「すごいなこれは・・・周囲が真っ暗なのに昼間みたいに見える」ジユリオ

暗視スコープの性能に皆が驚く

「時間がありません。護衛は周囲を警戒。我々はすぐに取り掛かりましょう」教皇

北に教皇とジユリオと虚無の円鏡と火のルビー

東にティファニアとサイトと虚無のオルゴールと風のルビー

南にセイバーハーゲンと隼人と虚無の祈祷書と水のルビー

西にジヨゼフとシェフィールドと虚無の香炉と土のルビー

教皇ら担い手はルビーに意識を集中し、精霊の力を集めた。

4時間後、岩場の回りはとてつもない量の精霊の力で満ち溢れていた

エルフ領 深夜1時

突然、体の中の精霊の力の減少により、苦しくなりエルフ達は飛び起きた。

「これは・・・まさか、蛮人達が、大破壊の儀式を・・・クッ。聖地監視の者達は何をしていたのだ・・・」

体の中の精霊力の減少に必死に抵抗するエルフ頭領

「緊急出動だ。軍隊を出せ」

声を枯らして命令するも、全員が床に倒れふしていた。

「このままでは・・・弱いものから死んで行く・・・しかし、もはやどうしようもない」

苦悩する頭領。彼にできる事はただ耐えることのみだった。

聖地 深夜2時

「精霊力は充分に集まりました。それでは儀式に入ります」教皇

それぞれが秘宝に触れる。それぞれに呪文が浮かぶ

「では、唱えてください」

全員が詠唱を始める。一時間はかかる長い呪文であった。

エルフ領

「なんだ・体が楽になったぞ。儀式は終わったのか・しかし、動けぬ」

精霊力の減少は止まったものの、体が動く状態ではなかった。

そのまま眠り込むエルフたち。幸いなことに、精霊力が6000年かけて溜まっていたため、

儀式による大量消費で死んだものはいなかった。

聖地 深夜3時

「呪文の詠唱が終わりました」教皇

前には天まで届きそうな巨大な召喚の扉が開いていた。

「さて、いよいよです。虚無の上級の上級の中 究極召喚魔法、オメガ・サモン、発動」

4人の使い魔のルーンが輝く、光がすべてを満たしていく

聖地 深夜4時

今まで海上だったところに、とてつもなく大きな大陸が出現していた。わずかに海面から浮かんでいる。

「これで聖戦は完了しました・・」疲労でその場にへたり込む8人

火竜山脈の風石はすこしずつ減少し、高度が下がっていた。

ベスニオ火山の噴火がおさまった。

ラグドリアン湖の洪水がおさまり、水が引いていった

ウインドボナの重力異常がおさまり、元の平地に戻った

ここに、精霊力の暴走はおさまり、聖戦は達成された。

公開

日本にて

「そうか・無事ハルケギニアにアトランティスが召喚されたか。そしてゲートの方も無事か」

日本国首相が報告を受ける

「では、アメリカや中国、EU他にも伝える。予定どおり成功したとな」

この一年、各国と水面下で調整を重ね、ハルケギニアの新領土についての地球側首脳国の承認はとれていた。

最も、金や石油を始めとする資源の安価な提供、移民の許可、日本への輸出枠の増大、各国の旧式武器の買取、各国国債の買取、そして、新世界の大陸以外の島々などの各国に対して割譲などさまざまな条件は飲まされたが。

「準備が出来次第、一般に公開する。そして移民を募る。これで景気が急回復し、第二の高度経済期を迎えるだろう」

その後、異世界とのゲートについて公表され、日本建国以来最大のニュースとなった。

新領土「アトランティス」についてはすでに「新都」という街ができてきているということ、そしてハルケギニアでの調査により、「擬似北アメリカ」「エデン」「擬似南アメリカ」「エルドラド」「擬似オーストラリア」「シャングリラ」の三つの大陸についてもすでに発見されており、日本国の領土になることが地球側の各国の承認もとれていることを説明された。

すでに噂にはなっていたが、与太話だと信じていない国民も多かった。しかし、国はすべて真実だと発表し、`タケダ`を通じて新天地に移住希望者を受け入れると周知された。

その後、ありとあらゆる物を一から建設するため、仕事量が激増し、雇用の100%達成、労働者の待遇が劇的に向上した。また、1000兆円を超える政府債務については、新領土の土地の所有権を債権化し、国債と交換、償却により消滅した。国債の代わりに土地を得た銀行等の債権者は、`タケダ`や全世界の投資家達に土地を売却し、彼らは広大な土地を得て、開発に乗り出していった。

数十年後、`タケダ`は世界で最も資産を持つ会社に成長するのであった。

アトランティスにて

「それでは、隼人君救出作戦を行う」アトランティス駐留自衛隊幹部。

高速ヘリコプター4台を聖地に急行させた。

「現地に到着まで一時間か・無事でいてくれればいいが。彼はもはや無力な若者ではない。

ハルケギニアと日本を繋ぐ重要人物だ。たとえ能力が無くなってもそれはかわらない」

「それと、戦闘機をゲルマニアに派遣。援護する」
数機が飛び立っていった。

世界をわたる塔にて

ヴァリヤークの集合体が、浩二達研究者が見守る中で消えていった。「さらばだ・・我が後継者たちよ。また会おう」歓喜に震えながら拡散していく

「さようなら・・同胞よ。貴方たちに会えてよかった。貴方方の技術はすべて引継ぎさせていただきました」浩二

「アトランティスは自動で一ヶ月ほどかけて海底に着く。何かわからなければ知識の部屋へ行け。さらばだ・・」
6000年幽閉されていた、すべての魂が天に昇っていった。

ゲルマニア

「警戒しろ。奴等は必ず攻めてくる。我々が作った国を、平民を必ず守るのだ」ローランが出軍を命令

すでに『飛嶽』による上空からの偵察で、トリステインに連合軍が集結している情報は得ていた。

旧式とはいえ、この時のために隼人が何百回も日本と往復して揃えた軍備。

人数は3万人と少ないが、異世界においては圧倒的武力を誇っていた。

トリステイン

ガリア・ロマリア・トリステイン連合軍は、旧ヴァリエール領に集結していた。その数地上軍20万人。

上空には3万人を誇る、ガリア・アルビオン両用艦隊50隻

その前方には、トリステイン空軍とロマリア空軍・ガリア諸侯空軍の合同艦隊70隻5万人。

「進軍」トリステイン軍グラモン元帥が号令する。

「真・聖戦」が始まった。

敵対

聖地の岩場

すでに儀式の後片付けが行われ、秘宝とルビーが教皇の元に持ち込まれた。

シエフィールドは土のルビーと始祖の香炉を渡す事に反対したが、ジヨゼフに「よい」と言われ引き下がった。

「（どうしてあのルビーと秘宝をわたしたのですか？ガリア王家の象徴なのに・・・）」

「（だからこそだ。これから先、余は王家を潰すのでな。正直必要ない。虚無の力もな。それに、余が断ったら、その瞬間に不意打ちされる可能性もある）」

海上の朝方は冷えこむ。ゲルマニア側は簡易テントを持ち込んでいた。

その周りに隼人の護衛とジヨゼフ達が集まる。暖かいコーヒー等が振舞われる。

「このコーヒーというのもハルケギニアには無い物だな・・・ふむ。うまい」ブラックで飲むジヨゼフ

「私はすこし苦いですね・・・」シエフィールド

「ああ。ミルクを入れて砂糖で味を整えるんですよ」隼人

「すこし入れたら飲みやすくなったわ・・・」

和気藹々としているゲルマニア。

すこしはなれた所で一人ぼつんと立っているティファニア。

「ほら。テファ。温まるよ」ミルクティーを渡す隼人

「あ・はい。ありがとうございます」「おいしそうに飲むテファ。目から涙がこぼれていた。

「・・・なんか、この一ヶ月辛かったみたいだね」隼人
「いや・・・そんな」

「おい、お前さつきから馴れ馴れしいぞ。テファにさわんなよ」サイト

「何勝手なこと言ってるんだ。俺はテファとは友達なんぞ。お前さつきからいたわる声一つかけてないじゃないか」

「うるせえ。何ならここで決着つけてやろうか。聖戦士様が相手してやるんだ。光栄に思え」デルフリンガーを抜くサイト。

彼は予想していたエルフの襲撃で活躍するといったことがなかったので、苛立っていた。

「もうやめてください。サイトさん」ティファニアが厳しい声をかけ、耳のピアスを外す。

フェイスチェンジがとけ、エルフの耳が現れる。

それを見てどよめく教皇側の騎士。平然としている隼人側の護衛

「エルフだ・・・」「彼女が裏切り者だとは・・・」「異教徒だ・・・殺せ」

「ふむ。どうもおかしい体をしていると思ったが、エルフだったか。よくもここまで我等をだましたものだな」カルロ

「本当お前等救いようがないよな。テファが聖戦でがんばった事を見てなかったのか」隼人

テファを後ろにかばっている。

「ふん。それとこれとは別だ。異教徒に死を」

「そうだ。エルフに死を」同意する教皇側

「やむをえませんね・・・ティファニア嬢の司祭の位をこの時をもって解任します」教皇

「やはり・・・やはり私は隼人さんの所でしか生きられなかったんですね・・・」

今まで味方だと思っていた人から、耳が変わった程度で罵声を浴びせられて泣くテファ

「ふん。先に裏切ったのそっちじゃないか。いいよ。そんな女、のしつけてくれてやるよ」サイト

「だったらありがたくいただきます。彼女みたいな巨乳女神、他にいるかよバーカ。なあ、みんな!!」

ワーーーーツと護衛から歓声があがる

「俺、俺の嫁に」「バカ・彼女は女神だ。誰かの嫁なんか反対だ」

「あの胸に挟まれたい」

「ふむ。余も妻が死んで久しいので・・・ボクツ」何故かジョゼフまで加わってて、シエフィールドに殴られてた。

「みんな・・・皆さんありがとうございます・・・」先ほどとは違う涙を流すテファ。

一触即発の雰囲気両陣営にまたがる

「お前、以前から気に入らなかつたんだよな。ここで決着つけてやる」サイト

「ふん。子供っぽい一騎打ちごっこか。悪いが俺は大人なんでね。そんな挑発にはのらんよ」隼人

「てめえ・・・ふん。やっぱり臆病者の守銭奴だったか。男として最低だな」

「何とでも言う方がいい。さっさと尻尾まいて帰れ」
「てめえ!!!」いきなり切りかかる

デルフリンガーが隼人の体に触れる。ギンッと音がし、表面を刃が

滑っていった。

「ばかな・・・なんで切れねえ」

「このマジックスーツは特殊な防刃加工もしてある。ただ人の力で振るった刀なんかで切れるかよ。それよりいいのか？」隼人

「ん？」サイト

見ると、四方八方から銃を突きつけられていた

「てめえら・・・」

「少しでも動くと蜂の巣だぞ」隼人

「こんなのみとめねえ。俺が勇者なんだーーーー・・・うがああああああ」いきなり周囲に切りかかるサイト

「バカ」他の護衛に切りかかっている隙に、サイトの足を銃で打ち抜く隼人

もんどりうって転がるサイト

「テファの手前、これで許してやる。さっさと帰れ。」隼人
暴れるサイトを教皇の騎士が連れて行った。

睨みあう両陣営

その時、鳴き声がして、ドラゴンが10匹ほど岩場に来た

「やっときてくれたか・・・ありがとうアズーロ」ジュリオがなでる

「よし、教皇様とジュリオ様、秘宝とルビーも忘れずに乗せる」カルロ

怪我をしたサイトも乗せられる。

「ジョゼフ様。我等と共にロマリアに行きましょう」教皇

「ふむ・・・余はゲルマニアがよこすフネとやらをみたいのな。彼らとともに行こう」

「残念ですね・・・」

「総員。魔法詠唱。全員殲滅！！」カルロが号令を下す

「この時を待ってたわ・・・」4つの指輪が輝き、極大系統魔法が飛ぶ
ドドドドーンと大きな音がして、土煙が立ち上った、

「これだけやれば骨も残るまい・ふふ。異端者に鉄槌を」カルロ
「お父様・お母様・これで仇はとつたわ・安らかに眠って」
セイバーハーゲン

いきなりダダダダダという音がして、周囲を固めていた護衛が倒れる
「な???ばかな・なぜ??」カルロが動揺する
土煙が晴れて、ゲルマニア側の姿が見える。全員無傷だった。

「バーカ。地球舐めんなファンタジー。一斉射撃。一人も逃がすな。
」隼人の号令で射撃が再開する
どンドン倒れていくロマリア側。

「ばかな・ばかな・ありえぬ・うわー」背を向けて逃げ出
すカルロ。その背中に容赦なく打ち込まれ、倒れる

「く・なんでなのよ。ここでお終いな??」セイバーハーゲン
その時、ゲルマニアとロマリアの間に竜が入り込み、プレスで威嚇
する

「はやく乗れ!!!」ジュリオが焦った声で言う
「くっ・覚えていなさい。絶対に私は諦めないわ」セイバーハー
ゲン

彼女達を乗せた竜は岩場を脱出した。生き残った者はわずか8名だ
った。

その後、高速ヘリコプターに乗り込むゲルマニア一同

「ふむ。逃がしてしまったな」ジョゼフ

「まあ、ドラゴンが間に入られたら、しょうがないですよ」隼人

「・・・サイトさん、大丈夫でしょうか」ティファニア

「あいつはお子様だから、一度は見逃した。でも、もし次に敵対し
てきたら、殺さざるを得ない。じゃないとこちらの仲間被害がで
るからね。テファもそれだけは覚悟しておいて」

「はい。私も覚悟を決めました。もうロマリアには戻りません」

「落ち着いたらゲルマニアに行こう。マチルダさんや皆が待っているよ。そこで普通に生活すればいいさ・・・」

「はい。」

隼人の優しさに、また涙がこぼれるテファだった。

空中戦（前書き）

今回の作者はにしなさとる氏です。ほぼ採用させていただきました。また、「公開」のラストの軍を変えております。確かに両用艦隊以外の艦隊もないと不自然でしたから。

空中戦

ゲルマニア首都ベルリンに向け、空中を進撃するロマリア・トリステイン・ガリア諸侯連合艦隊70隻。
その後ろにはガリア両用艦隊50隻が控える。

ところが、国境を越えてゲルマニア領内に入った直後、突然先頭の艦が爆発した。

「何！」

あわてて前方に目をこらす乗組員たち。特に視力に優れた一人の見張り員が、視程外から凄まじい速度で飛んで来る物体を認めた。

「前方より飛行物体！」

絶叫するも、物体の速度があまりに速すぎて対応のしようがない。迎撃どころか回避もできない内に、それは艦隊前方の軽巡洋艦に突入し、大爆発を起こした。

誘爆こそ起こらなかったものの、艦首を吹き飛ばされた艦は、航行不能となってそのまま降下していく。

それだけでは済まなかった。さらに6隻の艦が同じように爆発し、内半数が弾薬庫の誘爆を起こして、空中で木っ端微塵となった。

いくばくかの時間ののち、さらに8隻の艦が、同様にして撃沈される。その頃になってようやく、旗艦「チエザーレ・ボルジア」に3基のみ設置されている高性能望遠鏡が、前方に敵の姿を捉えた。しかし、たった1隻である。

見張り員は気づいた。それが、先日ロマリアを訪問した、あのゲルマニアの新鋭艦であることに。もつとも、あまりに特徴ある艦影ゆえに、見間違えようも無かったのであるが。

『もしや……』 報告を聞いた総司令官、カッシー二提督の懸念は、すぐ現実となった。ゲルマニア艦の上部ハッチが開き、何か四角い物がせり出したかと思うと、そこから何かが飛びだしたのである。

艦隊前方に位置する艦が、またもや8隻撃沈される。全隻数の1/3を失って、彼らはようやく悟った。あのゲルマニア艦には、とんでもない新兵器が装備されていることを。それが、1万マイルをゆうに超える射程と、中型艦を1発で撃沈し得るだけの威力を併せ持ち、しかも百発百中であることを。

一度には一発しか撃てないらしく、発射の間隔も結構長いのは幸いだが、その射程と命中精度だけでも大変な脅威だ。連合艦隊の装備する砲は、最大のもでも1000メートル強にしか届かない。彼らは、手の届かない位置から一方的に攻撃されるといって、屈辱的な戦いを余儀なくされていた。

シースパローの有効射程は20km以上、速度はマツハ3を超え、人間の目では、視認することすら困難な代物だ。ハルケギニアの空中艦隊に、対処する手段などあるう筈がない。

このままでは、たった1隻の艦に大艦隊が全滅させられかねなかった。

そうと判れば、カッシー二提督も躊躇はしない。 「全艦最大戦速！」

『向こうの方が手が長いのなら、接近戦を挑むのみ。どれだけ強力な武器があろうとも、これだけの数に対応できるとは思えない。包圍殲滅するのみだ』 そういう思惑であった。

ところが敵艦は、それ以上あの武器を撃つことも無く、艦隊が接近しても、ただ悠然と、その場に浮かんでいる。

『もしかして弾切れか？　しかし、それならなぜ撤退しない？』

連合側がいぶかしげに見つめる中、ゆつくりと回頭を始める敵艦。左の舷側が3箇所開いて、砲らしき物が姿を見せた。それでも連合側の疑念は晴れない。

『やはりか！　しかし、たった3門の砲で？　いや、右舷側にも3門あるのだろうから、合わせて6門か……。どんなに高性能でも、そんな少数の砲でどうやって戦うつもりだ？』

距離3000メートル。『あと少しだ。あと少しで、こちらの射程に入る……。』　連合艦隊の将兵がそう思った時、突然、敵艦中央の砲が火を噴いた。いや、「噴いた」などという形容は適切でない。その砲は、その後も目にもとまらぬ早さで、弾丸を吐き出し続けているのだから。

たちまち1隻が、百発以上の弾を撃ち込まれ蜂の巣となる。次の瞬間、その艦は誘爆を起こし、空中で四散していた。

「なんだ！　あの砲は!？」

「どうすれば、あんな速度で連射できるのだ?!」

彼らがそう叫ぶ中、またもや1隻が空中で四散する。

L-90の発射速度は毎分500発以上。2門合わせれば1000発を超える。しかも本来は、すばしい現代の航空機を落とすための代物だ。ハルケギニアの空中艦船など、射程内なら静止目標と変わらない。撃った弾の大半が命中し、敵艦を蜂の巣にしていく。口径は35mmと小さいとはいえ、マッハ3近い速度の炸裂弾は、

ろくな装甲の無い木造艦を粉碎するには充分だった。

「艦隊、一旦引け！ 両用艦隊に命令。敵艦の背後に回り込め！
包囲殲滅の体勢を作るのだ！」

提督がそう檄を飛ばす。しかし、連合艦隊の後ろから動かない両用艦隊

「ええい・・・何をしておる・・・ん？」

両用艦隊の機関砲が、連合艦隊に向けられる

「まさか・・・この場で裏切るつもりでは」

両用艦隊に取り付けられた20ミリ機関砲がうなる。

「これでは、こちらが包囲殲滅にあつたようなものです！！！」

「ええい。あの無能王め。始祖とブリミル教を裏切るとは・・・地獄に落ちるがいい」提督

2時間ほどの戦いで、連合側に残るのは、「チエザレ・ボルジア」を初めとする、12隻の大型戦艦だけとなっていた。さすがにそれらの艦は、20mm弾に表面をボロボロにされながらも、艦の深部までダメージが及ばず、撃沈するに至らない。

『戦艦だけはなんとか……』と彼らが思い始めた矢先、それまで沈黙していた、敵艦後部の砲が何かを放つ。「チエザレ・ボルジア」の見張り員は、我が目を疑った。それは、上下左右に曲がりながらこちらを追って来るのだから。

その「何か」は、「チエザレ・ボルジア」の隣にいた、ガリア

3番目の大型戦艦「エル・シド」に命中。次の瞬間、「エル・シド」は空中で爆散していた。偶然ではない。「飛嶽」の「TOW」操作員は、「エル・シド」の後部、弾薬庫がある位置を狙って命中させたのである。高温のメタル・ジェットは、「エル・シド」の装甲を易々と破り、弾薬庫を誘爆させたのであった。

「さらに後方から、すごいスピードで何か来ます」

アトランティスから飛んできた戦闘機ファントム5機。とどめとばかりにミサイルを打ち込まれる連合艦隊。

旗艦、「チエザーレ・ボルジア」は一撃で撃沈された。

それから後は、もう述べる必要は無いだろう。ロマリア・トリステイン・ガリア諸侯の連合艦隊で、生還した船は1隻も無かった。乗組員も、生きて帰った者は1/3に満たなかった。

空中戦（後書き）

あと、地上戦も募集します。迫力ある戦闘シーンが書けない自分がなさない。

地上戦（前書き）

人參々先生、セブン先生ありがとうございます。ほぼ採用させていただきました。お二人とも熱の入った戦闘を書いていただいて、本当に面白かったです。

地上戦

>> トリスティン〜ゲルマニア国境：街道 <<

山岳部を避けトリスタン方面から進軍を開始したトリスタン・ロマリヤ・ガリア諸侯連合軍

従来の歩兵・騎兵・銃器兵に留まらず、ロマリヤの陸亀に牽引された砲兵や多数のゴーレムに牽引された聖遺物・重戦車”タイガー2”。聖戦士隊による切り札である。各隊にはメイジが指揮官として配属されていた。

鉄と油と錆の匂いがミックスされそれ自体が禍々しい雰囲気をかもしだしていた。

ロマリヤ兵「あの丘を越えれば、ゲルマニア国境だ！各自プリミル様の威光と信仰を示せ！異端には死を」

ロマリヤ聖騎士の掛け声に呼応する声々。

従来1国に対して過去に類を見ない規模と陣容。彼らの頭の中は戦は鎧袖一触、戦後の利権と略奪によってもたらされる富、そして女への暴行狼藉が浮かんでいた。異端者にはどのようなことをしても神の栄光につながるのである。

しかし、連合軍は既にゲルマニア軍によって越境以前から捕捉されていた。彼らの上空2000m、風竜でさえ到達するのも困難で仮に到達できたとしても数分しか居られない極寒の高度。

普段なら鳥すらいないはずの高度に幾つかのゴマ粒が見えた。それはゲルマニアと日本の技術の合作である風石式小型偵察艇。

それによって戦闘開始前より連合軍の陣容はゲルマニアに筒抜けであった。

連合軍先頭より20kmの某地点： 砲兵隊

通信員「報告！H Qより伝達『富士に朝日は射した』繰り返します
『富士に朝日は射した』です！」
砲兵隊長「各車発射体勢に移行。観測員は、敵の位置を示せ。」
観測員「敵先頭は我が隊前方約20km、陣容は10km。更に後
方15kmに補給・輸送隊」
砲兵隊長「各車、目標敵前方集団中央！！」

地球にある日本より元自衛官と予備役による機械化部隊のひとつで
地球ではMLRSと呼ばれる車両を3・弾薬運搬車3・通信士気車
両1を備えた砲兵隊である。MLRSの編成数が少なく一見無視出
来そうな打撃力しかないように見えるが、それから発射されるもの
は地球では禁止条約にまでなったクラスター弾。高度1,000m
程で小爆発によって分解し、中の多数の子爆弾を地上にばら撒く。
これらの子爆弾の爆発によって200m×100m程度の範囲の保
護されていない兵員や軟装甲の車輛を一度に殺傷・破壊する能力を
持つ。そのロケット弾を12発搭載された日本でも虎の子の車両で
ある。

連合軍

連合軍は、国境を越え山越にゲルマニアの街の灯が間もなく見える
地点に差し掛かった。
頭上には満点の星々と2つの月が煌き、軍の輝かしい1歩を照らし
出している様に感じられた。
夜空に1筋の流れ星を皮切りに幾多の流星が見え始め、これは吉兆
でありプリミル様が必勝を約束されたなど声高に戦意を高揚させて
いた。

その流星群が夜空の端へ消えていくのではなく自分達の頭上で弾ける
爆発音によって初めて攻撃されたことを確認した。

ロマリア兵「ゲルマニアの新兵器とやらが脅威と聞いていたが、目標に満足に当れることも出来ない出来損ない無いのか。所詮伝聞は誇張である。所詮ゲルマニアの未開国よ」彼の続く言葉は頭上より降り注ぐ豪雨のような音によってかき消され、続けて悲鳴と爆音そして一面の炎によって永遠に遮られた。

続けて軽い爆発音と共に鉄の豪雨と炎による地獄絵図は中央から後方へ移動していった。

連続して前後左右から爆発が不規則で起こり、その度に人が馬が砲を牽引していた陸亀さえも癩癩を起した子供がおもちゃを投げるがごとく吹き飛んでいった。ゴーレムによって牽引されていた”タイガー2”も例外にはなりえなかった。初弾が装填されていたのである。ろつか子弾によってゴーレムが崩れていく中、内包した弾薬に引火しその破壊力は周囲に自らの破片と共に撒き散らしていった。

連合軍が大混乱に陥っている頃、ゲルマニア軍も動き出していた。

先発隊は73式装甲車20、87式自走高射機関砲5、74式戦車10という規模である

通信員「敵はクラスター弾により大混乱に陥っているもよう」

連隊長「よし、攻撃に移る。各員戦闘準備」

前方には、メイジが作った巨大なゴーレムが突っ込んでくる

隊長「ゴーレムにはかまうな、それを操っているメイジを殺せばいい。足を狙って打て」

戦車砲で打つ。動きの遅いゴーレムは、それだけで動きを止めた。

先発隊の砲撃により、大損害を受ける連合軍。

休む暇もなく、後発歩兵部隊25000人の攻撃にさらされる

全員がジープにのり、機関銃とロケットランチャーを装備しているまさに阿鼻叫喚の地獄がおこった。

魔法学院の生徒で、士官見習いとして従軍していたマリコル又は、ただ逃げ回っていた。

どうしてこのような状況になったのか、つけられた部下はどうなったのか、まったくわからない
やっと逃げ切ったと思い、その場に転がる。上をみると、影が覆った

「やった。両用艦隊だ。おい。たすけてくれえ」
両用艦隊の機銃が下を向く。マリコル又は笑顔を浮かべたまま、肉片となった。

先発隊による砲撃、後発隊による掃討、そして両用艦隊による爆撃により、連合軍はほぼ壊滅した。

ある悲劇の貴族

月 日、グラモン総司令官の演説を聞きながらこれまでの事を思
い出す、小領主の次男だが、重税で授業料も払えず学院から去り、
実家が口減らしの為、軍の門を叩くしかなかった、この先、軍隊
で使い潰される人生かと嘆いていたが、上官から3国連合でゲルマ
ニア侵攻すると言う、これは最初で最後の身を立てるチャンスだ此
処で手柄を立てれば、褒美や領地が手に入る危険でもやるしかない、
問題は自分と同じ境遇な同僚がゴマンと居る事だが、なんとしても
手柄をたててやる

月 日、明日、この山を越えればゲルマニア国境だ野営中、仲間
と手柄を立てたら如何すると言う事で盛り上がる
やはり自分の領地を貰って実家から独立するというのが大半だ、次
男三男は実家で肩身の狭い思える、手柄さえ立てれば領地が手に
入り、結婚でき家族も持てる、だが昼間進軍してる時、空に飛ん
でいたのは何だったのか？、ただの龍にしては大きすぎ、速さも比

べ物にならない・・・

月×日、ゲルマニア国境付近の森にてこれを書く・・・

どうしてこうなったのか・・・現在私の周りには10人前後しか居ない・・・他は死んだか私達と同じ様に何処かに隠れてるのか・・・始めは順調だった、国境を通過し小さな町が見えた、人影も無く、気の早い奴らは町で略奪する気で馬を走らせた、だが突然目の前で爆発が連続して置き、私は馬から投げ出され数分気を失ってたようだ、目を覚ました時見た光景が頭から離れない、長い棒が出ている鋼鉄の箱は連続で玉？を撃ちながら、動きまわり戦友達を踏み潰していく、空には煩い騒音をだしながら飛ぶ箱？は何かを出す度、爆発し逃げる戦友達文字どおり吹き飛ばす、信頼していた両用艦隊は、情け容赦なく友軍を撃っていく。

その箱達の後方で動けなくなった戦友達が平民が持つ銃？（少なくとも自分が知ってる銃はあそこまで威力は無いし連射も出来ない）で撃たれていく、
そして・・・ああ、あれは何なんだ。巨大な細長い球。まるで空を飛ぶ山だ。

私はなにを如何して逃げたのか覚えて無いが気が付いたら森の中でこうして日記を書いている・・・（もつともこれが遺書になる可能性が高いが、撃たれて止血はしたが血を流しすぎまともにもう動けない）まあ此処に居る全員似たような物だが、みな恋人に貰ったペンダントや指輪を見つめてすすり泣いている

なぜこのような事になったのだろう。私は彼女と幸せになりたかっただけなのに。

平民どもの声がする。見つけ次第頭を打ちぬかれる友。恐ろしい。こんな事があっていいはずがない。貴族である私が、平民どもによって滅ぼされるとは。

始祖プリミルは何をされているのか！！

・・・それとも、これが神の意思なのか。

・最後に不躑ながらこの手帳を見ている君に頼みたい
この手帳と挟んでいる指輪をトリストインに居るマリオンに渡して
貰いたい（住所が下に書いて有る）そして、ヨハンは最後まで君を
愛していると、

「森の中の戦死者から回収された手帳より抜粋」

地上戦（後書き）

いや、まさに能力がないなら味方に頼めを地でやってしまいましたw
策略つずまく陰険漫才なら好きただけ書けるのに・・・
皆様、本当にありがとうございました。

滅亡

トリステイン王国にて

「それでは、20万人もの連合軍が全滅したということですか！！」
「！！」アンリエッタ女王

目の前には、出陣前トリステイン軍だけでゲルマニア全土を征服してみせると豪語したグラモン元帥
ところどころ傷つき、血に汚れている

「はい。彼奴等の卑怯な先制攻撃と、両用艦隊の裏切りによって。」
グラモン

「そのような事はどうでもよろしい！！。これは貴方の責任ですよ」
ヒステリーを起こすアンリエッタ

「小官も恥を知っております。どのようなお裁きも受け入れる覚悟
です」

「よろしい。ではこの場で私自ら処刑しましょう」杖を振り上げる
アンリエッタ

「お待ちなさい！！！！」鋭い声で制止がはいる
マリアンヌ母后が入ってきた。

「止めないでください。信賞必罰は国の礎です」アンリエッタ。

「ならば、この度の戦いに参加すると決めた、貴方の罰は誰が与える
のです」

「私は女王です。この国のすべてを決定する権利をもつ者です。誰
からも罰を与えられる筋合いはありません」

「そのような傲慢な考えが、今回の悲劇を起こしたのです」

「傲慢ですと・・・私が？」

「傲慢です。私は以前、貴方に平民から手痛い反撃をつけること
もある。自重しなさいと教えたはずですよ」

「……………」

「ゲルマニアの平民達は、とてつもない武器を持つとわかっていたはず。それに手を出して、ただで済むとおもっていましたか」

「……うるさいです。お母様は今まで何もしてくれなかつたくせに「その点については謝罪しましょう。しかし、陰ながら貴方の力になろうと思っていたのです。マザリー二枢機卿に頼む事で」

「あんな悪魔に頭を下げる半平民など宰相に据えていたから、このようなことになったのです」

「……今の現状をみて、本気でそのように思っているのですか？」

マザリー二枢機卿を入牢させて以降、国の政治は半ば滞っていた。誰もまともに仕事をしていない。

横領・着服・治安の悪化。数え上げればキリがないほどである。

まともな租税の計算も行われず、徴税官が好き放題とりたて、貴族・平民達の怨嗟は国中にうずまいていた。

それらすべてに耳をふさぎ、半ば強引に出軍をしたのである。

「この戦いに勝ち、領土を増やせば、国の不満など解消できたはずです。」

「このような国がまとまっていないう状態で、一丸となつてかかってくるゲルマニアに勝てるはずはありません」

「ええいうるさい！！衛兵！！」衛兵を呼ぶアンリエッタ

「母后はお疲れの様子。部屋に案内しなさい」「はっ」

部屋に連行されるマリアンヌ。心の中で絶望しながら。

（ああ……これでトリステインも滅亡。あなた……ごめんなさい。私は国を守る事も子を育てることもできなかつた）

後ろで、処刑されるグラモン元帥の叫び声が聞こえた。

トリステインにて

すでに連合軍敗退の報は届いており、城下町は平民が殆どが逃げ出

して無人だった。

「残った軍をまとめて、奇襲をかけるべきだ」

「いや、ロマリアに亡命しよう。王統を守らぬと」

「このまま籠城して敵をひきつければ、立て直った連合軍とはさみうちに・・・」

「降伏して、なんとかゲルマニアの貴族として体裁を保てば・・・」

延々と続く会議。誰もが自分の意見を主張して、相手を貶めていた

「ふん。奇襲だと。それにまぎれて逃亡するつもりだろう」

「ロマリアに亡命か。出家したいなら自分だけするがいい」

「連合軍と挟み撃ち？そんな寝言は寝てから言うがいい」

「ふん。もはやゲルマニアにすら貴族はいないのに、我等を貴族として遇してもらえると本気でもっているのか？平民に屈することなどできぬ。恥を知れ」

もはや、城内に残っている戦力はわずかな騎士隊のみ。

逃亡する者は使用人に限らず、騎士や貴族からも出始めていた。

城内ですら美術品や宝物の盗難が横行し、城下町では盗賊が我が世の春を歌っていた。

そして、誰もがもはやトリスティンの滅亡を疑っていなかった。

そして、数日後。

一万のゲルマニア軍に取り囲まれるトリスティン城。

街は無人で、軍隊にすべて押さえられていた。

『飛獄』も上空に滞在していた。それを見て恐怖する貴族たち。

「これでは・・・もう逃げ出す事すらできない」

「城内では数日しか食料も持ちません。水も止められました」

「どうすれば・・・いつそ女王陛下を差し出して許しを請えば・・・」

城内にはこびる不穏な空気。すでに2回も女王に対して反乱がおき、玉座も反乱者の血で染まった。

外を見ればゲルマニア兵に包囲されている。彼らは余裕の表情だった。「おーい。ロイヤルビッチ！ さっさと出て来い。ゲルマニアは娼館も人手不足しているから、雇ってもらえるぜ」

「今まで俺達から搾取していた分を払ってもらうけどな」

「貴族貴族と威張っても、魔法一つ打ち返せないのか、さっさと出て来い」

「もう俺等はお馬さんに乗る必要もないんだが、騎士様の勇姿をみせてもらえませんか？」

その言葉に激昂した騎士が城門から独断で出て切りかかるも、あっという間に蜂の巣にされた。

トリステイン城内地下牢

一人の少女が歩いていた。アンリエッタである。

マザリーニ枢機卿が入られている牢の前に来る

彼は幽閉で憔悴していたが、女王が来たので居住まいを正した。

「これは女王陛下。このような場所にどういった御用で？」

「・・・連合軍は敗退しました。今では、トリステイン城はゲルマニア軍に取り囲まれています」

「やはり・・・」

「・・・先だつての無礼は謝罪します。何卒、私にお知恵をお貸しください」土下座するアンリエッタ。

「ここに至っては難しいですな・・・」

「そんな。貴方は私の先生ではありませんか。お見捨てにならないで!!!」

涙を浮かべるアンリエッタ

(ここに至って、ようやく現実を知ったのか。しかし、もはや遅かった・・・だが、私が育てたのだ、責任を取らねば)

「・・・わかりました。私が使者に立ちましよう。私の命に代えても、女王陛下と母后陛下の身は守って見せます」

「ありがとうございます・・・ありがとうございます」すすり泣くアンリエッタ。

(所詮、17歳の小娘なのだ。政治などわかるわけもない。可哀想なことをした・・・)

マザリーニはアンリエッタへの憎しみなど欠片も感じなかった。

白旗を揚げて衣服を整えたマザリーニが出る。

「私はトリステイン使者。マザリーニだ。降伏をしたい。代表者との会談を求む」

急遽会談の場が用意された

「始めまして。私はゲルマニア共和国大使、アドルフ・ヒットラーと申します。軍事の権限も委託されております」

赤毛の美青年が自己紹介する

「始めまして。私は・・・そうですね。トリステイン国使者マザリーニと申します」

「失礼ですが、宰相職にあるマザリーニ枢機卿では？」

「すでに私は宰相職も、枢機卿の位も解かれた平民です。ただ、このような時なので、臨時の大使として権限を委託されました」

「なるほど・・・ずいぶんとお疲れのご様子だ」

「ははは、恥ずかしいことながら、先ほどまで入牢しておりましたのでな。少々お見苦しいが、ご勘弁を」

「なるほど・・・わかります。貴方なら戦争に反対して牢に入れられてもおかしくない」

「いや・・・この度の戦争の責任、すべて私にあります。すでに当方

で処刑台を用意しております。貴方方のお手をわずらわせることなく、最大の戦争の責任者である私を処刑させますので、降伏を受け入れていただきたい。そして、何卒、マリアン又母后とアンリエツタ女王陛下、いや、城に残されたすべての者の命を助けていただきたい」

馬車で積んできたものをみせる。ぴかぴかに磨き上げられた処刑台であつた。

「いや・しかし、戦争の責任者は女王陛下や王族の方に帰します。それが専制国家では？」

「貴方が暗殺されそうになり、傷ついたとする。捕まえられた暗殺者は処刑されるとして、持っていた剣は？」

「ん??それは捨てるか誰かにもあげるかしますが・・・」

「なぜその場で剣を折らないのですか？」

「つまり・・・女王は道具であつたと言いたいのですか？」

「17の小娘の言う事を誰もが従う。それは彼女の意思そのものを道具として扱って、利益を求めるからではないでしょうか？」

「・・・」

「貴方方も元は商人であつたとき。取引先の意志を道具として、自らの利を追求されたりしませんか？」

「なるほど。さすがトリステインの屋台骨。貴方が入牢してなかつたら、トリステインは滅びなかつた」

「そういつていただけなのはありがたい。ならば、この骨を処分するほうが、道具の始末より優先するはずだ」

「・・・わかりました。城内すべての命を助けましょう。しかし、条件がある」

「この期に及んで飲めぬ条件など、城内の命以外にはない。なんなりと」

「貴方自身です。死なすには惜しすぎる。我等に従ってもらいますよ」

「わかりました。何でも従いましょう」

その日、トリスティンは無血開城された。

マザリーニとアンリエッタとマリアンヌは拘束され、他の者は開放された。

アンリエッタの武装解除命令書が各貴族に届き、ゲルマニアへの併合が決定された。

すでに大部分の貴族が破産寸前であったため、免責を条件に意外なほどすんなりと領地と爵位の返上が行われた。

反抗する貴族は一瞬で滅ぼされ、ここに6000年続いたトリスティン王国は滅亡した

逃亡（前書き）

今回で一応の決着はつきます。ちょっと次回からは更新がおちるかも

逃亡

ロマリア皇国にて

次々と、真・聖戦の報告が入る

「連合軍、艦隊・陸軍ともにほぼ壊滅！！ゲルマニア軍、ほぼ損害なし」

「トリステイン王国、滅亡。ゲルマニアに併合」

「ガリア諸侯。ジョゼフ王に改めて忠誠を近い、連合から離脱！！」

「ゲルマニア、ロマリア皇国に対して宣戦布告。すでにこちらに侵攻しつつあります」

「ガリア＝アルビオン、ロマリア皇国に対して宣戦布告。両用艦隊が向かっています！！」

「ロマリア南に出現したアトランティス大陸において、日本と名乗る集団が領有を宣言。同時に、ゲルマニア、ガリア＝アルビオンと同盟を発表。ロマリア皇国に対して宣戦布告！！」

ロマリアは完全に包囲されていた。苦悩する教皇一同

「まさか・・まさかジョゼフ王がすでにゲルマニアに味方していて、裏切るとは」教皇

「我々の魔法では、平民の軍隊に対抗できません。唯一の希望が奇襲でしたが・・」ジュリオ

「それに、アトランティスをすでに異世界の国家が占有していたとは。最大の脅威を自ら呼び込むとは・・ふふふ。無能ここにきわまりですね」

乾いた声で笑う教皇

その時、セイバーハーゲンが入ってくる

「教皇様。私の目的である聖戦により父の魂の開放は達成できました。次は・・・隼人の抹殺を」

「・・・今更彼一人を殺したところで手遅れでしょうが、やらないよりはマシですね」教皇

「ええ、準備は整っております」

「わかりました。聖戦士隊の利用許可を出しましょう」

ロマリア大聖堂、地下深くの空間。深夜0時

セイバーバーゲンと完全武装の聖戦士隊、そして父を殺した仇が死ぬところを見たいと、エレオノールがいた。

「ルイズ、これでどうするの？」

「私の魔力はすでに元に戻りました。ここで隼人を召喚して、出現したところを聖戦士隊の銃で殺します」

「そうなの・・・ふふ。ようやく彼に裁きが下せるのね」

「ええ、危険ですから、姉さまは下がっていてください」

呪文を唱えるルイズ。上空に光の輪が広がる

ゲルマニアにて

すでにティファニアとベルリンに戻っていた隼人

聖戦と戦争でギルドの仕事が滞っており、夜中まで書類仕事をしていた。

隣ではキュルケ・タバサとシエスタが手伝ってくれている

「しかし、俺は暇になってもいいと思うんだが・・・もう俺が直接日本から物資運ばなくても、アトランティス経由で自由に物資もつてくれるし」

「何言ってるのよ。ニホンから届いた物資をゲルマニアにもってきて、商人に卸すのが貴方の仕事でしょ。今までと大してかわらない

わよ」

「・・・がんばろう」

「隼人さん。ガンバです」

「・・・俺、金なら充分あるんだけど・・・ああ、ニートになりたい。もう充分働いた気がする」

もはや、ゲルマニア中の商人を顧客に抱えているので、隼人がいないと経済がまわっていかないのである。

「それにしてもなあ・・・もう今日はやめようよ」

そう言ったとき、足元から白い光が立ち上った

「!!!!!!!」全員に緊張が走る

「・・・レビテーション」下に落ちるより一瞬早く、タバサがレビテーションで隼人を浮かす

キュルケも手伝い、3人で浮かぶ。

「シエスタ。緊急事態よ。ゲルマニア軍に連絡」「はい!!!!!!」飛び出していくシエスタ。すぐに軍隊が到着した。

30分後

「まだ召喚の光は消えてないのですか？」隊長

「ルイズも最後の抵抗に賭けたのでしよう。しぶとく続けています」隼人達

「・・・わかりました。考えがあります。それでは、皆さん、外に出てください」

召喚の光に巻き込まれないよう、慎重に外にでる一同。

「それでは、皆さん、今より高く上がってください。10メートルほど」

三人の姿が高く上がる

「それでは、皆下がって。手榴弾用意。投げ入れろ」

隊長の命令により、召喚の光に手榴弾が投げ入れられる

ドドドーンと大きな音がして、何かが飛び出してきた。召喚の光が消える

「これは・・・人間の腕・・・」血まみれの腕が返ってきた
周囲に沈黙がおりる。

「隼人・・・ルーンは？」キュルケ

「消えてはいないみたいだ・・・ルイズはまだ生きている」隼人

「・・・でも、もう二度と召喚されないと思う」タバサ。一同も頷いた。

ロマリア大聖堂、地下

「姉さま・・・エレオノール姉さま・・・」死体に取りすがって泣くルイズ。

周囲は死体の山である。

手榴弾が破裂した瞬間、エレオノールはルイズをかばい、破片を受けて死んだ。

「隼人・・・隼人・・・あなたは、どれだけ私を苦しめれば気が済むのよ!!!」

薄暗い地下にルイズの呪詛がこだました。

その様子を見ていたジュリオ。教皇に報告する

「そうですね・・・ダメでしたか」

「彼らはもはや我々の手に余ります。何をしても対抗できません」

「わかりました。最後の手段を使いましょう」

「最後の・・・？」

「ええ、虚無の血を絶やすわけにはいきません。長い逃亡生活になります。マギ族の復権のためならば・・・」

決断する教皇

「逃亡ですか・・・わかりました」

「明日、決行させていただきます。随員は若く信仰心厚い神官と、純粹で命をも投げ出せる聖堂騎士。そして、始祖の一族である私・

ジュリオ・そしてカトレア嬢。我々が今までいただいた、浄財もできるだけ持つて行きましょう。何十年後かの復活のために。そして、
`聖遺物` を運び、`復活` にかかけましょう」
「ルイズとサイトはどうされますか？」
「サイトは所詮、平民の異世界人です。しかも怪我をしています。かまっている余裕はありません。おいて行きましょう。ルイズは・・・残念ながら始末するしかありませんね。彼女を生かしておけば、隼人の能力も消せない。万一逃亡先を知られたとき、次の瞬間大軍が押し寄せてくることになります。そんな危険を冒せません」
「わかりました・・・では、せめて私が引導を」

遺体安置室

ルイズはエレオノールの遺体にすがりつき、すすり泣いていた。
ジュリオが入ってきたことにも気がつかない
ジュリオは、いきなりルイズに向かって、銃を発砲する。`パン`
と音がして、ルイズの背中にめり込む
「ど・・・どうして」
「悪いね。君を生かしておいたら隼人の能力が残ってしまうんだ。」
「う・・・裏切り者」
「悪いと思ってるよ。君の死は無駄にはしない」
ルイズは無念の表情を残して、事切れた。

ゲルマニア

隼人のルーンが胸から消える
「・・・どうやら、ルイズが死んだようだな。思えば可哀相なことをしたな」
「仕方ないわ・・・」キュルケ
皆、なんとなく後味の悪い思いをしていた。

ロマリア皇国にて

緊急招集がかけられた

「皆さん。我々マギ族は聖戦を達成しました。しかし、思い上がった平民達に追い詰められ、信仰は破壊され、このロマリアの地も犯されようとしております。これははるか昔、ヴァリヤークに抑圧された一族の苦難の再現です。しかし、私には教皇として、マギ族を導く義務があります。ここにいる始祖の一族とともに、どこまでも付いてきて欲しいのです」

オオーーツと歓声があがる

「それでは、すぐに脱出しましょう」

ロマリア皇国から、教皇の御召艦「聖マルコー号」が静かに離れていく。

「瞬間移動」教皇は残りのすべての精神力をつかい、船ごと世界の何処かに転移した。

あてもない長い逃亡生活の始まりだった。

戦後

教皇一派がいなくなる事により、ロマリアは無血開城された。ロマリア領各都市はゲルマニアに委託され、政教分離が計られることになった。

そして、大聖堂を中心とする首都ロマリアのみ宗教国家として存続がゆるされ、神官の財産没収、莊園の開放、異端審問権の廃止が取られた。

新生国家ロマリア初代教皇には、マザリーニが推薦され、新教徒を始めとする各宗派の権利もみとめられた。

これ以後、ブリミル教は冠婚葬祭などを行う宗教としてのみ活動し、政治的影響力は貴族の没落に伴い大幅に低下した。

そして、すべてを巻き込んだ大戦が終わって5年

ゲルマニア

首都ベルリンは大いに発展していた。

高速道路が建設され、鉄道、電話、水道、電気などのインフラも日本並みに整備された。

ヴァリヤークの遺産の中に精霊石の作成方法があり、精霊石をエネルギーとする日本とはまた違った文明となっていた。

土のメイジは錬金

水のメイジは治療

火のメイジは火石の作成

風のメイジは風石の作成

火石による発電がコルベールの手により完成、電気自動車の動力源となった。

風石は飛行艇の燃料となり、需要がどんどんのびていた。

それぞれ亜人やメイジにも仕事が割り振られ、収入が絶たれた貴族も混乱は少なく、平民になじんでいった。

今まで社会になじめず盗賊等をしていた没落メイジも仕事が与えられ、治安は急速に安定していった。

そして、戦後3年目。ついに異世界間ゲートの解析に成功。

ベルリンなど各都市や新領土と日本を繋ぐゲートが建設され、自由に行き来ができた。

「皆おそいな、久しぶりの休日なのに」隼人

「皆で遊びに行くなんて久しぶりですからね〜子供も小さかったし」シエスタ。

今日はそれぞれの子供を預けて、皆で遊びに行く事になった。

「ごめん。ハヤタがぐずっちゃって」キュルケ。20代前半になり、ますます妖艶になっていた

「うちのハルトはおとなしかったですよ〜お父さんに懐いて」シエスタ。そばかすも消え、柔らかい感じの美人になっている

「・・・待たせた。」タバサ。相変わらず小さい体で、学生にしかみえない

「ハヤミちゃんは？どうしたの？」キュルケ

「・・・イザベラ姉さまに預けた。大喜びであずかってくれた」

「ああ、なんか想像つきます。タバサさんそっくりですもんね」

「みなさん。はあはあ、ごめんなさい」ティファニア。巨乳は健在である

背中に耳が長い赤ちゃんをおぶっている

「あれ？マチルダに預けてこなかったの？？」隼人

「マチルダ姉さん、今日は結婚式の打ち合わせなんです。」

「ああ、来月だっけ。コルベール先生喜んでたな・・・5年もアプロ
ーチしてたんだし」

「マチルダ姉さんもテルトが生まれて喜んでたけど、同時に結婚で
きなくて焦ってたみたいです。ふふっ」

「まあ、あの二人意外とお似合いだと思うよ。」

「年の差カップルに、大企業のオーナー同士の結婚ですからね。
ベルリンでも話題です」

「そうだよな・・・飛空船製造企業と素材製造企業のオーナー同士だ
もんな・・・」

うんうんと皆うなづく

「そっぴや、この間ジョゼフさんと会ったよ。いい年こいてシエフ
イールドさんと子供つくってたな」

一同が笑う

ジョゼフはアルビオンIIガリアに独裁制を引き、強力な指導力を発
揮し纏め上げた。

その後、各地に地方議会をつくり、中央に国家議会を開いた。

戦後2年目、自ら王政を廃止、権力の正当性を問うため統一選挙を
した結果、圧倒的支持で大統領に就任。

その後2年で突然辞任し、現在は民間人となってゲルマニアに移住
している。

「その辺をジャージきてうろつろしてんだから。この間そこでパチ
ンコしてたな」

余談だが、『ジャージの王様』として街では有名である。

「・・・叔父上もずいぶん変わった気がする。今じゃただのおじさ
ん。ハルミのこともかわいがってくれてる」

「・・・そつか。今まで散々仕事してきたんだから、もう休んでもいいよな。今度一緒に酒飲もうといつといてくれ」

この5年で、隼人はキュルケ・タバサ・シエスタ・ティファニアと結婚した。

隼人が経営するタケダの子会社「フロンティア」は地球とハルケギニアの貿易を一手に引き受け、すでにハルケギニアの大企業となっている。妻達もそれぞれの立場で隼人を支えていた。

「それじゃ、今日は仕事を忘れて遊ぼう」

皆で連れ立って街を歩く一同。それを背後からつける影があった

後ろからナイフで切りかかる暴漢

「・・・危ない」タバサが風の魔法で隼人を押し倒す

「・・・くっ」キュルケが影を殴りたおす

警官が駆けつけて、暴漢は取り押さえられた

「サイトさん??？」ティファニアが暴漢を見て驚く。

ロマリア開城の時に行方不明となったサイトであった。

「くそ・・・殺せよ。さあ」

汚れた姿で足を引きずっている。紛れもなくサイトだった。

「お前・・・どうしたんだ」隼人

「どうしたもこうしたもあるか!!!お前のせいで。テファまで奪いやがって・・・お前だけ幸せになって・・・」

「奪ったものにも・・・捨てたのはお前だろうが!!!」

「うるせえ!!!元はと言えば、テファが俺を召喚したのが原因だろうが、あのまま日本にいたら俺だって・・・」

「サイトさん・・・ごめんなさい。確かに私が召喚さえしなければ・・・」

「謝って済むか。俺の人生を返せ!!!!!!」
そのまま泣き崩れるサイト

「お前な、自業・・・」テファにさえぎられる隼人

「はい。それでは出来るだけの償いをします・・・、忘却」
優しい光がサイトを包む

「あれ？俺なんでこんなところにいるんだ？学校帰りだったんだけ
ど・・・」サイト

携帯で使用人を呼ぶテファ。すぐに迎えがくる

「この人を治療して、日本の家まで送りとどけていただけますか？」

「奥様、かしこまりました。では、こちらに」

なんだかよく分からない感じでサイトは連れられていった。

「あれでよかつたのかな？」隼人

「ええ・・・後でご両親の元に行つて、キッチンと事情をお詫びいたします。サイトさんにとっては、忘れていたほうが・・・」

テファの頬に涙が一滴流れる。

「ああ、だったら俺も一緒に行くよ。妻のことだもんな」

「はい・・・」

テファを抱きしめて慰める隼人。

「はいはい、いいからさっさと行くわよ」

「・・・独り占めは許さない」

「私たちもついていきますからね。家族のことなんだから」

「はい・・・皆さん」

家族に包まれて、テファは幸せだった。

復活

ハルケギニア大戦から50年後

一人の偉人が死を迎えようとしていた。

彼は自らを凡人だと常に言っていた。特殊な能力を持っていたのはわずか2年たらず。それも偶然に得たものだったと。自分がしたことは、人と人、国と国を繋いだことだけだと。高貴な精神も持つておらず、妻も4人も持ったと。

しかし、人々は彼をたたえた。どれだけ彼が否定しようと、彼を尊敬しつづけた。

決して高貴ではない、しかし誰よりも優しく奢らず人に尽くし続けた貴方は偉人だと。

「平凡なる英雄」と呼ばれた男。 武田隼人

彼はそのすべてを繋ぐ心で、ゲルマニアとつながった。日本とつながった。ガリア・アルビオン改めガリビオンとつながった。

平民とつながった。亜人とつながった。そして、最後にはエルフとも貴族ともつながった。

彼が育てた企業は、世界中の物流を支配し、富を自らに溜め込まず、社会に還元した。

世界は彼のお陰で、すくなくとも今までより住み良い公平な社会となった。

彼の枕元には4人の妻、10人の子供、27人の孫、4人の曾孫が

揃っていた。

「ひいおじいちゃん。しんじやだめ。」泣きながらすがりつく青い髪の幼い少女。その髪が優しくなでられる。

その場にいる誰もが、偉大な一族の総帥の死を悲しんでいた。

「大丈夫だよ。タバサ。皆ともきつとまた会える。わしは一足先にいっだけさ」曾祖母の別名を継ぐ曾孫につげる。

「皆にも言う。何を悲しむ。わしは親にも見捨てられた境遇から、偶然を得て世界第一の富豪となり、妻や子や孫の死をみることもなく先に死ねる。これほど幸せな人生があるか」

「あなた・・・」赤い髪・黒い髪・青い髪の老女、金髪の中年女性が泣き崩れる。

「皆仲良くな・・・大いなる意思のもと、また会おう」
そのまま息を引き取る隼人。

その日、世界を救った英雄の死に、殆どの人間が喪に服した。

そのころ、東方「ロバ・アル・カリイエ」沖の名もない島。
一心に祈りをささげる、法衣姿の老人。

「ついに・・・ついに完成した。我が生涯をささげた、虚無石」
空に浮かぶ、巨大なダイヤモンドのように輝く石。

その下では、若い女の死体があった。ミイラのように干からびている。

「いつものように、丁寧に埋葬しろ。復活の礎となった兄弟だ」
「はっ」聖堂騎士の服装をした若者が死体を運ぶ。

教会の裏には、何十もの墓があった。それぞれに墓標が立てられている

「ジョゼット」「マリー」「ミルフィー」他。

騎士は恭しく礼をし、女を埋葬した。

「教皇様・・・とうとう」月目の老いた男ジュリオ。

「ああ・・・長年にわたる我等の苦難も、これで報われる」教皇と呼ばれた男、ヴィットリオ。

「それでは、さっそく準備をいたします。秘宝と聖遺物を」

中央に浮かんでいる虚無石。その下に聖遺物と呼ばれたもの。

その周囲に4つの秘宝が並べられ、ヴィットリオの指には4つのルビー。

「この虚無石には、40人以上の虚無の担い手の魔力と命が結集している。これを使えば・・・」

うやうやしく聖遺物を巻いている布をとる。

中から固定化をかけられた、若者の死体が現れた。胸に大きな切り傷がある。

「我等が始祖、偉大なるブリミル様。今、最後の使命を果たします」
ヴィットリオ

「おじいさま・・・いよいよなのですな。」桃色の髪の少女が入ってくる。

「ああ、聖戦に殉じたお前の祖母も大叔母も喜んでくれるだろう。」

「ルイズ」髪をなでるヴィットリオ。

「ルイズという名前は、祖母の妹の名前から取られたとか」

「ああ、勇敢な虚無の担い手だった。卑怯な平民と最後まで戦ったのだ」

「私は平民が嫌いです。平民におもねて誇りを失ったメイジも嫌いです。聖戦以前の、真に誇りを持った貴族の世の中をとりもどすため、私はすべてをささげます」

「ああ、今から我等が主を取り戻す。復活に立会い、彼にすべてをささげよ」

「はい。心得ております」熱い視線を若者の死体に注ぐ。

「それでは始める。虚無の上級の上級の上、始祖体再生」

呪文を唱える。周囲におかれた秘宝が反応する

虚無石から一筋の光が若者の死体に降り注ぐ。みるみるうちに傷口が癒える。

ドクンという鼓動が胸から発せられる、どんどん血色がよくなっていく死体。

いや、すでに蘇生していた。

始祖の祈祷書と水のルビーが破壊される

「次に、虚無の上級の上級の上級、始祖魂召喚」

ゲルマニアでパン屋の店員をやっているポールは悩んでいた。

意中のマリリンをどうやってデートに誘おうかと。

彼はもてるタイプではなかったので、自信がなかったのである。

いきなり、胸に衝撃がきた。

「なんだ・・・これは。いたい。グッ」倒れるポール

おい、どうしたんだと周囲の人がゆすっても、何の反応もおこさなかった。すでに植物人間となっていた。

始祖と呼ばれていた若者の目が開く

「おい、ここはどこだ。お前等はなにしてんだ。くそ、うごけない」始祖の香炉と土のルビーが砕け散った。

「次に、虚無の上級の上級の上、始祖記憶召喚」

かなり小さくなった虚無石から一条の光が空に発せられる
、大いなる意思」と光がつながり、ブリミルの記憶と人格と能力が
集められ、若者の体に入っていく
始祖の鏡と火のルビーが砕け散った。

「次に、虚無の上級の上級の上」始祖復活「グッ 血を吐く教皇
「おい・・なんだこれは・・うわぁー」

何者かの声が聞こえる

「お前は私の魂の転生体だ。お前の真の名は始祖ブリミル。今こそ、
真の自分に戻るのだ」

「ふざけるな。俺はポールだ。明日マリリンをデートに・・・」
「ポール」の記憶と人格が、ブリミル」の記憶と人格に侵食されて
消滅する。

虚無石が消滅する。始祖のオルゴールと風のルビーが砕け散った。

すべての儀式が終了した。

「我は始祖ブリミル。今、ここに完全に復活した」

「おお・・我等が救世主よ。」瀕死のウィットリオ。跪くジユリ
オとルイズ。その後ろには、何人もの聖職者の姿があった。

「お前達の望みはわかっておる。マギ族を救うため、お前達を導こ
う」

歓声があがる。

・復讐の鎖はどこまでもつなげていく。人の世があるかぎり。歴
史はくりかえす。何度でも・・

—————完—————

復活（後書き）

やっと完結しました・・

ここから先は誰か書きたい人がいたらお譲りします。

最終話（前書き）

真・最終話です。

最終話

終りの始まりは静かに始まっていた。

発端は株価の暴落であった。

「なんだ、一週間連続ストップ安だと！！！！」

金融関係者が真っ青になった。しかし、悲劇はここでは終わらなかった。

錬金によって安定的に供給されてたレアメタルや貴金属の減少が始まったのである。

土のメイジ達の一部が姿を消し、原材料が高騰した。

水のメイジ達の一部が姿を消し、医療関係者がパニックになった。

火のメイジ達の一部が姿を消し、火石が需要を満たせず、運送が滞った。

風のメイジ達の一部が姿を消し、風石が需要を満たせず、飛空艇が飛ばせなくなった。

精霊石関係はあわててエルフから輸入を増大させたので致命傷にはならなかったが、この事件は久しく感じなかった社会不安を呼び起こした。

治安関係者が必死に行方不明者の搜索をした結果、浮かび上がった組織があった。

秘密結社『貴族』

100億工キユーを超える資産と、各国に深く浸透する賛同者を抱える組織。

構成員には、以前爵位持ちの貴族の子孫が多く含まれ、結束も固い。没落したとはいえ、多くの資産を持つ元貴族が母体になって作られた組織だった。

ゲルマニア公安局

「彼らは『貴族』という組織の構成員でした。父祖から過去の貴族の栄光を聞かされ、復権を誓うものたちです」

「ばかな・・今の世に貴族など、時代錯誤もはなはだしい」局長

「それが、彼らには絶対的に崇拜している存在があるようなのです」

「それは？」

「始祖ブリミルの復活」です」

「ブリミルだと・・ばかな。私もブリミル教徒だが、始祖が復活などありえない」

「今の世の新教徒の教義であれば、ブリミルや魔法絶対主義などありえないでしょう。しかし、原理主義者なら？」

「ロマリアの残党か・・ええい。今になって。わかった、政府に協力を要請する」

各国間の懸命な搜索により、東方「ロバ・アル・カリイエ」に『貴族』構成員が集結していることがわかった。

各国連合軍が急遽編成され、集結地に向かう

ロバ・アル・カリイエ ゴルゴダの丘

見渡す限り、貴族達で埋まっていた。その数5万人。

丘の上に立つブリミル。傍らにはヴィーットリオ、ジュリオ、ルイズ。そして聖職者たち

「皆様。今までよく耐えてくれました。平民に膝を屈したフリをし、屈辱に震えても今日という日を待っていたいたいた方々。貴方方こそ真の貴族です」 ヴィーットリオ

「ウィーッ」と歓声があがる。「始祖の栄光あれ」「真・教皇」「平民に鉄槌を」「ロマリア篡奪者に死を」

ヴィーットリオが手を挙げる。しんと静まり返る群集

「皆様、我等が6000年にわたり、ずっと守ってきた救世主。死の眠りから目覚めた真なる神。始祖ブリミルを紹介します」
再び歓声があがる。

壇上に立つ金髪の男の巨大な幻影が空に浮かびあがる

「我は始祖ブリミルなり。我が子孫達よ。今こそ我と共にあるべき威厳のある声が脳裏に響く。誰もがこの男を始祖ブリミルだと疑ってなかった。

上空に数十隻の戦艦が飛んでくる

「目標確保。砲撃します」

「バカなやつらだ。いまだき魔法なんて・・・かるく殲滅しろ」

打ち込まれるミサイル。爆発前にすべて消滅した。

「・・・バカな、消滅だと？対魔法消滅システム搭載のミサイルだぞ？」

丘には結界がはられ、一定距離に近づいた物体はすべて分解され消滅していた。

「ダメだ・・・これは未知の魔法だ。いったん引け。衛星から攻撃だ」

「ふ・・・愚かな者たちよ。極大消滅魔法、メギド」

ブリミルが手をふる。視界に入った艦隊すべてが分解された。

「衛星からレーザーを掃射」

「ダメです。反射され、衛星が破壊されました」

「核ミサイル発射許可！！！！！！」

「結界域に入ったところで消滅！！！！」

「ダメだ・・・打つ手がない。ブリミルの復活は本当だったのか・・・へたり込む司令官。」

世界は再び魔法の力で蹂躪されようとしていた。

これがブリミルの真の力。数万人のメイジの魔力を統合し、虚無に変換できるのである。

物理兵器。光学兵器すべてが無と貸した。

「それでは、今から平民ども、亜人どもに鉄槌を下す。皆、意識を集中させる」

ブリミルの命により、魔力を集中させる貴族達

ブリミルの胸からルーン文字が飛び出し、すべての貴族の胸にリーヴスラシルのルーンが刻まれる

数万人の復讐のリーヴスラシルとなった貴族

「虚無の最上級の最上級の最上級。究極封印呪文、世界封印」

数万人の唱和が重なる。ロハ・アル・カリエ以外のすべての土地を狭間に消す事を目的とした魔法。

衛星からの映像でその光景をみていたすべての人が、絶望に包まれた

意識を集中していたブリミル。その精神にか細い声が聞こえてきた

「・・・やめなさい」「やめろ」「やめんかい」「いいかげんにしろ」
声が段々大きくなる

「何者だ・・・どこにいる」

「何者だじゃないわよ」突然、前に青い髪の少女が現れる

「お前は・・・ふん。私の力になった魂か。何の用だ」

「私はジョゼット。最初に生贄にされた虚無の担い手、貴方を止めて見せる」

「ふん。どうやって？」

『『俺達の力でだ』』』数十人の姿が現れる

『『ポール ポール。目覚めなさい。貴方はブリミルではない。貴方はポールよ』』』

「バカめ・・・あいつは我が魂の転生体。我そのものだ」

「違う！！！」

「何????？」

「俺はポールだ。皆が力を与えてくれた。俺はポールだ！！！」

「バカな・・・私の魂自体が逆らうだと！！！」

「皆、力を貸してくれ、この場に集まった虚無の力で、この丘ごと封印する」

「なに・・・バカな。止める。我と同化し、世界をこの手に・・・」

『『世界なんていらなんだよ！！！！！！！！！！』』』

絶叫が起こり、ゴルゴダの丘に集結した数万人ごとが光の中に消えていった。

「ここはどこだああああ」数万人の絶叫が虚しく木霊する、一片の光もない世界。

教皇もジュリオもルイズも成す術がない

「ブリミル様・・・始祖様。助けてください。たすけて・・・」ルイズ。ブリミルの魂は、すべての力をなくし、虚空をさまようだけであった。

すべてが消えうせ、地面が抉られた巨大なすり鉢上の穴の中で、一人の男が立ち上がった。ブリミルの姿をしたポールである。隣には数十人の影が。

「俺だけ生き残って・・・いいのかな？」ポール

「いいのよ。あの瞬間、魂が二つに分離し、ブリミルの魂ごと貴族たちは狭間に永遠に封印されたわ。もはや永遠に生まれ変わることもない地獄へよ。リーヴスラシルのルーンも、ブリミルの魂が半人

分になったことで消滅しているわ」ジヨゼット

「そうか・俺は魂が半分だけになった抜け殻か・」

「しっかりしなさい。貴方の寿命がつきるまで、私たちの魂が一緒にいてあげるから」

ポールの体に影たちがはいり込む。心に力が戻ってくる

「とりあえず・帰ったらマリリンをデートに誘おう。今ならなんでもできそうだ」

足取りかるく歩き出すポール。歴史には刻まれない英雄だった。

.....真・完結.....

最終話（後書き）

次からは外伝をポツポツと。

外伝 ジュリアン

ハルケギニア大戦後10年。

ゲルマニアの大学をやっと卒業できた僕は、新聞社に運良く入社できた。

いくら景気が良いとはいえ、新聞社は新しく出来た業種で良い待遇なので、競争率も高い。

でも、本当に良い世の中になったと思う。

、言論の自由、なんて僕の子供の頃にはまったくなかった。

僕達平民は一生生まれた村から出ない人生を送る人も多かったのだ。

いくら自由な世の中になったとはいえ、異世界にまで一年留学できたのは、姉の旦那のコネ以外の何者でもない。

僕は平民出身で子供の頃教育も受けてなかったので、周りの貴族出身や金持ち出身の学生より明らかにハンデがあった。

最も、そんなもの帳消しするくらいの強力なコネもあったのだが……。

義兄の顔に泥を塗りたくないから、自分なりにがんばってきたつもりだった。

「ほう。君があのある有名なハヤト・タケダ氏の義理の弟にあたる、ジュリアン・ササキ君か」

出社の日、いきなり社長から言われた。値踏みするような視線。

この社長が貴族出身だという事は知っている。

「はい！！。よろしくご指導お願いします！！背筋を伸ばし、礼をする」

「ふん。まあ、足手纏いにならないようにな。まったく……なぜ平民なんかを……」

最後の方は小声だったが、ジュリアンには聞こえていた。

「もう行ってよろしい。彼の下につき、学ぶようにな」

「始めまして。私が君を預かることになったジーク・マクシミリアンだ。よろしく」

30代くらいのまだ若さが残る青年だった。どうやら、彼が上司になるらしい」

「マクシミリアン君。君の名はジーク・フォン・マクシミリアンだ。名前は正確に名乗りたまえ!!」

「はいはい。しかし、フォンの敬称は省いても正式なものとして取り扱われるよう改正されましたからね」時代の最先端をいくべき新聞社はいち早く取り入れないと」

「もういい・・・二人とも行きたまえ!!!」社長が不機嫌になる二人は失礼します と言つて、部屋を出た。

「ははは、災難だったね。いきなり嫌われたみたいだ」ジーク

「・・・義兄のことを引き合いに出されるのは慣れていませんからね。義兄からも言われています」

「ほう。面白い。どんな事かな?今じゃ彼の言葉は口から出るだけで金になるって言われているからね」ぜひ聞いておきたい」

「将来新聞社に入りたいって相談したときに、『タケダ』じゃなくて別のとこにいくなら、入社以降は俺のコネはあまり使えない。

そのコネを利用しようとする人と、そのコネを嫌う人に分かれて揉まれることになるだろうから、利用しようとする人と仲良くなつておけ』って」

「ほう。それは面白い。それで君はどう思った?」

「いやな気分になりましたよ。俺は俺の力で周囲を認めさせてやるんだ!!!!コネを利用したがる人なんて汚いと。」って言いましてよ。

「はは、当然の感情だな。それで?」

「だったら、試してみろって、日本に連れて行かれてその新聞社で一年バイトさせられました・仕送りなしで!!!!」
「なんで？」

「日本でバイトしながら文章書いて採用されるか試してみろって。」
「ほう。それでどうなった？」

「ちゃんと日本語は書けたんですよ。知識の部屋利用させてもらったから。でも書いても書いても鼻にもひっかけられなくて・・・」

「まあ、当然だわな。それでも新聞社に来ようとおもったんだ」

「ふてくされている時に義兄が来て、俺のコネを使ってインタビュ―して、それを出してみろって。`タケダ`の雄二社長に取り計らつてくれて、話を書いて向こうの新聞社に出してみたんですよ。当然そのまま掲載されました」

「ははは・・・プライド折れなかったの？」

「折れましたよ・・・ズスタスタ」

「それでも諦めなかったんだ」

「その後、義兄から説教されました。『実際に経験しないと、自分のちっぽけさつてのわからないからって。若造の力なんてたかが知れている。お前の現時点での唯一の強みは、俺のコネで誰にでも会えて話を聞いてくれることだって。それでいいんだって。義兄もここまで力をつけたのは、自分から叔父のコネやら、『平民』のコネやらジヨゼフ王のコネを使いまくって皆の力を借りたからだって。そうしているうちに、信頼してくれるようになるし、それなりに能力も身につくって」

「いいお兄さんだねえ。普通その事に気がつくのは散々失敗して社会人になって数年してからなのに」

「ええ。だから若いうちは義兄のコネでもなんでも使いまくってやるうと開き直りました。この会社も義兄が大株主なんですよね」

「ああ、社長は以前から出版社を経営してたけど、破綻寸前で、フ

ロンティア」に買収されたんだ。社長はただの雇われだ」

「なら、自分を利用しようとする人は、自分の味方になってくれる人ですからね。裏切られたらそこまでのことです。俺自身に信頼を勝ち得る力がなかっただけで、義兄だって救えないでしょう」

「はっははは。気に入った。大いに利用させていただくよ。僕のこととはジークと呼べば良い。どうせ貴族といっても男爵家の三男だ。もともと平民みたいなもんだ。実家は没落して右往左往だけどね」
「お願いします」と頭をさげるジュリアン

「さて、それなら、君の出来る最大限のことを利用させてもらおう。ちようどいい企画がある」

「それは？」

「隼人氏のこととは散々かかれているからね。周辺人物のその後が知り、記事にしたい」

「その後？」

「たとえば、彼を殺しかけたギーシュ。彼に異世界に送られた人、民間人になったジョゼフ王、日本に送られたアンリエッタ元女王。ああ、マザリーニ教皇の本心とか、いろいろありそうだ。大衆は英雄である彼の事はよく知っているが、その他の人については案外知らないからね」

「なるほど」

「文章は好きないように書いて良い。こっちで訂正するから。情報だけ漏らさず取材してくれ。手始めに隼人氏の紹介状を持って日本に行ってくれ」

「わかりました」

後日、英雄隼人にかかわった人物の「記事は大変好評となり、出版されてベストセラーになった。」

外伝 サイト

日本に来たジュリアンは、早速脇役達への取材にまわった。

「さて、誰からするかな。やっぱり一番関心が高いのは、サイト・ヒラガ氏だよな。今は27歳か。どうなっているんだろう」

東京の平賀家に電話をする

「どちら様ですか？」

「始めまして。ゲルマニア新聞の記者のジュリアンと申します。実は、サイト・ヒラガ氏に取材を申し込みたいのですが」

「・・・息子はもうあの世界とは縁が切れています。せつかく平穩に生きていますから、そつとしておいて欲しいのですが・・・」女性の声

「いえ、決して息子様を貶めるような内容にはいたしません。ただ、あの時代を生きた方の一人として、心境をうかがいたいです」

「・・・息子はただいま大学に通っております。息子の許可を直接お取りください」

「ありがとうございます。それでは、直接お話をさせていただきます。不躰な突然のお願い、申し訳ありませんでした」

電話を切る

「さて・・・彼は今、東富士大学に通っているんだっな。直接会ってみるか」

大学に直接行くジュリアン。教室の前で待っていると、授業を終えたサイトが出てきた。

両脇に女子学生が引っ付いていて、髪は金髪に染めていた。

「始めまして。サイト・ヒラガさんですね。私は、ゲルマニア新聞のジュリアンと申します。取材を申し込みたいのですが・・・」
「ああん？取材？そんなの面倒くせえよ！」

なんだこいつは、いい年してと思いつつながら、もう一度頭を下げる

「隼人から紹介状と手紙を預かっております。それから、私は隼人の義弟にあたるジュリアンと申します。よろしくお願いします」

紹介状と手紙を読むサイト

「チツ あいつの弟か。ム力つくが、話ぐらいしてやるよ。卒業したら無条件で『タケダ』に入社が決まってんでな」

「・・・そうですか」

「あいつ等が俺にした事考えたらそんなんじゃ足りねえが、仕方ねえのさ。何しろこっちは五流アホ大学生なんでな。ついてこいよ」
サイトについていくジュリアン。駐車場の車を見て驚いた。

「これは、ジャガーの新車。なんでこんな高級車を・・・」

「後で話してやるよ。乗った乗った」

近くのファミレスで取材をする

「んで、何が聞きてーんだ」

「まず確認しますが、貴方はティファニアさんの忘却で記憶がなくなっていることになってるのですが」

「表向きはな」

「・・・どうして思い出したんですか？」

「あの糞女の虚無の力で脳の記憶を一度は消滅・・・というか封印させた。確かにな」

「それで・・・なぜ？」

「日本に送られた瞬間、虚無魔法の封印効果が消滅して、全部思い出したよ」

「ははあ・・・」

「今更もつどうでもいいが、ムカつくぜ。中途半端なことしやがって」
不愉快そうにタバコを吸う

「次の質問です。貴方のガンダールヴのルーンはどうされたんですか？」

「みてみるよ」左手をだす。ルーンが消滅していた。

「あのロマリア落城のちょっと前、俺は教皇達に見捨てられて、必死になってルーンの手で痛む足を動かして逃げ出したんだ。しばらくしてルーンが消えた。多分、あの糞女が日本に遊びにでも来て、魔力が消滅してその時契約も切れたんだろうよ」

「そういうことだったんですか・・・」

「ほんとうにあの糞女だけはムカつくぜ。その後5年間、俺が一体どれだけ悲惨な目にあったか・・・思い出したくもないぜ」

「デルフリンガーは？」

「手持ちの金が尽きたときに売っぱらっちゃったよ。ふん！その後は乞食に盗賊さ。なんだその目は。ああん？」

無意識に責めるような目をしていたのだろう。サイトに睨まれた。

「・・・いえ、失礼しました」

「お前等他人は勝手に俺を悪人扱いするが、17の小僧がいきなり異世界に呼び出されて、聖騎士だの英雄だの持ち上げられてみる。

誰でもそいつ等の役に立ってやろうと思うだろうが。そのどこがいけないんだよ」

「・・・そうですね」

「俺は被害者さ。おまけに負け組みだ。自分の意思にかかわらずそうなるよう仕向けられた哀れなピエロさ」

最初はサイトの態度にムカついてたジュリアンだったが、段々同情してきた。

「お前だってあいつの弟だって言う事で良い目を見てんだろうが。」

あのときの俺や、貴族とどこが違う」

「・・・返す言葉がないですね。」

「ふん。今更どうでもいいさ。あいつ等がこのご謝りに来たとき、思い切りぶん殴ってやったからな」

「今は義兄たちを許しているのですか？」

「金を二億ほど持ってきたからな。おまけに将来の保障付きだ。そこで手打ちだよ」

「そうですね・・・」

「二度とあつちの世界なんかに行く気はないけど、記事を書くんならせいぜい公平にな。勝ち組の上から目線で書くようじゃ、いずれお前も足元すくわれるぜ。あのと時の俺みたいにな。話は終りだ」
タバコを消して立ち上がる

「今回は本当にありがとうございました」

「ケツ」

唾を吐いて立ち去るサイト。その背中では誰かの都合で人生を捻じ曲げられた者の悲哀を漂わせていた。

原稿を書いてゲルマニア新聞に送る。

記載はサイトは幸せに暮らしているという事と、彼も聖戦の被害者の一人だという事が強調され、ハルケギニアでのサイトの悪評はかなりおさまった。

外伝 アンリエッタ

「えーっと。次はアンリエッタ元女王とマリアン又母后なんだよな。」

事前に隼人が手をまわしてくれていたお陰で、アポイントが取れた。「こんなの、確かに兄さんのコネがないと会えないわな。完全に非公開だし。考えてみたら元自国の女王様と母后様か。10年前だったら即死刑だったな。てか、そっぴやあの時に実際に牢に入れられたんだっけ。」ちよつとびびっているジュリアン。

大きなマンシヨンの玄関で、部屋名を見る

、鳥巢真理亜 義史 杏里 絵里菜と書かれている。

「ここがアンリエッタ元女王の一家か・・・緊張してきた」
勇気を出してインターホンを押す

「はい」女性の声

「事前に連絡していた、ゲルマニア新聞のジュリアン・ササキと申します」

「どうぞー」オートロックが開かれる。

部屋に入ると、優しい雰囲気女性が迎えてくれた。エプロンをしている。

「改めて始めまして。ジュリアン・ササキと申します。ゲルマニア新聞に勤めています、隼人の義弟にあたります」

隼人からの紹介状と手紙を渡す

「隼人さんですか・・・懐かしいですね」手紙を読むアンリエッタ。

「・・・怒っていらっしやらないのですか？あの、義兄がずいぶん失

礼なことをしたと聞いていますが」

隼人の英雄伝で、唯一語られないことがある。玉座にう　こした事である。

あまりに下品で品格を疑われる行為として、皆躍起になって記録を消した。

貴族達の間では長い間噂が消えることはなかったが。

事あるごとにその事を言われ、隼人はずいぶん気まずい思いをすることになった。

「ふふ、昔の話ですもの。今から思えば、子供の粗相になぜあそこまで怒っていたのか」遠い目をするアンリエッタ。

「ママー――」と声がして、小さい女の子がよちよち歩きで出てくる

「どうしたの??絵里菜?」

「えっと、ママ、うち」

「はいはい、ちょっと待ってね。お母様、すいませんけど、絵里菜の面倒をみてくださらないかしら」

「はいはい。お客様の前で失礼しますよ」奥から初老の女性が出てくる

「マリばあちゃん」女の子が抱きつく

「エリちゃん奥でいいこしてましようね」慈愛に溢れた表情

「・・・マリアン又母后もお幸せそうですね・・・元トリステイン国民としては、本当によかったと思います」

心に暖かいモノが満ちてくる。

トリステイン国民にとっては、ハルゲキニア戦争前の王室は決して嫌われていなかった。

アンリエッタもトリステインの花といわれ、その可憐さから国民から絶対な人気があったのである。

日本に送られた後のことを話すアンリエッタ。

「日本の方々は本当に親切ですわ。ハルケギニアなら死刑か一生幽閉であるところを、5年の幽閉・いや、再教育機関で、私が如何に間違っていたか、政治とはどうすべきだったかを教えてもらい、新しい「鳥巢 杏里」という戸籍もいただいて、一生日本に住むことを条件として、開放していただけたとは。また、没収された資産の保障として、十分な日本円をいただきました。再教育機関で出会った夫にも職を斡旋していただき、このような立派な家も買えて、何不自由なく生活できています」

アンリエッタが笑う。

「トリステイン国民に対しては、本当にご迷惑をおかけいたしました。私たちだけが異国の地とはいえ幸せになって、遺族の方々に對しては申しわけありませんが、せめてこれ以上のご迷惑をかけないよう、こちらで一般市民として生きていっているとお伝えください」

「はい。女王陛下と母后殿下は今とても幸せに過ごされていると、必ずお伝えいたします」

「ありがとうございます・・・」アンリエッタが頭を下げる

「それにしても、なぜゲルマニアに包囲されたとき、素直に降伏されたのですか？」

「はい。包囲されてから、2回私は暗殺されそうになったのです」

その時のことを語るアンリエッタ

一度目はトイレの時。いきなり天井がはずれ、叛乱者に暗殺されそうになった。

死の恐怖を初めて感じて、自らの糞尿にまみれて転がりであるアンリエッタ。

幸い、護衛に助けられたが、初めて感じた死の恐怖は忘れられなか

った。

二度目は玉座の前で御前会議をしていたとき。

それなりに信頼していた貴族が立ち上がり、杖を向ける。

一瞬早く魔法を放ち、自らの手で初めて人を殺した。その血が跳ね返り、自らと玉座を汚した。

「この事で、もはや私ではどうすることもできない。誰も信頼できないと思っただのです。そうした時に浮かんだのは、マザリーニ枢機卿の顔。彼はどんなときでも私を、トリステインを守ろうと努力してくれていた事を、この愚かな女王は初めて悟ったのです。いつしか、アンリエッタは泣き出していた。

「あれだけ尽くしてくれた彼に対して無礼を働き、牢にまで入れたのに、気がついたらマザリーニ枢機卿を頼っていました。まるで父にすぎる子供のよう」
「すすり泣く声が響く」

「彼はここまで事態を悪化させた私を責めることなく、単身交渉に赴き、最上の結果をもたらしてくれました。もはや彼に二度と会えない身ですが、もし貴方が会うことがありましたら、彼に対して伝えてください。『愚かな娘は、その器量にふさわしい幸せを手に入れている』と」

「わかりました。必ず伝えさせていただきます」にっこり笑うジュリアン。

その時、玄関が開いて、声がする

「ただいま」

「おかえりなちゃい。パパ」

「主人が帰ってきたようですね」

「ちよつど良かった。実は、彼にもじっくり話を聞きたいんですよ。」

外伝 ギーシュ

「ただいま」とリビングに入ってくる金髪の男性。娘を胸に抱き上げている

「おかえりなさい」と優しく微笑むアンリエッタ。

帰ってきたのは国家移民管理局職員 鳥巢義史 氏
トリステインでの名前はギーシュ・ド・グラモンといった。

「始めまして。ゲルマニア新聞記者のジュリアン・ササキと申します。隼人の義弟にあたります」

「ええ、お話は伺っていますよ。元トリステインの人とまた会えるとは懐かしい。ぜひゆっくりしてってください。私達もいろいろお話を伺いたいので、今日は泊まっていかれては？」

「よろしいのですか？」

「ええ、もちろん。妻の手料理も召し上がって、感想をぜひ元トリステインの方々にも聞かせてあげてください。杏里、今日は一人分食事を多くつくってくれ」

「ええ、もちろんですとも。今からご用意させていただきますわ」

「それでは、ジュリアンさん。こちらへ」客間に移動する二人。
アンリエッタが食事を作る間、これまでのことを聞くジュリアン

彼の評判はトリステインでは最悪に近かった。無慈悲で傲慢なまさに悪い貴族そのもので、隼人を殺しかけた人物でもある。しかし、目の前の男はどこにでもいる家庭的な良き父であり、夫であり、紳士であった。

「そうですね。ははは。故郷では私の評判はそんなに悪いですが、まあ自業自得ですがね。これじゃますます故郷にかえれないなあ」

頭をかいて苦笑するギーシュ

「僕も、実際にお会いするまではそんな印象でした。しかし、貴方はずいぶん評判とは違う印象です。隼人にこちらに送られてから、何があつたか教えていただけませんか？」

「ははは・・つまらん話ですよ。自分の力に酔い、選民意識を持っていた子供が、現実を知りちつぽけな自分を理解する。まあ誰でも経験することですけどね・・それでもよろしければお話いたしましょう」ギーシュは少しずつ語りだした。

目の前の生意気な平民を懲らしめようと思っていたら、いきなり景色が変わった。

異国の町並みのようにみえる

「さいならバイバイ」後ろから声が聞こえて、振り向いたら平民が消えていた。

「なんだ？？なにが起こつたんだ？おい君、ここはどこだ？」近くにいた平民に聞く

「???& amp ;:& amp ;;!%\$\$\$!#!\$%& amp ;:& amp ;p ;:???!(! (. . . ! ! ! ! !」

「わけのわからない事をしゃべってないで、ちゃんと話したまえ・・つて、貴族である僕をおいて、勝手に行くんじゃない」

呼び止めた平民はさっさとどこかに行く

「待てつていつているだろ！！ゴーレム」杖を振ってゴーレムを作ろうとしたが、何もおこらない

「なんだ！！！！どうしたんだ！！」こんな事は魔法が使えるようになって初めてだった。いつでも魔法は使えた。しかし、いくら杖を振っても何も起こらないし、誰にも相手にされない

「ここはどこなんだ！！！！どうなっているだーーーー！！！！」

絶叫するギーシュ。周りから奇異の目で見られる。いたたまれなくなつて、あてもなく走り出した。

それから一週間

誰にも相手にされないことが、こんなに辛いこととは思わなかった。店にはいろいろなものがあったが、金貨を差し出しても買えないのである。

怒ろうにも杖は役立たず。寝る場所は路上。勝手に食べ物を買って来たものも持っていつては、追いかける毎日。

これほど辛いことはなかった。あの平民にかかわった事を後悔する毎日。なんとか見つけだしてトリストインに帰してもらおうと、出現した所を中心に徘徊していた。

一度、あの平民を見かけたことがある。歓喜して駆け寄ろうとするも、こちらに気づかれる前に姿が消えた。

空腹と路上生活でギーシュは徐々に狂いかけていた。

「そして、どうなされたんです？」

「いやはや、恥ずかしい事に、同じ地区で万引きを繰り返していたので逮捕されてしまったんですよ」

そんなある日、制服を着た屈強な男に連れられ、建物の中に拘束された。

もうどうにでもなれと自棄になっていったギーシュ。

拘置所で奇行を繰り返した。いきなり隣の人間を殴った、ところかまわず放尿した。

手を焼いた警察は、身元不明の精神異常者として精神病院に押し付けた。

「それは・・・辛いですね」

「いやいや、たしかに辛かったです、それまでよりはマシでしたな」

部屋に放り込まれたギーシュは少し落ち着きを取り戻し、前向きに取り組んだ。

少しずつ言葉を学び、会話の内容を理解していった職員たちとも徐々に会話が成立していき、手のかからない患者として厚遇された。

そんなある日、スーツを着た男が現れ、ギーシュを連れて行った。目の前に連れてこられた男をみて、ギーシュは久しぶりに興奮した。ハルケギニアの言葉が通じるのである。

男はアルビオンの騎士だと名乗った。トリステインに侵攻したが、わけもわからず、この地に飛ばされたのだと。

トリステイン侵攻と言われて腹が立ったが、とりあえず情報交換に励んだ。

「それで、君達はハルケギニアという世界から来たと」

「ソウデス」

「ふむ・常識はずれだが、あの竜はこちらにはいない生物だ」

「ワタシタチをドウシマスカ？」

「とりあえず、保護しよう。精神病院には戻らなくていいぞ。君が正気だというのは証明された」

「アリガトウゴザイマス」

いつの間にか、平民に頭を下げるのも苦にならなくなっていた。それだけ外の世界での孤独が堪えていたのである。

その後、何人もハルケギニアから送られてきた人間が、施設に収容された。

殆どの人間は貴族だからと特別待遇を要求したが、無力な存在になつたことをすぐ思い知らされ、従順になった。

いつの間にか、ギーシュは日本に来たハルケギニア人のまとめ役のようになっていった。

そんなある日、ギーシュに衝撃が走った。新たに連れてこられた二人。紛れもなくアンリエッタ女王とマリアンヌ母后である。

「女王陛下。母后殿下。ああ、なんという事でしょう。貴方方までこの世界に送られるとは・・・」跪くギーシュ

「貴方は???」アンリエッタ

「私は陛下の忠実なる臣、ギーシュ・ド・グラモンと申します。グラモン元帥の四男です。」

「・・・グラモン元帥の息子?」二人が顔をうつむかせる。しかし、ギーシュはその表情を不安のためと勘違いした。

「もうご心配は要りません。臣が父に代わってどこまでもお力になります」

二人の表情は曇ったままだったが、ギーシュは嬉しかった。

二人と話し合い、ハルケギニアの情勢がわかってきた。トリステイン滅亡に号泣するギーシュ

「許さない・・・必ずトリステインに戻り、再興を」ギーシュ

「ギーシュどの。もういいのです。もはや再興などかなわぬ事。それより、貴方にお願いがあります」マリアンヌ

「光栄の至り。何でもご命令を」

「アンリエッタにはもはや味方はこの無力な母のみ。娘の友達になつてほしいのです」

「もつたいない。私は忠実な臣下でございます。」

「ならば、命じます。アンリエッタの友となりなさい」マリアンヌ。

・・・消え入るような声でアンリエッタが言う

「私は罪深い女王です。もはやルイズにも会えない。しかし・・・お願いしたいのです。私の友達となってください」

ギーシュはもともと彼女を崇拜していたが、その可憐さに保護欲をかきたてられた。

「わかりました。私でよろしければ、一生の友誼を誓わせていただきます」

アンリエッタはか細い声で礼を言った。

「失礼ですが・・・貴方の父上の事は？」

「その時は知らなかったよ。後から泣きながら詫びを入れられた。

マリアン又母後に一度止められたが、後から騎士に処刑させたよね」

「お怒りにならなかったのですか？」

「うーん。怒りを感じなかったといえは嘘になるが、ある意味、失敗したら処刑される覚悟をもって戦場に出たわけだからね。元帥杖は軽くない。父は常日頃その覚悟を僕達子供に説いていた。自分がその立場になったからって、逃げるわけには行かない」

「そんなもんですかね・・・」

「それに、父は幸せだったと思うよ。貴族としての生をまっとうできて。彼は古い貴族だから、新しい世に馴染めるわけがない。実際後から調べたら、兄たちも殆ど戦死か逃亡して行方不明だ。父が生きていたにしろ、貴族の没落に巻き込まれて自殺しただろうね」

「貴族には貴族の苦勞や悲劇があるという事ですね・・・」

「ああ、何が幸いするかわからない。隼人にこちらに送られてなかったら、戦死するか乞食になるかの2択だった」

笑うギーシュ

「それからどうしたんですか？」

「アンリエッタも最初は罪悪感で僕と仲良くしてくれてたんだろうが、いつしか愛し合うようになってね。国家移民管理局に採用されることになり、教育機関から出る事になったとき、彼女からプロポーズされたよ」照れて笑う

「はは、嬉しかったでしょう」

「そりゃもう。高嶺の花をつかんだ勇者の気分さ。それから三人で

暮らすようになり、子供も出来た。かなり皮肉な気分だが、隼人には感謝しているよ。彼がこっちに来たら会いたいね。お互い、大人になった気分でもう一度話をしてみたいな」

「義兄にもお伝えさせていただきます。きつといい再会ができますよ」

「貴方、ご飯できましたよ」

「おお、ありがとう。さあ、ジュリアン君も食べよう」

アンリエッタの手料理は普通においしく、ジュリアンはギーシュがうらやましくて仕方がなかった。

（俺もいつかこんな嫁さんもらえるのかな・・・今まで彼女もいないし。俺の方がかわいそうじゃん）

ゲルマニアに取材結果を伝えるジュリアン。

特に元トリスティンでの反響がすごく、いくつか非難の声もだが、幸せに暮らしている元女王一家に対して祝福する声が大半だった。

彼女らにもう一度王に返り咲いてもらおうという意見も多かったが、ありがた迷惑になるのでそっとしておこうという意見に落ち着いた。

外伝 ギーシュ（後書き）

ジュリアン君がんばっているの、誰か嫁さんを見繕うと思うんですが・誰がいいかな？

外伝 ワルド

ギーシュの取材を受けて一週間後、ジュリアンは隼人からの連絡を待っていた。

隼人からワルドはマニラに送ったと言われたからである。

政府機関を通して行方を捜しているの、見つかったらマニラに飛んで欲しいと依頼された

「しかし、さすがに無理だろ。絶対見つからないだろうな。まあ、のんびりするか」

隼人からの連絡があるまで、のんびりしようと勝手に決める。

一週間ほどして、隼人から電話が入った。

「マニラで情報をつかんだらしいので、行ってきてくれ」隼人

「え？本当に見つかったの？どれだけすごいんだよ」タケダは「電話がはいってびっくりするジュリアン

「ふふ。タケダなめんな。それじゃ、全部手配しておくから、準備だけしておけよ。」

「・・・隼人さん。もしかして、僕を便利屋として利用してない？」

「さあな？」

「絶対利用しているだろ！！！！」

「あんま深く考えるな。手紙と航空便と金送ったから、後よろしく電話が切れる。」

「あの人の手のひらで踊らされている気がするが・・・まあいいか」次の日、送られてきた航空便でマニラに飛ぶ。

現地ではタケダの通訳がいた。

ワルドらしき人物を知っているという者に会いに行く。

「ああ、ワルドーね。しばらくここで面倒見ていたよ」
食堂で太った主人が話す

「うちの店先で裸で寝てるもんだから、水かけてやったんだ。そうしたら土下座して泣き出してね。可哀相だから、メシを与えて下働きで使ってやってたんだ」

「それで、どうしたんですか」

「まあ、この間まではおとなしく働いてたんだけどね。うちの娘が年頃になってきたら色目使いだしたから、追い出したよ」
ガハハと笑う

「今はどうしているんでしょうか」

「ああ、この街にいられなくなったもんだから、出て行ったよ。どこにいったのかなあ」

「どこに行ったか分かりませんかでしょうか。」

「ちよつと待つてな。常連客に聞いてみるからしばらくして戻ってくる主人

「『パヤタス・ダンプサイト』で見たって言う奴がいるな」

「『パヤタス・ダンプサイト』？」

「ゴミすて場所だよ。そこでゴミを拾って生計を立てる奴がいるんだ」

「わかりました。ありがとうございます」

お礼を渡して店を出る

『パヤタス・ダンプサイト』はマニラから出るゴミを分別なしに持ち込む巨大なゴミ捨て場所で、そこではゴミを拾ってリサイクル業者に売る人のバラックが立ち並んでいた。

ここにいる人の収入は低く、一般人の半分から1/4くらいしかない。

皆ゴミに埋もれるような家に住んでいる。

「しかし、ここからどうやって探すか・・・そうだ」

ハルケギニア言語でスピーカーで呼びかける

「ワルド子爵 いらしたらぜひ出てきてください。お話があります」
ゴミを拾っている人はわけの分からない言葉にキョトンとしているが、一人の中年男性が転がりでる

「私だ・・私がワルドだ。子爵をもつ貴族なんだぞ!!!!」

その姿をみて、ジュリアンは目を疑った。

まず、ガリガリにやせている。全身から異臭がする。

頭はハゲていて、目は落ち窪んでいた。

隼人から聞いていた堂々とした貴族の姿はどこにもない。

「と・・とりあえず、僕はジュリアン。ハルケギニアから来ました。ゲルマニア新聞の記者です。隼人の義弟・・え？」

ハルケギニアという単語が出た瞬間に、男が土下座する

「頼む。私をハルケギニアに帰してくれ」

とりあえず、`タケダ`で保護することにして、ホテルまで連れ帰った。

食事と入浴を済ましたら、ワルドは多少落ち着いた様子だった。

「改めて自己紹介させていただきます。ゲルマニア新聞の記者です。

隼人の義弟にあたります」

隼人から託された手紙を渡す

「隼人か・・いまいます。私がこのようになったのも、彼のせいだ」

憎憎しげに顔を顰める

「いったい、何があつたんですか？」

「.....」

「実は、隼人にかかわった人に対して取材をしているんです。ぜひ聞かせてください」

「いいだろう。その代わりに私をハルケギニアに帰せ」

「それは可能です。いいですよ」
「ふん。じゃあ話してやるか」

フィリピンに来てからのことを話すワルド。
魔法が使えなくて何も出来なくなったこと。

油断していたら街のチンピラに絡まれて、もっている物をペンダント以外すべて奪われた事。

食堂に拾われて何年かすごしたが、自意識過剰な娘に嫌われてあることないこと告げ口されて追い出された事。

それからずっとゴミ拾いをして、その日暮らしをするしかなかったこと。

「この手をみる」傷だらけになった手を見せる

「こんな無様な人生に陥るなら、いつそあの時殺してくればよかったのだ・・・」泣き始めるワルド

ジュリアンは同情した

「えっと、今ハルケギニアに帰っても、とつくにトリスティンは滅亡しているんですが、それでもいいですか？」

「滅亡だと・・・どういうことだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

聖戦のこと、ハルケギニア大戦のこと、戦後の貴族の没落のことを話す。

「そんなことがあったのか・・・聖戦は達成されたんだな。母もこれで安らかに眠れるだろう・・・」

胸のペンダントをまさぐる

ジュリアンは何があったか知りたかったが、聞いてはいけないような気がした。

「そして、ルイズはどうなった。私の可愛いルイズは。」

「彼女を愛していたのですか？」

ハルケギニアでは彼女の評判はすこぶる悪い。

「当然だ。婚約者だった。いや・・こちらに来て、会えなくなっ
てから初めて愛していると気づかされた。私の人生で二番目に真剣に
私を愛してくれた女性。今度こそ私は彼女を誠実に愛す。かなうな
ら再会して、共に人生を歩みたい・・」

「ルイズは・・大戦で死亡しました」

「な・・なんとということだ!!!!!!」

しばらく泣き崩れるワルド

「今では、殆どの貴族が没落しています。ワルド領も没収されまし
た。それでも帰りたいたいですか？」

「それでもいい。私をハルケギニアに帰してくれ。死ぬなら故郷で
死にたい」

「分かりました。隼人に頼めば仕事も斡旋してくれるでしょう。」

「ああ、もう隼人に復讐しようなんて気もおこらん。どうでもいい
さ」

すべてをあきらめた表情になるワルドだった

その後、ハルケギニアに帰ったワルドは、隼人の紹介で精霊石精製
企業に勤める。

もともとスクウェアの風のメイジだったので、人より何倍も風石を
効率よく作り、10年で工場長まで上り詰めた。

その間、15以上も年下の若い女性と結婚し、周囲を驚かせた。

その女性は、`烈風カリン`の実家の一族で、困窮しているところ
をワルドが救ったとのことだった。

桃色の髪をした若い女性は最初気がすすまぬ様だったが、最後には
愛し合うようになったといわれる。

ワルドの記事を読んだ反応はさまざまだった。

貴族の没落に喝采を叫ぶもの。10年にわたる困窮に同情するもの。

しかし、これだけ苦しんだのだからもう許してやるべきだという意見が最終的には大勢を占めた。

外伝 アニエス

「さて、他に地球に来た人のその後を紹介してもらおうかな。」

日本でのハルケギニア人のまとめ役をしていたギーシュを訪ねて、相談する

「うーん。再教育機関から出た人はほとんどハルケギニアに帰っているよ」

「そうなんですか・・・行き先は？」

「バラバラで僕もあまり把握してないが・・・そうだ。アニエスを紹介しよう」

「アニエスさんですか？」

「僕のちよつと後に日本に送られた女性で、アンリエッタの親衛隊長だった人だよ。今でも手紙が来るよ」

「アニエスですか・・・懐かしいですね。私もまた会って見たいですが・・・ジュリアンさん。手紙を届けていただけませんか？」アンリエッタ

「はい、いいですよ。それじゃ僕もハルケギニアに帰って、訪ねてみます」

ギーシュとアンリエッタの手紙を持って、ハルケギニアに帰るジュリアン

ゲルマニア新聞に久しぶりに出社すると、ジークに褒められた。

「いや、すごい反響だよ。早く次の人記事にしてくれと電話や手紙がどんどん来ているよ」

「そうですか・・・」

「どんどんやってくれ。自由に動いていいから。もう一つ担当してもらった、日本紹介のコーナーは別人に任せるから」

「わかりました。じゃ、これからハルケギニアで動きますね。」

「頼むよ。君の取材のおかげで、発行部数が急激に伸びているよ」

「はい、がんばります。とりあえず、次はアンリエッタ元女王の親衛隊長アニエスさんに会いに行こうと思います」

「どこに住んでいるんだい？」

「元トリスティンの、アングル地方ダングルテルだそうです」

「ダングルテルか・・・10年前の『宗教改革』は知っているよね」

「ええと・・・？確か・・・」

「じゃ勉強してから行って。資料室に当時の記事があるから」

「・・・はい」

資料室で勉強するジュリアン

『宗教改革』は、今の宗教庁が以前とまったく別組織になったことを自ら発表すべく、今までの新教徒虐殺事件のすべてを公表したことであった。タングルテルの事件も公表され、命令を下した神官・貴族はすべて裁判を受け刑に服していた。

「ええと・・・主犯リツシユモン伯爵 死刑 アルマ枢機卿 終身刑。

その他か・・・実行をした軍は国の命に従っただけなので免罪か・・・って実行隊長コルベールってまさか・・・」

その中に誰でも知っている有名人があったので驚くジュリアン

「なになに・・・自ら裁いてもらうため、出頭か。マザリーニ教皇が直接事情を聞き、事実を知らされず命令に従った者に罪はないと審判。その後、財産の殆どを新教徒救済のために寄付していて、一年に一度はマザリーニ教皇と各地を回って謝罪をしている・・・か。彼の真摯な態度に触れ、殆どの新教徒が彼を許しているわけか・・・これは被害を受けた新教徒の現在も記事にしてこいつてことだな。よし」

数日間みっちり勉強してから、タングルテルに向かうジュリアン。

タングルテルについてみて、驚くジュリアン。

ここは以前は虐殺により殆ど無人になった漁村のはずなのに、港に停泊している多くの漁船。ほとんどが風石機関を搭載した、最新の空海両用式船だった。街には店が立ち並び、コンビニもある。焼き払われた教会は立派に建て替えられていた。港には造船工場まである。

役所の人に聞いてみた

「えっと、ここは本当にタングルテールなのですか？」

「そうですよ。」

「なんでこんなに発展しているんです？」

「ああ、コルベール様のおかげですよ。」

「コルベール先生が？」

「おや、貴方は直接知っているんですか？彼を先生と呼ぶなんて・・・」

「ええ、義兄の先生なので、ちょっと会った事もあるんです。しかし、こんなに発展しているとは・・・」

「彼はまったく街の誇りです。タングルテール虐殺の贖罪のため財産を寄付したんですが、そのやり方が上手かった。財産の寄付のやり方は、まず最初にインフラを無料で整備してハルケギニアでも最も進んだ街とし、公共事業で人を最初に集める。そして、事業の規模を縮小するときに、今後もこの街に住む者は20年間無利子で融資を受けられる事にしたんです、おかげでその融資で船を買ったり家を買ったり事業を起こしたりするものが続出しました。わずか10年でここまで発展したんです」

「すごいものですね・・・」

「ただ単に金をばら撒くだけでは、誰も働きませんからね。無利子とはいえ借金があるわけですから、皆必死に働いて借金を返そうとするわけです。他にもいろいろ工場を作ったりして雇用も生み出しました。この街の者は彼に足を向けて寝られません」

「そうですね・・・ところで、この街にアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランという人はいますか？」ギーシュからの紹介状を見せる。
「ああ、この人なら街の郊外に広い土地を買って、ワインを造っていますよ。」
「ありがとうございます・・・」礼を行って教えてもらった住所に向かう

「のどかなとこだなあ」周囲に広がる牧歌的な風景。
そこで葡萄の世話をしている、凜とした雰囲気的女性がいた。

「あの、すみません。貴方は、アニエス・シュヴァリエ・ド・ミランさんですか？」

「違うよ」

「え、ここはその方の住所だと思えますが」

「私の名前はアニエス・ミランだ。シュヴァリエなんてもう意味がないからな」

「失礼いたしました。私はジュリアン・ササキと申します。ゲルマニア新聞の記者をしております。日本にいるアンリエッタ元女王とギーシュさんの紹介で、取材したいと思い、訪問させていただきました」紹介状と手紙を見せる

「陛下とギーシュ殿の紹介か。ぜひとも近況を聞きたいね。元気にされていらっしやっただか？」

「はい。とても元気で幸せそうでした。ああ、手紙の中にお子様の絵里菜ちゃんの写真も入っていますよ」

「どれどれ・・・ほう。これは可愛い。惜しいな、どこに出しても恥ずかしくない立派な姫なのに・・・」食い入るように写真をみるアニエス

「えっと・・・女王様はもうこちらには戻るつもりはないみたいなのですが・・・」

「わかつていささ。冗談だ。もう陛下は日本で平和に暮らされてい

るようだ。安心したよ」にっこり笑うアニエス

「よし。話を聞こう。少し早いけど昼飯にしよう。食事の用意を」近くにいた青年に申し付ける

「はい。アニエスさん。今日の昼食は何がいいですか？」

「ああ、お前に任せるよ。旨い物をつくってくれ」

「はい。お客様も一緒に食べてみてくださいね」

レイナルと呼ばれた青年が家に入っていく

「失礼ですか、恋人ですか？」

「ばか、何を言うか。彼はこの街に流れてきた没落貴族で、たまたま出会ったんだが、家が没落して一家離散して困ってて、自分にやる仕事がないって言うから住み込みで雇ってやっているだけだ」赤い顔をしていいつのるアニエス

（この人内心で彼のこと気に入っているんだろうな）ジュリアンは思った。

昼食の後、アニエスの話を聞く。

日本の再教育機関を出た後、アンリエッタから幾ばくかの退職金をもらい、故郷に帰った。

そこでコルベールの融資を受けて、葡萄栽培に乗り出したこと。

幸いにも日本で農業知識も学び、また景気がすごく良いので、楽に生活できていること。

「軍隊にいた頃は殺伐としていたが、ここでは誰かを殺したり、殺されたりする心配もない。のんびりやっているよ」

「失礼ですが・・・コルベール先生のこと、恨んでいないのですか？」

「・・・確かに恨んだこともある。以前マザリーニ教皇とコルベール氏がこの街に来たとき、虐殺の生き残りが壇上にあがり、胸倉をつかんだらしいな。その場に私がいたら切り付けていたかもしれん」

「では・・・」

「今は恨んではおらん。彼も仕方がなかったのだ。私が陛下を守るために隼人を殺そうとしたのと同じでな。同じことをした人間が、自分を柵に上げてコルベール氏を一方的に責める資格もなかるう。日本で充分に復讐の末路を見させてもらった。アンリエツタ陛下と
いうな・・・。個人的な復讐に酔ったあげく、大勢の命を死なせ、国も滅ぼされた。」遠い目をするアニエス

「それに、今では彼は充分に償いをしている。主犯は皆裁かれた。我等が教皇マザリーニの教えどおり、復讐心を捨て貴族も平民も隣人としてうけいれるさ」

「そうですね・・・アンリエツタ陛下も隼人に対しての復讐心を完全に捨てられています。今は幸せいっぱいのご様子」

「ふふ。私もそれに見ならうつもりだ」

「なるほど・・・だからレイナールさんという身近な男性を大切にしているんですね」茶々をいれるジュリアン

「何を言うか！！！！！」

(なんだかこの人からかいがあるな・・・)

アニエスの記事は、復讐心をすてることで幸せをつかんだ女性と話題になった。

記事を読んだ人により、タングステールへの移民が激増した。

その後2年ほどして、アニエスとレイナールの結婚の報告の手紙が届き、ジュリアンは自分の直感が正しかったと思った。

外伝 オスマンと魔法学院

「トリスティンに來たわけだし、魔法学院も取材していくか。」

事前に電話をし、取材をしたいと申し出る。隼人の名前を出すと、あっさりポイントが取れた。

「確か大戦後に、隼人さんが出資して再建させたんだよな。あのいろいろな事しているよな」

トリスティン魔法専門学校の門をくぐる。

大戦後、9年間の義務教育が施行され、平民の識字率が大幅に向上した。

15歳以降の進学は各種専門学校になる。年齢制限はなく、誰でも自由に通えた。

仕事をもつ人も通えるように、基本的には単位制になっており、自分で選択できる。

卒業が早いか遅いかの違いのみで、夜間・昼間でも同格の卒業資格を取れる仕組みになっていた。

世の中の意識も少しずつ変わり、魔法も特殊技術の一つにすぎないと思われるようになっていった。

小学校の6年間で平民・貴族問わず魔法の資質を検査され、魔法の資質を持つ者にはだいたいのレベルを教えられる。

努力してもドットやライン止まりと知らされた者の中には、最初から魔法の習得を諦める者も多かった。

また、意外と平民達の中にも魔法の資質を持つものが多かった事が、魔法至上主義への止めを刺すこととなった。

学院長室に入るジュリアン

「初めまして。ゲルマニア新聞の記者であるジュリアン・ササキと申します。隼人の義弟にあたります」

紹介状と隼人の手紙を学院長に渡す

「ふむ。わしは学院長をしているオスマンという。よろしくな」

美人の秘書を脇に従えた、白髪の老人が挨拶する

「よろしくお願ひします。さっそくですが、隼人についてはどう思われますか？」

「ふむ。あまり長くここには居なかったが、彼が与えた影響は大きかったな」

「と、いうと？」

「彼は瞬く間に学院の使用人の人気者となったよ。まあ、日本の知識や物を持ってきてくれて、貴族を屁ともおもってない態度。使用人にとっては眩しかったんだろうな」

「そうですか・・貴方自身はどう思われますか？」

「わしの印象はちょっと変わった平民だったな。学院の生徒や教師にとっては不愉快に感じておるみたいで、無視されておったが」

「なるほど」

「わしの印象が変わったのは、あの事件からだったな」

「事件というと・・」

「有名であろうが。シュヴァリエのマントを踏みにじるなど、前代未聞だぞ」

「はは、アレですね・・ですが、僕はアレを知っているから、隼人を尊敬しているんですよ。」

「笑い事ではないぞまったく！！あの後王宮から怒り狂った使者がきて、彼を抹殺するように命令された」

「え・・そうなんですか」

「当然じゃろう。まったく。確かに言いたい事があるなら言ってみるとはわしの言葉だが、そこまで過激なことをせんでもよかるうに。」

まあ、彼も若かったんじゃろうが」

「いいえ、あそこでシュヴァリエのマントを踏みにじったからこそ、世界を変えることができたんですよ」

「確かにな・・ハルケギニアの常識では考えられん事じゃ。だが、かばう方の身にもなれ」

「え・・？オスマン氏がかばったんですか？」

「彼の能力を使者から聞いて、とてもかなわないどころか、反撃を食らって消されかねん。下手をしたら生徒にも危険が及ぶと思つてのう。ゲルマニアの留学生であるキュルケ嬢と仲が良かったから、放つておけば自然にゲルマニアに行つてトリスティンから居なくなると説得したんじゃ。まあ、そのとおりになつたわけじゃが」

「君子危うきに近寄らずですか・・」

「能力をもつと早く知つておけば、ギーシュ君の犠牲もなかったんじゃがな・・」

「ご心配なく。彼は日本でアンリエッタ元女王と結婚して、幸せに暮らしておりますよ。むしろ、日本に送られて感謝すらしています」

「本当かね・・確かに、その後に来た大戦のため、多くの学生が死んだ。教師もギトー君を始め、殆ど戦死したな・・。若いものが死ぬのを見るのは辛いものじゃ・・」。
オスマンが沈んだ声でつぶやく。

「しかし、これからの世の中では、戦争するにしても学生が駆り出されることはないでしょう。魔法が使えるからといって特権をもつこともないし、貴族というものも廃止されました。」

「ときおり、これでよかつたのかと疑問に思うこともあるが、それは老人の僻みじゃな・・。貴族たちの中にも、平民を身を張つて守り導くことに意義を見出す者も多かつた。だからこそ、あの戦争で家が立ち直れぬほどの貴族の戦死者を出したのだ。もちろん腐つた貴族がはこびり、社会は疲弊の極に達していたのも事実だがな・・」

「

「でも、今は平和です」

「多くの者の犠牲の上に成り立っておる平和じゃ・・わしにできる事は、教育によって魔法を使えるものの自覚を促すしかできぬ。魔法を特権とおもつなかれ。奢るなかれとな。」

「貴方が学院長をしているかぎり、その精神は伝わっていくと思いませんよ」

窓の外をみるジュリアン。校庭では魔法を使ったスポーツをする生徒達。どこの学校でもある風景だった。

職員ももはや使用人と呼ばれず、用務員と呼ばれ、生徒に用事を言いつけられることもない。

学校や学生寮の清掃なども生徒達の手によって行われ、生徒が特権に思ふような事はすべて廃止されていた。

学院を散歩するジュリアン。

裏庭に行くと、一人の生徒が集団で苛められていた。

「おい、金だせよ。平民」どうやら、苛めている方が元貴族、苛められているほうが平民らしい

「き・君だつて平民じゃないか」

「はあ？俺の家は公爵様だぜ。立場を弁えろよ」「そうだ。平民の分際で生意気だ」

ジュリアンが不快に思い、止めようとすると、笛が鳴って警備員が来る。

見ていると、問答無用で苛めた集団が殴り倒されていった。

「いたい・・くそ、お前、俺達を殴ってただで済むとでも思っているのか。俺はロンデー公爵の一人息子だぞ」

「だからどうした。この学院に入学するとき、誓約書に書かれていますだ。苛めをした場合、問答無用で体罰だと」警備員が笑う

「くそ・・・平民が。アイスカタター」氷の刃が出現し、警備員に当たる。

警備員は平然としていた。

「な・・・なぜだ」

「お生憎さまだな。俺達魔法学院の警備員は、魔法無効化スーツが支給されている。お前の魔法なんか効かないぜ」

「く・・・くそ・・・」

逃げ出す貴族の子弟たち。

「バカな奴等だ。この学院内では遠見のマジックアイテムで隅々まで見られているのに。バツチり顔も撮られてて、身元確認なんかすぐだ、後で全員停学だな。君、大丈夫か？」警備員が苛められていた学生に声をかける

「は・・・はい。大丈夫です」

「ああいったバカな学生が入学した直後は増えるんだが、すぐに現実を知っておとなしくなる。心置きなく勉強したまえ」

「はい！！！！」学生が元氣よく返事をして去っていく。

拍手するジュリアン

「失礼ですが貴方は・・・？」警備員が声をかけてくる

あわてて身分証を見せるジュリアン

「いや、記者の方ですか。お恥ずかしいところを見られてしまいました」

「いえ、適切な対応に関心していたところです。失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「ははは。名乗るほどの者ではないですが、ギムリと申します。私もこの学院の卒業生でしてね。運良く大戦で生き残ったものの、学院に帰るとほとんど開店休業状態だね。まあなんとなく残っていたら、学院長に警備員として雇われたのです」

「ははあ。不躰ながら、今の世はどう思われます？」

「良い方に変わったんじゃないでしょうか。私は隼人さんを見たこ

とがある程度で、学院にいる間は親しくなることはなかったんですが、今思うともったいない事でしたな」ハハハと明るく笑うギムリ。

貴族の中にもちゃんと現実を受け入れている人もいるとジュリアンは改めて思った。

この事を記事にした後、ギムリ警備員がちょっとした有名人になり、モテるようになったらしい。

後に彼からお礼の手紙がきて、ジュリアンは苦笑した。

外伝 ガリア王一族 1

ゲルマニアに帰ったジュリアン。

さつそく上司のジークに捕まる

「次はいよいよ大物だぞ。最後の王様だ」

「本当ですか・・・まだ怖いですよ。超大物じゃないですか」

「心配するな。気さくな人だと聞いている」

「そんな事言っても・・・一時はこのハルケギニアの半分を支配した権力者でしょ？」

「だから皆疑問に思っているんだ。あのまま絶対権力者として君臨できたのに、なぜ自分の権力をあっさり放り投げたのか。長年続いたガリア王家をなぜ自分の代で潰したか。興味は尽きない」

「ちよつと考えさせてください。心の整理が・・・」

「わかったよ。でもあんまり待てないぞ。読者の記事にしてほしい人アンケート一位なんだから。」

「そんな事してたんですか・・・」

とりあえず、数日の猶予をもらって家に帰るジュリアン。

夜中、借りているアパートに帰り、ジャージに着替えるジュリアン。

「まったく・・・相手は大物中の大物じゃないか。今からでもその気になったらすぐガリビオンの支配者になれる人だぜ。誰か代わってくれよ・・・」

座ってコーヒーを入れた時、インターホンが鳴った。

「はい」ドアを開けるジュリアン。外にジャージ姿の青い髪とヒゲのオッサンが居た

「どちらさまで？」

「ふむ。お前が隼人の義弟か」いきなりずかずかと部屋に入ろうとする

「ちよつと、勝手に入らないでくださいよ」

「気にするな。隼人の身内なら遠慮はいらんぞ。余にとっても身内だ」

「遠慮してください!!! って・・・余?もしかして・・・」

「隼人から聞いた。余の話を書きたいというから、きてやったぞ。初めて会うな。余がジョゼフだ」

「元ガリビオン王のジョゼフ様!!!!!!」

「今はただの民間人だ。ふむ。ここは話をするには静かすぎるな。外で飲みながら話をしよう」

そのままさっさと出て行く。あわててジャージ姿のまま後を追った。

ゲルマニアに大戦後に出来たキャバレー「魅惑の妖精亭」

「あーらジョゼちゃん。また来てくれたの。スカロン嬉しい」

ジョゼフ王に抱きつく筋肉質のオカマ

「ふふ、また来たぞ。乳の張った若い女を愛するのは余の楽しみだからな」

「オジさん。また来てくれたんだ。嬉しい」スカロンだけではなく、何人もの少女に抱きつかれるジョゼフ

その光景を見て固まるジュリアン

「あら〜この子が・わ・い・い。どうしたの?同じようにジャージ着て。ジョゼちゃんの息子?」オカマが迫ってくる。後ずさるジュリアン。ピンチ!!!

「ああ、こいつは隼人の義理の弟だ。シエスタの弟だよ」

「あら、そういえば・・・何年もあってないからわかんなかったけど、ジュリちゃんじゃない。久しぶり〜」

ととう抱きつかれて頼ずりされるジュリアン。ジョリジョリする

「え?どこかで会いましたっけ?」

「な〜に言ってるのよ。スカロン叔母様を忘れたの?」

「・・・スカロン叔父さん!!!!!!!!!!!!なんなんですかこれは!

「！！！！」

「やっと思い出してどなるジュリアン。こんな親戚見たくなかった！！！！」

「やーね。叔母様と呼・ん・で」

全身から悪寒が立ち昇る。本当に吐きそうになった。

「はいはい。親父、あんまりジュリアンからかわない。こいつは昔から真面目なんだから」

奥から従姉妹のジェシカが出てくる。やっともな親戚に会えてほっとする。

「ジェシカ姉さん。なんなんだよこの店は！！！！」

「ああ、あんた等の家族皆固いからね。こういう店しているの言っ
てなかったのよ。シエスタは知っているけど、黙っててもらって
るんだよ。」

「知らなかった・・・」

「叔父さんには黙っていてよ」

「こんな事いえないよ・・・」頭を抱えてうずくまるジュリアン。

「話をついたようだな。まあ、今日は楽しめ。酒と妖精もってこい」
ブースに着いて飲み始めるジョゼフ。乳をもんだりチップを弾んだ
り、傍若無人である。

少女達も慣れているのか、どんどん密着してくる。

ジュリアンは実は童貞で、女と付き合った事もないので、緊張して
気後れしている。

ジュリアンがブースの隅っこでチビチビやっていると、ジョゼフが飲
め！！と杯を寄せてくる。

そのうちに段々ジョゼフに絡まれてきた。

「おい・・・お前は平民なのか？」

「平民ですよ。どっから見ても先祖代々」

「ふむ・・・えらいな」

「何が偉いんですか・・・」

「偉いとも。王や貴族などよりよっぽどな。」
持論を展開するジヨゼフ。

「あの、それでは、取材をさせていただいていいですか？」

「ふふ。野暮なことを言うな。乳でも愛でてみる」

「乳って・・・」

隣の少女が胸を押し付けてくる。ドキドキ。

「人生の楽しみは乳と共にあるべきだぞ。」

なぜかおっぱいについて説教が始まった。

「お前は、乳はでかいのが好みか？それでも小さいのが好みか？」

「そんなの・・・わかりませんよ」

「つまり奴め。その年でまだ自分の嗜好を掴んでないのか。もしやお前、桜男子か？」もうめちやくちやである。

「いや、だから、そういう事ではなくてですね・・・」

「鍛え方が足りん！！酒を飲み乳を愛でた経験もない男に何がわかる。よし、余が鍛えてやろう」

「そうよ。ジュリアンちゃん。今から鍛えればおつきくなるわよ」

ジヨゼフに揉まれている少女がからかう。

「私たちもジヨゼフ様にもまれておつきくなったんだもんね」別の少女たちが笑いあう。

「なにを鍛えておつきくるんですか！！」だんだんジュリアンもわけが分からなくなってくる。

「それは当然だ。ナニにきまっておる」ジュリアンの股間を指差すジヨゼフ。下品。

「ねえねえ、私たちみてそれが限界？」少女達。

「お前のサイズはそこで打ち止めか。まだ諦めてはいかんぞ」

「あーもういいですから。」トイレに避難するジュリアン。

トイレから戻ったら、ジョゼフがカラオケで歌ってた。

その歌を聴いて卒倒しそうになるジュリアン

「ば・・・ばかな。『金太の 冒険』だと・・・」

周りの人は日本語の歌なので意味がわかっていない。次の歌は・・・

「や・・・やめる。『お万 方』だけは歌うんじゃねえ」

マイクを奪いとり、演奏中止を押し、コントローラーをでたらめに押す。

でた歌が「イ カ帝国の成立」

「・・・」

「歌え」ジョゼフが無表情で言う

結局、歌ってしまった。

「やれやれ・・・このおっさん、本当に元王様なのか？」

ソファに寝転んで潰れているジャージのおっさん。尻を掻いている。

「私たちも最初に知ったときはびっくりしたけどね」ジェシカが来て、介抱する。

「ジョゼちゃんも現役の頃はいろいろストレスたまってたみたいだからね。今は本当に幸せそう」スカロン。

「それじゃ、ジョゼちゃん連れて帰ってね。いつもの事だからツケでいいわよ」

「おいおい、僕彼の家知らないんだけど」

「大丈夫。いつもの事だから。タクシー呼ぶわ。連れて行ってくれるだけでいいのよ」ジェシカ

はあ・・・しょうがないとジョゼフをおぶって連れて帰るジュリアン。なんだか精神的に疲れてしまった。

外伝 ガリア王一族 2

タクシーが着いた先は、ゲルマニア中心部の高級マンションだった。

「なるほど、ここならちよつとは王様らしい住まいだよなあ」

エレベーターの中で思う。

最上階ワンフロアすべて占める部屋にジョゼフをおぶって連れて行くジュリアン。

ドアが開いて、おでこが特徴の美女が迎えいれてくれた。

「やれやれ、迷惑かけたね。いつもは潰れる前に帰ってくるんだけど、今日は特に楽しかったみたいだねえ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ、こんなになるまで飲むのは隼人と飲むときぐらいだよ。どうやら貴方を気に入って、安心して飲みまくったんだろうね」

「そうですか・・・ありがとうございます。あ、申し遅れました。僕はゲルマニア新聞の記者で、ジュリアン・ササキと申します。隼人の妻シエスタの弟にあたります」

「そうかい・・・私はイザベラ。この親父の娘だよ」

「はい。イザベラ姫様ですね。姉さんから聞いた事がありますよ。シャルロットさんの姉同然とか」

「ふふ、昔はいろいろあつたけどね・・・」コーヒーを入れながらイザベラが言う。

「まことに不躰ながら、その辺りの事を取材させていただきたいのですが・・・」

その時、奥から男の子がでてきて、イザベラにまわり着く。

「ねーねー遊ぼう」

「可愛らしい坊やですね。息子さんですか？」

イザベラのおでこにピキツと血管が浮き出る

「なにいつてるんだい！！！！弟だよ。この子はシェフィールドさんの子のシャルル。私は独身だよ。文句あるかい？」

「い、いえ、すいませんでした！！」テーブルに着くぐらい頭下げ
る。

「ふん。どうせ28にもなつて結婚もできない行かず後家。おまけにシェフィールドさんはマジックアイテム製造企業のオーナーで忙しいから、実際にこの子を育てているのも私よ。親父は役にたたないから、心配でどこにも行けやしない。って、なんで笑っているの！！！！！」

「いや、なんだかギャップがおかしくて・・・キツめの美人が坊やの頭をなでながら愚痴るのって・・・」

「アンタも大概失礼な男だねえ。隼人に似ているよ」

「彼との付き合いも長いですからね・・・移ったんですよ」
いつのまにか打ち解けた雰囲気になった。

「それで、シャルロットさんとの関係の話聞かせていただいていますか？」

「そうねえ。もうそろそろいいかな。昔の話だし。」

叔父の死、シャルロットへの嫉妬と愛情、和解の一連の話をする。

「そんなことがあったんですか・・・」

「姫時代は毎日針のムシロ。いくら王の娘とはいえ、周りからの目は厳しかったわね。半ば犯罪者の家族の気分だったよ」

「そうですね」

「まあ、和解のきつかけになってくれた隼人には感謝しているよ。

私の元に妹であるシャルロットを返してくれた。すぐ奪われたけどね」

心なしか寂しそうである。

したとおもつたのに」

「襲うわけないでしょ!!!」

「ふむ。イザベラは気に入わんかったわけだ、ちこ立たなかったのか?」

「そんなわけないでしょ!!!!!!普通に綺麗だと思いましたよ」

「立ったのなら自然にやるがいい。余に遠慮はいらんぞ。早く嫁に出さんと可哀相だ」

「やるって・・・」想像して顔が赤くなるジュリアン

「アンタら二人、朝っぱらからなんて話してるんだい。だいたい、嫁になんかいけるわけないでしょ。シャルルの面倒誰がみるのよ!!!」

「ふむ。ならば婿だな。こいつはちこは小さいが、なかなかいい男だぞ。婿にどうだ?」

「あーもつづるさい!!!さつさとメシ食べなさい」怒られる二人。

なんだか、これから先こんな事が何回もあるような気がするジュリアンだった。

その後、ジョゼフに連れられ、朝一番にパチンコ店に行く二人。

隣の台に座り、打ちながら取材する

「それで、どうして最高権力者である貴方が、自ら権力を放棄したのですか?」

「ふむ・・・長い話になるが・・・おっ 激熱リーチ」
確率変動で当たる。

シャルルとの確執・暗殺、狂王となり、すべてを破壊することで感情を取り戻そうとしたこと。ロマリアの使者の虚無魔法で父とシャルルとの再会で感情をとり戻し、シャルロットとの和解と、王家を

潰す誓約をしたこと。ゲルマニア滞在で大衆の楽しみを知ったこと。

すべて話し終えてもまだ確率変動が続いていた。その間ジュリアンは大ハマリ

「それで、今の心境は」

「ふむ。楽しいの一言だな。金はたつぷりあるし、ミュージズが稼いでくれる。余は堂々と遊んでいられるし、面倒臭い事もない。二度と権力やら権謀術数の世界に帰る気はないな」

確率変動が終わって終了。玉を流すジョゼフ。10エキュー勝利。ちなみにジュリアンは5エキューの負けだった。

(やばいな・・・経費で落ちないかな) 青い顔になるジュリアン。

ジョゼフの誘いで牛井屋で昼食

「シエフィールドさんはなんて言っているんですか？」

「彼女は余には過ぎた女だ。何をしてても笑って余を愛してくれている。おかげで他の女には乳をもむ事以上の事はできん。」

「ははぁ・・・」

「余の死んだ妻もいい女だったが・・・あの頃余は荒んでたのでな。今は最高の幸せを満喫しておる」

「そうみたいです。今回、取材ありがとうございました。いい記事が書けそうです」

「ああ、また飲みに行こう。」
握手して別れるジュリアン

ジョゼフ一家の記事は反響がすごく、部数が大幅に伸びた。

人々は王としての生活が決して良いものではない事を知り、庶民の生活に本当に満足をしている王に親しみを覚えた。

姫から家事手伝になったイザベラ姫に対して「結婚したいので紹介して!!」という手紙が何通も新聞社に届いた。

その後

「だからって・・・週に二回も三回も飲みに行くってのは・・・」

「よいではないか。隼人も忙しいのでな」

「僕も忙しいですよ!!!」

毎週連れまわされ、家に送る羽目になったジュリアンだった。

外伝 マルトーと元使用人

「さて、次は一般市民で隼人にかかわった人について取材してほしいね」ジーク

「一般市民？」

「ああ、あの大战の前後でどう変わったか、隼人の影響で歴史を変えた人だけじゃなくて、一般市民の視点からどうなったかを実例を挙げて取材してもらいたい」

「分かりました。隼人に聞いてみますね」

隼人に電話して聞くジユリアン

「それで、一般市民の視線から語ってくれるような人しない？」ジユリアン

「うーん。魔法学院で世話になった三人と、コック長していたマルトーさんがいいかな？」

「今どこにいるの？」

「全員、ゲルマニアに来て、それぞれ仕事しているよ。俺もたまに会っている。仕事上の付き合いもあるし」

「その人達がいいと思う。ぜひ紹介してよ」

「わかった。皆に連絡してアポを取ってやるよ」

数日後、隼人から連絡がくる。

「明後日の午前中なら皆時間取れるって。マルトーレストランに来てくれるそうだよ」

「隼人さんは行かないの？」

「やだよ、俺の事聞いてまわる場に居るのは。午後からシエスタと二人で行って、皆で遊ぶようにしているから、あんま時間とらないよ」

「わかったよ。ありがとう」

「しかし、今回はなんか気まずいな。恥ずかしい気がする。」隼人
虚無の日

レストランに訪問すると、がっしりした中年男性と女性二人、青年
一人がいた。

「おう。お前がシエスタの弟か。新聞記者になったんだって。イン
テリさんだな。俺はマルトーだ。このレストランを経営している」
がっしりした中年男性が言う

「そういえば、姉の上司だった人ですね。姉がお世話になりました」
「よせよ。あいつや隼人にもお世話になっているのはこっちだ。旨
い飯作ったから、食べながら取材とやらを受けようか」席に着く一
同。

「久しぶり。ルノーよ。ちっちゃい頃よく遊んであげたよね」

「私は初めましてだね。ミルトよ。シエスタとは今でも良く三人で
遊びに出かけているわ」

「僕も初めましてだね。ジョアだよ。今でも取引先として、隼人に
は世話になっているよ」
それぞれ自己紹介をする。

「初めまして。ジュリアンです。シエスタの弟です。皆さんよろし
くお願いします」頭を下げるジュリアン。

「堅い事はよせよせ。それよりメシを食え。」マルトー
皆で食事しながら、取材をするジュリアン

「それで、マルトーさんは隼人のことをどう思われます？彼によっ
てどう変わりましたか？」

「そうだなあ。奴に出会って人生がいいほうに変わったよ。今まで
料理を学んで、魔法学院のコック長というそれなりに高い地位につ

いていたが、貴族の小僧小娘にイチャモンを付けられることにうんざりしてたな。そんな時に奴が現れて、新しい料理を教えてもらい、当時はハンパなく高価だった調味料を惜しげもなく提供してくれた。そのおかげで独立する金も技術も身につけて、レストランを開けた。あいつは俺の恩人だな。今でもここの店に来るけど、たたでいくらでも食わせてやっているぜ」

「そうですか・・・」隼人も意外とセコいなと思ったジュリアン

「ええと、次はルノー姉さん。今どうしているんだっけ？」

「日本で倒産したチヨコレートやお菓子をつくる会社を、タケダを通して買収して、技術持ってきてこっちで作っているわ。新タイルブ村に工場とかも作っているわよ」

「そんなお金よくありましたね」

「隼人を通じて何回も日本に行つて、あつちのモノをハルケギニアで売れば100倍になったからね。その時にお金貯めてたの」

「そうなんだ・・・」

「最近じゃブドウを使ったケーキとかも販売しているわよ。順調なの。」

「つぎに、ミルトさんは、なにをされています？」

「親の会社のデザイナー。日本の昔のファッションを研究して、こちらで売りに出したら大ヒットしたわよ。参考に出来るものが一杯あるから向こうの世界にも頻繁に行っているわ」

「最後に、ジョアさんは？」

「隼人を通じて日本から持ってきたモノを貴族に売ってた縁で、文房具やオフィス関連のモノを売り出しているよ。まだなんだかんだ言つて事務作業をしているのは元貴族が多いから、その時に便利さを知った貴族が発注してくれてる。最近じゃだいたい一般にも紙やボールペンも普及してきたから、以前みたいに100倍も儲けるなんてことしてないけどね。でも、殆どうちの独占だから、値段を安くしても安定して商売ができている」

「はあ、皆さんしっかりしてますね。」ジュリアン

「まあ、僕達は幸運だったわけだけど、ちゃんとそれなりの苦勞はしているよ。仕事みな忙しいしね」ジョア

「私ももつと会社大きくするんだ〜まだまだ広げられるし。将来はエルフ領とかにも広げたいわね」ルノー

「今じゃほとんど私が会社のデザイン部門を仕切っているからね。

これからもがんばらないと」ミルト

「俺も最近じゃ従業員が育って来ているから、チェーン店にしよう
と
思っているんだ」マルトー

彼らを見て、これからの時代は平民がひっばっていくということを実感したジュリアン。

元使用人がそれぞれ事業を起こして成功している記事を掲載した後、地球への留学生が増えた。

その後、日本のみならず世界中に留学していった平民が、ハルケギニアに戻った後無数の事業に取り組み、ますます発展する事になった。

外伝 武田一族

だいたいこの人の話を聞いて、ネタが詰まってくるジュリアン

「次は誰に聞けばいいですかねえ」

「うーん。隼人さんの親族なんかがいいんじゃないか？」

「雄二社長ですか？それがいいかも。一回会ったことあるし」
「決まりだな。また日本に行ってくれ」

大阪の武田邸に向かうジュリアン。インターホンを押す

「はい。どちら様ですか？」若い使用人の声

「ゲルマニア新聞のジュリアン・ササキと申します。今日取材を申し込みました者ですが・・・」

「ちよつと待つてくださいね」

使用人に案内されて屋敷内に入るジュリアン

（しかし大きな屋敷だな・・・まあ、巨大企業タケダのオーナーだと当たり前か」

奥の和室に雄二社長と静子夫人の姿があった。

「お久しぶりです。雄二社長」挨拶するジュリアン

「おお、久しぶりだな。立派になって。社会人として自覚が出てきたのかな？前は子犬のように震えてしたのに」ニヤツと笑う雄二

「貴方、またからかって・・・」静子夫人が諫める

「いえ、まだまだです。でも、隼人のおかげでいろんな人に会えたから、少し慣れたかもしれません」

「ふふ、いいことだ。少しずつ成長している証拠だ」雄二。

和やかに世間話をする三人

「それで、お嬢様の春奈さんは、アドルフさんと結婚するんですね」

「ああ、三ヶ月後にな。まさか異世界に行かれるとは思わなかった」
寂しそうにいう雄二

「でも、この大阪にもゲートがありますから、すぐ会えますよ」

「そうだな。時代は変わったもんだ。異世界がここまで身近になるとはな・・・」

「ええ。私が初めて隼人に会ったのは14歳の時でしたが、当時は野蛮な社会でしたからね・・・」

「私もそろそろ引退して、隼人に後を継がせるつもりだよ。あいつも立派になったからな」

「そうですか・・・ところで、隼人さんのご両親はその後見つかりましたか？」

「ああ・・・しかし、見つかった時はもうボロボロでね。隼人には知らせてないが、もう病気で死んでいるよ」

「そうでしたか・・・」

「今更動揺してどうにかなるほど子供ではないだろうが、隼人にも春奈にも知らせない方がいいと思って黙っているよ。あの二人の親は私たちで充分だ。」

「お願いですから、その事は記事にはしないでくださいね・・・」静子

「そつだ。結婚といえば、君はジョゼフの婿にといわれているんだろ？」雄二

「そんなの飲み席での冗談に決まっていますよ」

「そうかな。イザベラさんも君を気に入っているとこの間ジョゼフが言っていたが」

「またあのオッサンは・・・というかなんで知っているんです?」

「あいつはちよくちよく家に来て泊まっていくぞ。日本が相当気に入っているらしい。」

「楽しい方ですからね。うちに来ていただくと嬉しいんですよ」「静子
「僕は絶対あのオッサンの息子なんかになりませんからね!!!」
真っ赤な顔で言うジュリアンを、二人は面白そうに見ていた。

雄二の記事はそれほど反響はなかったが、アドルフと春奈の結婚式
は大いに盛り上がった。

外伝 ポール

ハルケギニア大戦から50年。隼人が死んで一ヶ月。

私は隼人の義弟としてマスコミに関わる者として、最後の結末を書こうと思う。

思えば、この50年はいろいろな事があった。

新聞記者としてさまざまな立場の人と出会い、その人生を聞き、記事にしてきた。

日本を参考にし、プロ野球という制度をつくり、娯楽として提供した。

最後の王の姫と結婚して婿となり、幸せな家庭を築いた。

いつの間にかデスクとなり、最後には隼人から経営を託される様になった。

私は義兄と同様、幸せな人生だったと思う。

ただ、最後にこの事件については、詳細に記事にして世に広めたい。

隼人が逃してしまったロマリアの残党達の叛乱とその結末。

第四の権力といわれるマスコミのトップに立つものとしての義務だと思っ。

貴族の叛乱。それは、謎の光により、貴族が消滅することで終結した。

たった一人生き残ったブリミルを名乗っていた男は、現在警察当局に拘束され事情聴取されている。

私は警視総監であるビット・ツェルプストー君とは長年の付き合いなので、特別に事情を聞くことが出来た。

「それで、彼はプリミルではなく、ポール・メクランと名乗っているのかね？」

「ええ、ジュリアン叔父さん。しかし、衛星を通して皆が彼の姿をみえています。プリミルと名乗った貴族叛乱の主犯に間違いありません」

「しかし、それなりに筋が通っていることも言っているんだろう」

「ええ、今は、相心の調査機械」で取調べをしているのですが、よくわからないのです」

「よくわからない？あの機械すべての真実がわかるはずだけどな」

現在、犯罪者に対する取調べは、ヴァリヤークの遺産を解析して作り出された精神鑑定機械で行われているので、冤罪はほぼなかった。彼の中に何十人も人間の記憶があり、機械で調べても混乱するのです」

「うーん。そんなケースがない事もないが・何十人というのは聞いたことがないな」

「ええ、ですので、叔父さんから、ミューズ」の協力を得られるよう、お願いしていただけませんかでしょうか？」

「ミューズ」は義母シルフィールドが作ったマジックアイテム開発企業で、今は義弟シャルルが代表者をしている

「わかった。その代わり記事は優先的にゲルマニア新聞が書かせてもらおうぞ」

「ええ、お願いします」

その後、「ミューズ」本社での徹底的な精神鑑定により、「プリミル事件」の全貌が判明した。

「なるほど。君のおかげで我々は救われたのか、皆を代表して礼を言う」ジュリアン

「いえいえ。自分のためにした事ですから。それで・マリリンはどうしています？」ポール

「元気にしているよ。調べたところ、君の体が入院している病院に何度もお見舞いをしているね。」

「そうですか・・・よかった」

「恋人かい？」つい記者をしていた時の癖できいてしまうジュリアン
「いえ・・・ただの友達です。恋人になれればいいですけど」笑うポール。

何とか力になってやりたいと思うジュリアン。

「さて・・・君の無罪は分かったんだが、これからどうする？」

「何も考えてなかったんですけど、元の生活に戻りたいですね」

「残酷なことを言うようだが・・・それには問題があるな」

「え・・・なぜです？」

「君の精神はポールでも、体はブリミルだ。あの事件は衛星を通して全世界の人間が見ている。どこに行っても問題が起こるだろう」

「そんな・・・」

「たとえ整形手術をしても、ブリミルの体自体がとんでもない凶器であり、宝になる。貴族の残党がいたら、確保しようとするだろうな」

うつつむくポール

「君の選択肢は二つ。一生その体で監視付きの人生を送るか、危険を承知で元の体に戻るかだ」

「元の体に戻るんですか？」

「ああ、魂を体に戻すことができるマジックアイテムがある。本来は緊急蘇生用のアイテムだがな。ブリミルの体と君の体を並べ、ブリミルの生命活動を停止させ、魂が体から出た後、君の体に戻す。しかし、君の魂は何十人も人間が混じっている。果たして上手くいくか・・・」

「大丈夫です。ぜひ元の体に戻してください。それで死んでも・・・」

あきらめます」
「わかった。」

この事は記事にされる時は、ポールの件は伏せられて、貴族たちは力を制御できず自滅したと報道された。

生き残ったブリミルを名乗る男も当局によって拘束され、間もなく死刑が適用されることになった。

貴族の叛乱について知った人は貴族の完全な滅亡に安堵した。

そして処置当日。関係者には事情が説明され、マリリンも呼ばれた。
「ポール。無理しなくてもいいのよ。その体でもポールはポールだわ」手を握るマリリン

「ありがとう。でもこの体自体が危険物なんだ。僕は必ず元の体に戻るよ」

「でも・・・」泣き出すマリリン。

「元の体に戻れたら、頼みがあるんだ」

「なに？」

「デートしてくれ」

「もう・・・何回でもしてあげるわよ。だから、絶対に帰ってきてね」手術室に運ばれるポール。皆が見送った。

数年後、ポールとマリリンの結婚式が行われた。

参加者は多数に渡ったが、その顔ぶれにポールの友人は驚いた。

マスコミのドン

ジュリアン・ササキ・ガリア

氏とイザベラ夫人

警視總監

ビット・ツエルプストー氏

「ミューズ」社長

シャルル・ガリア氏

ゲルマニア首相

アドルフ・ヒットラー氏とハル

ナ夫人

その他にもタケダ一族の重鎮たちが勢ぞろい。

「おい・・お前ただのパン屋の店主だよな。なんでこんな人達が参加してんだよ」友人達

「ふふ。ポールは英雄なのよ。誰にも知られないけどね。世界を救った自慢の夫よ」

ポールの体に寄り添うマリリン。

幸せな二人を皆の心からの祝福が包んだ。

外伝 ポール（後書き）

これで外伝も完結です。

初めての小説でいろいろ拙いこともありましたが、読んでいただいてありがとうございます。

次回作 変更(前書き)

あらすじと冒頭を乗せさせていただきます。

「反逆の勇者と道具袋」

異世界に召喚されたが、魔王の生贖にされてしまう勇者の物語

周囲から見捨てられた孤独な少年。しかし、地球に選ばれて・・・

次回作 変更

あれ・・・？ここはどこだ？

目が覚めたら、いつのまにか知らない部屋だった。

おかしい。

いつものように自分の部屋で寝ていたのに。

寝ぼけた頭で現状確認する。

俺は菅井真一。17歳。

両親と妹の4人暮らし。ごくごく平凡な高校二年生。

15歳の妹晴美はアイドルとして大人気ブレイク中。ここだけが一般と違うとこだが、俺は何の能力もないし。

しかし、ここはどこだ？

俺の部屋はこんなに広くないし豪華でもない。

ベットなんか天蓋つきのキングサイズだし。

考え込んでいたら、ドアが開いて白いドレスを着た美少女と、メイド服を着た少女が入ってきた。

「お寝覚めになりましたか？ 初めてお目にかかります。勇者様」
満面の笑みで話しかけてきた。

「勇者様？」

「はい。貴方様は、この世界を救う運命の勇者様。私は貴方に忠誠をささげます。申し遅れました。私はこのフリージア王国第四王女、メルトと申します。貴方様のようなすばらしい方を召喚できて誇りに思います」

「フリージア王国？第四王女？そんな国聞いた事もないけど？」

「はい。それは当然です。異世界から魔力が強く、勇者として才能がある方を召喚させていただきました。失礼ですが、この袋を開けていただけませんか？」

メルトは薄汚れた巾着袋を差し出す。ちよつと持ち歩けるくらいの大きさが、中には何も入っていないそうにない。

「何も入っていないみたいだが・・・うわー!」

袋を開けたとたん、空中に魔方陣が浮かび上がった。

「おお・・・やはり勇者様。その勇者の袋は主と認められた者にしかその中身を取り出せないようになっております。その魔方陣に手を入れて、勇者にふさわしい装備を取り出すよう念じて見てください」

言われるままに念じてみる。すると、金色のフルプレートがでて、真一の体に装着された。

「なんだか夢を見ているようだな・・・いや、これはきつと夢だ。寝よう」

現実逃避をしてベッドにもぐりこもつとしたが、鎧が邪魔で苦しい。

「ねえ、この鎧なんかならないの？重くて邪魔なだけだ」

「あつ。はい。すぐ外させていただきます。ミル、お願い」

側に控えていたミルと呼ばれた少女の手を借りて鎧を脱ぐ。

「あの・・・勇者様。お手数ですが、アルを全額と念じて袋から出てくるか試していただけませんか？」

「アル？まあいいけど。それじゃ」再び魔方陣に手を突っ込んで触れたものを取り出してみる。

次の瞬間、金貨で部屋が埋め尽くされた。

「すばらしいです。これでわが国も救われます。次はですね・・・さまざまな名前を挙げて取り出すことを要求される。言われるがままに従う真一。

鋭く輝く剣・きらびやかな鎧・美しい宝石・金銀財宝が出てくる。

途中から真一も面白くなり、何が出てくるか期待するようになった。

数時間ほどそうして、やっと終了した。

なにか体から力が抜けていくようで、相当疲労していた。

「お疲れ様でした。それでは明日、父である国王陛下と謁見していただきます。今日はごゆっくりお休みください」

メルトの指図で豪華な料理が運ばれる。美しい侍女が給仕をする。しきりに恐縮していたが、優しくいなされ、酒と料理を堪能してしまった。

食事の後は侍女達と広い風呂に入り、ぐっすりと眠った。

謁見室

「メルト、勇者の様子はどうか」玉座から威厳のある声で問われた。「はい。ヘラート陛下。今日のところは歓待させましたから、今はいい気持ちで寝ておりますわ」

メルトがこの国の王であるヘラート四世に返答する。その顔は嘲る様に笑っていた。

「ふふふ。先祖が魔王を倒して用済みになった勇者を始末したはいものの、あの道具袋の封印が勇者にしか解けないとはな。おかげで勇者が世界中から集めた伝説の武器防具や金銀財宝もとりだせぬままだ。これでは今の世に再び現れた魔王に対抗できぬ。どうしたものかと思っていたが」

「勇者召喚術を習得して再び勇者召喚するのは骨がおれましたわ・兄や姉は頼りになりませんし」

「メルト。数日かけて袋の中身を取り出させたら、しばらく鍛えて魔王討伐に向かわせる。きちんと処置をしてな。くくく。」

「わかりました。」

二人で顔を見合わせて笑う。真一はそんな事も知らずに眠っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547s/>

ゼロの奴隷 復讐の使い魔リーヴスラシル

2011年10月17日07時21分発行